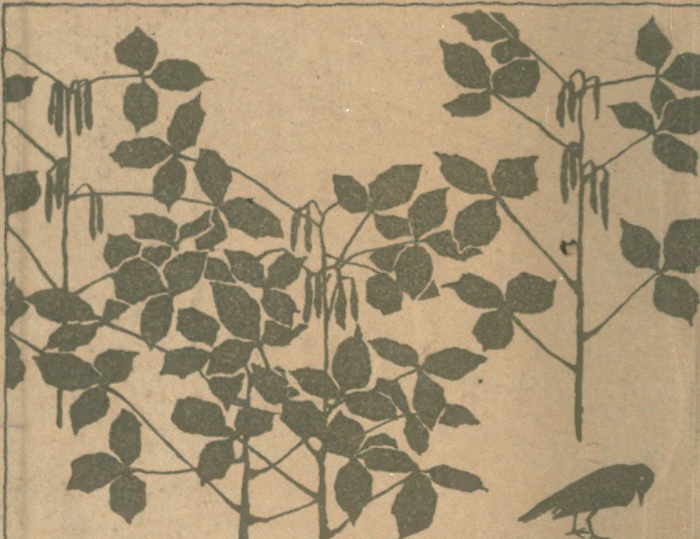
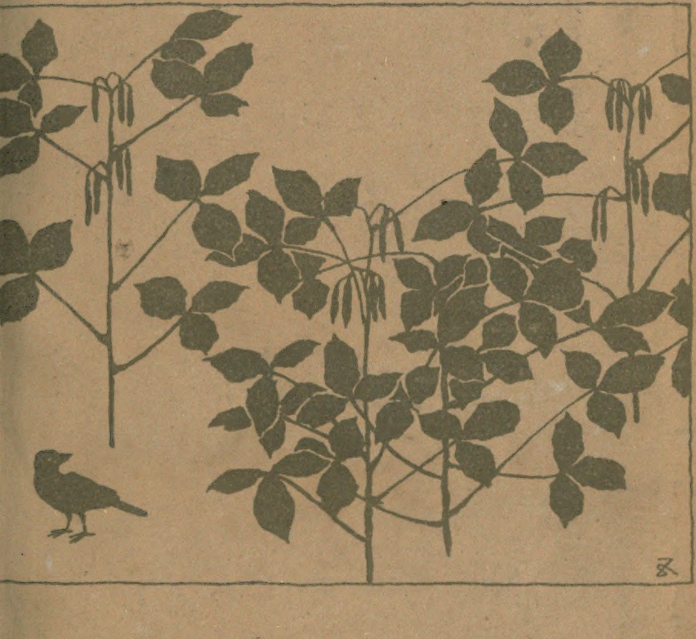




大正三年三月十三日印刷
大正三年三月十六日發行

有朋堂文庫（非賣品）
狂言記　上

不許複製

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

せう。福は内〳〵、鬼は外〳〵。シテへ打つける。▲シテ これはならぬぞ。▲女 鬼は外〳〵。▲シテ これは何とする。▲女 鬼は外〳〵。▲シテ あゝ許せ〳〵。▲女 鬼は外〳〵〳〵。

おまぞ—進ぜると也

たも憎いか。小太刀佩いたもにくいか。弓擔げたもにくいか。緣でこそ候はめ。はいとう〳〵、擔げたがいとし。又側へ寄るなり。▲女 なう〳〵、おそろしや〳〵。又側へ寄り居つた。あつちへうせ〳〵。▲シテ 小歌 來うか小二郎、來まいか小二郎、いひきれ小二郎、門さそに〳〵。さすならさゝい〳〵。藪から道はないものか〳〵。▲女 なう〳〵、こはや、おそろしや。まだ其所に居るか。出て行け〳〵。▲シテ 扨も〳〵、心強い女ぢや。これほどいふに合點をせぬ。しめ〳〵と降る雨も、西が晴るれば止むものを。何とてか、我が戀の晴れやる方のなきやらん。鬼泣くなり。▲女 これは如何なこと。あの鬼が眞實妾を思ふと見えて、涙をこぼす。騙して寶を取らうと存ずる。▲女 謠 いかにや〳〵鬼殿よ。まこと、妾を思ひなば、寶をわれにたび給へ。▲シテ やあ、わごりよも惡うは惚れぬよ。易き間の御所望なり〳〵。笠簑持ちて、蓬萊の島なる己が持つたる寶は、隱れ簑、隱れ笠、打出の小槌、諸行無量、常むやう、くわつしこくにくわつたりと、わごりよにおますぞ。さあ〳〵、最早身共がまゝぢや。此所へ來て腰を打つてたもれ。あゝ草臥れた。▲女 やあ、よい時分でござる。豆をはやしま

ぬけい—のけいの音便か

李夫人—李延年の妹にて武帝の后也

楊貴妃—名は太眞、玄琰の女、天寶四年玄宗の後宮に備はる

おいら〳〵しや—いら〳〵すること

んぞやつたら去ぬるか。▲シテなか〳〵、去なう。▲女こりや〳〵、これを遣る。早う去ね。▲シテこれは何ぞ。▲女これは荒麥ぢや。▲シテ何ぢや。荒麥ぢや。鬼の心はあら麥の〳〵、食ふ術を知らざれば、捨ててぬけい。▲女扨も〳〵、勿體ない事をしをる。▲シテなう〳〵わごりよは此所に一人居るか、二人居るか。▲女一人居やうと、二人居やうと構ふな。▲シテいや、一人居やらば、伽をしてやらう。▲女なう〳〵厭な事いひ居る。あつちへうせ〳〵。▲シテ扨も〳〵も、美しい女房かな。あれほど美しい女房も又あるまい。小歌節あら美しの女房や。漢の李夫人、楊貴妃、小野の小町は、見ねば知らねども、あれほど美しき女房もあるものか。あゝら、ほそ堪へ難やな。あの島先に居りやればこそ、お手はかくれ、渡らぬ先にお手をかくるでもなし。あゝら、おいら〳〵しや。おきやうこつやの。女の側へ寄るなり。▲女なう〳〵、こはや〳〵。彼方へうせい〳〵。恐しや〳〵。▲シテなう〳〵。▲女何事ぢや。▲シテ其方のその細い口で、身共が頤へ喰ひついてたもれ。▲女なう〳〵、厭な事云ひ居る。あつちへうせい。打ち出して下されなう、おそろしや〳〵。▲シテ小歌太刀佩い

めひらぎやんな
—目がひらぐ(ひり／＼と痛む)也　やんなはやなといふ感動詞

突いた。あら、めひらぎやんな。この様なものは、かちおとしてくれう。最早心易い。案内いはう。ものもう。案内。▲女 表に案内がある。こちの人は留守ぢやによつて、開くる事はなりませぬ。▲シテ いや、ちと用がある。開けてたもれ。▲女 それなら開けませう。ざら／＼。これは如何なこと。誰もないもの。又若い衆が嬲ると見えた。▲シテ 扨も／＼不思議な事ぢや。鼻の先に居る某が見えぬさうな。まことに思ひ付けた。身共が隱れ蓑、隱れ笠を被て居る故ぢや。脫いで參らう。ものもう。案内。▲女 又案内とおしやる。今も開けたけれど、誰もない。嬲りやるものであらう。開くる事はならぬ。▲シテ いや、この邊の者ぢや。ちと用がある。開けてたもれ。▲女 あたりの人なら、開けて遣らう。ざら／＼。なう／＼、怖しや／＼。鬼が來た。あたりに誰もないか。あれを打出して下され。なうなう、こはや／＼。▲シテ これ／＼、身共は蓬萊の島の鬼と云うて、こはい物ではをりない。▲女 鬼がこはうなうて、何がこはからうぞ。彼方へうせい／＼。おそろしや／＼。▲シテ なう／＼、島から只今著いて、殊の外ひだるい。何ぞ食ぶる物が有るか。たもれ。▲女 な

こちの人―わが夫
さいて―戸締りをすること
次第―曲がかり
豆を拾うて―節分の鬼儺の豆也
豆をはやす―豆を打ちて離す意か
道行―曲がかり
ひだるい―空腹のこと

十　節分

二人　シテ鬼　鬼の頭巾、ぶあくの面、厚板、下半袴、脚絆括り、菅笠、簑かけ杖つき
　　　女　箔小袖、ゆばうし

▲女　妾は、この家の女房でござる。今夜は節分でござるによつて、こちの人は出雲の大社へ、年籠に參られてござる。表も裏もさいて、好う留守いたしませう。▲シテ鬼次第　節分の夜にもなりぬれば〳〵、豆を拾うて噛まうよ。詞　これは、蓬萊の島より出でたる鬼でござる。今夜日本には、節分ぢやと申して、家々に豆をはやす。急ぎ日本へ渡り、豆を拾うて噛まうと存じ候。道行謠　蓬萊の島をば後に見なしつゝ〳〵、行末問へど白雲の〳〵、あら骨折れや、草臥れや、足に任せてゆく程に〳〵、日本の地にも著きにけり。詞　急ぐほどに、これは日本の地に著いた。殊の外草臥れてひだるい。何ぞ貰うて食べたいが、やあ、これに家がある。覗いて見やう。ぐつさり。あ痛〳〵。まことに忘れた。今夜節分で、蓬萊の島から鬼が來ると云うて、家々に柊をさす。それを忘れて目をしつくりと

ごげんざう―御見參なるべし

乙御前―醜女のこと

おとましーうとましい也いやなこと

れ。その義なら、身共は、只今から隱居致しませう。まづそれにゆるりとござれ。▲シテ畏つてござる。さらば、まづこの絹を取らせられ。ちとごげんざう申しませう。かぶる。いやいや、その樣に、厭と仰せられては、なりませぬ。是非ともこれを取らせられ。身どもが取りませう。やあ、これは乙御前ぢや。なう〳〵、おとましや〳〵。▲女なう〳〵こちの人、今からこなたと中ようして、千年も萬年も添ひませう。こちへござれ。▲シテいや、身共は、ちと用がある程に、去んで參らう。▲女いや〳〵、最早一寸も側を離れる事はならぬ。▲シテいや、ちよつと歸つて參らう。▲女いや〳〵、やることではない。▲シテまづ離しやれ。なう〳〵おとましや〳〵。▲女やることではないぞ。やるまいぞ〳〵。

一跡一跡目也家督のこと

されてござる。▲しうと 此方へ通らせられと云へ。▲冠者 畏つてござる。申し〳〵、これへお通りなされませ。▲シテ 心得た。不案内にござる。▲しうと 初對面でござる。扨札の面には、算の達した、五百倶の賽の目を、空で仰せらるゝお方を、聟に取らうとあげてござる。こなたには御存じでござるか。▲シテ 何と、五百倶の賽を目を申せ。▲しうと なか〳〵、左樣でござる。▲シテ それ易い事でござる。早速只今、ちうで申しませう。とてものことに、拍子にかゝつて申さう。五百倶の賽の目、さらば數へ申さん。一壹千に二貳千、三參千に四四千、合せてこれまで一萬なり。五五千に六六千、都合二萬千なり。すこしも違は候まじ。▲しうと なるほどさうでござる。違はござらぬ。算の達した事でござる。この上は、如何にも聟に取りませう。幸、今日は吉日でござる。娘も連れて參り、引合せませう。それにござれ。▲シテ 心得ました。つれにはいり、▲しうと なう〳〵、これが卽ち身共が娘でござる。向後は中をようして世帶をなされ。身共が一跡も、こなたへ渡します。萬事この上は打任せますぞ。▲シテ 如何にも心得ました。何事も氣遣なされますな。▲しうと 嬉しうこそござ

ござるが、こなたには覺えてござるか。▲二むこ なか〳〵、存じて居ます。申しませう。まづ此扇の骨が、十本あるによつて十、又足の指が十、これで合せて二十。▲しうと いや〳〵、その樣な事では、なか〳〵埒は明きますまい。歸らせられ。歸らせられ。▲二むこ いや、も一度申して見ませう。▲冠者 いや〳〵、なりますまい。歸らせられ。歸らせられ、▲二むこ はあ。さても〳〵、面目もござらぬ。歸りませう。▲シテむこ 罷出でたる者は、この邊に住居致す者でござる。此中、山一つ彼方に、一人娘を持たれた人が、何者なりとも、算勘の達した者を、聟に取らうと、高札をあげられてござる。某は恐らく、如何やうの算でも、存ぜぬ事はござらぬ程に、只今あれへ參り、聟にならうと存ずる。道行 やれ〳〵、身どもの參つてござらば、何程むづかしい算なりとも、埒明かぬと云ふ事はあるまいほどに、舅が喜うで、聟に取るでござらう。やあ、參るほどにこれでござる。ものもう。案内。▲冠者 又表に案内がある。どなたでござる。▲シテ 身共は、高札について參つた聟でござる。▲冠者 その通申しませう。それに待たせられ。申し〳〵、又高札につき、聟の望でおいでな

が五つ、左が五つ、合せて十ぢやによつて。▲しろと いや〱、その樣な事ではなりますまい。歸らせられ〱。▲初むこ いや、も一度仕直して見ませう。▲しろと いや〱、どうでも埒が明きますまい。歸らせられ。太郎冠者戻せ〱。▲冠者 畏つてござる。さあ〱歸らせられ〱。▲初むこ これは面目もござらぬ。▲二むこ これは、この邊に隱れもない算者でござる。山一つ彼方に、一人娘を持たれてござるが、算勘の達した者を聟に取らうと、高札打たれてござる。某が參り、聟にならうと存ずる。恐らくは、如何樣の算でも、心許ない事はござらぬ。やあ、はやこれぢや。ものもう。案內。▲冠者 又表に案內がある。どなたでござる。▲二むこ これは、高札の面について參つた聟でござる。▲冠者 その通申しませう。それにござれ。▲二むこ 心得ました。▲冠者 申し〱、高札について、又、聟殿のお出なされてござる。▲しろと いかにも此方へ通せ。▲冠者 畏つてござる。申し〱、これへお通りなされと申します。▲二むこ 心得ました。不案內にござる。▲しろと 初對面でござる。札の面には、算勘の達した、五百倶の賽の目を、空で仰せらるゝ人を、聟に取らうとあげて

邊の者でござる。此中承れば、山一つ彼方に、一人娘を持たれた人がござるが、何者なりとも、算勘の達した者を、聟に取らうと、高札が上げてござる。某ほど、算の達した者はござるまい程に、この度あれへ參り、聟にならうと存ずる。まづ急いで參らう。道行やれ〳〵、身どもがあれへ參つたら、如何樣のむづかしい算があるとも、埓明くることでござる。定めて、聟になるでござらう。やあ參るほどにこれぢや。案内申さう。ものもう。案内。▲冠者表に案内とある。どなたでござる。▲初むこ身共でござる。高札の面についいて參つた聟でござる。▲冠者その通申しませう。それにござれ。申し〳〵、高札についいて、聟殿のお出でなされてござる。▲しうといかにも、お目にかゝらう。これへ通らせられと申せ。▲冠者畏つてござる。申し〳〵、此方へお通りなされと申されます。▲初むこ畏つてござる。不案内にござる。▲しうと初對面でござる。高札の面には、算勘達して、五百倶の賽の目を、空で仰せらるゝお方を、聟に取らうと申してござる。こなたには、賽の目を御存じでござるか。▲初むこなか〳〵、存じました。申しませう。まづこの右の手の指



算勘聟—一名賽の目

五百倶—二つの賽を一倶と云ふ

九　算勘聟

六人　シテ聟　素袍、折烏帽子、小さ刀
舅二人聟　長袴、
太郎冠者　半袴、上下、腰帯

▲しうと　これは、この邊の者でござる。某一人娘を持つてござる。何者にはよるまい。算勘の達して、五百倶の賽の目をちうで申す人があらば、聟に取らうと存ずる。まづ高札を打たう。はつし〳〵。一段とよい。やい〳〵太郎冠者あるか。▲冠者　これに居ります。▲しうと　汝喚び出す、別の事でない。高札の面について、聟殿のお出なら、此方へ申せ。▲冠者　畏つてござる。▲初むこ　罷出でたる者は、この

のつれな事ぬかす。大盗人共やらぬぞ。▲もしあゝ許させられ〳〵。▲主やるまいぞ〳〵。

順の舞—輪番に舞ふこと
番匠屋—大工

も何ぞ一つ舞はしませ。▲ゐざり身共も舞はうか。▲二人よかろ〳〵。▲ゐざり舞いとし若衆の小鼓は、締めつ緩めつ、緩めつ締めつ。ちょ、たほつほ。なるかならぬか。▲二人えいや。さあ〳〵、順の舞ぢや。啞も舞やれ。▲おしいかにも舞はう。舞番匠屋の娘子の、めしたるや帷子、肩に鉋箱、腰に小鑿小手斧、才槌や鋸、忘れたりや墨さし、裾にかんなくづ、吹きや散らした。ぱつと散らしたお方に名殘が惜しけれどよ、うらや濱の手ぐり舟が、急ぐ程にの、頓て來うぞい。▲三人ざょんざあ〳〵。▲主片輪者共を、留守に置いてござる。心許なうござる。急いで歸らうと存ずる。これは如何なこと。酒盛の聲がする。これはさて。座頭が目を明く、躄が立つ、啞が物いふ。さては賣僧の大盜人ぢや。やい〳〵やい。▲三人そりやお歸りやつた。何とせう。▲おし。ゐざりお歸りなされましたか。▲座頭わわ。▲主おのれは座頭であつたが、啞になり居つて。やるまいぞ。やあ、おのれも、躄であつたが座頭になつて。大盜人。やらぬぞ。▲ゐざりあゝ許させられ。それなら、ゐざりませう。▲主やあ、おのれは啞ぢやが、ものぬかしてゐざり居る。▲おしわあゝ。▲主まだ、そ

また花の春は云云ー謠曲熊野の文句

某が預つた酒藏を開けて、一杯づつ飮うで、さて錢藏を開けて、又一勝負して、その後、輕物藏を開けて、引擔げ〳〵退くまいか。▲二人 これは一段よからう。▲おし それなら、こちへをりやれ〳〵。酒藏を開けう。これ〳〵これぢや。藏の戸を開かう。ざら〳〵。さても〳〵大分の甕ぢや。どれにせうぞ。此所な蓋を取らう。まづはよさゝうな酒ぢや。身共が酌を致さう。さあ〳〵飮ましませ。▲二人 注いでたもれ。さらば飮うで見やう。やれ〳〵、よい酒ぢや。啞も飮ましませ。▲おし いざ謠はうか。▲二人 よからう。▲三人 ざゝんざあ〳〵。▲座頭 さらば身共が酌いたさう。▲おし あゝこれ〳〵、ちやうどある〳〵。座頭も飮ましめ。▲三人 謠 また花の春は淸水の、たゞ賴め、賴もしき、春もちゞの花ざかり。▲おし はあ、いかう醉うた。なう〳〵一つ受持つた。肴に座頭、何ぞ小舞舞やれ。▲座頭 慰ぢや、舞はうか。▲二人 よからう。▲座頭 謠うてたもれ。▲二人 心得た。▲座頭 舞 山から下る小山伏、腰にほらの貝、お手に珠數、お客僧うけ給ふ。柴垣越に物いはう。▲二人 えいやあ。さてもさても面白い。ざゝんざあ、濱松の音はざゝんざあ。▲おし 又一つ飮ましめ。さあ〳〵、躄

仕合―始末、前に不仕合とあるは不幸の意

自由なものぢや。ちと目を開かう。▲ゐざりやれ〳〵足を伸さねば、めり〳〵いふ様な。ちと足を伸さう。（二人見合せ、）▲座頭やあ、わごりよか。これは〳〵。定めて此中の不仕合故。來たであらう。▲ゐざりなか〳〵、その通ぢや。このあちらに何やら呻く聲がする。行て見まいか。▲座頭よからう。行て見やう。（啞を見て、）▲座頭これは如何なこと。あれは誰ぢや。いざ嚇さう。▲二人やい〳〵。▲おしわあゝ。（二人笑ふ）▲二人さても〳〵可笑しい事かな。▲おしやあ、わごりよ達か。定めて此中の仕合ゆゑ、來たであらう。▲ゐざりなか〳〵、その通ぢや、▲おしまづわごりよ達は、何になつて來たぞ。▲ゐざりされば、一人は座頭、身共は躄になつて來たわ。さてわごりよは、何になつて來たぞ。▲おし身共は、常々皆口の利いた者ぢやと云うたによつて、引き違へ、啞になつて來た。▲座頭誠に、今のは啞ぢや。▲おしさて賴うだ人は、四五日他所へをりやつた。何も預りはせぬか。▲ゐざりなか〳〵、預つた。座頭は輕物藏、身共は錢藏ぢや。▲おしこれは皆よい物ぢや。▲座頭わごりよは何を預つた。▲おし身共は酒藏を預つた。▲二人これは猶よい物ぢや。▲おしそれにつき、身共の思ふは、まづ

くわつと—思の外多くの意

輕物—絹布類のこと

らうが。何も藝はないか。▲おし 弓引く態。わあゝ。▲主 さては弓を射るか。▲おし わあゝ。▲主 まだ藝があるか。▲おし 鎗遣ふ態。わあゝ。▲主 鎗を遣ふか。さても〳〵重寶な者ぢや。くわつと扶持をせうぞ。▲おし それはかたじけ。口に手あて、退く ▲主 これは如何なこと。啞が物いうた。さりながら啞の一聲福貴の相と申す。抱へうと存ずる。やい〳〵、いかにも、抱へて遣らう。こちへ通れ。▲おし わあゝ。▲主 それに居よ。▲おし わあゝ。▲主 やれ〳〵、片輪者どもを、數多抱へてござる。めい〳〵に役を申し付けて、ちとよそへ參らうと存ずる。やいやい座頭。▲座頭 何事でござります。▲主 某は、四五日よそへ行く。向なが、輕物藏ぢや。そちに預ける。よう留守をせい。▲座頭 畏つてござる。御留守は御氣遣なされますな。頓てお歸りなされませ。▲主 心得た。やい〳〵躄、某は四五日よそへ行く。あの錢藏を預くる。よう留守をせい。▲ゐざり 畏つてござる。頓てお歸りなされませ。▲主 心得た。やい〳〵啞。▲おし わあゝ。▲主 四五日よそへ行く。よう留守をせい。向な酒藏を汝に預くるぞ。▲おし わあゝ。▲主 それ〳〵、頓て戻らうぞ、▲座頭 さても〳〵、目を塞いで居れば、不

勝負師—博徒

ついて參つた躄でござります。▲主 何と、札について來た躄か。若者ぢやが不便な。抱へてとらせう。こちへ通れ。▲ゐざり それは忝うござります。通りませう。▲主 それにゆるりと居よ。▲ゐざり 畏つてござる。▲をし 罷出でたる者は、隱れもない勝負師でござる。此中、徒者と寄り合ひ、手慰致してござれば、散々仕合がわるうて、金銀は申すに及ばず、女共が衣類まで打込うでござる。これでは、何とも今日も送られぬと存ずる所に、山一つ彼方に、富貴なお方があつて、片輪者を抱へうとある高札が揚つてござる。身共は生れつき、片輪ではござらぬ。皆人の常々申さるゝは、口の利いた者ぢやとおしやる程に、この度は引きかへ、啞になつて參らうと存じ、道具を用意致してござる。急いで參らう。道行 まことに天道人を殺さずと申すが、この事でござる。あれへさへ參つたら、ありついて扶持を貰はうと存ずる。やあ、參る程にこれぢや。まづこれから、啞になつて參らう。啞と申す者は、この樣な短い竹二本叩いて、わあゝ。▲主 やあ、表に呻く音がする。何者ぢや知らぬ。これは何者ぢや。▲をし わあゝ。▲主 さては啞か。▲をし わあゝ。▲主 抱へて遣

になつてござる。やあ、參る程に是でござる。これから座頭になつて案内申さう。ものも。案内もう。▲主 表に案内がある。どなたでござる。▲座頭 いや、私は、高札の面について參つた座頭でござる。▲主 何と云ふぞ。札の面について來た座頭か。いかにも抱へて遣らう。こちへ通れ。▲座頭 それは忝うござる。通りませう。これに居りませう。▲ゐざり これは、この邊に隱れもない、いたづら者でござる。いつもの若い者共と寄合つて、勝負を致してござれば、金銀は申すに及ばず、家屋敷まで、打込うでござる。これでは、何とも暮さう樣がないと存ずる處に、山一つ彼方に、有德人があつて、片輪者を抱へうとある高札があかつてござる。生れついた片輪ではなけれど、日頃足の達者な者でござる。この度は引きかへて、躄になつて參らうと存ずる。まづ急いで參らう。道行 扨も〱、うつけたこと致した。面白い〱と存じ致して、かやうになつてござる。今更後悔なれど是非もござらぬ。參るほどにこれぢや。此所許から躄になつて參らう。ものも。案内もう。▲主 表に案内がある。どなたでござる。▲ゐざり 私でござる。これは、高札の面に

目の鞘の外れた者—目ばしこき者

八　三人片輪

四人　主　長袴、小さ刀
座頭　上水衣、下半袴、布頭巾、杖つき
ゐざりおし　二人共に半袴、上下、腰帯

▲主 此邊の者でござる。某存ずる仔細あり、片輪者どもを數多抱へうと存ずる。まづ高札をうたふ。はつし〳〵。一段と好うござる。▲座頭 これは、この邊に住む博打でござる。この間は、さん〴〵仕合がわるうて、金銀は扨おき、諸道具まで打込うでござる。これでは、何とも今日を暮さうやうがないと存ずる處に、山一つ彼方に、片輪者を數多抱へうとある高札が揚つてござる。身共は生れついたる片輪でなけれども、常々人の仰せらるゝは、目の鞘の外れた者ぢやと、おしやる程に、この度は引きかへて、座頭になつて參らうと存じて、かやうに出で立つてござる。まづ急いで參らう。道行 やれ〳〵、皆人々の意見なさるゝ時、止まれば好うござつたに、取返さう〳〵と思うて致し、かやうの態

閻浮―佛語閻浮提の畧也人間界のこと
活々の文―活かす呪文
誰そや云々―道理なりまで曲にかゝる
たら〳〵に―未詳或は「たらしよ」の誤か

けた事がある。彼奴が世にある時から、この太刀を好うだ。謀にて二度閻浮に返さうと存ずる。いかに磁石が氏神も慥に聞きたまへ。元より磁石が好むこの太刀を、鋼元拔きくつろげ、枕元にどうど置き、活々の文を唱へ、磁石が上をひらり〳〵と飛越えて、いかに磁石〳〵。▲シテ 謡 誰そや、あたりに音するは。▲アド いにしへのたら〳〵に。▲シテ 名を聞くだにも恨めしや。▲アド うらむるは道理なり。げに恨むは道理なり。▲シテ がつきめ。やるまいぞ。▲アド はあ、これは生返つた。又太刀を拔いて何とする。あぶないわ〳〵。▲シテ 何のあぶない。大盜人。切つてくれうぞ。▲アド 許せ〳〵。▲シテ やるまいぞ〳〵。

どみたー鈍つたなるべし

見て、あゝと云ふが、何者ぢや。▲シテ身共を知らぬか。某は唐と日本の境に、ちくらが沖といふ所に、磁石山といふ山がある。その山の磁石の精ぢや。夜前鳥目を呑うだれば、殊の外喉に詰つてわるい。今汝が太刀を見れば、清々として呑みたいほどに、切先から只一呑にせうぞ。▲アドおのれが、その如くに口を開き、手を廣げ、呑まうと思うたりとも、呑まれまいぞ。さあ、呑うで見よ〳〵。切て掛る。▲シテあゝ〳〵。▲アドやあ、彼奴があゝと云へば、何とやらこの太刀がどみたやうな。やい〳〵、この太刀を見すれば、何とあるぞ。▲シテ呑まう〳〵と思うて、心が清々〳〵としてよい。▲アド又隠せば何とあるぞ。▲シテ隠せば心が消え〴〵としてわるい。▲アド鞘に差せば何と。▲シテいや〳〵差すな。命が消える。▲アドそれは幸の事ぢや。命を取らうが爲に、これまで追掛けて來た。鞘に差いて差し殺すぞ。▲シテいや〳〵、差すな〳〵。▲アド差すぞ〳〵。▲シテ差すな。▲アド差すぞ〳〵。やあ、彼奴が死んだ態する。最早騙さるゝ事ではないぞ。起きよ磁石〳〵。是はいかな事まことに空しうなつた。人が見付けてはなるまい。急いで退かう。さりながら、思ひつ

南無三—三は三寶の略
ほどは—遠くはの意
丸腰—帶刀せぬこと
重代—家傳の名刀

ことがある。して退かう　亭主々々。約束の物たもれ。▲亭 心得た。これ〳〵。▲シテ まづ過分な。なう〳〵こはや〳〵。急いで退かう。さりながら、あまり夜深な。此所に待つて、夜明けて參らう。▲アド 亭主々々、約束の鳥目をくりやれ。▲亭 いや、最前渡した。▲アド いや、まだ請取らぬ。▲亭 いや〳〵渡した。▲アド それは合點がいかぬ。見て來う。南無三。宵の相談を聞いたかして、退いた。▲亭 それは憎い事ぢや。▲アド 身共は追つかけう。▲亭 なか〳〵。追つかけて見やれ。ほどは行くまい。▲アド さりながら、丸腰ぢや。何ぞ一腰貸してたもれ。▲亭 心得た。重代なれど貸すぞ。首尾ようして歸りやれ。▲アド 心得た。扨も扨も、憎いことかな。どちへうせた知らぬ。▲シテ なう〳〵、怖しや〳〵、夜が明けた。まづ退かう。こはい事に逢うたことかな。まづ急いで參らう。▲アド されば、まだこれに居る。がつきめ。大盜人。やるまいぞ。一打にしてくれうぞ。▲シテ おのれが人賣ぢや。▲アド とかくおのれ、打切つてくれうぞ。▲シテ あゝ〳〵。▲アド なんの、あゝと云うたりと、一打にしてくれうぞ。▲シテ あゝ〳〵。▲アド おのれは、身共が一打にせうと云へば、この太刀を

う。まづ、これへお通りやれ。▲シテ心得ました。苦しうないか。▲アドなか〳〵。▲シテなう、身共は殊の外草臥れた。最早ふせりますぞ。寢る。▲アドやあ、最早寢るか。明日お目にかゝらう。扨も早う寢られた。なう〳〵亭主ござるか。▲亭主なか〳〵、これに居ます。やあ、其方に逢ひたかつた。▲アド何の用ぞ。▲亭いつぞやの者が、何の役に立たぬ者ぢや。どれぞよさゝうな者があらば、代へてたもれ。▲アド何ぢや、役に立たぬ。それなら幸の事ぢや。只今遠江の見附の者を、まんまとたらして、奥に寢さして置いた。これと代へて遣らうぞ。▲亭一段ぢや。それと代へてたもれ。▲アドさて、明日早々立つ程に、鳥目を貸してくりやれ。▲亭易いこと。何時でも貸して遣らう。▲アドかの者奥に寢さして置いた。心許ない。最早行て寢ますぞ。▲亭なか〳〵、休ましませ。明日お目にかゝらう。▲アドなうなう、何と、湯水でも飲みたうないか。やあ草臥れた。よう寢らるゝ。身共も此所に寢るぞ。側に寢る、▲シテなう〳〵怖しや〳〵。最前から合點のいかぬ者ぢやと思うて、そつと起きて、立聞して居たれば、人賣に出逢うた。まづ急いで退かう。さりながら、宵に聞いた

ひぢたわつて—不詳

息災—無事

晩じた—暮れたこと

▲シテ 眞實は、遠江の國見附の者ぢや。▲アド それ〳〵、見附の人ぢや。▲シテ 見附の町を一丁程行て、ひぢたわつて、角に大きな藪がある。▲アド いかにもある。▲シテ その隣にちひさい家がある。▲アド あるとも。▲シテ その家のうちの者で候。▲アド それ〳〵、其所ぢや〳〵。▲シテ 扨はよう知つて居やる。近づきぢや。▲アド 何と、只今は何と思うて上りやつた。▲シテ されば〳〵、終に都を見ぬ故に、此所彼所を見物いたさうと思うて、上つてをりやる。▲アド それなら、此所も不案内にあらう。身共が案内者して名所を見せう。又京へは、明日連立つてまゐらう。▲シテ いかにも萬事頼みますぞ。▲アド さあ〳〵、こちへをりやれ〳〵。▲シテ 心得た。道行 ▲アド なう何と、ものは無事なか。▲シテ 誰でをりやるの。▲アド それ、ものは。▲シテ 伯母か。▲アド なか〳〵、その伯母か。▲シテ 成程、息災にをりやるわ。▲アド それは嬉しい。身共はその伯母に抱き育てられた者ぢや。▲シテ 扨はそなたの事であらう。上方に子も同前の者があると、常々いはるゝは。▲アド なるほど身共でをりやる。參る程にこれが身共が常宿ぢや。最早今日は日も晩じた。これに泊つて、明日都へ上ら

坂本―比叡山の東麓

有りやう―實際のこと

事ぢや。何といふ。坂本の市ぢや。それは幸の事ぢや。見物致さう。扨も〳〵夥しい店ぢや。何を買ふとまゝぢや。これは小間物店ぢや。色々の物があるわ。▲アド 罷出でたる者は、坂本邊を駈け廻る、心の直に無い者でござる。今日は坂本の市でござる。あれへ參り、仕合を致さうと存ずる。やあ、これに田舍者と見えて、小間物店に見入つて居る。ちと當つて見やうと存ずる。▲シテ 何を買ふとまゝぢや。櫛、針、笄。▲アド 櫛、針、笄。▲シテ 白粉。▲アド 白粉。何と久しいの。▲シテ 其方は誰ぢや。見知らぬが。▲アド いや、身共は知つて居る。▲シテ 身共は、ものの國の者ぢや。▲アド それ〳〵、ものの國の人ぢや。▲シテ 扨は知つて居やる。有りやうに云はう。▲アド なか〳〵。おしやれ。▲シテ 尾張の者ぢや。▲アド いかにも尾張の人ぢや。▲シテ 尾張の熱田の宮を伏し拜うで。▲アド それそれ、拜うで。▲シテ それから右へ行て。▲アド 右へ行て。▲シテ 角から三軒目に大きな家がある。▲アド なか〳〵、有る共。▲シテ 其家の者ではをりない。▲アド いや〳〵、其所ではない。▲シテ 扨はよう知つて居やる。ありやうに云はう。▲アド なか〳〵、おしやれ。知つて居る。



七　磁石

三人　シテアド二人　半袴、上下、腰帯
宿主　長袴小さ刀さし

▲シテ　罷出でたる者は、遠江の國の者でござる。某終に都を見物致さぬ。この度都へ上り、此所彼所を見物致さうと存ずる。まづ急いで上らう。道行　皆人々の申さるゝは、若い時旅をせねば、老いての物語がないと仰せらるゝによつて、俄に思ひ立つてござる。やあ、參る程にこれは尾張の國ぢや。扨も〳〵聞き及うだより、よい國ぢや。急いで參らう。これは何所の國ぞ。何と、近江ぢや。これも取分大きな國ぢや。又あの向ふに人立がある。何

いたゞきつれた—其の次に大原女といふを略す

何所へいた知らぬ—素襖を探すなり

ようこそ知らしてくりやつたれ。内々参らうと思うたれど、最早参るまいと。▲主扨も扨も酒に醉ふて譯がない。▲冠者あの山見さい。この山見さい。いたゞきつれた。素襖落す。▲主やあ、これを貰うて來た故ぢや。これを取つたら機嫌が悪からう。▲冠者はて不思議な。何所へいた知らぬ。▲主やい〳〵太郎冠者、さあ〳〵謡へ〳〵。身共は謡ふぞ。釣する所に釣つた所が面白。さあ〳〵謡へ〳〵。▲冠者これ〳〵、こなたはよい機嫌の。人が見て氣違と云ひませう。▲主やい〳〵、そちは何やら尋ぬる。何を落した。▲冠者いや、何も尋ねはしませぬ。▲主それでも身共は、物を拾うた。▲冠者何を。▲主物を。こりや、これを拾うた。▲冠者それは伯父御様に貰ひました。こちへおこさせられ。▲主やい、あの横著者、どちへうせる。やるまいぞ〳〵。

う。忝うござる。扨、追付け下向致しまして、めでたうおみやを進ぜませう。▲をぢ もはや先に聞いた。▲冠者 私の事でござるによつて、何もござらぬ。まづかみ様へは、祝うて御祓、若子様へは悦ばせらるゝ様に物差、こなたへは、しをらしう笙の笛を進ぜませう。▲をぢ いや／＼無用にせい。最早行け。▲冠者 かう參ります。さらば。忝うござる。さても／＼、これは醉うたさうな。面白いことぢや。ちと道々謠うて參らう。ざゝんざあ、濱松の音はざゝんざあ。あゝ面白い事ぢや。この素襖を著て宮廻せい。忝い。▲主 太郎冠者を、伯父者人の方へ使にやつてござる。殊の外遲い。定めて酒を飲うで、口きいて居るものであらう。見に參らう。これは如何な事。酒に醉うて正體もない態ぢや。やい／＼、おのれは今まで何して居つた。▲冠者 こなたは誰ぢや。頼うだ人か。何しにござつたぞ。▲主 おのれが遲さに迎に來た。▲冠者 いらぬ迎の。▲主 やい／＼、伯父御は參らうとおしやるか。參るまいとおしやるか。▲冠者 伯父御の御返事か。▲主 なか／＼。▲冠者 參らうとやら、參るまいとやら、知りませぬ。▲主 それでは埒が明かぬ。返事をいへ。▲冠者 伯父御の御返事は、

遠來―遠方より到來の酒

ろくにをります―ろくにしてあぐらなどする也

取らせられ―おしまひなされ

お斟酌―御辭退の意

もく〳〵うまい。結構な御酒でござる。いつ下されます御酒より、とりわけ、よう覺えました。▲をぢよう飲み覺えた。これは遠來ぢや。▲冠者さやうでござりませう。好い御酒でござる。も一つ下されませう。▲をぢまだ飲むか。過ぎぬ程に飲め。▲冠者醉ふ事ではござらぬ。注がせられ。これ〳〵、溢れます〳〵。又ちやうどある。半分飲み下に置く。扨、ちとゆるりとござりませ。私はろくにをります。いつぞはこなたへ申さう〳〵と存じ、申しませぬ。こなたを世間で褒めます。▲をぢ何と云うて褒むる。▲冠者まづ結構な伯父御樣ぢやいの。太郎冠者が參つても、酒を下されます。あの樣なお氣の附いたお方はあるまい。第一お慈悲が深いと申して褒めます。▲をぢそれは、惡ういはるゝ樣にならうて、身共も滿足ぢや。さあ飲め〳〵。▲冠者たべませう。扨も〳〵よい氣味かな。さあ取らせられ。▲をぢ最早取るぞ。やい〳〵、これは著古したれども、この素襖を著て、めでたう宮廻りせい。▲冠者この素襖を私に下されますか。▲をぢなか〳〵、取らすぞ。▲冠者これは似合ひませぬ。お斟酌申しませう。▲をぢはて、いらぬこと云はずとも、取つて行け。▲冠者それなら戴きませ

慮外―恐入る意

かみ樣―奥樣

▲をぢいや〳〵、そちが供するであらう。めでたう門出祝うて遣らう。酒を一つ飲うで行け。▲冠者いや、內も忙しうござる。歸りませう。▲をぢいや〳〵、暇はいらぬ。是非一つ飲うで行け。▲冠者それなら御意次第に致し、一つ下されませう。まづ下に居りませう。▲をぢさあ〳〵、この盃で一つ飲め。▲冠者これは大盃でござります。お酌これへ下されませ。▲をぢいや、苦しうない。飲め〳〵。▲冠者慮外でござる。はあ、申し〳〵、一つちやうどござる〳〵。さらばたべませう。▲をぢ何とあるぞ。▲冠者いや、只ひいやりとばかり致して覺えませぬ。▲をぢそれなら、も一つ飲め。▲冠者も一つ下されませう。又ござります。ちやうどござる〳〵。半分飲み、最早一息にはなりませぬ。靜にたべませう。下に置く。扨、私もこの度御供致しますす筈でござる。追つけ下向いたしまして、こなたへ土產を進上申しませう。▲をぢいや〳〵いらぬこと、無用にせい。▲冠者私のことでござるほどに、こなたへはめでたう御祓、かみ樣へは物差、若子樣へは、悅ばせらるゝ樣に笙の笛、これはかりでござる。▲をぢいや〳〵、御祓ばかりにせい。さあ〳〵飲め〳〵。▲冠者下されませう。飲む。扨

れる者もない。さりながら、供をすると云うたら、餞などなさるゝ事があれば、後がむづかしい程に、知れぬとまうせ。▲冠者 畏つてござる。▲主 最早行くか。▲冠者 參ります。▲主 行たらば頓て戻れ。▲冠者 はあ。▲主 えい。▲冠者 はあ。やれ／＼、急な事を申しつけられた。まづ參らずばなるまい。道行 まことに世間に吝い人もあるが、身共の頼うだ人ほど吝い人はあるまい。餞があれば、後がむづかしいと云はるゝ。吝い人ぢや。やあ、參るほどにこれぢや。ものもう。案内もう。▲をぢ 表に案内とある。どなたでござる。▲冠者 私でござります。▲をぢ やあ、太郎冠者か。何と思うて來た。▲冠者 頼うだお方より使に參りました。▲をぢ 何と云うて來たぞ。▲冠者 明日俄に參宮致します。内々こなたにも參りたいと仰せられました。おまゐりなされますまいかと、申しておこされました。▲をぢ ようこそ心にかけておこされた。内々望なれども、明日の事を、今からは何とも用意も出來まい。殘多けれども、急な事ぢや。この度は、え參るまいと云へ。▲冠者 それはお殘おほ存じまする。▲をぢ 何と、定めて汝は供するであらう。▲冠者 いや、まだしかと知れませぬ。

六　素襖落

三人　シテ男　半袴、上下、腰帯
　　　アド二人　長袴、小さ刀さし

▲主アド これは、このあたりの者でござる。某、明日參宮致す。それにつき、身共の伯父者人も、參宮するなら知らせてくれい、參りたいと仰せられた程に、誘ひに遣らうと存ずる。やい〳〵太郎冠者あるか。▲シテ太郎冠者 はあ、これに居ります。▲主 汝を喚び出すこと、別の事でない。某明日より參宮する。それにつき、供には汝を連れるほどに、さう心得。▲冠者 それは忝うござります。▲主 又伯父御の内々參宮したいと仰せられた。そちは、伯父者人の方へ行て來い。▲冠者 畏つてござる。▲主 行て云はうは、明日思ひ立つて、參宮いたします。こなたにも、内々參宮したいと仰せられました。參らせらるゝかと云うて、問うて來い。▲冠者 畏つてござる。▲主 又、そちも供するかと云うて問はるゝならば、まだ知れませぬと云へ。▲冠者 すれば、まだ知れませぬか。▲主 いや、そちならで連

印を結んで―多く眞言宗にて行ふ呪文を唱へ兩手の指を種々の形に組む

ると云ふか。待て〳〵、仕様がある。印を結んでかけて、今一祈祈つて、祈り退けて遣らう。（印結び）如何に惡心の深い蟹なりとも、明王の索にかけ、祈るなら、などか奇特のなかるべき。ぼろぼん〳〵。橋の下の菖蒲は、ぼろぼん〳〵。誰が植ゑた菖蒲ぞ。ぼろぼん〳〵。▲シテ あいた〳〵。これは南無三寶、己が耳も挾み居つた。あいたあいた〳〵。▲かに ひやありひやり、ほつぱい、ひやろ、ひい。▲二人 やれ、蟹めがにぐるわ。やるまいぞ〳〵。

苛高―九珠數に對して珠の角立ちて平たきをいふ
むしやうな―えたいも知れぬなどの意なるへし

小足八足、右行左行して遊ぶ物ぢや。汝行力を慢ずるによつて、これまで顯れ出てあるぞとよ。▲シテ 扨は、彼奴めは蟹ぢや。やい〳〵強力、彼奴はしれた蟹ぢやわ。▲強力 何と仰せらるゝ。蟹ぢや。それなら私次第になされ。はて扨何者ぞと思うて、よい肝を潰した。おのれこの金剛杖で、甲を打破つてくれうぞ。覺えたか〳〵。まだ仕樣がある。鼻竹篦をあててやらう。あゝ悲しや〳〵。蟹がはさみました。あいた〳〵〳〵。なう〳〵、こなたの行力は、かやうの時の爲でござる。早う祈り退けてくだされ。▲シテ ちつとも氣遣ずな、今の間に祈り退けて遣らうぞ。それ山伏と申すは、山に寢起をする故に山伏なり。この兜巾は、布切七八寸眞黒に染め、襞を折つて、頭に戴くによつて兜巾なり。又この珠數は、苛高ではない。むしやうな珠數珠を繋ぎ集め、これを苛高の珠數と名づく。かほど貴き山伏が、一祈祈るものならば、などか奇特のなかるべき。ぼろぼん〳〵ぼろぼん。いろはにほへと、ぼろぼん〳〵〳〵。▲強力 申し〳〵、最早祈らずとおいて下され。こなたの祈らせらるれば、猶きつう挾みます。あいた〳〵〳〵。▲シテ 何と、なほ締め

空飛ぶ鳥も祈り落す—靈驗ある喩

けうがつた—不思議な

通ぢや。いざ、追つけ行かう、汝も供せい。▲強力畏つてござる。▲シテ道行さあ來い〱。▲強力參ります。▲シテやい〱、身共も久々難行苦行を致したによつて、恐くは、空飛ぶ鳥も、祈り落すことぢや。何と尊いことではないか。▲強力仰の通、尊いことでござる。

▲シテこの如く行く道にて、何なりとも汝に、眼前にて、奇特を見せたいなあ。▲強力されば、こなたの行力の達した奇特を見たうござります。▲シテやあ、何とやら山が鳴る音の樣な。暗うなつたぞ。▲強力さればいかう山が鳴つて參りました。只事ではござるまい。こはいことでござる。▲シテこれは〱、頻に鳴つて來たわ。油斷すな。▲かにどよ〱〱。

▲強力そりや、何やら出ました。こはい物でござる。なう悲しや〱。▲シテ扨も〱、おそろしい物ぢや。問うて來い。▲強力いや〱、私は厭でござる。こなた行て問はせられ。

▲シテおのれを連れるは何の爲ぢや。行て問うて來い。▲強力いや〱、何程仰せられてもこればかりはなりませぬ。こなたござれ。▲シテおのれは臆病な奴ぢや。やい其處な奴、おのれはけうがつたなりぢや。何者ぢや。▲かに兩眼天にあり、一甲地に附かず。大足二足、

大峯ー吉野の金峯山



五　蟹山伏

シテ山伏　兜巾、篠懸、上水衣、下半袴、脚絆、り、腰帯、小さ刀さし上は何も着ず、金剛杖に檜笠付け搔げ

三人　強力

蟹　黒頭、面賢徳、下袴括り、厚板

次第　貝をも持たぬ山伏が〳〵、道々うそをふかうよ。▲シテ山伏　これは、出羽の羽黒山の山伏でござる。この度大峯葛城の役を勤め、只今がかけ出でござる。やい〳〵強力、あるか。▲強力　はあ、御前に居ります。▲シテ　早かつた。汝も知る如く、今度大峯、葛城の役目を首尾よう勤め、本國へ下る。何とめでたい事ではないか。▲強力　御意なさるゝ通、おめでたいことでござる。▲シテ　如何にもその

蒙求ー唐の李瀚著
智者ー學僧
五百八十年七廻りー極めて長生のこと祝言也

ることではない。連歌を止めよならば、いかにも止めうず。是非止めがたくは、世帯を營むすきぐ〵に、其方と兩吟にするであらう。最早去んでくれさしますな。▲女 何がさて、連歌さへ止めさせらるゝならば、いかにも去にますまい。▲シテ それは嬉しい事ぢや。正眞の元の女に媒人なしといふが、このことぢや。假初ながら二度の緣ぢや。めでたう謠はう。▲女 ようござらう。▲シテ 謠 濱の眞砂はよみつくしつくすとも、この道は盡きせめや。たゞうちすてよ、何事も、なにはのふる箕うちかづけて、ありし契にかへりあふ、緣こそ嬉しかりけれ。なう〵、其方と身共が命は、五百八十年。▲女 七廻り。▲シテ めでたうをりやる。此方へをりやれ〵。シテかづけたる箕を持ち舞ふ。古箕うちかづけにて、女にかづけ、あとは扇にて仕舞なり。

るとても、互に厭き厭かれぬ中ぢやほどに、近い所を通らしますならば、必ず寄らしませ。▲シテ又其方が親達へも、よいやうに心得てくれさしませ。さらば〳〵。さても〳〵、興がつたなりかな。あの箕をかづいたなりは、何とぞあらう事ぢや。なう〳〵、まづ戻らしませ。▲女いや、用もござるまい。▲シテ暇のしるしに、まだ添へてやる物がある。戻らしませ。▲女何でござるぞ。▲シテ其方がその箕を被いで行くなりを見て。三日月の、出るも惜しき名殘かなと、發句をしたほどに、其方が親達へ話してくれさしませや。▲女心得ました。まことに、かやうのことに返歌をせねば、口無い者に生るゝと申す。この脇を致さうと存ずる。申し、ござるか。▲シテ其方は何をして居るぞ。夜分にならぬうちに、早う去ないで。▲女されば、只今の發句に脇をしました。▲シテそれは誰がいの。▲女妾が。▲シテ何とめさりやつた。▲女秋のかたみにくれてこそゆけと、しました。▲シテこれは如何なこと。其方は、これほどの心得があらうとは思はなんだが、勸學院の雀は蒙求を囀り、智者の邊の童は、習はぬ經を讀むと云ふが、其方の事ぢや。この上は戻らす

三日月—箕被きを言掛く

脇—第一句即ち發句に附くる第二句が脇なり

秋のかたみにくれて—秋に厭き暮れに呉れを掛く

勸學院—淳和天皇の時設けられし藤原氏の學校

じて夫に從ひ老いて子に從ふ也

家貧にして云々―謡曲芦刈雲雀山にも見ゆ本朝文粋橘在列の詩句

さもしい物―あさましき物也

きぬ〳〵―別れ

あゝ誠に、家貧にしては新知少く、いやしき身には故人疎しと云ふが、身代ふりよくしたれば、女房にさへ見捨てられた。貧は諸道の妨といふが、尤ぢや。世をも人をも恨むまい。二世をかねた妻とても、退けば他人ぢや。暇が欲しくば遣る程に、早う出て行かしませ。▲女なか〳〵、出て行きます程に、しるしを下され。▲シテそれは追出すがしるしぢやわ。▲女いや、女の作法で、塵を結んでなりとも、しるしを取らねばなりませぬ。▲シテそれは安い事ぢや。これ〳〵、塵遣ろ。▲女塵を結んでと云うたは詞でござる。何なりとも、しるしになるものをおこさせられい。▲シテ其方が知る通り、何も遣らう物がない。家についた柱なりとも、引き抜いて行かしませ。▲女柱が持つて行かるゝものでござるか。何なりともおこさせられい、▲シテ何を遣らうぞ。こゝに其方が、朝夕手馴れた箕がある。これを遣るぞ。▲女これでも苦しうござらぬが、路次で人にも逢ひませうに、この様なさもしい物が、持つては行かれますまい。▲シテ持つて行かれずば、かづいて行かしませ。道で人に逢つて、顔が見えいでよからう。▲女この如くに、きぬ〳〵にな

あざる—戯るゝこと

三從—女は幼にして親に從ひ嫁

眞實ぢやと思はしますか。これは皆當座のいひ捨でをりやるわいの。又其方が出て去なうと云うたも、某は誠と思はれぬ。連歌を止めよといふ枕詞ぢやと合點をした。今いうたは皆虚言でをりやる。必ず氣にかけさしますな。▲女いや〳〵、どうござつても、暇を取らねばなりませぬ。▲シテ扨は今いうたことが、それほど腹が立つか。其方が出て去なうと云ふ對句に云うてをりやる。これ程のことを、口ずさみに云ふまいものではない。某が思ふとは、裏表の違ぢや。天神も照覽あれ。ざれごとでをりやる。とかく夫婦は何事も同意せねばならぬ。かう云うてあざるからは、堪忍してくれさしめ。▲女いや、眞實でござらうとも、ざれごとでござらうとも、連歌をさせられては、身代つゞきませぬ程に、どうでも暇を下され。▲シテこれは、かゝる難句をいひかけさします。譬へば骨を朽し、肉を曝すとも、この面白い連歌を、止める事はならぬ。よし此上は、出て行きたくは行かしませ。さりながら、貞女兩夫に見えずと云うて、一度結んで、二度改むる道はない事。三從の愼を知らぬ女は、神祇釋敎にも背くぞ。わごりよは生類ではあるまいぞ。

宗匠―今俳諧の方に云ふ通り先生也

おのれは人の氣にあたる差合も知らぬ云々―以下連歌道の用語を多く插入せり

やり句―未詳

擧句―發句に對して最終の句をいふ

去り嫌ひ―似よりたる句を近接せしめぬこと

姙み句―腹案

▲シテ やあら、おのれは、憎い事を云ふ奴ぢや。尤も某が日頃連歌に好いて、農作を怠る故に、身代落ちぶれたれども、分際相應の理を辨へぬではない。貧福は自然の物なり。果報は寢て待てと云ふことがある。今こそ時にあはで落ちぶれたりとも、今少し連歌を仕覺えて、各の宗匠もするならば、世を送るたづきになるまいものではない。おのれは、人の氣にあたる差合も知らぬ奴ぢや。まづ前句に、連歌を止めよといふやり句をいふ。擧句に、出ていねとも云はぬに、暇をくれいと云ふ。出す五文字から合點がいかぬ。おのれが樣な奴は、人倫たる者は、下女、はしたにしても使ふまいずれども、もとより惡女の去り嫌ひもない某なればこそ、今まで添うて居たれ、常々氣にいらぬ女ぢやと、姙み句に思うて居たに、幸のことぢや。片時も早う出て去ね。▲女 おんでもない事。出て行かいで何とせう。其方がやうなる人に添ひ合するが、前世の因果でをりやる。妾が持つて來た道具小袖を、代なせ〳〵と云うて、皆にさしましたほどに、父樣や母樣に云うて、取返さずば置くまいぞ。▲シテ 扨も〳〵、可笑しいことをいふ。わごりよは今いうたを、

代なさしませ—質に預け又は賣れといふこと

となれば、みな手筈が違ふ。ならぬと云うては置かれまい。物は爲樣、事は才覺ぢや。何卒調ふやうにしてくれさしませ。▲女何と云はせられても、いとなむことはなりませぬ。▲シテそれならば、いひかねたれども、わごりよが嫁入の時、持つてをりやつた手箱を代なさしませ。▲女妾が手箱が、今までござらうか。それは疾う代なしました。▲シテ其方はいつぞやの會の時も、それも代なしてない、これも代なしてないと、おしやつたれども、みごと調へさしました。▲女その時は、何ともしやうはござらず、妾が親里へ云うて遣つて、やう〳〵調へました。▲シテまことにその才覺がよい筈ぢや。又この度も其方が親里へ云うて遣つて、調へてくれさしませ。▲女これが、一度や二度のことではござらず、その樣に、さい〳〵云うて遣る事はなりませぬ。▲シテこれが、わるい事ではなし、わごりよが親も、連歌を好きやるほどに、厭とはおしやるまい。どうでも云うて遣つてくれさしませ。▲女思もよらぬ事。云うて遣る事はなりませぬ。その上、連歌にかゝつてござる故、身代なりませぬ。向後連歌をやめさせられまいなら、妾には暇を下され。

葎の宿—あばらやのこと

力をも入れずして云々—古今集の序文に和歌の徳を述べたる文句

道は邇きに在れど云々—孟子の語

高適—字は達夫唐宗の時の人

身代のつゞく思案をさしませ。▲シテいや、其方は連歌の頭にさへ當れば、腹を立てる。まことにこの様な葎の宿へ、各のお出なさるゝを忝いと思うて、いぶせき小屋の塵をも拂うて、喜ばうはずを、その如くに不機嫌にするは、定めて某に連歌を止めよと云ふことさうな。これはわごりよが、この道にたづさはらぬゆゑぢや。ちと連歌を仕習はしませ。力をも入れずして、天地を動し、鬼神の心をも和らげ、猛き武士もなぐさむ。其方が様に不束な拙い者も、ならぬ事ではない。道は邇きに在れど、これを遠きに求め、事は易にあれど、これを難に求むといふ、聖賢の金言がある。又歌にも、植ゑて見よ花のそだたぬ里もなし、心からこそ身はいやしけれと云うて、移せばなる事ぢや。唐の高適は、五十にして、初めて詩を作つたとさへ云ふ。我が朝に住んで連歌、歌に心を寄せぬは、水に住む蛙には劣つた事でをりやる。▲女まだ譯もない事仰せらるゝ。もはや今夜の頭を營まう様がござらぬ。▲シテいとなまう様がない。▲女なか〱。▲シテ扨々、それは苦〱しい事ぢや。いづれものお出なさるゝ様にと、かた〲契約をしたに、その様なこ

頭に當る―當番のこと

四　箕かづき

二人　シテ　男　素襖、小さ刀さし
　　　女　箔小袖、ゆばうし

▲シテ　罷出でたる者は、この邊の者でござる。頃日、此所許の若い衆が寄り合ひて、連歌をなさるゝにつき、某、この道に不堪なりといへども、各〳〵にまじはつて、口眞似をいたす樣にござる。まことに高き賤しきを分かず、貴からずして高位の交をなし、この樣な面白い事はござらぬ。それにつき、今晩は、某が頭に當つてござる。まづ女どもを喚び出して、申し付けうと存ずる。これの、をりやるか。▲女　妾を喚ばせらるゝは、何事でござるぞ。▲シテ　別の事でもをりない。連歌の頭に當つたについて、いづれもがお出なさるゝ程に、その用意をさしませ。▲女　扨も〳〵、輕忽な事を云はせらるゝ。只さへならぬ身代で、今日も連歌、明日も連歌と云うて、連歌にばかり係つてござるによつて、この如くに、身代おちぶれたことではござらぬか。むざとした事を、仰せられずとも、何卒

共出家になつてをりやる。これ〱身共ぢや。▲女やあ〱、こゝな男、誰に問うて坊主になつた。妾は何とするぞ。あら腹立ちや〱。▲アドいや、おれは是非なりたいとも云はなんだ。こゝな出家が、樂な者ぢや、是非なれとおしやつた。▲女なれと云うてなるものか。腹立ちや〱。▲アドあゝ許せ〱。▲女やい〱、そこな賣僧坊主、なぜに大事の男を坊主にした。▲シテいや〱、常々望ぢや、お内儀も合點ぢやと云はれた。▲女まだその様な事云ふか。腹立ちや。もとの様にして返せ〱。▲シテあの今剃つたものが、何となるものぢや。二三年の内には、元の様に生えうぞ。▲女いや〱、どうでも元の様にして返せ。やるまいぞ。どこへ逃ぐる。▲シテいや〱、知らぬぞ〱。▲女やるまいぞやるまいぞ。あらはらだちや〱。

こちの人―夫を呼ぶ詞

う。何と、人の名といふは、家により、つく字があるが、こなたの家には、何といふ字をつくぞ。▲アド されば、私家には、下にれんの字をつきます。▲シテ 何と、れんの字、れんれん。▲アド 蓮と申す字でござる。▲シテ 何ぢや、蜂の巣。▲アド いや、蓮と申す。▲シテ いかにもく〳〵、合點でござる。蓮の字、下に蓮の字〳〵。よい名があるわ。▲アド 何とでござる。▲シテ い蓮坊とつけませう。▲アド いや〳〵、是は厭でござる。もそつと、よい名をつけて下され。▲シテ 夫なら何とつけうぞ。は蓮坊とつけませう。▲アド いや〳〵、是も聞きにくい名でござる。よい名をつけて下され。もそつと長い名がようござる。▲シテ それなら長い名は、ちりぬ蓮坊とつけませう。▲アド いや〳〵、これも喚びにくい名でござる。▲シテ これもいやなら、何とつけうぞ。よい名があるわ。ろ蓮坊と附けう。▲アド ろ蓮坊。これは好い名でござる。これに致しませう。▲シテ それなら、向後こなたは、ろ蓮坊ぢや。▲女 なうなう、こちの人は何所にござる。一飯が出來ました〳〵。▲アド これ〳〵、此所にゐるわ。▲女 否、こなたではない。こちの人、何所にぞ。▲アド いや、そちが見違へたが道理ぢや。身

合點―承諾

三歸―佛法僧の三つに歸依すること

五戒―殺生偸盗邪淫妄語飲酒の五つの戒め也

ござるによつて、女共も親類も、皆合點でござる。是非とも髪を剃つて下され。▲シテ それなら、なるほど、弟子に致して剃りませう。用意なされ。▲アト 心得ました。まづ揉みませう。最早ようござる。▲シテ さらば剃りませう。三歸五戒を授けたり。南無歸依僧歸依法歸依佛。ぢより／＼。（頭巾著せ）さあ剃りました。好うござるわ。▲アド 忝うござる。何と似合ひましたか。▲シテ なか／＼、よう似合ひました。何と衣の用意がござるか。▲アド いや、まだ用意もござらぬ。▲シテ それなら、身どもが代の衣がある、貸しませう。これを著させられ。▲アド 忝うござる。著ませう。▲シテ 扨も／＼、尚好うござる。▲アド 申し／＼、とてものことに、私の名を附けて下され。▲シテ いや、名は今までの名がようござる。▲アド いや／＼、出家の、俗名ではなりますまい。是非とも附けて下され。▲シテ まづそれにござれ。やれ／＼、迷惑な事でござる。身どもは幼少の時より、學文は致さず。人の名を附くるは、とつと、むづかしいものぢやと申す。何と致さう。思ひ出した。いろはをやう／＼習うておいた。いろは字で、名をつけて遣らうと存ずる。さらば名をつけて進ぜ

後世―未來に極樂往生すること

まだ朝顏の花は、早朝に開き、夕を待つ樂もある。人間の果敢なきは、出づる息、入る息を待たぬ果敢ない物でござる。老少不定と申して、若いが先だち、老いたるは、後に殘る世のならひでござる。かやうのことを存じて、後世を願はぬと云ふは、大きな油斷でござる。必ず〳〵、こなたにも、今より後世を大事と心得、願はせらるゝが肝要でござる。まづ教化と申すも、皆この樣なことでござる。▲アド 扨も〳〵、ありがたい教化に預りまして、忝うござる。何と、こなたの樣な出家は、今からこの世を離れてござるほどに、定めて、何事も心にかゝる事も無う、樂な事でござらう。▲シテ 仰せらるゝ通り、出家ほど樂な者はござらぬ。この世に、一つも思ひ殘す事はござらず。たゞ後世を大事に致し、何方へなりとも、行きたい方へ心に任せ參る事なれば、出家はこの世からの佛でござる。▲アド さやうでござらう。それにつきまして、私も常々出家の望でござる。向後は、こなたの弟子にして、出家にして下され。▲シテ それは易い事でござる。さりながら、まづ、親類衆又御内儀とも、よう談合して、出家にならせられ。▲アド いや〳〵、常々望で

まづ宿を借りませう。ものもう。案内。▲アド表に案内がある。どなたでござる。▲シテこれは旅の出家でござる。行き暮れてござる。一夜の宿を貸して下されい。▲アド安い事でござる。見苦しうござれども、御宿申しませう。これへ御通りなされい。▲シテそれは忝うござる。通りませう。まづ下に居ませう。▲アドなうなう、女ども居さしますか。旅の御出家に、御宿申した。一飯を拵やりやれい。▲女心得ました。拵へませう。▲アドなうなう御出家、まづゆるりとござれ。追つけ一飯が出來ます。▲シテそれは忝うござる。▲アドそれにつきまして、私の常々存ずるは、こなたの樣な御出家に逢ひまして、敎化にも預りたいと存じてござる。それ故、御宿を申してござる。今宵は、夜とともに、敎化をなされて下されい。▲シテそれは易いこと。出家の役でござるほどに、いかにも敎化を致しませう。まづ敎化と申じて、別の事もござらぬ。すでに人間の果敢ない事を申さば、電光、朝露、石の火、風の前の灯、又は朝顏の花などにも、譬へおかれてござる。御存じの如く、朝顏の花と申すは、朝開きて日の出れば凋み、夕にばらりと落つる。果敢ない物でござる。



三路蓮坊主

三人　シテ出家　衣、布頭巾
　　　アド男　初半袴、上下、後に十德
　　　　　　　小袖、ゆばうし

▲シテ坊主 これは、東國邊に住居致す者でござる。某世の中を味氣なう存じ、かやうの態になつてござる。これより國々修行致さうと存ずる。まづ上方へ上り、此所彼所を見物致しませう。そろ〳〵と參らう。道行 まことに出家程、世に樂な者はござらぬ。何方へなりとも、行きたい方へ、心に任せ、參ることでござる。やあ、これははや日も暮方になりました。宿を借りたいが、これに家がある。

たらしめ―人をだます者

ないぞ。▲シテ どうでも返さぬか。さあ取つたぞ〳〵。▲入間 やい〳〵たらしめ。どこへ、やることでないぞ。やるまいぞ〳〵。

すかさう—はづすこと

入間樣—入間風

も致さねば、其方におまらするでもをりやらぬぞ。▲入間 これは結構にもない上下、小袖を、下されも致さねば嬉しうもござらぬ。▲シテ まだ嬉しうないといふ。扨も〳〵可笑しいことかな。入間言葉は面白い物かな。▲入間 一段の仕合でござる。すかさうと存ずる。▲シテ なう〳〵、これ〳〵。まづ戻りやるな。▲入間 いや、是を置いて參るまい。▲シテ いや、用がをりない。まづ戻りやるな。▲入間 何事でをりやる。▲シテ 何と、その如くに、色々の物貰うて、眞實嬉しいか、嬉しうないか、おしやれ。▲入間 いや忝うもござらぬ。▲シテ いや〳〵、それは入間樣。最早入間言葉をさらりと捨てて、眞實は嬉しいか、嬉しうないか、おしやれ。▲入間 眞實は思召しても御覽ぜ。この如くに太刀、刀、上下、小袖まで下されて、何がさて忝うもござらぬ。▲シテ はて扨くどい人ぢや。その入間言葉をさらりと止めて、眞實をおしやれ。▲入間 眞實は何かござらう。この如くに結構なもの、種々下されて、忝うないと云ふ事がござらうか。身に餘りて忝うござる。▲シテ 何と、忝い。▲入間 なか〳〵。▲シテ 忝いとは、忝うないと云ふ事であらう。此方へ返せ。▲入間 いや〳〵、遣ることで

ほうどした―行き詰つた

京折―京都にて製したる品

下されもなされば―刊本かくあれどなされねばとすべし

矢八幡成敗せまいと云ふ事ぢやと思うて、あら心安や、ざつと濟んだと申す事でござる。▲シテこれでほうどした。助けずばなるまい。▲冠者お助けなされたがようござりませう。▲シテこれ〳〵、わごりよの命を、最早助くるでもをりないぞ。▲入間身共が命を助けもなさらねば、忝うもござらぬ。▲シテ大笑あり。扨も〳〵をかしい事かな。やい〳〵太郎冠者、命を助かつて忝うないと云ふは、可笑しい事ではないか。なんぞ遣つて、入間言葉を聞かう。これ〳〵、この扇は、京折でもなけれども、そなたへ進ずるでもをりないぞ。▲入間京折でもござらぬ扇を、下されも致さねば、滿足にも存じませぬ、▲シテ大笑あり。扨も〳〵可笑しい。物を貰うて嬉しうないと云ふわ。これ〳〵、この太刀かたなは重代なれども、遣るでもをりないぞ。▲入間重代でもござらぬ太刀かたなを、下されもなされば、祝著にも存ぜぬ。▲シテ大笑あり。なう〳〵可笑しや〳〵。何をやつても嬉しうないと云ふ。太郎冠者も何ぞ遣つて、入間言葉を聞かぬか。▲冠者いや、私は何も遣る物がござらぬ、▲シテやあ、この上下、小袖もやつて、入間言葉を聞かう。さあ〳〵脱がせ〳〵。なう〳〵、この上下、小袖は、水に濡れ

南無三寶—驚嘆の聲
成敗—罪を責むること、手打などにする也
入間言葉—又入間樣といふ、反對にいふと意を逆にいふとの二つあり

ござる。御無用ぢや。止めさせられ〳〵。▲シテ さあ〳〵太郎冠者、渡れ〳〵。これは如何な事。南無三寶。やれ、流れるわ〳〵。▲入間 はあ、これは深いと申すに。笑止な。▲シテ おのれ、憎い奴の。やる事ではないぞ。成敗する。▲入間 これは何とめさるぞ。▲シテ 最前に川の名を問へば、入間川といふ。渡瀬はと問へば、此所は深い、上へ廻れといふ。總じて入間言葉には、逆語を使ふにより、この所を深いと云ふは、淺いと云ふこと、上へまはれといふは、此所を渡れと云ふことと、心得て渡つたれば、諸侍に、欲しうもない水をくれた程に、成敗するぞ。▲入間 扨はこなたには、入間言葉をよく御存じでお遣ひなさるゝな。▲シテ なか〳〵、知つて居る。▲入間 何と、成敗せうと仰せらるゝは定でござるか。▲シテ なか〳〵、定ぢや。▲入間 とても事に、御誓言で承りませう。▲シテ 何が扨、弓矢八幡成敗いたす。▲入間 やら心安や。ざつと濟んだ。▲シテ これは如何なこと。成敗せうと云へば、あら心安や、ざつと濟んだと云ふは、どうしたことぢや。▲入間 さればその事ぢや。こなたは入間言葉を御存じで、お使ひなさるゝによつて、成敗せうと仰せらるゝは、弓

慮外―無禮

いや、某に、今の樣な慮外をぬかす。打切つてくれう。▲冠者 いや、左樣でござらぬ。お國許でこそ、こなたを見知りませう。こゝ許では、見知らぬによつての事でござる。言葉を直してお尋ねなされませ。▲シテ それもさうぢや。言葉を直さう。申し〳〵、向なお方に、物が問ひたうござる。▲入間 これは如何な事。言葉を直した。申し〳〵、物が尋ねたいと仰せらるゝは、此方の事でござるか。何事でござるぞ。▲シテ 扨も〳〵可笑しい事かな。言葉を直した。川の名を問はう。申し〳〵、この川は何と申す川でござる。▲入間 これは入間川と申します。▲シテ やい太郎冠者、入間川ぢやと云ふわ。▲冠者 さやうでござる。▲シテ 渡瀬を問はう。申し〳〵、この川は何處許を渡ります。又こなたの名は何と申す。▲入間 身共は、入間の何がしでござる。この川は、これより上を渡ります。此所は深うござる。▲シテ やい〳〵、何がしぢやと云ふわ。最前腹を立てたが道理ぢや。渡瀬は上を渡ると云ふ。さあ〳〵知れた。渡れ〳〵、▲冠者 いや〳〵、其所は深いと申します。御無用でござる。▲シテ いや〳〵、身共が合點ぢや。此所を渡れ〳〵。▲入間 申し〳〵、其所は深う

三國─日本唐天竺

隱れもない何がし─庄屋などの格

あの如く─横柄なる詞遣をいふ

もでござる。▲シテ これは戯言。馬に乘せうぞ。▲冠者 彌忝うござります。▲シテ やい太郎冠者、向に眞白に見ゆるは、富士山であらうなあ。▲冠者 成程富士山でござる。▲シテ 三國に隱れもない名山ぢやと云ふが、見事な山ぢやなあ。▲冠者 左樣でござります。▲シテ大名道行 さあ來いく。はや駿河の國へ來た。急げく。やあ、これは渺々とした野へ出た。定めてこれが武藏野であらう。扨もく廣いことぢやなあ。▲冠者 廣い野でござります。▲シテ もはや國許へも程近い。さあ來いく。▲冠者 參ります。▲シテ やあ、これに大きな川がある。是は何といふ川ぢや。上りにもあつた川か覺えぬ。▲冠者 されば、覺えませぬ。▲シテ 誰ぞ在所の者が見えたら、尋ねたい。▲入間何某 これは入間に隱れもない何がしでござる。川向へ用所あつて參る。▲シテ やあ、向に人が見ゆる。尋ねて見やう。やいく、向な者に物が問ひたいやい。▲入間 これは如何なこと。この邊で某に、あの如く云ふ者は覺えぬ。返事の致し樣がある。やいく、物が問ひたいと云ふは、こちの事か。何事ぢやや い。▲シテ これは憎い奴の。太郎冠者、太刀をおこせい。▲冠者 これは何となされます。▲シテ

二　入間川

シテ　大名　熨斗目、素襖、大臣烏帽子、小さ刀
三人　太郎冠者　半袴、上下、太刀持つ
入間　長袴、小さ刀

▲シテ大名　八幡大名。長々在京致すところに、訴訟思ひのまゝに相叶ひ、この様な嬉しい事はない。まづ太郎冠者を喚び出し、喜ばせうと存ずる。やい〳〵太郎冠者、あるかやい。▲冠者　はあ。▲シテ　居たか。▲冠者　お前に居ります。▲シテ　早かつた。汝を喚び出す事、別の事でない。なが〳〵在京するところに、訴訟思ひのまゝに相叶ひ、追付け國許へ下る。何とめでたい事ではないか。▲冠者　これは御意の通、おめでたい事でござる。▲シテ　その義ならば、追付け下らう。供をせい。▲冠者　畏つてござる。▲シテ　道行　やい〳〵、汝は精を出して、よう奉公したほどに、國許へ行たらば、馬に乗せうぞ。▲冠者　それは忝うござる。▲シテ　さりながら、馬に乗るまでは牛に乗れといふ。まづ牛に乗せうぞ。▲冠者　それは、ともかく

許由―帝堯の時の人といふ
桃林―牛を桃林の野に放つといふ周武王の故事
風吹枯木云々―白樂天の詩句なり雨と霜との語尾を引きて牛の嘶聲に譬ふ
一天の君云々―天皇の牛車に召さるゝこと
どう／＼―馬を驅る掛聲
させいほうせい―牛を逐ふ聲

とは候まい。その上一天の君も、牛に引かれて行幸あれ。馬にひかれて、行幸ありたるためしはあるまいぞ。▲曰 扨も／＼、これも劣らぬ系圖ぢや。さりながら、これでも、何とも云ひつけられぬ。やい／＼、これでも云ひつけられぬ。重ねて何ぞ勝負をせい。▲馬 されば、何を致しませうぞ。勝負に駒競いたして、駈合ひませう。問はせられて下され。▲曰 心得た。やい／＼、今度は勝負に、駒競して駈合させうと云ふが、汝もするか。▲牛 いや／＼、それはなりますまい。總じて馬ははやい物でござる。牛は駈くる事が遲うござる。なりますまい。▲曰 いや／＼、爲ずば汝が負ぢやぞ。▲牛 それなら是非に及びませぬ。致しませう。▲曰 それならこれへ出よ。牛もこれへ出よ。さあ駈けい。▲馬 どう／＼どう。▲牛 させいほうせい／＼。▲馬 どう／＼／＼。さあ勝つたぞ／＼。▲牛 やい／＼／＼。▲馬 何事ぢや。▲牛 遲牛も淀、速牛も淀と云ふ。明日の今時分には追つ付かうぞ。▲馬 最早勝つたぞ／＼。どう／＼／＼。▲牛 させいほうせい／＼／＼。

「いろふ」の寫し誤か
南鐐—平宗盛の馬
木の下—源仲綱の馬
よめなし月毛—平重衡の馬
鬼足毛—足は鹿の誤歟、木曾義仲の馬
大夫黒—源義經の馬
望月の駒迎—八月十六日駒牽の儀式行はる東國より貢る馬を逢阪山に迎ふるをいふ
白馬の節會—正月七日の儀式二十一疋の白馬を叡覽あるなり
駒北風に—文選の古詩に胡馬依北風とあり
逢阪の—これは無之の歌

めでたきことを競馬、又本歌にも、逢坂の關の清水にかげ見えて、今やひくらん望月の駒とこそあれ、牛とはござるまい。▲目 扨も〳〵、これは聞き事ぢや。あれも系圖があるか、尋ねて見やう。やい〳〵、あの馬には系圖があると云うて、その仔細を語つた。汝が牛にも系圖があるか。語れ。▲牛 畏つてござる。系圖がござる。語りませう。よう聞いて下され。語 抑牛は、大日如來の化身として、牽牛織女と聞く時は、七夕も牛をこそ寵愛し給ふ。惠山和尚といつし人、我が身を牛になしてこそ、異類の法を見せしむれ。許由といへる賢人は、王になれとの勅を受け、耳を洗ひし水をだに、巣父は牛に飼はざりし。佛の作る十牛や、法の花咲く牛の子に、桃林の春も面白や。今は昔になりひらの、うしみつまでの御契、さこそ心をつくし牛、野飼の牛の一聲も、草刈笛にやまがふらん。されば牛も心あればこそ、風吹古木晴天雨と、女牛吟ずれば、男牛聞き、月照平砂夏夜霜と、この兩牛の聲を、朗詠にも作れたり。忝くも天神の御詠歌に、牛の子にふまるな庭のかたつむり、角ありとても身をば頼みそ。かやうにこそあれ。やはか馬

馬こそ負うて―經典を傳へしことを云ふ

八疋の駒―絕地翻羽、奔宵、越影、踰輝、超光、騰霧、挾翼いづれも駿馬なりと云ふ

望雲水―これは宛字か項羽の馬は騅と云へり

管仲―齊桓公の臣これは孤竹を征せし時のこと

稻乞―刊本この二字、字體明かならず、これは

蠅を追うでござらうと、仰せられて下され。▲目 これも尤も聞えた。その通を云はうぞ。やい〳〵、只今あれが云ふを聞いたか。▲馬 なか〳〵、承りました。我儘なこと申す。それはともあれ、此方の馬には、とつと系圖がござる。あれが牛には系圖はござるまい。▲目 何と、馬の系圖がある。それなら語つて聞かせ。▲馬 畏つてござる。語りませう。語 それ馬は、馬頭觀音の化身として、佛の說きし法の舟、月氏國より漢土まで、馬こそ負うて渡るなり。周の穆王の八疋の駒、扨項羽の望雲水、安祿山の驊騮なんどは、何れも千里をかくるなり。又管仲は旅に出で、俄に大雪降り、故鄕へ歸らん道を忘れつゝ、馬を放ちて、その跡をしるべにしつゝ歸りしも、馬の德とぞ聞えける。扨日の本に名を得しは、天の駮駒初として、光源氏の大將の馬に、稻乞須磨の浦、燒金南鐐、木の下や、よめなし月毛、鬼足毛、源太佐々木が名を揚げし、生食、摺墨、大夫黑、雲の上には望月の、駒迎せし逢坂の、小さかの駒も心して、引く白馬の節會にも、牛のねり入るためしなし。佛の前には繪馬を掛け、神には立つる幣の駒、駒北風に嘶ふれば、惡魔はくわつと退きて、

申しあがつて—言ひ募つて

流鏑馬—馬弓の一種也馬を走せ乍ら鏑矢にて射る也

供御—食物

るによつて、身共が早々罷出で、一の杭に繋いでござれば、あの橫著者が、私よりとつと後から參つて、先へ來たと申す。それを申しあがつての事でござる。目代殿ならば、急度御詮議なされて下され。▲目これは埒の明かぬ事ぢや。どれも同じやうな事を云ふ。やい〳〵、あれに樣子を尋ねたれば、汝が云ふ如く、あれも先へ來たといふ。これでは何とも埒が明かぬわ。▲馬扨はさやうに無理を申しますか。私が先へ參りましたが定でござれども、さやうに申さば、まづその通になりともなされ。總じて、この馬と申すは、上つ方に御重寶なされて、駒競の、流鏑馬のと申して、とつと尋常なものでござる。あの又牛と申すは、賤しい物でござる。このめでたい市場に、一の杭には立たれますまい。とつと市末へ遣らせられませ。▲目尤ぢや。その通いひ付けてやらう。やい〳〵、あれが只今いうたを聞いたか。▲牛なか〳〵、承りました。尤もあれが申す如く、駒競の、流鏑馬のと申してござれども、それもこの牛と申すものに、田を鋤かせ、米を作り、供御をさしあげ申して、その上にこそ、駒競も、流鏑馬も入ませうずれ。何も參らずば、頤で

や。▲馬こなたは、どなたでござる。▲目これは所の目代ぢや。▲馬まづ御禮申します。▲目禮は追つての事。何を論ずるぞ。▲馬さればく〳〵、まづ御聞きなされて下され。このところ御富貴故、牛馬の新市を御立てなさるゝ。御高札には、何者なりとも早々罷出で、一の杭を繋いだ者を、末代まで、市の司に仰せつけられうずとの御事でござる。それゆゑ夜深なれども、身共の、早々罷出で、まんまと一の杭に繋いでござれば、あの横著者が、後から參つて、先へ來たと申すほどに、退けと申せども、退きませぬによつてのことでござる。目代殿なら、急度いひつけて下され。▲目何と、其方が先へ來たが眞實か。▲馬なかなか。まことでござる。▲目それなら云ひつけて取らせう。まづ待て。やい〳〵、このめでたい新市に、何をわつぱと云ふぞ。▲牛こなたは目代殿でござるか。▲目なか〳〵。▲牛まづ御禮申します。▲目禮は追つてのこと。何事を云ふぞ。▲牛さればの事でござる。この所御富貴について、牛馬の新市を御立てなさるゝ。御高札には、何者にはよるまい、早早罷出で、一の杭に繋いだものを、末代まで、市の司に仰せつけられうとの御事でござ

市場はこれぢや。扨も〳〵賑かなことかな。さりながら、一の杌はまだ上さうな。上へ參らう。これは如何なこと。身共ほど隨分夜深に參つた者はあるまいと存ずるところに、はや何者やら先へ來て居る。彼奴は大方四五日前から來て居ると見えた。何とせうぞ。思ひ出した。致しやうがある。あの先の杌に繋いで置かう。まんまと知らぬ樣に繋いだ。皆々、一の杌を、この牛博勞が繋いでござる。御用ならば仰せられ候へ。まだ夜深な。ちとまどろまう。▲馬 扨も〳〵寢たことかな。これは何者ぢや知らぬ。やい〳〵、其處な者、起きよ〳〵。▲牛 これはどなたでござる。▲馬 身どもは馬博勞ぢや。▲牛 何ぢや、馬博勞ぢや。▲馬 なか〳〵。▲牛 身共は目代殿かと思うて、よい肝潰した。そちが馬博勞なれば、身共は牛博勞ぢや。▲馬 それでも身共が先へ來た。其所を退け。▲牛 いや〳〵、身共が先へ來た程に、退くまい。▲馬 それなら目に物見せう。▲牛 目に物見せ立ては置いてくれ。▲馬 やあ、おのれは憎い奴の。退かぬか〳〵。蹈め〳〵。▲牛 やれ、これは何とする。出合へ〳〵。▲目 やい〳〵〳〵、これは何事を論するぞ。このめでたい市初に、何事ぢ

富貴につき、牛馬の新市を御立てなさるゝ。何者にても早々罷出で、一の杭に繋いだものを、末代まで、市の司に仰せつけられうとの御事でござる。某罷出で、一の杭に繋がうと存じて、夜深にござれども罷出でた。まづ急いで參らう。道行 やれ〳〵只今こそ、かやうの賤しい商賣いたすとも、一の杭に繋いでござるなら、後には何を商はうと、身共次第ぢや。參るほどに、市場はこれぢや。さりながら、まだ一の杭は上さうな。上へ參らう。これがさうぢや。こゝにこの馬を繋いで置かう。皆々、一の杭を、この馬博勞が繋いでござる。馬の御用あらば仰せられ候へ〳〵。やあ、まだ夜深な。ちとまどろみませう。ねてゐるなり ▲シテ牛 これは、山一つ彼方に住む牛博勞でござる。この所御富貴につき、牛馬の新市を御立てなさるゝ。何者なりとも、早々罷出で、一の杭に繋いだものを、末代まで、市の司に仰せつけられうとの御事でござる。身共も、一の杭に繋がうと存じ、早々罷出でた。まづ急いで參らう。道行 やれ〳〵只今こそ、かやうの賤しい商賣致すとも、一の杭に繋いでござるなら、後には金襴緞子、綾、錦など商はうと、身共次第ぢや。參るほどに

博勞―牛馬の賣買人也古支那に馬の相者とて博勞伯樂などありしに基くといふ



續狂言記卷之五

一　牛馬

三人　シテアド二人　長袴、上下、腰帶
目代　長袴、小さ刀

▲アド目代　罷出でたる者は、この邊の者でござる。この所富貴なるにつき、牛馬の新市を御立てなさるゝ。早々罷出で、一の杭に繫いだ者を、末代まで、市の司に仰せつけられうとの御事でござる。則ち某に目代を仰せつけられた。まづ高札を打たう。はつし〳〵。一段好うござる。▲アド馬　罷出でたる者は、この邊の馬博勞でござる。この所御

と思うて腹を立て、愚僧も取り外して、一人腹を立つる所が、修羅道ぢや。布施の方とも、齋の方とも、一道に辨へなんだところが、人道ぢや。四道を構へながら、天台の剃刀にて頭を圓め、解脱とそうの衣を著て、口に佛言を唱ふるとも、成佛得脱ならずして、無間地獄へ落ちんこと疑ひ有るまじ。あら淺ましの愚僧が心中や。はあ、切もしなしたり。南無阿彌陀佛〱。

とそう―原本にかくあれど轉相なるべし
しなしたり―失策せる意

點心—間食
らたいふはたうばゐんさい—不詳
はぐれた—外れた
ちやうさい—調菜なるべし。

べ、點心を食うて、御馳走にあふは、出家の身として、これに上越す思出はあるまい。只齋の方へ行かう。又此所にある、らたいふはたうばゐんさいと聞く時は、裸體にては安からず。その上、麻の衣に紙の衾、設け易うして、道心の望少し。十疋の布施を取つて、眞中より押し切り、半分は鹽噌、薪を買うて、衾を被り、寒氣を防いだが增しであらう。殊に布施の方にも、一飯はあると申すほどに、とかく、布施の方へ參らう。やあ〳〵、何と云ふぞ。一飯が過ぎて、出家達はお歸りやつたと申すか。これは如何な事。まことに獨言を云うて居た中に、日がたけた。尤ぢや。是非に及ばぬ。今からなりとも、お齋の方へ參らう。やあ何と、愚僧が遲いと云うて、餘の出家を喚ばせられて、それもお歸りやつたと申すか。南無三寶。これは何方もはぐれた。扨も〳〵苦々しい事をした。よく〳〵思案するに、人死して六道に迷ふと申すが、愚僧は生きながら迷うた。まことに、色々のちやうさいを調へて待つところへ行かぬは、これすなはち餓鬼道なり。又、布施の方へ行かうか、齋の方へ行かうかと迷ふところが、畜生道。檀那も遲い

布施物をひかせらるゝ—施し物を賜はること
常齋—きまりたる食事
思案に落ちぬ—決心のつかぬこと
檀徒—檀家に同じ
しやうもん—證文か、一說宗門

十　どちはぐれ

一人　僧　布頭巾、のしめ、衣、珠數持

愚僧は、この邊に小庵を結んで、住居致す者でござる。今日は、さる御方に志をなされ、その上、十疋の布施物をひかせらるゝとありて、昨日、愚僧にも參る樣にと、御使でござつた程に、なるほど參りませうと申して、約束致してござるが、さりながら、又常齋を下さるゝ御方があつて、毎月定めてこれへ參る。まことに粥から御齋を下されて、その上に、結構なお菓子まで下さるゝが、何方へ參らうぞと、とやかうと思案に落ちませぬ。されば有生衣食住と聞く時は、一切生を請けたる物の、食を求めぬはござらぬ程に、只齋の方へ參らう。布施は後の事でこそあれ。いや〳〵、檀徒はこれ萬行のしやうもん、是によつて親疎を殘さず、佛も布施を取れとこそ說き給ふ程に、とかく布施を取る方へ參らう。さりながら、一時の榮華に、千年を延ぶると申すほどに、粥からお齋まで食

搖に上げう―胴上げをすること

うにござる。解けますぞ〱。さあ解きました。どれ〱、こなたも解きませう。扨も扨も、憎い奴でござる。何としたものでござらう。▲主 いや〱、この態では、側へ寄るまいほどに、元の樣にして居て、これへ來たらば捕へて、あいつを搖に上げう。▲次郎 一段とようござらう。▲主 さあ、これへ寄つて、元の樣にして居よ。▲次郎 心得ました。▲太郎 狐めは、二疋ながら居るか知らぬ。この鎌で打殺してくれう。さあ、今打殺すぞ〱。▲主 そりや次郎冠者。▲次郎 心得ました。▲主 おのれは憎い奴の。次郎冠者、足を持て。▲次郎 心得ました。▲主 さあ、ゆりに上げ〱。▲太郎 これは、何と、狐共するぞ。▲主 狐とは。まだおのれめは。憎い奴の。縛り居つたがよいか。これがよいか。▲太郎 扨は頼うだ人、次郎冠者か。許させられ。眞平御許され〱。▲二人 何所へうせる。やるまいぞ〱。

がつきめ—餓鬼めと罵る也

て、見舞に來た。次郎冠者を先へおこしたが。▲太郎なか〳〵。あれに居ます。これは如何なこと。これもようばけた。その儘頼うだ人ぢや。縛つてくれう。がつきめ。おのれ騙さるゝ事ではないぞ。▲主これは何とするぞ。身共ぢや。▲太郎おのれもようばけた。まづ縛つて、此大木に括りつけて置いて、致しやうがある。狐は松葉で燻べると厭がるといふ。燻べてやらう。さあ〳〵、尾を出せ。鳴け〳〵。▲主おのれ太郎冠者め、主を此樣にして、罰當りめ。▲太郎何を狐殿いはるゝ。さらば次郎冠者狐も燻べてやらう。さあ〳〵鳴け鳴け。こん〳〵と云へ。▲次郎是は何とする〳〵。▲太郎ありや〳〵、厭がるわ〳〵。おのれ二疋ながら、鎌を取つて來て、皮を剝いでくれうぞ。待つて居れ。ようばかさうと思うたなあ。只今殺してくれうぞ。鎌を取つて來るぞ。▲主扨も〳〵、氣の毒な奴ぢや。やあ、それに見ゆるは次郎冠者か。▲次郎さやうでござる。こなたは頼うだ御方か。▲主なか〳〵。汝も縛り居つたか。▲次郎いかにも縛られました。▲主何と、鎌を取つて來る。殺さうといひ居つたが。何とそちが繩はほどかれぬか。▲次郎されば、どうやら繩が解けさ

眉毛を濡さう―ばかされぬやうに眉に唾をつくるなり

どつこへ云々―こゝにて縛る也

う似せた。おのれ、ばかさるゝ事ではないぞ。まづ眉毛を濡さう。▲次郎 ほいく。▲太郎 ほいく。此所に居るわ。▲次郎 何所に居るぞ。▲太郎 此所に居るわ。やあ次郎冠者か。▲次郎 なかく。頼うだ人が云ひ付けられて、伽に來たわ。▲太郎 ようこそをりやつたれ。さてもさても、よう化けた。其儘の次郎冠者々々々々。捕へて縛つてやらう。やい次郎冠者、最前向の山から、大きな鹿が出たを、身共が逐うたれば、此方の山へくわらくと逃げたわ。▲次郎 それは出かした。▲太郎 どつこへ、やる事ではないぞ。▲次郎 これは何とするぞ。▲太郎 何とするとは、狐め。ばかさるゝ事ではないぞ。▲次郎 己は次郎冠者々々々々。▲太郎 何の次郎冠者。おのれ縛つて此柱に括つて置いて、狐殿、よいなりの。おのれ、今に皮を剥いでくれうぞ。▲主 太郎冠者、次郎冠者を山田へ遣してござる。心許なうござる。見にまらうと存ずる。ほいく。太郎冠者やい、次郎冠者やい。ほいく。▲太郎 これは如何なこと。又狐が出居つた。あれは頼うだ人の聲ぢや。これも捕へてやらう。ほいく。▲主 ほいく。何所に居るぞ。▲太郎 此所に居ます。▲主 やあ、これに居るか。淋しからうと思う

へ行て、鳥獸も來たらば、逐うて番をせい。▲シテ太 畏つてござる。私一人でござるか。▲主 いや、後ほどは、次郎冠者も見舞に遣らうほどに、まづ行け。▲シテ太 心得ました。▲主 さりながら、この中は、狐塚の狐が出てばかすと云ふほどに、ばかされぬやうにして番をせい。▲シテ太 それはこはいことでござる。最早參ります。▲主 明日早々歸れ。▲太郎 はあ。▲主 えい。▲太郎 はあ。道行 さても〳〵、迷惑なこと云ひ付けられた。夜晝使はるゝと云ふは、氣の毒な事ぢや。參る程にこれぢや。まづこれに居て番を致さう。▲主 太郎冠者を、山田へ番に遣はしてござる。定めて淋しうして居るでござらう。次郎冠者を見舞に遣はさうと存ずる。やい〳〵、次郎冠者あるか。▲次郎 これに居ります。▲主 汝は大儀ながら山田へ行て、太郎冠者が伽をしてやれ。▲次郎 畏つてござる。▲主 竹筒もちと持て行け。▲次郎 心得ました。これはさて迷惑なれども、參らずばなるまい。主命ぢや。是非に及ばぬ。これは暗うて、何所やら知れることでない。呼ばはつて見やう。ほい〳〵太郎冠者。やい何所に居るぞ。▲太郎 さればこそ、狐が出た。あれは次郎冠者が聲ぢや。よ

氣の毒な—閉口な、困る

伽—相手



九狐塚

三人　シテ太郎　半袴、上下、腰帶
　　　アド主　長袴、小さ刀さし
　　　次郎冠者　半袴、上下、腰帶

▲アド主 此邊の者でござる。某山田を數多持つてござる。當年は殊の外よう出來てござる。さりながら、頃日は鹿、猿、貉が出て、田を荒します。太郎冠者を喚び出し、山田の番に遣らうと存ずる。やい〳〵、太郎冠者あるか。▲シテ はあ、御前に居ります。▲主 汝を喚び出すこと、別の事でない。當年は身共の山田が、殊の外よう出來た。それにつき、頃日は、鹿猿が田を荒す程に、汝は今夜山田

いたが、それほど腹が立つか。まづこちへ寄らしませ。▲猿 きやあ〳〵。▲シテ なう
悲しや。女共、これはなぜに掻き付く。どうしたことぞ。▲猿 きやあ〳〵。▲シテ あゝ
悲しや。女房共が猿になつて、毛が生えた。何とせうぞ。▲猿 きやあ〳〵。▲シテ あゝ
悲しや。ゆるせ〳〵。

もよい男でをりやる。▲女それならどうなりとしませうが。▲シテなう女どもく、何方へ行かしました。女房どもく。▲女いや、此所に居ます。さてもく、今の舞は面白い事でござる。▲シテいやく、わごりよは立つ居つして、どうやら合點が行かぬ。よいく、仕樣がある。この帶で繋いで、身共が帶に結ひつけて置かう。▲女これは何となさるゝ。▲シテこれく、かうして置けば氣遣がない。さあく、酒を又飲まう。▲女それく、注ぎました。最早過ぎませう。▲猿引これはいかなこと。座頭は賢い者ぢや。繋いで置いた。なうく、をりやれく。何と、腰を敎ゆるは、繋いであるによつて、行かれぬと云ふ事か。尤ぢや。何とせうぞ。思ひ出した、仕樣がある。この猿と繋ぎ代へて置かう。足音を聞きとられてはなるまい。そつと繋ぎ代へて置かう。さあ、しすました。まんまと繋ぎ代へた。これく、其方をよい所へきもいらうといふは詐、身共が所へ連れて行て、千年も萬年も添はうぞ。此所へ負はれさしめ。なうく嬉しや。急いで歸らう。▲シテさあさあ、もそつと酒を飮まう。注がしめ。なう女共、なぜに物をおしやらぬ。繋いで置

一天四海云々ー謡曲土車の文句

としうござる。▲シテ 女房ども〳〵、どちへ行たぞ〳〵。▲女 これ〳〵、此所に居ます。▲シテ いわごりよは合點のいかぬ、何所へお行きやつた。▲女 いや、酒を取りに參りました。▲シテ いや〳〵、合點が行かぬ。さあ〳〵、又酒を飲まう。注がしませ。▲女 心得ました。それそれ、一つ注ぎました。參れ。▲シテ はあ、さても〳〵、旨い事ぢや。さあ又差さう。飲ましませ。▲女 妾も醉ひませうが、それならも一つたべませう。なう〳〵、邊に誰もござらぬほどに、肴に小舞を一つ舞はせられ。▲シテ されば、其方の望ぢやほどに、酒には醉ふ、舞もせうか。▲女 それは嬉しうござる。舞はせられ。▲シテ 何も慰ぢや。舞はう。謡、小舞 一天四海波を打ち、をさめたまへば、國も動かぬあらかねの、土の車のわれらまで、道せばからぬ大君の、みかげの國なるをば、ひとりせかせ給ふな。▲猿引 これはいかなこと。座頭が舞を舞ふ。これ〳〵、をりやれ〳〵。ちよつとをりやれ。▲女 何でござる。▲猿引 どうでもよい所へ肝煎らうほどに、身共次第にして、早う抜けてをりやれ。▲女 妾も厭でもござらぬが、して、その參る所は、好い所でござるか。▲猿引 なるほど好い所で、しかも男

ちやうど―盃に酒の滿ちたる形容

わつさりと―陽氣に

肝煎―世話をすること

さあ參れ。▲シテ さらば飲まう。注がしませ。これ〳〵、一つありさうな。▲女 ちやうどござる。▲シテ さても〳〵、內で飲むとは違うて、旨いことぢや。さらば、わごりよに差さう。▲女 戴きます。▲シテ 一つ飲ましませ。わつさりと謠はう。▲二人 ざゝんざあ、濱松の音は、ざゝんざあ。▲女 さらばこれを、こなたへさしませう。▲シテ よからう。注がしませ。さても〳〵、飲むほど旨い。何なりとも謠はう。▲猿引 これは洛中を廻る猿引でござる。今日も旦那まはりをいたす。承れば頃日は花盛ぢやと申す。今日は序ながら淸水へ參り、花を見物して歸らうと存ずる。はやこれが淸水地主でござる。さても〳〵、夥しい花見かな。やあ、これに座頭が、女房を連れて、花見に來てゐる。さても〳〵、よい女ぢや。これこれ、なうをりやれ。ちと物が問ひたい。▲女 何事ぞ。妾が事でござるか。▲猿引 いかにも其方のことぢや。あれはわごりよの男か。▲女 なか〳〵、妾が幼馴染でござる。▲猿引 さても〳〵、其方の樣な好い器量で、あの樣な座頭を男に持つものか。身共がよい所へ肝煎りて嫁入させう。をりやれ。▲女 されば、妾も厭でもござらねども、あの人も幼馴染で、い

この春は云々―新古今集藤原家隆の歌也實はこの程は知るも知らぬも玉鉾の行きかふ袖は花の香ぞする也玉鉾は道の意

竹筒―酒器

地主―權現也

れは嬉しうござる。よい慰でござらう。さりながら、花は見るとこそ申せ、嗅ぐといふ事はござるまいぞ。▲シテいや〳〵、さうおしやるな。嗅ぐと云うても苦しうない。歌がをりやる。よう聞かしませ。この春は知るも知らぬも玉鉾の、行きかふ人の花の香ぞすると云ふ時は、嗅ぐと云うても、ちつとも苦しうない。▲女尤でござる。さあ〳〵、ござれ〳〵。▲シテ手を引いてたもれ。▲女心得ました。▲シテなう〳〵、其方と身共と、このやうに手を引合うて行くは、花を見るよりは、これほど面白いことはおりやらぬ。▲女はて扨人が聞くに、むざとしたこと仰せられそ。▲シテ花見に行くやら、夥しい人ぢや。▲女さうでござる。▲シテやあ、竹筒を用意めさつたか。▲女なか〳〵。はや申し付けまして、淸水の地主へ持たしてやりました。▲シテそれは一段ぢや。▲女申し〳〵、何かと云ふうちに、これがはや地主でござる。▲シテはやこれか。何所ぞ人のない所に居やう。▲女此所がようござる。これにござれ。此所に見事な花がござる。▲シテそれなら此所に居やう。其方も下に居さしめ。さあ〳〵、まづ一つ飲まう。竹筒を出さしめ。▲女心得ました。さあ

猿替勾當―一名猿座頭

せがめども―ねだれども

八　猿替勾當

四人
シテ　勾當　角帽子、水衣、下袴
女　箔小袖、ゆばうし
猿引　半袴、上下、腰帶、杖持、幣腰にさし
猿　猿の面、かるさん

▲シテ　これは、この邊に住居致す勾當でござる。頃日は、西山東山の花が盛ぢやと申す。それにつき女どもが、花見に參りたいと云うて、毎年せがめども、身共は目が見えず、花はえ見ませぬによつて、參りも致さねば、殊の外、女共が腹を立つるほどに、當年は女共を連れて、某も參り、目で見る事がならぬほどに、花を嗅いでなりとも慰まうと存ずる。なうなう、女共居さしますか。▲女　妾を喚ばせらるは、何事でござる。▲シテ　いや、其方を喚ぶは、別のことでない。頃日は、西山東山の花が盛ぢやと申す。其方の、いつも花見に行きたいいいと云うて、せがまします程に、今年は身共も同道して、花見に參らうほどに、わごりよは花を見やれ。身共は花を嗅いでなりとも慰まうわ。▲女　なうなう、そ

やるまいぞ〳〵、

一腰—帶刀のこと

へ〳〵。▲後アド やい〳〵、これはまづ何事ぢや〳〵。▲初アド やあ、よいところへ御出やつた。あれに居る者が、毎日この所へ殺生に來る。それ故射殺して遣らうと云ふことぢや。命が惜しくは、その刀、上下、小袖も、皆脱いでおこせ。▲シテ 諸侍の一腰が遣らるゝものか。▲初アド おのれ、おこさずば、射殺すぞ。おこさぬか〳〵。▲後アド やれ、命には代へられまい。渡せ〳〵。▲シテ あゝ、是非に及ばぬ。さあ、刀を遣るぞ。取れ。▲後アド どりや〳〵。身共が取つて遣らう。▲初アド まだその上下、小袖も脱いでおこせ。▲シテ いやいや、これはならぬ。▲初アド おこさぬと、射殺すぞ〳〵。▲シテ あゝあぶない。命助けてくれ〳〵。▲後アド それならば、よう渡せ〳〵。▲シテ さても〳〵、迷惑な事かな。脱いで遣らうまで。さあ取れ。▲後アド 殺されうよりは、渡したがよいわ。こちへおこせ。さあ〳〵皆剝ぎ取つたわ。▲初アド やい〳〵、おのれ助けたけれども、昔より殺生の禁制な所で、諸鳥を取つた。助くる事はならぬ。どうでも一矢で射殺すぞ〳〵。▲シテ あゝ悲しや。やれやれ、助けてくれい。許せ〳〵。▲二人 どちへ逃ぐる。やらぬぞ。やる事ではないぞ。

してやつたーうまくだましたる也

御鷹を刺し落し申す間、鐵にて鷹を作り、いつもの如く合せければ、かの雉眞の鷹と心得、刺せども〳〵刺されず候處に、まことの鷹を助鷹にかけとらせ、その雉を神に齋ひ、雉の領とて今にある。又歌にも、物いへば父は長柄の人柱、なかずば雉も射られまじきをと、いふ歌もある。なんぼう仔細のある事でをりやる。されども、身共は、さる仔細あつて、殺生しても苦しうをりない。▲初アドさても〳〵、仔細のある事でござる。やあ今日は、雉も歌の心を存じてやら出ませぬ。あれ〳〵、向な薄の中に雉が居ます。▲シテどれ〳〵、何所に居るぞ見えぬ。▲初アドあれ〳〵、立ちますわ。早う射させられ〳〵。▲シテ見えぬ。何所に居るぞ。▲初アドあれ〳〵、尾を出しました。その弓こちへおこさせられ。身共射ませう。▲シテこれ〳〵渡すぞ。射やれ。▲初アドさあ、してやつた。おのれ憎い奴の。雉は嘘ぢや。おのれを、たつた一矢で射てやらうぞ。▲シテやれ〳〵、あぶないあぶない、出合へ〳〵。▲初アド何のあぶない。殺生禁制の所へ、毎日來て殺生する。雉を射たがよいか。これがよいか。射殺して遣らうぞ。▲シテやれ、許せ〳〵。あぶない。出合

はない。それ故毎日々々、この河内の禁野へ殺生に參る。今日も參らう。何でも今日も、鹿、猿、鳥類でも、射て遊ばうと存ずる。▲初アド　されば、あれぢや。言葉をかけ、致しやうがある。こなたはよい時分に出させられ。▲後アド　心得ました。▲初アド　申し〳〵、こなたには、見ますれば、毎日々々殺生に御出なされます。よい御慰でござらう。▲シテ　さればく〳〵、よい慰でをりやる。わごりよも殺生が好きか。▲初アド　なか〳〵、好きでござる。何と今日は鳥獸も出ませぬ。▲シテ　その通ぢや。何でも出たらば、射て見せうものを。▲初アド　申し〳〵、この河内の國禁野の里は、昔より殺生禁制の所と申しますが、これには仔細がござるか。▲シテ　なか〳〵、仔細がある。知らずは語つて聞かさう。よう聞かしませ。▲初アド　辱うござる。承りませう。▲シテ　抑も推古天皇の御時、この野にて御狩ありしに、諸鳥迷惑して、血の涙を流し、津の國玉作天王寺さして逃げて行く。太子不便に思召し、王位に御意見あつて、それよりこの野は禁野となる。その後、三足の雉出生す。化鳥なれば退治あるべしとて、御鷹を合され候へども、この雉の尾刃の劍なれば、

扱ひ手—仲裁人

やれ憎いことでござる。なんでも今日は捕へてやらうと存ずる。参るほどにこれぢや。ものもう。案内もう。▲後アド 表に案内がある。案内とはどなたでござる。やあ、これはこれは、こなたか。好うこそ御出でなされた。何と思召し御出ぞ。▲初アド されば〱、只今参ること、別の事でもござらぬ。この所へ、何者やら、毎日殺生に出で、雉を捕る。憎いことぢや。捕へうと存ずれど、見れば、手者と見えて、弓矢を持つて居ます。身共一人では心許なうござる。こなたを語ひ、何とぞして弓矢を取つたらば、こなた、其所へよい時分に出て、扱ひ手になつて、挨拶なされ。身共は、弓矢で射殺さうと申さう。こなた中分に入つて、刀、脇差、衣裳も皆剝ぎ取り、丸裸にして、いなしませう。▲後アド それは一段ようござらう。それならば、剝いだ物は、兩人して配分致さう。▲初アド なか〱。その通でござる。いざ参らうか。▲後アド なか〱。参らう。▲初アド さあ〱、ござれ〱。やあ、何かといふうちにこれぢや。まづこれへ寄つて居て、待ちませう。これへござれ。▲後アド 心得ました。▲シテ 大果報の大名。扨世の中に慰は多けれど、殺生ほど面白い物

禁野—河内國交野郷
長袴—半袴の誤か
手者—手きゝ
成敗—責め懲すこと



七 禁野

三人　シテ大名　熨斗目、素襖、大臣烏帽子、小さ刀、弓矢
　　　アド二人　長袴、小さ刀さし

▲初アド　これへ出でたる者は、この在所、禁野の里に住居する者でござる。この所は、昔より、殺生固く禁制の所なるに、何者やら、毎日々々參つて殺生致す。見れば、手者と見えて、弓矢を持つて居ます。捕へて、戒に成敗致さうと存ずれども、身共一人では心許なうござる。爰に某が懇致す人がある。これを語うて、今日は捕へ、致しやうがござる。まづあれへ參り、相談致さう。道行　やれ

は勿體ない。經を切るか。大盜人。やるまいぞ〳〵。▲シテあゝ悲しや。許させられ〳〵

許させられ。▲主やるまいぞ〳〵。

突いで、突ぐ―突いて、突くの訛

せろつほう―大根の細切、せんろつぽん

はりに刻む―細かく刻むをいふ

して、燒物でござらう。▲シテそれ〳〵、さうでござる。▲アドそれなら、まづこの鯛の鱗をふいて。▲シテなう〳〵、それはまづ皮を剝くか。▲アドいや〳〵、皮を剝くとはいはぬ。鱗をふくと申す。よう覺えさしませ。扨魚頭を突いで。▲シテなう〳〵、それはかぶを離すか。▲アドいや〳〵、これもかぶを離すとは申さぬ。魚頭を突ぐと申す。よう覺えさしませ。こなたは皆精進物の事ばかりおしやる。扨背切にして。▲シテ又せろつぽうに刻むか。▲アド否々、これは背切にすると申す。よう、覺えさしめ。▲シテ心得ました。覺えました。▲アド扨此鮒を、鱗をふいて、おろして、魚頭を突ぎ、扨鱠に作るぢや。▲シテそれは、はりに刻むか。▲アドいや〳〵、これは鱠に作ると申す。さあ〳〵皆よいわ。さらば鱠を齏へませう。▲主兩人の者に役を申し付けた。心許なうござる。見に參らう。これはいかな事。出家が料理する。料理人が經を讀む。賣僧のかはぢや。やい〳〵〳〵。▲シテそりやお出やつたわ。こちへをりやれ。▲アド妙法蓮華經〳〵。▲主やい〳〵、それは鯛ぢやが、讀まれるものか。▲アドあゝ、許させられ〳〵。▲主やるまいぞ〳〵。やい〳〵、それ

めされ ―なされの意

水の流れる樣な ―流暢なること

てをりやる。所にはや、この何經とやら、讀めというて渡されて、迷惑致す。一字も讀める事ではござらぬ。こなた、古出家なら、經がなりませう。何經でござるぞ。▲シテどれどれ、それは法華經でござる。▲アドまことにそれ〳〵、法華經と云はれました。▲シテなうなう、これについてよい事がある。身共はこの頃まで、出家であつたによつて、經の分は何でも讀みます。又こなたは元獵師なら、魚類の料理がなりませうぞ。▲アドいかにも〳〵、何なりとも料理いたすわ。▲シテそれなら、一段よい事がある。その經を身共が讀みませうほどに、こなたはこの料理をめされ。▲アドこれは重疊の事ぢや。さらば代りませう。これへござれ。▲シテそれ〳〵、互に行く〳〵は、習ひ合うて致さう。▲アドさやうでござる。代りませう。さあ〳〵、その經を高々と讀ませられ。▲シテ心得ました。妙法蓮華經普門品第〳〵、▲アド扨も〳〵氣味のよい、水の流れる樣な讀みやうぢや。▲シテさあさあ料理めされ。▲アド心得ました。この魚は何になると云はれました。▲シテされば、その赤いは、何でござる。▲アドこれは鯛、又これは鮒でござる。定めて鮒は鱠、鯛は背切に

中参つた出家ぢや。心安い者でをりやる。最前から見れば、その鯛を、目を抉らう、皮を剝かうとおしやるが、知つておしやるか、知らいでおしやるか。▲シテされば〳〵、その事ぢや。こなたも此中來たとおしやる程に、心安う存ずる。身共が身の上を、懺悔致さう。某もこの頃まで、こなたの樣な出家でござつた。出家と申す者も、檀那あしらひの、なんのかのと申して、とつと、むづかしい物ぢやによつて、俄にこの樣に還俗致してござる。俄に還俗致したれば、商致さう元手は無し、何と致さうと存ずる處に、此方に料理人を抱へうと、高札があがつたによつて、まづ參つて、抱へられたけれども、元出家なれば、魚類の料理は存ぜぬ。精進の料理は、形の如く致した處に、はやこの魚を料理せいとおしやるによつて、迷惑致して、この體でござる。▲アドさてはさやうでござるか。身共も懺悔致さう。この頃まで、某は、堅田の獵師でござつた。獵師も後世のほどが、心許なう存じて、俄に斯樣に出家致したれども、檀那は無し、何とも暮さうやうがない處に、此方に出家を抱へうと、仰せられたによつて、何かなしにこれへ參り、ありつい

志の日―佛事を營む日

枡の底のやうな―四角なこと

かぶを離さう―かぶは頭のこと

參るほどにこれぢや。ものもう。案内もう。▲主又表に案内がある。どなたでござる。▲シテいや私は、高札の面について參つた料理人でござる。抱へさせられたらば、辱うござりませう。▲主なるほど聞屆けた。いかにも抱へてやらう、此方へ通りやれ。▲シテそれは辱うござります。通りませう。▲主やれ〳〵、二人共まんまと抱へてござる。めいめいに役を申し付けませう。なう〳〵出家、この經は法華ぢや。明日志の日ぢや。これを高々と讀うでたもれ。勝手で聽聞致すぞ。▲アド心得ました。讀みませう。▲主これ〳〵料理人、俄に客がある。この鮒は鱠、鯛は燒物に、背切にしてたもれ。▲シテ畏つてござる。▲主切目尋常にしてたもれ。▲シテ心得ました。これはいかな事。はや料理を云ひ付けられた。これは何とやらいはれたが、赤い魚ぢや。▲アドこれは扨、はやこの經を讀めとおしやる。何經とやらいはれた。枡の底の樣な字が幾つも有るわ。何所から讀まうぞ。▲シテこの魚を何とせう。目を抉らうか、皮を剝かうか。いや〳〵、まづ、かぶを離さう。▲アドなう〳〵、これ〳〵。▲シテどなたでござるぞ。▲アドいや〳〵、苦しうない。身共は此

還俗―出家の人が俗人に還る也

參る程にこれぢや。ものもう。案内。▲主表に案内がある。どなたでござる。▲アド私は高札の面について、參つた出家でござる。▲主何と思うてお出やつた。▲アド私無調法な者でござれども、抱へて下されましたらば、辱うござりませう。▲主いかにも、抱へて遣らう。まづこちへ通りやれ。▲アド畏つてござる。通りませう。これに居りませう。やれやれ、嬉しや〳〵。▲シテ罷出でたる者は、この邊の者でござる。某は、頃日までも出家でござつたが、出家と申すも、殊の外何かにつけて、むづかしいものでござるによつて、俄に還俗致し、かやうの體になつてござる。さりながら、俄に出家を落ちたれば、元手は無し、商もならず、何とも、暮さう樣が無いと存ずる處に、山一つ彼方に、有德な人が、料理人を抱へうとある高札が上つたと申す。まづこれへ參り、何卒致し、料理人にありつかうと存ずる。まづそろ〳〵參らう。道行やれ〳〵、某も出家の時、精進の料理は、大方致したれども、魚類の義は、心許なうござる。さりながら、あれへ參りたらば、某一人でもござるまい。料理人もござらう程に、行く〳〵は見習うて、致さうと存ずる。

後世―未來の佛果を云ふ

道心―發心して佛門に入りたる者、僧

檀那―施主

六 俄道心

三人　シテ　男　半袴、上下、腰帶
　　　アド　坊主　布頭巾、衣
　　　主　長袴、小さ刀、鯛鮒經

▲主 罷出でたる者は、この邊の者でござる。存ずる仔細がござるほどに、料理人と出家を抱へうと存ずる。まづ高札を打たう。はつし〱。一段と好うござる。▲アド出家 これへ出でたる者は、この邊に住居致す者でござる。某は二三日以前まで、堅田の邊に、住居致した獵師でござつた。獵師も、何とも後世も心許なうござるによつて、俄にかやうに道心になつてござる。さりながら、俄の出家でござれば、檀那は無し、何とも致さうやうがござらぬ。それにつきて、聞けば、山一つ彼方に、出家を抱へうとある高札を打たせられた。身共が參つて、あり付かうと存ずる。まづそろ〱參らう。道行 やれ〱、何とも致さうと存ずる處に、一段の事でござる。なんでもありついて、仕合致さうと存ずる。

強い膏藥ぢや。これから鎌倉へ、一引に引いてくれうず。▲シテ いや〳〵、なるまいぞ〳〵。扨も〳〵、これも強い膏藥ぢや。それなら、都方へ一引に引かうぞ。やあ〳〵〳〵。▲アド これはならぬぞ〳〵。何とするぞ〳〵。▲シテ そりや引きこかした。さあ勝つたぞ〳〵。▲アド いや〳〵、今のでは知れぬぞ。も一度勝負をせい。やるまいぞ〳〵。

薬味―薬に調合する原料

てよりこの方、身共の膏薬は、天下に隠れがをりない。▲アド まことにこれは、餘程の系圖ぢや。互に劣らぬ事ぢや。いざこの上は、薬味を明して、吸ひ合せて見やうか。▲シテ それが好からう。何とわごりよが薬味は、何々が入るぞ。▲アド されば、身共の薬味は、むづかしい物が、なか〳〵入る。まづ地を走る雷、空を飛ぶ胴亀、木に生つた蛤、この様な物が入るわ。▲シテ それはむづかしい物ぢや。身共が薬味も、いろ〳〵大切な物が入る。白烏、赤犬の生膽、三足の蛙、この様な物が入るわ。▲アド それは大切な物ぢや。今などはあるまいが、何とおしやる。▲シテ その事ぢや。今この薬味は、求むる事がならぬ。先祖の祖父より求めて置かれたを、只今まで、少しづつ惜しみ使ひにするわ。▲アド さうであらう。▲シテ いざ、膏薬を吸ひ合せて見やうか。▲アド 一段よからう。拵へさしませ。▲シテ 鼻の先につけて、吸ひ合せう。何と、よいか〳〵。▲アド 拵はよいぞ。さらば、ちと鎌倉へ引かうぞ。▲シテ いや〳〵、引く事はなるまいぞ。扨も〳〵強い膏薬ぢや。さらば、ちと都方へ引かうぞ。▲アド いや〳〵、都へはなるまいぞ。これは何とするぞ〳〵。扨も〳〵

平相國淨海—淸盛

さいて—指定して

透頂香—元の歸化人陳宗敬の傳へし痰の藥也、小田原外郎のこと

ば身共が系圖を語つて聞かさう。よう聞かしめ。▲アド 心得た。▲シテ 扨も、平相國淨海の御時、御庭を作らせられしに、立石になる石を、都の北山より、三千人して引いて參り、やう〳〵北の門まで引寄せたれども、御門より內へ入るゝことがならなんだ。その時、某が先祖の祖父罷出で、あの石を直したう思召さば、所をさいて仰せつけられ、膏藥にて吸ひ寄せて、御目にかけうと申した。その時淨海をはじめ御前の人々、扨も〳〵大きな事をいふものかなと、一度にどつと笑はせられた。さりながら、直すならば、云ひ付け直させ、直さぬにおいては、曲事に云ひ付けると、仰せ出された。其時先祖の祖父、畏つて罷出で、かの膏藥を、透頂香ほど指の腹につけ、息をほつとしかけ、大石に向ひ、あの石吸へ〳〵と云ひければ、かの大石が膏藥に引かれて、じり〳〵〳〵、じつと吸ひ寄せた。淨海をはじめ各、扨も不思議なる膏藥かな、何と銘があるかと問はせられた。いや、何とも銘はござらぬ、吸膏藥と申し上げければ、かほど名譽の膏藥に、銘が無うては叶ふまいと仰せられ、石を吸うたる膏藥なれば、天下一の石吸膏藥と下され

芥子粒程―少しばかり

この生食が、虚空をさしてとつて出た時に、御前なりし諸大名、やれ、あれを止めよ〳〵と、仰せられたれども、誰あつて止むる人もなかつた。その時、某が先祖の祖父罷出で、あの馬を、この膏薬にて、止めて御目にかけませうと申した。頼朝をはじめ諸大名、何として膏薬で止められうぞと仰せられ、一度にどつと笑はせられた。さりながら、止めさへするなら、止めさせいと仰せ出された。畏つて候と、先祖の祖父罷出で、膏薬を指の腹に芥子粒程つけ、息をほつとしかけ、かの駈ける馬に向つて、あの馬吸へ〳〵と申したれば、何が、膏薬の強いに引かれて、駈出でたる馬が、じた〳〵〳〵、じつと吸ひ寄せた。その時頼朝をはじめ、御前なる人々、扨も〳〵名譽なることかな、何と、その膏薬には銘があるかと仰せられた。いや〳〵、何も銘はござらぬ。只物を吸ふによつて、吸膏薬とばかり申しまする由、申し上ぐる。頼朝聞召し、かほどの膏薬に、銘が無うてはなるまい、銘を取らせうとあつて、馬を吸うたる膏薬なれば、鎌倉一の馬吸膏薬と下されてよりこの方、某が膏薬は、鎌倉に隠れはをりない。▲シテ これも餘程の系圖ぢや。さら

せめ―調馬

の上手はあるまいと存ずる處に、聞けば鎌倉方にも、名譽の膏藥があると申す。この度鎌倉へ下り、膏藥を吸ひ合せて見やうと存ずる。まづそろり〳〵參らう。道行 今日は道連もなうて淋しうござる。▲アド やあ、いかう松脂臭うなつた。何事ぢや知らぬ。やあ、此處な者は、この廣い海道を、なぜに行き當る。▲シテ いや、そちが當つた。▲アド 何と。其方は、どれから何所へ行く。▲シテ 身共は、ちと用事あつて鎌倉へ行くが、そちは何所へ行く人ぞ。▲アド 身共は鎌倉方の膏藥煉ぢやが、身共ほどの膏藥の上手はあるまいと思ふところに、聞けば、都にも、膏藥の上手があると申すによつて、煉り比べて見やうと思うて上るところでをりやる。▲シテ 扨は鎌倉の膏藥煉とはわごりよが事か。身共も其方が云ふ如く、鎌倉の膏藥煉の事、聞及うで、只今鎌倉へ下る所でをりやる。▲アド 扨はさやうでをりやるか。何と某の膏藥には系圖があるが、わごりよの膏藥にも系圖があるか。▲シテ なるほど此方にもある。其方から語つて聞かしやれ。▲アド 心得た。語らう。よう聞かしませ。語 扨も昔、頼朝の御代に、生食、摺墨といふ名馬をせめさせられしに、何としてか、

名譽—評判の好きこと



五　膏藥煉

二人　シテ男　半袴、上下、腰帯
　　　アド男　出立同前

▲アド　罷出でたる者は、鎌倉方の膏藥煉でござる。某ほど、天下に膏藥の名譽なるは、あるまいと思ふ處に、聞けば都にも、名譽の膏藥があると申す程に、この度都へ上り、膏藥を煉り比べて見やうと存ずる。まづそろり〳〵上らう。道行やれ〳〵今日は天氣も好し。この樣な仕合はない。やあ、殊の外淋しい。道連もない。この所に待つてよからう。連も參つたら、同道致さうと存ずる。▲シテ　これは都に隱れもない膏藥煉でござる。某ほど膏藥

や。ゆるせ〳〵。

しめ。▲シテ 辱うござる。代物は追付け持たして參らう。さらばこれを負うて參らう。手を添へてたもれ。▲アド 心得た。よいか。▲シテ なか〳〵、よいぞ。さらばかう參る。▲二人 さらば〳〵。▲シテ なう〳〵、嬉しや〳〵。まんまと柑子は買ひ濟ました。急いで歸らう。やあ、これは何かと致し、隙が入つて、早暮方になつた。何所が何所やら道も確と見えぬ。連もなし、何とせうぞ。これに道が二筋ある。この山中で日は暮れ、問ふ人もない。何とも迷惑ぢや。右へ行かうか、左へ行かうか。はて、氣の毒な。▲子 右へ行け。▲シテ はあ。これは如何なこと。どれからやら、物いうた。この夜中に、邊に人はなし、何者ぢや。狐か知らぬ。心許ないことぢや。早う參りたいが、迷うてはなるまい。どちへ行かう。右へか、左へか。何所へ行かうぞ。▲子 こりや〳〵、こちへ行け〳〵。▲シテ あゝ悲しや。柑子が手を出した。扨は人になつたか。捨てて逃げう。▲子 いで、食はう〳〵。▲シテ ああ悲しや〳〵。許してたもれ。柑子が鬼になつた。免さしやれ。命を助けてたもれ。▲子 いで、食はう〳〵。どちへうせるぞ。やるまいぞ〳〵。一口にせうぞ〳〵。▲シテ あゝ悲し

て、柑子を皆賣つて、俵に入れて置かれたと云ふが、それは殘多い事ぢや。木にある時に、思ふまゝ取つて食はうと思うたが、殘多い。さりながら、何所にあるぞ見て、一つ二つ盜うで食べませう。何所許に置かれた知らぬ。さればこそ、これにあるわ。まづこの俵を開けて取出さう。さらば食うて見やう。扨も〳〵、旨い事かな。一つでは堪忍がならぬ。も一つ食はう。これは〳〵、取分け今年の柑子は旨い。まだ食へ〳〵。これは食へば食ふ程旨い。これは如何なこと。一つ二つと思うて、皆食べた。何とせうぞ。親が聞いたらよいとは云ふまい。はて、氣の毒な事した。やあ思出した。あの柑子買は、とつと律氣な、臆病者でござる。これに幸 風流の面がある。これを被て俵の中へ這入り、騙して歸らうと存ずる。まづ面を被やう。さらば俵へ這入らう。一段とよい。▲シテ 昨日いつも柑子買ふ所に約束致し、俵に入れてたもれと申した。今日取りに參らうと存ずる。參るほどにこれぢや。ものもう。亭主ござるか。▲アド なか〳〵。これに居ます。▲シテ 何と柑子を取つて、俵に入れて置いてたもつたか。▲アド なか〳〵。これにある。取つて行か

風流—囃し物

行かしめ—行けよ

時分—柑子を仕込む季節

見えう—御出になる

四 柑子俵

三人　シテ男　半袴、上下、腰帯
　　　アド、子　出立同前

▲シテ 罷出でたる者は、邊土に住居致す者でござる。身共は、毎年在々へ柑子を買ひに廻り、商賣に致す者でござる。やう〳〵時分になりましたほどに、買ひに廻らうと存ずる。まづ急いで參らう。道行 やれ〳〵當年は、何でも精を出し、金銀を大分儲け、仕合を致さうと存ずる。やあ、參る程に、いつも柑子を買ふ所はこれでござる。案内を乞はう。ものも。案内もう。▲アド 表に案内がある。どなたでござる。▲シテ いや、身どもでをりやる。▲アド やあ其方か。定めて時分ぢやと思うて、柑子を買ひにお出やつたか。▲シテ なか〳〵、その通ぢや。賣つてたもれ。▲アド 其方が見えうと思うて、待つて居た。▲シテ それは過分な。俵に入れて置いてたもれ。明日取りに參らう。▲アド いかにも取りにをりやれ。ようをりやつた。▲シテ はあ。▲子 何と云ふぞ。身共の親が、いつもの柑子買が上つたによつ

杖が見えぬ。▲シテそれ〳〵、遲いく〳〵。▲アドこれは最前とは違うた。こりや佛師ぢや。▲シテいや〳〵、佛ぢや。▲アドどれも皆人ぢや。扨は賣僧どもぢや。憎い奴の。やるまいぞ〳〵。▲三人あゝ、ゆるしやれ〳〵。▲アドやるまいぞ〳〵。

きつとして一身動きもせずにの意

様に、きつとして居やうぞ。▲アド参つて拜みませう。後堂の何所許ぢや知らぬ。や、此所にあら薦が垂れてある。揚げて見やう。さら〳〵。扨も〳〵、よう出來た。早いことかな。殘の三體は何所にある知らぬ。佛師殿ござるか。▲シテなか〳〵、これに居ります。▲アドあれは、よう出來ましてござる。殘の三體の地藏も、一緒に拜みたうござる。何所にござる。▲シテされば、所が狹さに、脇に置きました。こちへ廻らせられ。▲アド心得ました。▲シテ扨〳〵も、忙しい事かな。また地藏にならずはなるまい。なう〳〵、早う地藏の道具を拵へて持たしませ。拵が出來たか。見付けられぬやうにせうぞ。▲アド扨も〳〵、これもよう出來た。あら、ありがたや。南無地藏大菩薩〳〵。なう〳〵佛師殿ござるか。▲シテなか〳〵、これに居ます。▲アド殊の外よう出來ましたが、どうござつても、一緒に六體共に拜みたうござる。▲シテいや、最前申す如く、所が狹さに、一緒に置きませぬ事でござる。▲アド夫なら是非に及びませぬ。も一度行て拜みませう。▲シテこれは扨、又地藏にならずはなるまい。さあ〳〵早う拵やれ〳〵。▲二人心得た。鉾があるか。錫

請取つた―注文を引受けたり

下心あつて致した事でござる。致しやうがござる。なう〳〵をりやるか。ちと相談することがある。出さしませ。▲二人 何事でをりやるぞ。▲シテ わごりよ達を喚び出すは、別のことでない。田舍者が地藏を誂へたいと云うて、町中を呼ばはつて廻つた程に、身共が言葉をかけ、佛師になつて、まんまとたらして、六地藏を請取つた。すなはち代物萬疋にきはめた程に、首尾好うしおほせたら、わごりよ達にも配分して遣らうぞ。地藏にならしめ。▲二人 いかにも配分しておこしやらば、地藏にならう。▲シテ それは一段ぢや。まづそれに待たしませ。後から因幡堂へおぢやれ。やう〳〵田舍者が參る時分ぢや。因幡堂へ參らう。▲アド 最早地藏の出來ます時分ぢや。急いで因幡堂へ參らう。やあ、佛師殿ござるか。▲シテ なか〳〵。ござつたか。▲アド 何と、地藏は出來ましたか。▲シテ なか〳〵、出來ました。後堂へ廻らせられ。あら薦が垂れてある。▲アド 心得ました。▲シテ やあ、何れもをりやつたか。さあ〳〵、早う地藏の拵さしませ。わごりよは鉾と、其方は錫杖、身共は珠數、これでよいぞ。面をまづ著さしませ。▲二人 心得た。▲シテ よいぞ〳〵。佛の

たらしてーだますこと

ござる。▲シテされば、最前も申す如く、某は安阿彌の流ぢやによつて、弟子數多持つて居る。急ぎぢやとおしやれば、御手を作る者には御手、御首を作る者には御首を作らせ、片端から、身どもが膠を以て、ちよつちよと、つけて廻るによつて、明日の今時分と申す。又急ぎでもなければ、身共が一細工に、ぽつ／＼致すによつて、それで來年の今時分と申すことでをりやる。▲アド尤も聞えました。こなたの一細工が、望みでござれども、其様に逗留もなりますまい。明日の今頃出來さして下され。▲シテ心得た。出かして遣らう。▲アドして、代物は何程でござるぞ。▲シテ萬疋でなければ出來ませぬ。▲アドいかにも萬疋で誂へませう。何と、御宿は何所許でござる。▲シテいや／＼、宿を云うたりとも、お知りやるまい。五條の因幡堂を知つて居やるか。▲アド存じましたとも。▲シテあの後堂に、あら薦を垂れて置かう程に、明日今頃、あれへをりやれ。▲アドなか／＼、參らう。▲二人さらば／＼。▲シテやれ／＼、田舍者をまんまとたらしてござる。身共は幼少の時分より、楊技を一本削つた事がござらぬ。さりながら、身共が丈だけと申したも、

六地藏―六道に現じて利生し給ふ地藏にて、延命、寶處、寶手、持手、寶印、堅固意の六體とも檀林、寶珠、寶印、持地、除蓋障、日光とも云ふ

る。▲アド 扨はさやうでござるか。それならば、六地藏を賴みたうござるが、作りて下されうか。▲シテ なか〳〵、作りて遣らうが、其方は六地藏の謂をお知りやつたか。▲アド いや、何とござるも存ぜぬ。▲シテ 一々云うて聞かさう。まづ六地藏と申すは、一體はみやうい地藏と申して、錫杖を持つて、無間地獄を救ひ給ふ。又一體は、むに地藏とて、本願を以て、餓鬼道の苦患を助け給ふ。一體はしやうさん地藏とて、珠數を持つて、畜生道を助け給ふ。一體はそく地藏とて、衣を持つて、人道の苦患を救ひ給ふ。又一體は鉾を持つて、修羅の苦患を助け給ふ。一體はふくりき地藏とて、手を合せて、天道の苦患を祈り給ふ。されども同一體なり。何れの佛の願より勝れて、ありがたい事ぢや程に、いかにも六地藏を作つておませう。扨お丈は何程に致さう。▲アド されば、何程が好うござらう。▲シテ とかく身共の存ずるは、某がせいだけに、作つて遣らう。▲アド なか〳〵、それがようござらう。して、何日頃出來ます。▲シテ されば、急ぎなれば、明日の今時分、急ぎでもなければ、來年の今頃でをりやる。▲アド これは大きな違でござるが、なんとした事で

大すつぱ—大盗人

運慶云々—前の佛師に註す

る。佛師が、何所許にあるやら、名を何と云ふも知らぬ。さりながら、都の樣子を見るに、知らぬ事は、呼ばはつて通ると、知れると見えた。ちと呼ばはつて廻らう。なう〳〵、其所許に佛師殿はござらぬか。佛師屋はをりないか。地藏を調へたうござる。▲シテ罷出でたる者は、都に住居する大すつぱでござる。見れば田舍者と見えて、何やら呼ばはる。ちとあれに當つて見やうと存ずる。なう〳〵、これ〳〵、其處な人。▲アドやあ〳〵、こちの事でござるか。何事でござる。▲シテなるほどわごりよの事ぢや。この洛中を、何をわつぱとおしやるぞ。▲アド身共は、田舍者でござれば、聊爾な事は申さぬ。御免なれ。▲シテいやいや、其方が粗相をおしやるではない。何を尋ねやるぞと云ふことぢや。▲アド身共、地藏が求めたさに、佛師殿を尋ねます。▲シテそれは仕合ぢや。身共が、眞佛師でをりやる。▲アドなう〳〵、怖や〳〵。疾つとそちへ寄らせられ。身共は幼少より、蝮蛇は嫌でござる。▲シテいや〳〵、それは其方の聞きやうが惡い。都には運慶、湛慶、安阿彌と云うて、佛師が三流ある。中にも安阿彌の流ぢやによつて、眞佛師ぢやと云ふ事でをりや

さいてござる——指定せられたる意



三　六地藏

四人　シテ、二人　布頭巾、水衣、下半袴、腰帶、錫杖、矛、珠數
アド田舍者　半袴、上下、腰帶

▲アド　これは、この邊に住居致す者でござる。頃日在所の者ども寄合ひ、宿外れに堂を立ててござるが、これに六地藏を作らせうと申す談合きはまつてござる。それにつき、某に都へ上り、地藏を調へて參れと、さいてござる。急いで上らうと存ずる。道行　やれ〳〵、都へ上つてござらば、これを序に、此所彼所をも、見物致さうと存ずる。やあ、程なうこれは都でござる。扨も〳〵忘れた事があ

桜かざしの袖ふれて花見車云々―謡曲小鍛の文句

袖ふれて。▲アド 一段の謡うたふ。致しやうがござる。やい、太郎冠者。うたひ 花見車くるより、月の花よ待たうよ〳〵。▲シテ はあ。これでつまりました。▲アド 總別何も知り居らいで、むざとした事を云ひ居つて、某と競合ひ居る。あつちへうせい。▲シテ はあ。▲アド えい。▲シテ はあ。

櫻ちる云々―紀貫之の歌

行きくれて云々―平忠度の歌

山櫻云々―紀貫之の歌下の句見てし人こそ也

花の色は云々―小野小町の歌

せらるゝ。さやうに仰せられたらば、人中で、恥をかゝせられう、身共は苦しうござらぬが。▲アド して、汝がその樣に云ふは、仔細があるか。▲シテ なか〳〵、仔細こそござれ。花が見させられたくは、私が鼻を見させられ。他所へござるまでもござらぬ。▲アド いや、おのれは、言語道斷の事を云ひ居る。汝が面なは、鼻といふ。花といふは別ぢや。▲シテ 左樣ではござらぬ。歌などにも、櫻とは詠まれたれども、花とは詠まれませぬ。▲アド なかなかでもないことを云ひ居る。その歌を詠うで聞かせい。▲シテ 詠うで聞かせたらば、肝を潰させられう。▲アド 急いで詠め。▲シテ 心得ました。「櫻ちる木の下蔭は寒からで、空に知られぬ雪ぞ降りける。」これは何と。▲アド こちにも花といふ歌がある。▲シテ さらば詠うで聞かせられい。▲アド 行きくれてこの下蔭を宿とせば、花や今宵の主ならまし。▲シテ この方にもまだござる。山櫻霞の間よりほのかにも、見えし人こそ戀しかりけれ。▲アド それなら此方にもある。花の色はうつりにけりないたづらに、わが身よにふるながめせしまに。▲シテ それならば、此方には、謠にござる。▲アド 謠へ。聞かう。▲シテうたひ 櫻かざしの

二　櫻諍

二人　シテ男　半袴、上下、腰帯
　　　アド主　長袴、小さ刀さし

▲アド主　これはこの邊の者でござる。この頃は、何方も花の盛ぢやと申す程に、花見に參りたう存ずれども、暇がなさに、參ることも、え致さぬ。最早、暇になつてござる程に、今日は花見に參らうと存ずる。まづ太郎冠者を喚び出し、申し付けう。やい〳〵太郎冠者あるか。▲シテ太郎冠者　はあ。▲アド　居たか。▲シテ　お前に居ります。▲アド　汝を喚び出すこと、別の事ではない。頃日は、方々の花盛ぢやと云へども、暇がなさに、花見に行く事もならなんだ。最早、暇になつた程に、花見に出でうと思ふが、何とあらうぞ。▲シテ　これは、珍しい事を仰せられます。頃日は、櫻の盛ぢやと申す程に、櫻を御覽ぜられうとあらば、尤でござるが、珍しからぬ花を、御覽ぜられて、何にさせらるゝ。▲アド　いや、おのれは何事を云ふ。櫻も花も同じことぢや。▲シテ　これは、賴うだ人とも覺えぬ事を仰

諸白—酒の極上

のく〳〵。（これを繰返し囃すなり。）▲シテ 扨も〳〵、面白可笑しい事かな。太郎冠者、次郎冠者めが、都でしたゝか騙されてうせて、囃子物して來る。身共が機嫌を直さうといふ事であらう。これは出ずはなるまい。いかにや〳〵、太郎冠者、次郎冠者もよく聞け。千石の米をも、萬石の米をも、藏にどうと納めて、鰡の鮨を頬張つて、諸白を飲めやれ。▲二人 目近に持つて參つた。これ〳〵御覧候へ。▲シテ 何かの事はいるまい。こちへつゝと持込め。▲皆 げにもさあり。やよ、げにもさうよのく〳〵。ひやろ〳〵、ほつぱい、ひやろ、ひい。

ちや。▲次郎 されば、これには樣々仔細がござる。私も、都で尋ねましたれば、唐と日本の境に、ちくらが沖と申すところがござる。其所の田の米は、一粒蒔けば一萬倍、二粒蒔けば二萬倍でござる。その田の米を、この内へ籠めたによつて、籠骨でござる。▲シテ これは如何な事。これもしたゝか、ぬかれ居つた。好う物を聞き居れ。籠骨と云ふは、この扇の骨を、常のは十本あれど、十二本か、十五本に籠めたを、籠骨と云ふ。何ぞや、おのれも役に立たぬ扇を持つてうせて、何かとぬかす。某が内に、今日より叶ふまい。あつちへ失せう。▲次郎 それでも都の者が、さやうに申してござる。▲シテ まだ、そのつれな事ぬかす。あつちへうせい〱。扨も〱腹の立つ事かな。▲太郎 やい〱次郎冠者、御機嫌が悪い。何とせうぞ。やあ、思出した。かの都の奴が教へた、囃子物して見まいか。▲次郎 まことにこれはよからう。したゝか都でぬき居つた。定めてこの樣にあらうと思うて、教へたものであらう。さあ〱囃しませ。▲太郎 心得た。▲二人 千石の米ぼね、萬石の米ぼね、目近に持つて參つた。これ〱御覧候へ。げにもさあり。やよ、げにもさうよ

そのつれなこと―その樣なこと
ぬかれてうせた―だまされて來たこと

求めて參りました。▲シテ やれ〳〵、骨折や〳〵。骨が折れたら臺所へ行て、水でもひいやりと飮まぬか。▲太郎 いや、たべたうござりませぬ。▲シテ 何と、目近籠骨を求めて來たか。▲二人 なか〳〵、求めて參りました。▲シテ 出かした〳〵。急いで見せい。▲太郎 畏つてござる。これが目近でござる。▲シテ これは、身共の鼻の先へさしつけて、何事ぢや。▲太郎 この如くに、さしつけましたところが、目近でござる。又退けますれば、目遠とも申します。▲シテ 扨も〳〵鈍な奴かな。やい其處な奴、よう聞け。▲太郎 何事でござる。▲シテ 目近といふは、尤もその樣な扇の事なれども、それは常の持扇、この要を、目近うつたを目近といふ。何ぞや、その澤山な扇を、求めてうせて、いや目近の、目遠で候のとぬかす。おのれがやうな奴は、あつちうせい。▲太郎 それでも都の者が、これが目近ぢやと、申してござる。▲シテ まだ、そのつれなことぬかすか。あつちへうせい〳〵。▲次郎 それ〳〵、よいなりの。さらば身共の籠骨を御目にかけて、御機嫌直さう。これが籠骨でござる。▲シテ おのれも、都でぬかれてうせた。何やらお供米のやうなものを、扇につけて、それが何

主がござる。▲アドそれならば、總じて人の主は、機嫌の好いことも、又惡い事もあるものぢや。若し機嫌の惡い時は、機嫌の直る囃子物を、敎へて遣らうぞ。▲二人それは辱うござる。敎へてくだされ。▲アド別の事でもない。千石の米ぼね、萬石の米ぼね、目近に持つて參りた。これ〳〵御覽候へ。げにもさあり、やよ、げにもさうよの、と云うて囃しやれ。その儘機嫌が直るぞ。▲二人いかにも覺えました。辱うござる。かう參る。▲アドお行きやるか。▲二人なか〳〵。▲三人さらば〳〵〳〵。ようをりやつた。▲太郎なう〳〵、嬉しや〳〵。まんまと目近籠骨を求めた。いざ、急いで歸り、頼うだ人の御目にかけう。▲次郎一段よかろ。▲太郎さあ〳〵、をりやれ〳〵。▲次郎心得た。道行▲太郎なう〳〵、これを御目にかけたらば、御機嫌であらう。▲次郎定めて待ちかねてござらう。▲太郎やあ、何かと云ふうちにこれぢや。まづこれに置かしめ。歸つた通り申さう。申し〳〵、太郎冠者、次郎冠者歸りました。▲シテやあ、兩人の者が戻つたさうな。太郎冠者次郎冠者、戻つたか〳〵。▲二人只今歸りました。▲シテ何と、目近籠骨を求めて來たか。▲太郎なか〳〵、

ちくらが沖―幸若舞の百合若大臣にも見ゆ「多くのむくりが取乘つておめき叫んで押す程に日本と唐土の汐境のちくらが沖へ押し出す」

主持―主人に抱へられたる身分

▲太郎 さてはさやうでござるか。それならその目近から見せて下され。▲アド 心得た。見せて遣らう。待たしめ。これ〳〵、これが目近でをりやる。▲太郎 この様に顔へさしつけさせらるゝが、どうした事でござる。▲アド されば〳〵、これをさしつけたが目近、又退けたところが目遠でをりやる。▲太郎 聞えました。なるほど求めませう。これへ下され。▲次郎 なう〳〵、籠骨を見せて下され。▲アド 心得た。追つつけ見せう。これ〳〵、これが籠骨でをりやる。▲次郎 これを籠骨と仰せらるゝには、仔細がござるか。▲アド なか〳〵、仔細がある。唐と日本の境に、ちくらが沖と云ふ所がある。其所の田を、みね越の田と申す。この米は、一粒蒔けば一萬倍。二粒蒔けば二萬倍になる。その田の米を、この内へ籠めたによつて、籠骨と申すわ。▲次郎 扨も〳〵めでたい仔細でござる。なるほど求めませうが、代物は何程でござるぞ。▲アド これは、どれも萬疋でをりやる。▲二人 まけはござらぬか。▲アド 負はない。厭ならおきやれ。▲次郎 いかにも求めませう。これ下され。辱うござる。▲アド 最早かう參る。▲アド なう〳〵、其方達は主持さうな。▲二人 なか〳〵。兩人共に

して、此所彼所を見物せうぞ。▲次郎 なか〳〵、ようをりやろ。▲太郎 やあ、何かと云ふうちに都ぢや。扨も〳〵、聞及うだより、賑かな事でないか。▲次郎 その通ぢや。▲太郎 はつたと忘れた事がある。目近屋が何所許やら、籠骨が何所にあるやら知らぬ。何とせう。

▲次郎 されば、何としたものであらう。▲太郎 おう〳〵、さすが都ぢや。知らぬ事を、呼ばはれば調ふと見えた。いざこれから、呼ばはつて歩かう。▲次郎 一段ぢや。さあ、呼ばはらう。▲太郎 目近屋は其所許にないか。▲次郎 籠骨屋はをりないか。▲太郎 目近買はう〳〵。

▲次郎 籠骨買はう〳〵。▲アド これは洛中に隠れもない、心の直に無い者でござる。見れば田舎者と見え、何やら尋ねる。ちとあれに當つて見やうと存ずる。なう〳〵、これ〳〵。

▲太郎 此方の事か。何事でござる。▲アド 其方達は、この廣い洛中を、何を尋ぬるぞ。▲太郎 さればでござる。我等は目近籠骨を尋ねますわ。▲アド それを見知つて居やるか。▲太郎 これは都人とも覺えぬ。見知ればこれを買ふと申せども、存ぜぬ故呼ばはります。▲アド それは尤ぢや。身共が誤つた。某はその目近籠骨屋ぢや。賣つてやらう。それに待ちやれ。

わつさりとして―さつぱりと快活にして

なか〳〵。▲二人 太郎冠者、次郎冠者、御前に居ります。▲シテ 念なう早かつた。兩人の者喚び出すこと、別の事でない。此中の彼方此方の御參會は、夥しいことではないか。▲太郎 御意なさるゝ通り、夥しい事でござります。▲シテ それにつき某も、各〳〵を近日申し入れうと思ふが、何とあらう。▲太郎 これは一段好うござらう。▲シテ その義ならば、上座にござる御方へは、目近籠骨を、進上申さうと思ふが、何とあらう。▲二人 一段好うござりませう。▲シテ それなら、身共が藏に、目近籠骨が有るか。▲太郎 されば、御道具は悉く預りましたが、さやうの物はござりませぬ。▲シテ その義ならば、都にはあらうか。▲太郎 なろほど、都にはござらう。▲シテ それなら、兩人共に都へ上り、太郎冠者は目近を、次郎冠者は籠骨を求めて來い。▲二人 畏つてござる。▲シテ 行たらば、頓て戻れ。▲二人 はあ。▲シテ えい。▲二人 はあ。▲太郎 何と次郎冠者、急な事仰せつけられたではないか。▲次郎 その通ぢや。さりながら、何を云付られても、わつさりして、奉公がしよい。▲太郎 なか〳〵、左樣でをりやる。いざ上らう。道行 さあ〳〵、をりやれ〳〵。都へ上つたら、これを序に

目近大名一名
目近



續狂言記 卷之四

一 目近大名

四人　シテ大名　熨斗目、素襖、大臣烏帽子、小さ刀
　　　太郎次郎　半袴、上下、腰帯
　　　賣　長袴、小さ刀

▲シテ大名 この邊に隠れも無い大名。此中彼方此方の御參會は、夥しい事でござる。それにつき、某も各〱を申し入れうと存ずる。まづ、太郎冠者を喚び出し、申し付けう。やい〱、太郎冠者あるか。
▲太郎 はあ。▲シテ 居たか。▲太郎 御前に居ります。
▲シテ 早かつた。次郎冠者も喚べ。▲次郎 畏つてござる。次郎冠者召すわ。▲次郎 何ぢや、召すか。▲太郎

方量もない―途方もない、際限も無い

てしなの人の心や。▲アド扨も〳〵、おもしろい事ぢや。まだ謡へ〳〵。やい太郎冠者、謡はぬか〳〵。これはさて、寝入り居つて、鼾をかき居る。扨々慮外な奴の。免して置けば方量もない奴の。起き居らぬか。罰當りめ。▲シテ みやこなれや東山。▲アド 何の謡。聞きたうもない。▲シテ あゝ免させられ〳〵。▲アト どちへうせる。やるまいぞ〳〵。

獻が惡う—盃の數が不吉なること

錦帳の下云々—白樂天の詩句也謠曲芭蕉の文句

都なれや云々—謠曲小鹽の文句

結構な酒を、澤山に下されます事かな。今覺えました。好い酒でござる。終に覺えませぬ酒でござる。も一つ下されませう。▲アド最早いらぬもの。▲シテ獻が惡うござる。▲アドそれなら飲め〳〵。▲シテこれ〳〵、又一つござる〳〵。これは一息に飲みませう。さあとらせられ。▲アド最早飲まぬか。▲シテそれはくどい。とらせられ。▲アドさあ〳〵謠うて聞かせい。▲シテ謠ひませうが、私は横に寢て居ませねば、謠ふ事がなりませぬ。▲アド謠が聞きたい程に、許すぞ。寢て謠へ。▲シテ心得ました。慮外ながら、こなたの膝を枕に致しませう。▲アドおのれ、主の膝を枕にするものか。▲シテいや〳〵、私が枕にすると思召すな。謠がなさるゝと思召しませ。▲アドそれなら是非ない。とかく早う謠へ〳〵。▲シテ心得ました。謠ひませう。謠 錦帳の下とは、廬山の雨の夜、草庵の内ぞ思はるゝ。▲アド面白い事ぢや。まだ謠へ〳〵。餘り慮外な奴ぢや。枕を外してやらう。さあ〳〵、謠へ謠へ。▲シテなぜにやら聲が出ませぬ。▲アドそれなら枕をしてやらう。さあ謠へ。▲シテこれ〳〵、これでは謠はれます。謠ひませう。謠 都なれや東山、これもまだあづまの、は

たしなめ—慎しめ

慮外—失禮

人召仕ふ下人が、主に暇を請はいで、京内參りするはずか。さりながら、存ずる仔細あり、此度は免す程に、其所を立て。▲シテそれは御眞實でござるか。▲アドなか〳〵、眞實ぢや。▲シテやら心安や。嬉しや。▲アドやい〳〵、この度は免すぞ。以後をたしなめ。▲シテ畏つてござる。▲アドして、都では、何所々々を見物した。珍しい事はなかつたか。▲シテ別に珍しい事もござらぬが、都には面白い小謠がはやりました。覺えて參りました。▲アドそれは出かした。聞かう程に、謠うて聞かせい。▲シテ畏つてござる。さりながら、私の謠ひますには、酒をたべませねば、聲が出ませぬ。一つたべて、謠ひませう。▲アドそれなら、酒を飲うでなりとも、謠うて聞かせ。▲シテ一つくだされませうか。▲アドさあ〳〵、これで飲め。▲シテこれは大盃でござります。お酌慮外でござる。▲アド苦しうない、飲め。▲シテはあ。これ〳〵、一つござります〳〵。さらば、たべましよ。▲アド扨も氣味のよい飲みやうかな。何とあつたぞ。▲シテいや、只ひいやりとして、覺がござらぬ。▲アドそれなら、も一つ飲うで覺え。▲シテ下されませう。はあ。これ〳〵、ござります〳〵。扨も

寢聲―一名寢音曲

をりそうた―行つた

十　寢聲

二人　アド主　長袴、小さ刀
太郎冠者　半袴、上下、腰帯

▲アド主 罷出でたる者は、此邊の者でござる。某召仕ふ下人が、身共に暇も請はいで、何方へやら參つてござる。承れば、前夜歸つたとは申せども、まだ某に目見えをせぬ。言語道斷、憎い奴でござる。今日は彼奴が宿へ參り、きつと折檻を致さうと存ずる。道行 やれやれ、暇をくれいと申したら、暇を取らさうものを。請はぬところが憎うござる。やあ、參る程にこれぢや。身どもの聲は、聞き知つて居る。作聲をして喚び出さう。ものもう。案内もう。▲シテ やら奇特な。ゆふべ歸つたを、どなたやら御存じで、案内とある。物もうはどなたでござる。▲アド 退り居れ。▲シテ はあ。▲アド 俄の慇懃迷惑な。おのれは誰に暇を請うて、何方へをりそうた。▲シテ その事でござる。一人召仕はるゝ下人の事でござるによつて、お暇は下されまいと存じ、忍うで京内參り致してござる。▲アド 何と、一

わろ―汝
強戯―過度の悪戯
菩提の種―發心の動機

高野へ參らう。▲又アド 一段よからう。其方剃つてくれさしませ。▲シテ 心得た。（二人ながら剃りて頭巾被せ、肩衣とり、衣著てよし。）法師なりもよいわ。いざ參らう。さりながら、まづ在所へ戻つてからの事に致さう。▲アド さうも仕らう。▲シテ 參る程にこれぢや。誰々の女房衆お出やれ。（二人の女出る。）▲シテ 某をこの樣にしたがよいか。（四人ながら腹を立て、）▲四人 これは如何なこと。何としてよからうぞ。あのわろの女房衆も、喚び出して剃らう。▲シテ それは免してくれい。▲四人 なんの免せ。（といふまゝ、喚び出して剃り、綿帽子被せ、六人ながら舞臺へ出て、）▲シテ 昔からも、強戯はせぬ事ぢやと云ふが、このことぢや。さりながら、これは只事であるまい。後世を願へとあるお告げであらうぞ。▲アド まことに短い命を持つて、徒に暮さうことでないほどに、これを菩提の種として、後生を願はう。▲シテ それならば、某音頭をとつて申さう。なまうだ。▲三人 なまうだ。▲比丘 なまうだ。▲皆々 なまうだ〳〵〳〵。とつぱい、ひやろ、ひ。

ぞ。誰々ぢや。▲シテ聲を聞けば、正しう誰々ぢやが、不思議な事ぢや。▲アド何事を云ふぞ。▲シテその事ぢや。某儀在所へ戻つたれば、誰が云うたやら、二人ながら、川へはまつて死んだと云うて、在所では泣き歎く。▲アドやれ、その樣な事はな云ひそ。かの返禮に云ふものであらう。なおかまやつそ。▲シテいや、さう云はゞ云へ。女房衆が、生きても死んでもと云うて、自害して死んだ。▲アドやれ、だまされはせまいぞ。▲シテそれなれば是非もない。さりながら、證據がある。▲アドそれは何事ぞ。▲シテこれ〳〵、この髪を見さしませ。これは其方の女房衆の、又、これはわごりよのお内儀のぢや。覺はないか。二人ながら手に取り見て、▲アドこれは如何な事。髪が短うて赤い。▲又一人は鬚が縮うである。扨はまことか。▲シテなか〳〵、何の僞があらう。其方達が知るまいと思うて、これまで來て知らせた。▲アドまことに思ひ合はすることがある。女どもが常々云うたは、自然の事があらば、生きては居まいと云うたが、一定ぢや。情ない事ぢや。というて二人ながらさめ〴〵と泣く。▲シテそれ程に思やらば、後世を弔うておやりやれ。▲アド何としてよからうぞ。いざ、樣を變へて、

おませう—進ぜう

比丘尼なり—尼となれる姿

まことでござるか。といふて、二人の女さめ〴〵と泣く。▲シテ 某も不便に思うて、この如くに樣を變へて、高野へ登るが、そなた達が知るまい程に、知らせうと思うて、これへ立ち寄つた。▲女 扨はまことでござるか。此中夢見が惡かつたと思うてござる。この上は川へなりとも、身を投げて死なう。▲又女 妾も自害してなりとも死にませう。といふて歎く。▲シテ それ程に思やらば、死んでいらざること。頭を剃つてなりとも、念佛を申して、お弔やれ。▲女 まことにさやうに致いて、後世を弔ひませう。▲シテ それは一段ぢや。さやうにめされい。▲女 誰頼まう人もないほどに、こなた剃つて下され。▲シテ 眞實さやうに思やるか。それならば剃つておませう。二人して、われ先と剃らする。剃りてから綿帽子被せ、▲シテ 某は最前も云ふ如く、これから高野へ參るほどに、序に、この髪を高野へ納めておませう。▲女 如何やうにもなされて下され。▲シテ 二人ながら、比丘尼なりが好い。さらば〳〵。一段の事をした。まだこれでは腹がいぬ。かの者どもが、遠いへは行くまい。追つついて、致しやうがござる。といふて行く。二人は立ち、▲二人 かの者は、在所へもえ戻るまいぞ。そこで互に見て、▲シテ そなた達は誰ぢや。▲アド 誰とは何事を云ふ

誰の—朋輩の妻を呼ぶ

▲二人 扨々聞えぬ人ぢや。いざ参らう。（というて、大臣柱の側に坐して居る。）▲シテ坊主 （立て）扨々腹の立つ事でござる。この返報を致したい。や、思ひよつた事がござる。まづ宿へ戻らう。誰の、内におぢやるか。又誰のも、をりやるか。お出でやれ。▲女 （二人ながら出る。）なうそれの聲ぢやが、何として歸らせられたぞ。これは如何な事。それは何としたなりでござるぞ。▲シテ坊主 さればされば、そなた達に逢うても面目ない。▲女 まづ何事でござるぞ。妾がところのは、何とめされてござるぞ。お歸りやりませぬか。▲シテ まづかう通らしめ。そなた達に逢うて、云はうとは思へど、涙に咽んで云はれぬ。▲女 さやうに仰せらるれば、いよ〳〵聞きたうござる。早う仰せられい。▲シテ それならば、隱いてもいらぬこと。云はう。まづ三人同道して參つた。所を云うても合點がいくまい。道に大きな川があつた。二人は渡らうといふ。某は深さうなほどに、まづ樣子を見て、渡らしませと云うたれど、聞かいで、手と手を取り合うて渡つた程に、眞中で、深い所へはまつて、二人ながら、棒やなどを振る如くに、ぶらり〳〵と流れて死んだ。▲女 扨も〳〵、苦々しい事でござる。▲又女 それは

腹立てずく—ずくは相談ずくなど云ふ語法に同じ

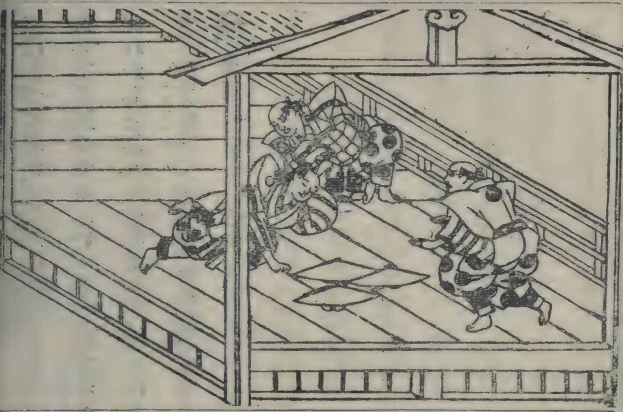
れは餘りぢやが。▲初アド いや／＼、何事も腹を立てまいと云ふからは、苦しうあるまい。その上腹を立てたらば、その時の樣子によらう。そなたは、剃刀をお持たちやつたか。▲後アド いや持ちませぬ。▲初アド 不嗜みな人ぢや。自然髭を剃らうと思うて、某は剃刀をたしなうだ。さらばお揉みやれ。▲後アド 心得た。そのうちに、剃刀手合をして、剃りかゝる。▲初アド まづ一方は剃つたが、何とせうぞ。思ひ出した。耳へ水を入るれば、寢返るものぢやと聞いた。といふて、剃刀の柄で、耳へ一雫落す眞似をする。そこで寢返る。又揉うで剃る。頭巾被せて、肩衣取り、衣著せて、▲初アド いざ、ちとまどろまう。▲後アド よからう。といふて、二人ながらぬる。坊主目を覺し、衣、頭の樣子見て驚き、二人の者を起し、二人ながら起きて、▲初アド やあ、其方は何と思うて法體したぞ。▲シテ 何と思うてとは聞えぬ。この樣な事をするものが、そなた達ならではせまい。▲後アド いや、聞えぬ事を云ふ。それほどに思ひよつたらば、ちと某等にも知らせいで。殊の外腹を立て、二人を叱る。▲初アド その事ぢや。たとへば、われ等がしたにもせよ、最前何事にてもあれ、腹立てずく無しと、約束した上は、それ程に云はうことではない。▲シテ 尤なれども、ことによつたものぢや。この如くに、坊主になつてよいものか。といふて、散々に言葉からかひして、坊主は戻る。二人は行く。坊主太鼓打の側に居る。

かしまだち云々—旅の初めにて歩行になれねば云々の意

口固め—堅き約束

ねごい—熟睡の癖あること

詣致さうと存じて、これへ參つてござる。▲アド ようこそござつたれ。誰殿もこれにござる。それへなりとも參つて、誘ひませうと存じてござる。さらば追付けまゐりませう。▲シテ さらばござれ。▲アド まづござれ。▲シテ 參らうか。▲アド なか〱ござれ。▲シテ かやうに同道致すからは、自然腹の立つことがござるとも、互に堪忍を致いて、同道致さう。▲アド 仰せらるゝ通、長の旅ぢやほどに、戲事をもせいでも叶はぬ事ぢや。如何やうの事があるとも、堪忍を致いて、同道致さう。▲シテ や、殊の外草臥れてござる。折節これに辻堂がござる。まづ腰をかけて休みませう。あゝ、いかう草臥れてござる。ちと某はまどろみませう。▲アド あの人は殊の外草臥れたと見えた。▲後アド かしまだちぢや程に、さうもおぢやらう。▲アド ちとこれへござれ。まをし。よう寢入つたと見えた。それにつき最前あの人が、何事をしたりとも、腹を立てまいと云はれた程に、ちと嬲つて見ませう。▲後アド まことに、かた〲口固めをせられた程に、嬲らうが、何としてよからうぞ。▲初アド あの人はねごい程に、こかいても知られまい。いざ、坊主になさう。▲後アド そ



佛詣—寺參り

九　六人僧

六人　男三人　はじめ半袴、下くゝり脚帯、後に布頭巾、上十徳
　　　女三人　はじめ箔小袖、ゆばうし、後に衣、はなの帽子

▲シテ 罷出でたる者は、この邊に住居致す者でござる。此中思ひ立つて、佛詣致さうと存ずる。某ばかりでもなし、一兩人申し合うた方がござる程に、これを誘うて、同道致さうと存ずる。參る程にこれでござる。誰殿御宿にござるか。▲アド どなたでござるぞ。▲シテ いや、某でござる。▲アド 何と思うて出させられた。▲シテ その事でござる。今日は日もよくござるほどに、内々申し合うた如く、佛

わ坊主―長老を罵る詞

主になつたれば、これは何事ぞ。▲比丘 なうお長老樣。昆布を何にしませうぞ。元のやうにして、返させられい。▲長老 いや某も、かうあらうとは思はなんだ。そなたたちも、よかれかしと思うての事ぢや。▲男 この樣の坊主になして、聞えぬ。わ坊主、ようして返せ。といううて、坊主を突き倒す。▲長老 これは何事するぞ。といううて摑み合ふ。比丘うろたへて男の足とる。▲男 これは某ぢや。色々ありて、坊主打ちこかし道入る。▲長老 やるまいぞ〳〵。

びなんながら―未詳

勤―讀經

申し受けうといふ―原本かく有れど申し受けませうなどあるべき所也

ざる。三貫でござるの。▲長老 お、おう。びなんながら剃る眞似し、綿帽子被くる内に、▲男 わごれはおかいで。はあ剃つたわ。▲長老 さらば、いざ行かう。▲男 心得ました。坊主先。中男坊主。後比丘尼。▲男 これは一段の事致いた。▲長老 なう、比丘はちと後からわたしませ ▲女 心得ました。▲長老 これぢや。ものも。案内も。▲施主 案内とはどなたでござるぞ。▲長老 高札の面について參つた。▲施主 御出家達か。▲長老 なか〱。▲施主 かう通らせられい。とワキ座に直し置く。▲比丘 立つて、ものも。案内も。▲施主 誰そ。どなたでござる。▲比丘 高札の面について參つた。▲施主 お比丘尼か。▲比丘 なか〱。▲施主 こなたはこれへござれ。とワキ正面に置く。▲長老 さらば、勤いたさう。といふて勤めする。新發意もつけて申す。つとめ過ぎて、亭主あしらうちに昆布五枚、長老又五枚新發意、比丘の前に三枚置く、▲長老 御念の入りました。お菓子まで。▲施主 これが布施でござる。▲長老 とてものことに、御布施を申し受けうといふ。▲施主 これが御布施でござる。肝を潰す。▲長老 高札には、五貫と三貫と、布施になされうとござる程に、早う御布施を。▲施主 いや昔からも、この昆布一枚を一貫、二枚を二貫と申す。これを五貫と申す事でござる。早う仕舞うて歸らせられい。そこで、肝を潰す。亭主引つ込む。▲男 なうお長老様。五貫と三貫取ると仰しやつたにより、坊

おきやらいでの―よせばよいに也

などいふ。剃刀取出し、剃る眞似して、頭巾被せて、肩衣とらせ、衣をも、小僧といろて、へんてつ著せて。▲長老 よう似合うた。俄なりの樣にはない。▲男 あお過分にござりまする。して、五貫はまことでござるかの。▲長老 なか〳〵。愚僧も只今參るよ。▲女 なう、こなたは早、坊主にならせられたの。▲男 をゝ、五貫致さうと存じてなつた。五貫では、まづ五十日も七十日も、ゆるりと過ぐるほどに。▲女 ま、それならば、最早こなたも、その樣にならせられた程にぢやが。まをし、お長老樣、比丘尼には三貫でござるか。▲長老 なか〳〵。出家には五貫、比丘尼には三貫ぢや。▲女 まことでござるか。▲長老 確に高札にある。▲女 それならば、妾も比丘尼になりませう。▲男 いや〳〵、某こそかうなつたれ。まだそなたは若い女子の、尼になると云ふ事があるものか。無用ぢや。▲女 さうではあれども、最早こなたも出家にならせらるゝ。その上八貫取れば扨、ようござるほどに、お長老樣、私も髪をおろしませう。▲長老 其方は無用ぢやがの。▲女 いや、どうありとも、剃つて下されませい。▲長老 おきやらいでの。さりながら、八貫の布施を取れば扨、いかい事ぢや程に、後はともあれ、まづ剃らば剃らしませ。▲女 畏つてご

俄なり―俄出來のこと

樣をかゆる―剃髮して法體となること

▲男 はあ、それはまづ如何やうな事でござりますぞ。▲長老 いや、その事ぢや。此邊に、志の深い人が有るが、志をせうず、出家衆には五貫、又比丘尼は三貫づゝ布施をせうと云うて、高札を打たれた。▲男 や、それはまことでござるか。▲長老 なか〳〵。▲男 して、俄なりの出家にも、その通でござりまするか。▲長 をゝ、出家でさへあらば、違ふ事はあるまい。▲男 何と致しませうぞ。出家になりませうか。なう嚊。▲女 やあ、輕忽な事。いかに手前がならぬと云うて、さうはなりますまい。▲男 いや、さうではない。五貫取れば、どこぢやと思はしますぞ。お長老樣、なりませう。▲長 どうなりともぢやが、女房衆に談合めされい。いづれはや、五貫取ればよい事ではあるまで。▲男 あゝなりませう。嚊、なるぞ。▲女 なう、如何に年を取ることがならぬと云うて、樣をかゆるといふことはあるまい。▲男 いや、又後はどうも致さう。お長老樣、髮を剃つて下されい。▲長 剃つてもやらうが、女房衆合點か。▲男 あれも合點でござらう。五貫取ればようござる。▲長老 それならば剃らう。（というて剃るうちに）▲女（はしがかりにて）これは如何なこと。はや剃らるゝ。苦々しい事ぢや。

わせた―來た

おましたい―進ぜたい

參りました。▲長老 はや仕舞うて、歳暮の禮にをりやつたか。▲男 なか〳〵。御禮申しまするが、といふうちれ、▲女 お寺樣、妾も御禮に參りました。▲長老 や、二人ながら禮にわたせたは、早う仕舞はせたものぢやあらう。▲男 その事でござりまする。仕舞ひかねまして、節々の事でござれども、ちと御無心申しに參りました。最早何ともなりませぬほどに、どうぞして、三ケ日年をとりまするほど、貸させられて下されませい。▲長老 それは苦々しい。どうぞしておましたいが、少しもない程に、どれへなりとも、無心を云はしませ。▲女 申しお寺樣、此度の事でござる。三ケ日さへたてますれば、又どうもなりまする程に、少し貸して下されませい。▲長老 なうそなた達は、聞分のない。出家の詐を云はうか。有りさへせば、貸さないでわ。少しもない。▲男 尤でござりますれども、最早どなたへ無心を申さうやうもござらぬ。春になりましたらば、急度返辨申しませうほどに、どうござるとも、年をとらせて下されませい。▲長老 まだおしやる。愚僧は其樣な者で はないあらば如才があらうか。扨何卒して。なうそなたが扨、出家なれば よい事が あれども。

お宿にござれかしぢやまでー留守でなければよいがの意

何としたものであらうぞ。▲女 妾は、こなたの、どうもなされうと思うて居たれば、それは扨、何と致さうぞ。いつも〳〵、扨苦々しい事でござる。どうぞして、三ケ日の用意を、なさるゝことはなりませぬか。▲男 いや、どうもならぬ。わごれ才覺さしませ。▲女 こなたさへさやうに仰せらるゝに、妾が何として才覺致さうぞ。どれへぞ行て、無心云うてなりとも、年をとるやうになされい。▲男 最早方々の門を塞げた處で、何所へ無心云はうやうもないが、何とせうぞ。お寺樣へ無心云はうか。これも節々のことぢやところで、何とせうぞ。▲女 お、おう、お寺樣へがよからう。こなたが厭ならば、妾ばかり行てなりとも、借つて參らう。▲男 お、おう、それもよからうが、そち一人遣らうより、某と二人行て、どうぞ云うて、少しなりとも借つて參らう。いざをりやれ。▲女 心得ました。▲男 又お寺樣は、何としても、餘の所へよりも心安い。お宿にござれかしぢやまで。これぢや。ものも。ござりますか。▲長老 案内とは誰ぞ。▲男 いや 某 でござりまする。▲長老 や、誰ようをりやつた。何と思うておぢやつたぞ。▲男 近い正月でござりますが、歳暮の御禮に

申し入れ―招待すること
布施―僧へ施す品
方々の方を塞げた―諸方から融通し盡したる也

八　昆布布施

シテ男　初は半袴、上下、腰帯、後に十徳、布頭巾
女　箔小袖、ゆばうし、後に衣、ばうし
四人　住持　頭巾、衣、珠數、
施主　長袴、小さ刀

▲アド　この邊に住居致す、志の深い者でござる。仔細ある程に、出家達を申し入れ、布施を致さう。御出家衆に五貫、比丘尼に三貫、まづ高札を打たうと存ずる。▲男　罷出でたる者は、この邊に住居致す者でござる。一日々々と食ひて、はや押し詰めてござる。隣には正月のこしらへして、お小袖の、何のかのと云うて、夥しうこしらへをなさるゝが、某は年をとらうやうがござらぬ。石で手を詰めたやうな事ぢや。又どなたへ參つて、無心を申さう樣もないことは、方々の方を塞げた所で、何ともならぬ。まづ女共を喚び出し、談合致さう。これの、居さしますか。▲女　妾を喚ばせらるゝは、何事でござる。▲男　そなたを喚び出すも、別の事でない。早押し詰めてあれども、年をとらうやうがないが、

輕忽や—率爾の意

くまどつて—原本くさどつてN

いで〳〵—以下曲がかり

わ男—罵る詞

と思うても、其方が顔を見ては居られまい。▲女 なう輕忽や。それは十二一重で身を纒ひ、長髢を下げておぢやるによつて美しい。妾ぢやと云うても、十二一重で身を飾つたらば、その上臈衆にも、負くることではおぢやるまい。▲シテ いや〳〵、その樣な事な云はしましそ。それがしは、思ひ止まる事はならぬ程に、歸らしませ。▲女 なう、それならば、其方は天下に隱れもない金岡殿ぢやほどに、その戀しいとおしやる上臈の顏を、妾が顏をくまどつて御覽ぜられい。▲シテ まことにこれは、面白い事を思ひ出した。それならば、隨分顏を彩つて見て、似たれば、其方も仕合、身共も果報ぢや。さらば宿へ歸らう、といううて二人ながら一遍回り、女を大臣柱へなほし、紅皿と、白粉皿と、シテ柱の少し先に置きて、筆二本持つ。但し内一つ小さき刷毛にても、舞 いで〳〵さらばゑどらん。かけり仕舞有りて口傳あり。いで〳〵さらばゑどらんとて、紅やおしろいすりぬりたれど、下地は黑き山がらす、もしもや似ると又たちかへり、丹花の脣、柔和の姿に、何とゑどれどこの面が、戀しき人の顏には似いで、狐の化けたに異ならず。と、女を突き倒し逃げこむ。▲女 わ男、やるまいぞ〳〵。

原本此處は假名にて此く書けりかなをかの音便とすべきか或は此の狂言もと金若の事か金若は天長承和頃の人にて金岡よりは前なり

はしますな。そなたは宿へお歸りやれ。▲女なう、こなたは、戀をなさるゝと申すが、まことでござるか。▲シテいや〳〵、むざとした事を云はします。此中氣をつめて、繪を書いたところで、氣が詰つたによつて、氣晴しにかやうに歩く。▲女いや〳〵こなたの態は、さやうには見えませぬ。眞直に仰せられい。なることならば、妾が共々に肝を煎つて、叶へて進ぜう。▲シテ扨は其方も、さやうに思はしますか。▲女なか〳〵。成ることならば叶へて進ぜう。▲シテそれならば、恥かしけれど語らう。そりや、いつぞや、禁中へ繪を書に行つた事があきたわ。▲女なか〳〵。▲シテその時、いかにも美しい上臈の、年の頃二十ばかりなるが、某の繪を書くを御覽じられて、一筆と仰せられた程に、戲畫を書いて進じたれば、思うたよりも見事なと仰せられて、奥へござる。しつくりと手を締めてあれば、うつゝなと仰せられたお顏が、あゝ、忘れられぬ。▲女さればこそ。さやうの事であらうと思うた。さりながら、それは雲の上人ぢや程に、そなたが何程思はしられてもなるまい程に、思ひ止まつて、宿へ歸らせられい。▲シテいや〳〵、いかに止まらう

花のゑん―花の宴か

嬋娟―美しきこと

太液の芙蓉―太液は漢の武帝の造りし池芙蓉は蓮也こゝは白樂天の長恨歌の太液芙蓉未央柳といひ梨花一枝春帶雨といふ句意を取る

戀よ戀云々―狂言枕物狂にも此の文句あり

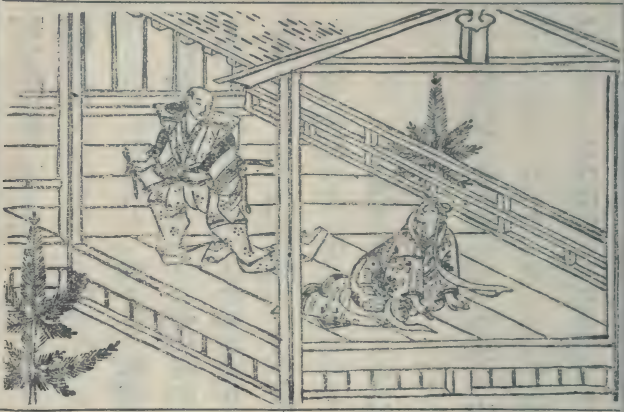
かいもとれて―かきもつれてに同じ

これの―こちの人

かなわかどの―

抓つたれば、立ち戻つて、あゝうつゝなやと仰せられい、につこりと笑はせられたお顔の俤が身にしみて、心うつゝなくなりて候よなう。いつの春か思ひそめて、忘られぬ花のゑんや花のゑん。あゝ扨、嬋娟の黛、丹花の脣、柔和の姿、太液の芙蓉の、雨を帶びたる粧と申すは、かのお姿の事かなう。戀はうき名の立つのみか、やう／＼正體も無う迷ひ惚れたよ。何時の世にかは君を忘れじ。かやうに存ずれども、再び逢も見もせで、あのおそろしき朽木の梅さへ、八重に咲くものを、咲くものを。戀よ戀、われ中空になすな戀。戀風が來ては、袂にかいもとれてなう。おう、袖の重さよ。こひかぜは、おもいもんのかの。舞臺に寢る。▲アド女 これは、金岡と申す者の妻でござる。聞けばこれのは、戀をして、洛中を、今日は歩かるゝと申す。沙汰の限りでござる。參つて見て、連れて歸らうと存ずる。扨々腹の立つと云ひ、外聞の惡い事でござる。なう、これは如何な事。かなわかどの／＼。▲シテ や、わごれは何しに來た。▲女 何しに來たと云ふ事があるものでござるか。これは何とした事でござる。宿へ歸らせられい。▲シテ いや、某の事は、な構

次第―謡がかり
金岡―畫家巨勢家の祖清和以下五朝に歴仕す



七　金岡

二人　シテ　金岡　素襖、のしめ、小さ刀、大筆携げ出る
　　　女　箔小袖、ゆばうし

▲シテ男　次第にて出づる、戀路に迷ふうき身のうへ〳〵、命や限なるらん。詞　これは天下に隠れもない、金岡と申す繪書でござる。某一年、禁中へ繪を書きに參つたれば、内裏上臈衆の、如何にも美しう出立たせられ、數多ござつた。中にも二十歳ばかりなる上臈の、持たせられた扇を差しいだ させられて、何ぞ一筆と仰せられた程に、戯畫をざつと書いて進じたれば、扨々思うたにかはつて、見事やと仰せられて、奥へござるを立ち寄つて、ふつつりと

さらし—晒布
はんま千鳥—濱をはんまと發音す
將來がようあるまい—後生が恐からう

最前の通ぢや。又顔を撫でるぞ。▲きく 心得た。なでい。ほめうぞ。▲シテ 舞 宇治のさらしに、島に洲崎に、立つ浪をつけて、はんま千鳥の友呼ぶ聲は、ちり〳〵やちり〳〵、ちいりちりやちり〳〵と、友呼ぶ所に、島かげよりも、艪の音が、からりころり〳〵と漕ぎ出して。釣りする所に、釣つた所が面白。足にて顔なでる。▲きく どこへ。ぬかることではないぞ。シテの足持つ。おもしろいとの〳〵。廻る ▲シテ これは何とするぞ〳〵。▲きく おのれがやうな奴は、かうして置いたがよい。打こかす。▲シテ やあおのれ、座頭の分として、憎い奴の。座頭の足を取り引き廻す。▲きく これは何とする〳〵。▲シテ お手つ。參つたの。打こかし入る。▲きく やい〳〵、目も見えぬ者を、この樣にし居つて、將來がようあるまいぞ。やるまいぞ〳〵。

れがあの如くに笑ふ筈はないが、思ひ付けた、扨は某が顔を、臑で撫で居つたと見えた。扨も憎い事ぢや。やあ、返に又致しやうがある。やい瞽、身ども今の返禮に、平家を稽古した。そちが耳が聞えるなら、語つて聞かせたいなあ。▲シテ何と云ふぞ。平家を語らう。よかろ〳〵、語れ。▲きくさりながら、語つてもそちが耳が聞えぬほどに、これも相圖に、果てたところで、手をさし上げる程に、その時賞めい。▲シテ何と、今の手を上ぐるが相圖か。▲きくなか〳〵。▲シテ如何にも賞めう。語れ〳〵。▲きく心得た。語るぞ語るぞ。（平家）抑これの瞽めは、片輪者の癖として、根性は拗ねうて、臆病瞽のやけ瞽め。（手を上げる。）▲シテえいやあ、扨も〳〵、面白い事かな。▲きく（笑うて）これは如何な事。瞽といふ者は、己が身の上の事云ふに知らいで、出來たと云うて嬉しがる。これは可笑しい事ぢや。▲シテやあ又座頭めが笑ふが、扨は身共が身の上の事を云うたと見えた。又致しやうがある。やい〳〵菊市、今の平家は面白かつた。身共も今一番、舞を舞うて見せうぞ。▲きく何と云ふぞ。又舞はうと云ふか。▲シテなか〳〵。▲きくいかにも、舞へ〳〵。▲シテ相圖は

置け―止せの意

くわんじや聖―勸進聖なるべし

舞うたり〳〵―賞讚の詞

何ぢや、居ぬか。居やうやうがあつてこそ。笑ふなり。▲シテ これは如何な事。座頭めがいかう笑ふが、扨は身共を嬲りをつたと見えた。憎い事ぢや。致しやうがある。やい菊市、身どもは此中、小舞を稽古して好う舞ふが、そちが目が見ゆるなら、舞うて見せたいなあ。▲きく それは面白からう。目こそ見えずと、舞の聲を聞いて慰まう。舞うて見せい。▲シテ 何と、置けといふか。▲きく いや、舞へと云ふ事。▲シテ それなら舞はうか。さりながら、これも果てた所で賞めねばならぬ。その相圖には、果てた所で、そちが顏を撫でう。其時賞めい。▲きく 何と、相圖に、果てた所で顏を撫でるか。▲シテ なか〳〵。▲きく いかにも、賞めて遣らう。舞へ〳〵。▲シテ 心得た。さらば舞ふぞ。舞 こゝ通る熊野道者の、手に持つたも竹柏の葉、笠にさいたもなぎのは、これはどなたのお聖樣ぞ。笠の内がおゆかし。大津阪本のお聖ぢや。あゝくわんじや聖ぢや。足にて顏なでる。▲きく えいやあ、扨も〳〵、舞うたり〳〵。▲シテ 笑うて、これは如何なこと、目の見えぬ者は、何も知らぬ。身共が、足で撫でたを知らいで嬉しがる。扨も〳〵、面白い事かな。▲きく これは合點がいかぬ。あ

精—根氣

ず、身共は、耳は聞えても目は見えず、何としたものであらう。▲シテ何ぢや。其方は目が見ゆると云ふか。▲きく扨も氣の毒な。さうではない。盗人が這入つたらば、身共は、耳が聞えても目が見えぬが、何とせうと云ふこと。▲シテ聞いた。まことにそちが云ふ通ぢや。何とせうなあ。▲きく身共がつく〴〵思案するに、若し盗人が這入つたら、身共が耳で聞きつけて、そちが膝を突かう程に、それを相圖に防げ。▲シテこれは聞いた。若し盗人が這入つたらば、その相圖に、身共が膝を突かうと云ふか。▲きくなか〱、さうぢや。▲シテこれは一段よからう。若し盗人が這入つたら膝を突け。身共が防がうぞ。▲きく心得た〱。あゝ扨も〱、聾に物云へば、精も心も盡きる事ぢや。▲シテこれは如何なこと。座頭と云ふ者は、智恵の深いものぢや。よい思案を思ひ付けた。▲きくやあ、いかう淋しい。ちと聾を嬲つて遊ばう。そりや〱、盗人よ〱。▲シテ心得た。やれ盗人が這入つたぞ。出合へ〱。やるまいぞ〱。▲きく笑うて、扨も〱可笑しい事かな。よう盗人が居やうぞ。これはよい慰ぢや。面白い事かな。▲シテやい菊市、盗人は居ぬわ。▲きく

る程に、言ひ合うて、よう留守をせいと云ふ事ぢや。▲シテ何と菊市が來て居ますか。▲主なか〱。▲シテいかにも、言ひ合うて、よう留守を致しませう。▲主それ〱、是へ出よ。▲シテ心得ました。▲主菊市、最早身共は行く程に、聾もこれに居る、言ひ合うて、よう留守をしてたもれ。▲きく畏つてござる。やがて御歸りなされませ。▲主やがて歸らうぞ。▲シテ扨も〱、あの菊市が、目も見えぬなりで、頼まるればとて、留守に來るものか。若し盜人が這入つたら、何とせうと思うて來た知らぬ。▲きくやあ、聾が、身どもが事を云ふと見えた。聾々〱、太郎冠者。▲シテやあ菊市か。よう來た。▲きく何と此中は久しう逢はぬが、息災さうな。▲シテをゝ、此中はよい天氣ぢや。▲きくいや、さうではない。此中は久しう逢はぬと云ふ事ぢや。▲シテされば〱、久しうをりやる。今日はよう留守にをりやつた。▲きくその事ぢや。頼うだ人の、二三日他所へゆくとおしやつたほどに、留守に來た。言ひ合うて、よう留守をせうぞ。▲シテこれは聞いた。いかにも言ひ合うて、よう留守をせうぞ。▲きくさりながら、若し盜人が這入つたら、そちは目が見えても耳が聞え

まいか。▲きく好うこそ御出なされました。幸今日は隙で居ります。なるほどに參りませう。▲主それは近頃過分。その義なら、いざ同道致さう。さあ〳〵をりやれ〳〵。▲きく畏つてござる。慮外ながら、ちと手を引いてくだされ。▲主心得た。道行なう菊市、この間は久しう見えなんだ。何として見えぬぞ。▲きくさればでござります。方々勤めますにより、隙を得ませいで、御見舞も申しませぬ。▲主それは一段ぢや。とかく隙のないがようをりやる。やあ早これぢや。まづ奥へ通りやれ。それにゆるりと居やれ。▲きく畏つてござる。これに居りませう。▲主聾々、太郎冠者々々々々。▲シテ何ぢや、呼ばしやるか。何でござる。▲主身共は二三日他所へ行く。よう留守をせい。▲シテ何と、二三日の内に雨が降らうかとおしやるか。▲主いや〳〵、さうではない。二三日他所へ行く。よう留守をせいと云ふ事ぢや。▲シテ聞きました。二三日他所へござる。よう留守をせい。▲主いかにもさうぢや。又あれに菊市も來て居る程に、言ひ合うて、よう留守をせい。▲シテ菊畠の事はお氣遣なされますな。大事に致しませう。▲主いや、さうではない。菊市も來て居

聾座頭—一名不聞座頭

六　聾座頭

三人　シテ　つんぼ　半袴、上下、腰帶、
座頭　布頭巾、水衣、下半袴、杖つき
主　長袴、小さ刀さし

▲主 罷出でたる者は、この邊の者でござる。某二三日さる方へ參る。身共の使ふ者は聾でござる。あれ一人では、留守が心許なうござる。それにつき、こゝに菊市と申して、出入いたす座頭がござる。これをよびに參り、相留守に賴まうと存ずる。急いで參らう。道行 内に居ればようござるが、何とござらうぞ。定めて宿に居るでござらう。やあ、何かと申すうちにこれでござる。ものもう。菊市内に居らるるか。▲きく やあ、表に案内がある。どなたでござる。▲主 いや身共ぢや。▲きく やあ、好うこそ御出なされました。只今は何と思召し、御出でござる。▲主 その事ぢや。某二三日他所へ參る。それにつき、身どもの使ふ者は聾で、何とも心許ない。其方を相留守に賴みたう思うて來た。來てくりやる

もしました。それならこちへ、その子をおこさしやれ。▲鬼 それなら食ふまい。とてもの事に、この子を肩に載せて、囃子物で行かう程に、そちも囃せ。▲女 心得ました。囃しませう。▲鬼 鬼の養子を肩に載せて、蓬萊の島へ参らう〳〵。養子を〳〵肩に載せて、島へ参らう〳〵。扨も〳〵、よう見れば、見るほど旨さうな。これは食はねば堪忍がならぬ。一口に食うてやらう。あゝ、わん。女 なう〳〵悲しや〳〵。それを食はしてなるものか。おのれがやうな奴は、男には持たぬ。打ちこかしてやつたがよい。その子もこちへおこせ。なう〳〵怖しや。こはや〳〵。逃げ入るなり。▲鬼 扨も〳〵、女ぢやと思うて、油断して打ちこかされた。扨もしなしたり〳〵。やあ、これに笠を置いて行た。せめてこれなりとも取つて行かう。やい〳〵、今の女、どちへ行くぞ。どうでも女房にせねばおかぬぞ。やるまいぞ。やるまいぞ〳〵。

れ。助けて下されれ。▲鬼いで、食はう〳〵。やい、そこな奴、おのれは七つさがれば、人の通らぬ所へうせた程に、たつた一口に、いで、食はう。▲女あゝ悲しや。助けて下され〳〵。▲鬼何と、助けてくれ。やあ、見ればよい女房ぢや。やい〳〵、それなら命を助けてやらうが、己が云ふことを聽くか。▲女何なりとも聽きませう。▲鬼それなら、そちを連れて行て、おれが女房にせう程に來い。▲女それは迷惑でござる。その上私は夫がござる。▲鬼いや〳〵、男はあるまい。おれが女房にせう。▲女なるほど、男がござる。それ故この子がござる。▲鬼それでも、女房にせねばならぬ。どうあつても來い。▲女いや〳〵、夫は無理でござる。なりませぬ。▲鬼それなら、たつた一口にしてくれうぞ。いで、食はう。▲女あゝ悲しや。それなら、どうなりとも致しませう。助けて下され。▲鬼何と合點するか。▲女なか〳〵、合點でござる。さりながら、この子は何としませう。▲鬼その子は、おれが養子にせう。これへおこせ。▲女心得ました。抱かせられ。▲鬼扨も〳〵好い子ぢや。よう見れば旨さうな。一口にしてやろ。わん。▲女あゝ悲しや。その子故にこそ合點

鬼の養子―一名鬼の継子

七つさがればー午後四時過



五　鬼の養子

二人　シテ鬼　鬼の頭巾、ぶあくの面、厚板縮小袖、ゆばうし、子をいだき出る
　　　女

▲女 妾はこの邊の者でござる。山一つ彼方に、親里がござる。久しう參らぬほどに、今日この子を抱いて、見舞に參りませう。道行 久々參らぬが、何事もないか、心許なうござる。やあ參るほどに、此所は、播磨の印南野と申す所でござる。此所は七つさがれば、鬼が出て人を取ると申すが、心許なうござる。早、日も晩じてござる。人でも連れて參らうものを。心許なうござる。▲シテ鬼 いで、食はう〳〵。▲女 あゝ悲しや。なう〳〵、許して下さ

腹だちや〳〵。身が燃えて腹が立つ。やい、わ男、よう暇の狀おこしたなあ。おのれ喰ひつかうか、摑みつかうか。あゝ、腹だちや〳〵。▲シテやい其處な奴、男の一旦隙やるに、此所へ何しに來た。あつちへ行け。▲女いかにも、其方に執心で來たでもない。ちと入る道具があつて、取りに來た。▲シテそれは何ぢや。▲女この袋へ入る程の物ぢや。▲シテそれほどの物は、やらう程に、取つて行け。何ぢや。▲女あれぢや。指さし向を教へ、▲シテどれぢや。▲女あれ、あれぢや。▲シテどれぢや。▲女おれが欲しい物は、是ぢやわ、袋を男の首へ被せ、引く。▲シテやれ、これは何とする。目が見えぬわ。首が締る。許せ〳〵。▲女何の許せ。どうでも連れて行て、妾がしやうがある。▲シテあゝ悲しや。最早去るまい。ゆるせ〳〵。

藪を蹴出しても一草むらを探しても、所在にいくらもある意

暇の狀をおこし居つた。やい、おのれはようこれを持つてうせた。おのれまで一つになつて、憎い奴の。汝掴みつかうか、喰ひ付かうか。腹だちや〱。▲冠者 いや申し〱、まづ、物を云はさせられ。私は參るまいと申してござれば、行かずは手打にせうと仰せられたによつて、是非なう持つて參りました。何も存じませぬ。▲女 これはそちがいふ通、知らぬ事もあらう。それなら、そちは先へ歸れ。妾が其所へ行て用がある。それへ行かうと云うて歸れ。▲冠者 いや、御返事に及びませぬ。▲女 いや〱、それでも用がある。行かねばならぬ。先へ行け。▲冠者 心得ました。さればこそ、かうあらうと思うた。まづ歸つてこの通申さう。ござりますか〱。▲シテ 太郎冠者、戻つたか。▲冠者 歸りました。扨も〱、殊の外腹を立てさせられて、はやこれへござります。▲シテ 何しに來るぞ。返事に及ばぬと云はいで。▲冠者 さう申しましたれども、行かねばならぬ用があると、仰せられます。▲女 なう〱、腹だちや〱。藪を蹴出しても、彼のやうな男は、二人や三人は蹴出すれども、騙したが憎い。この袋を持つて行て、致しやうがある。扨も〱、

ていどーきつと

よいとは仰せられますまい。御免されませ。▲シテ いや〳〵苦しうない。ちつとも氣遣せずとも、返事には及ばぬと云うて、置いて來い。▲冠者 さやうではござるが、餘の御使は、何なりとも致しませう。この事においては、御免されませ。▲シテ 扨は汝は、これ程に云ふに、女どもは怖うて、身どもは何とも思はぬか。この上は厭でも應でも遣るが、ていど行くまいか。刀に手かくる。▲冠者 あゝ參りませう〳〵。▲シテ 何と、行くか。▲冠者 なか〳〵、參りませう、▲シテ それなら早う行て來い。これを持つて行て、返事に及ばぬと云うて、その儘歸れ。▲冠者 畏つてござる。▲シテ 早う行け。▲冠者 心得ました。やれ〳〵、迷惑な事を仰せ付けられた。この狀を渡したらば、身共を、よいとはおしやるまい。腹を立てらるゝであらう。道行 さりながら、主命ぢや。參らずはなるまい。まことに孫子に傳へて、さすまいものは宮仕ぢや。やあ、參る程にこれぢや。ものも。案内も。▲女 やあ、今のは太郎冠者が聲ぢや。迎に來たか知らぬ。やあ太郎冠者、遲いと思うて迎に來たか。▲冠者 いや、何も存じませぬ。御狀が參りました。狀渡す。女狀見る。▲女 なう〳〵、腹立や〳〵。妾が男めが、

暇の狀―離緣狀

わゝしうて―騒がしに同じ語ここは不行儀と見るべし

四　暇の袋

三人　シテ主　長袴、小さ刀
　　　太郎冠者　半袴、上下、腰帶
　　　をんな　縮小袖ゆばうし、大きなる袋持つ

▲シテ男　罷出でたる者は、この邊の者でござる。某幼馴染の女がござるが、眉目形見苦しうて、朝寢を致し、たま〳〵起きて大茶をたべ、人事をいひ、殊に大酒までたべて、醉狂を致し、何とも迷惑に存ずる。いつぞは去りたい〳〵と、存ずるところに、昨日より親里へ歸つてござる程に、この暇の狀を持たせてやつて、去らうと存ずる。まづ太郎冠者を喚び出し、申し付けう。やい〳〵太郎冠者、あるかやい。▲冠者　はあ。▲シテ　居たか。▲冠者　お前に居ります。▲シテ　汝喚び出す事、別の事でない。そちも知る通り、女共がわゝしうて、何とも堪忍ならぬ。それ故、暇をやるほどに、汝はこの狀を持つて行て來い。▲冠者　畏つてござるが、さりながら、あれは常のかみ樣とは、違ひましてござる。私を

方へ行かうまでよ。▲シテそれはまことか。▲おにまことぢや。▲シテ眞實か。▲おに眞實ぢや。

▲シテ謠 朝比奈腹をするかねて〱、熊手、薙鎌、鐵撮棒を持たする中間のなきまゝに、閻魔王に〱、ずつしと持たせて朝比奈は、淨土へとこそ急ぎけれ。

朝比奈云々一曲がかり

かうりやう―虹梁なるべし

門破らぬぞ、急ぎ破れとありしかば、畏つて候と、頓て馬より飛んでおり、ゆらり〳〵と立ち出づる。内には、すは朝比奈こそ、門破れと、大きなるかうりやうに、大釘鎹を、打ちぬき〳〵しけるは、劍の山の如くなり。朝比奈、何程の事のあるべきぞと、門の扉に手をかけ、えいやと押せば、えいやと抱ゆ。えいや〳〵と押したりしは、大地震の如くなり。されども朝比奈、力や勝りけん、閂、扉おし落し、内なる武者三十騎、壓に打たれて死したりしは、そのまゝ鮨をしたるが如くなり。▲おにあゝ、その鮨が、一頰張ほゝばりたいなあ。▲シテその時ならば申さうものを。かゝつしところに、御所の武士に、五十嵐の小文次と名乘つて、朝比奈が鐙をかへさんと、目掛けてかゝる。朝比奈、何程の事のあるべきと思ひ、かの小文次を取つて引き寄せ、鞍の前輪に押し當て、左へはきりゝ、右へはきりゝ、きりゝ〳〵と押し廻してありしよな。（閻魔を引き廻す。）▲おにあゝ最早、和田軍聞きたうない。▲シテもそつと語らう。▲おにいや聞きたうない。▲シテそれなら、淨土への道しるべせい。▲おにこの閻魔王さへまゝにする程に、どつちへなりとも、行きたい

あつたら―惜しい事に云ふ
責めとむない―責めたうもない
荏柄の平太―名は胤長
ふりこほりがつゝぬき―未詳

者ぢや。▲シテ身共を知らぬか。朝比奈の三郎何がしぢや。▲おに何ぢや。朝比奈ぢや。あつたら骨折つた。責めまいものを。さりながら、朝比奈と聞いて責めぬも口惜しい。も一度責めて、地獄へ落してくれうぞ。いかに罪人、急げ〳〵とこそ。（責一段あり。この内にシテ棒にてこかす。）▲シテお責めそい。▲おにいや〳〵、最早責めとむない。やあ、よい事思ひ出した。汝は和田軍の様子知つて居やう。語つて聞かせ。▲シテをゝ、なか〳〵。手にかけて知つて居る。語らう程に、床几持つて來い。▲おに心得た。さあ〳〵、語れ〳〵。（鬼腰掛けて居るを突き退ける。）▲おに扨も閻魔王あたりのきつい奴ぢや。▲シテやい〳〵、これはその時、手柄をした七つ道具ぢや。▲おにさうあるか。生臭い。▲シテ語つて聞かさう。聞け。▲おに語れ〳〵。聞くぞ。▲シテ抑和田軍の起は、荏柄の平太、碓氷峠にて君に奪はれ、一度ならず三度まで、鎌倉を引き渡さる。一門九十三騎、平太縄目の恥を雪がんと、親にて候義盛、白髪頭に甲を戴けば、一門残らず、鎌倉殿の大御所の、南門に押し寄せ、鬨をどつと作る。ふりこほりがつゝぬき、さげ切、この朝比奈が人つぶて、目を驚す所に、義盛使を立て、何とて朝比奈は、

一聲—同上

朝比奈の三郎—名は義秀和田義盛の巴に生ませたる子

たん尺—手形の事をいふ（俚言集覽）

きつくりともせぬ—一寸も身動きせぬ也

に著きにけり。詞 急ぐ程に、これは六道の辻に著いた。この所に待つて居て、罪人が來たらば、地獄へ攻め落しくれう。▲シテ朝比奈一セイ ちからもやう〳〵朝比奈は、冥土へとてこそ急ぎけれ。詞 これは朝比奈の三郎何がし、思はずも無常の風にさそはれ、冥土へ赴く。そろり〳〵と參らう。▲おに はあ人臭い。罪人が來たさうな。さればこそ罪人が來た。いかに罪人、急げ〳〵とこそ。責一段あり。▲シテ やい〳〵、最前より、某が眼の前をちらり〳〵とするは、何者ぢや。▲おに これは地獄の主閻魔大王ぢや。▲シテ 扨も〳〵、痛はしい態かな。娑婆で聞いたは、玉の冠に石の帶、四邊も輝く態と聞いたが、さうもをりないよ。▲おに されば、その古は、金銀ちりばめ、輝くやうな態であつたが、今は人間が賢うて、彌陀の淨土へ、ぞろり〳〵と、ぞろめくにより、地獄のがつし以の外な。さあるによつて、玉の冠、何もかも、たん尺の代にやつて、一色もない。只今汝を責めて、地獄へ責め落してくれうぞ。▲シテ 何程もお責めそい。▲おに いかに罪人、急げ〳〵とこそ。責一段あり。足を杖にてこと、棒をゆすりなどするなり。 やい〳〵、この閻魔大王が、これほどに責めるに、きつくりともせぬは何

次第—此の文句曲がかり
邐齋—托鉢のこと
八宗九宗—律、倶舍、成實、法相、三論、華嚴、天台、眞言を八宗と云ひ之に禪を加へて九宗と云ふ
がつし—餓死也飢饉也
道行—謠がかり



三　朝比奈

二人　シテ　朝比奈　上白水衣、下大口、大刀はき、腰帶、さばき髮、白鉢卷、棒つき、七道具
　　　アド　鬼　鬼の頭巾、ぶあくの面、厚板、下半袴くゝり、杖つき

▲閻魔 次第にて出る、 地獄の主閻魔王〳〵、邐齋にいざや出でうよ。詞 これは地獄の主、閻魔大王です。今程は人間が賢うなつて、八宗九宗に法を分け、彌陀の淨土へ、ぞろり〳〵と、ぞろめくによつて、地獄のがつし以の外な。それ故この閻魔大王が、六道の辻へ出で、罪人が來てあるなら、地獄へ攻め落さうと存じ候。道行ふし 住みなれし地獄の里を立ち出でて〳〵、足に任せて行くほどに、六道の辻

せく。

がまやで隣の牛の子を生みて、思はず知らず牛の子を取る。▲後アド 一段出來た。さりながら、これも同じやうな事ぢや。重ねて何ぞ勝負をしやれ。▲シテ それならば、この度は、角力をとらうと云うてたもれ。▲後アト なう〳〵、角力をとらうと云ふわ。▲初アド いかにもとりませう。▲後アド それならばお出やれ。▲シテ さあ〳〵、行司をめされ。▲後アド 心得た。お手つ。▲二人 いや〳〵〳〵。▲シテ 勝たぞ〳〵。▲初アド なう〳〵、あのやうに、棒でうちまはする角力は、遂に取つた事がござらぬ。棒を下に置いて、とれと云うてたもれ。▲後アド なう〳〵、その棒を下に置いて、おとりやれ。▲シテ いや〳〵、これは、身共の一方の足ぢやによつて、下に置く事はならぬと云やれ。▲後アド なう〳〵、下に置く事はならぬと云ふわ。とかくあの棒に、取りつけばよいほどに、棒をお取りやれ。▲初アド 心得た。それならば、も一番とらうとおいやれ。▲後アド も一番とらうと云はるゝわ。▲シテ いかにもとりませう。さあ〳〵、行司をなされ。▲後アド お手つ。▲初アド やあ〳〵、お手、勝つたぞ〳〵。▲シテ やい〳〵、角力は三番の物ぢや。やるまいぞ〳〵。その足をかや

理分―道理の立つこと

時の牛の子は、こちへおこせと云うてたもれ。▲後アド 心得た。なう〳〵、最前からのは、其方の理分にしてやらう。その代に、牛の子をおこせいと云ふわ。▲初アド 扨も〳〵、云へば云はるゝものかな。さりながら、おぬしも思うて見やれ。牛の子と筍とは、一口には云はれまい。▲後アド いや〳〵、兎角身共が思ふには、この樣に互に云うては埒が明かぬ。この上は何ぞ勝負をして、その勝負によつて、牛の子を遣るものか、遣らぬものかにせう。何とあらう。▲初アド して、勝負には何を致さう。▲後アド されば、何がよからうぞ。▲初アド 身共は歌を詠まう。あれも詠むか、問うてたもれ。▲後アド なう〳〵、これでは埒が明かぬによつて、勝負に歌を詠まうと云ふが、其方も詠むか。▲シテ あの人の歌は、終に承らぬ。それなら、まづあれから詠めと云うて下されい。▲後アド さあ〳〵、急いで詠ましめ。▲初アド かうもござらうか。▲後アド 何との。▲初アド 我が畑へ隣の竹の根をさいて、思はず知らぬ竹の子を取る。▲後アド 一段と出來た。▲初アド あれにも詠めとおしやれ。▲後アド さあ〳〵、急いで詠ましめ。▲シテ かうもござらうか。▲後アド 何との。▲シテ 我

ひかせてやつた
—取らせたこと

しませ。隣の竹の子を取りは致さぬ。身共が畑に生えた筍を取れば、取らすまいと云ふによつての事でをりやる。▲後アド扨は、わごりよが畑に出來たか。▲初アドなかく。▲後アドこれはあれがのが無理ぢや。その通いはう。今の聞かしましたか。▲シテなかく、聞いた。尤も畑へ生えたれども、根をさいたは此方の藪からなれば、竹の子を取らすまいと云ふ事ぢや。▲後アド尤さうなれども、さうは云はれまい。▲シテ云はれまい。お主の頼む事ではない。退かしめ。▲後アドまづ待ちやれ。その通いうて見やう。今のを聞かせられたか。▲初アドそれは無理な事を云ふ。尤も根をさす所は隣からなれども、畑が身共が畑ぢや。取らねばならぬ。それならば、今から根のさゝぬやうにせいと、云うてたもれ。▲後アドなうく、それならば、今から根のさゝぬやうにしてたもれと云はるゝ。▲シテ扨もく、云へば云はるゝものぢや。それならば身共もまた、あれが方から取るものがある。取つてたもれ。▲後アドそれは何ぢや。▲シテいつぞやあれが牛が、身共が厩で子を生んだ。なれども、身共は律義に、親牛も、子も、皆ひかせてやつた。それならば、その

ていとーきつと

の子を取らします。▲初アドやあ、お出やつたよ。何と、この竹の子をなぜに取る。▲シテなか〳〵。▲初アドこれは身共が畑へ生えたによつて取る。わごりよは構ひそ。▲シテ尤も畑はそちのなれども、竹の根のさいたは、こちの藪からぢやによつて、取らする事はならぬ。▲初アドわごりよは無理な事を云ふ。どうでも身共が畑に生えたゆゑ、取らねばならぬ。構やるな。▲シテお主はていと取るか。▲初アドていと云うて何とする。▲シテ目に物見せう。▲初アドそれは誰が。▲シテ身共が。▲初アドそちが物見せ立は、おいてくれい。▲シテ悔むな。▲初アド悔むことはをりない。▲シテおのれは憎い奴の。▲初アドやれ出合へ〳〵、▲後アドやい〳〵、これは何事ぢや〳〵。まづ待ちやれ。これはどうした事ぢやぞ。▲シテやあ、よい所へ御出やつた。まづお主も聞いてたもれ。あれが、身共筍を取るによつて、取らすまいと云へば、是非取らうといふ故に、追ひ廻す。取らぬやうに云うてたもれ。▲後アド尤ぢや。その通いうてやらう。それに待たしめ。なう〳〵わごりよは、なぜに隣の筍を取るぞ。▲初アドやあ、其方はよい所へ出さしました。まづ聞いてくれさ

竹子爭―一名竹の子
根がさいて―根が蔓る也

二　竹子爭

三人　シテアド二人　半袴、上下、腰帶
　　　アド男　長袴、小さ刀さし

▲初アド　罷出でたる者は、この邊に住居致す者でござる。某は畑を數多持つてござるが、當年は、某の畑へ、隣の藪から根がさいて、竹の子がきたと申す。今日は參り、ちと竹の子を取つて參らうと存ずる。まことに世の中に、蒔いた物の生ゆるは尤でござる。蒔かぬ物の生えると云ふ事は、調法なことぢや。參る程にこれぢや。扨も〳〵、見事な竹の子が出來た。まづこれは折りませう。ほん〳〵。扨も〳〵、見事な事や。▲シテ　罷出でたる者は、此邊の者でござる。某藪を數多持つてござるが、當年は、竹の子が、大分出來てござる今日はちと藪へ參り、垣なども結はせ、人の取らぬやうに致さうと存ずる。總じて、何時とても、竹の子時分には、人が取りたがる事でござる。やあ、參る程にこれぢや。扨も〳〵、夥しう出來た。▲初アド　ほん〳〵。▲シテ　これ〳〵、なぜにその竹

ると云ふが、このことであらう。なう〳〵痛い事かな。▲むこ やあ〳〵、今のは何と云うたぞ。も一度云うて聞かしやれ。▲女 何ぢや、も一度云へ。紫塵の懶さは、蕨一手をとると云ふ事ぢや。▲むこ それ〳〵、蕨で思ひ出したわ。蕨餅のことぢや。▲女 何と、蕨餅と仰せらるゝか。それは妾が仕様を知つて居ます。拵へて進ぜうぞ。▲むこ なう〳〵、嬉しや嬉しや。旨い物ぢやわ。よう拵へてたもれ。食ひたうてならぬ。▲女 心得ました。易い事ぢや。こちへござれ〳〵。▲むこ 嬉しい事ぢや。わごりよは立派な人ぢや。生長い事をよう覺えて居やる。今の打擲したは堪忍さしませ。▲女 何が扨、堪忍せいでなりませうか。氣遣召さるな。▲むこ なう〳〵、いとしや〳〵。こちへをりやれ〳〵。（女を負うて這入る也。）

鷄既鳴云々—唐の賈島の詩
かいじやうとき—粥常齋か
かいのすざい—粥の素菜か
氣霽云々—都良香の詩
ところ—野老也薯蕷也
池凍云々—藤原篤茂の詩
こしゆ海云々—未詳
紫塵の云々—紫塵嫩蕨人擧レ手といふ小野篁の詩による

▲女いや〳〵、それは朗詠の詩の事でござらう。▲むこそれ〳〵、それを食はう。▲女これは食はるゝ物でござらぬ。妾が一つ二つ覺えて居ます。云ひませう程に、その内に有るなら有ると仰せられ。▲むこ心得た。云うて聞かしやれ。▲女鷄既鳴忠臣待レ旦。あしたとは、かいじやう時、若しかいのすざい、鷄冠菜ばしまゐつたか。▲むこいや〳〵、その樣な物でもなかつたわ。▲女氣霽風梳ニ新柳髮。氷消波洗ニ舊苔鬚。ひげにて思ひ出した。若しところばしまゐつたか。▲むこいや〳〵、ところは己も知つて居るが、それでもない。▲女池凍東頭風度解。窓梅北面雪封寒。梅にて思ひ出した。若し梅干ばしまゐつたか。▲むこなう〳〵、酸やの〳〵。聞くさへ酸い。それでもをりやらぬ。▲女こしゆ海の底には、なつとうの沙を敷くとは、納豆を肴にして、酒ばしくらうたか。▲むこ酒ばしくらうたかとは、藁で作つても男ぢやに、くらうたかとは、どうした事ぢや。おのれ聽かぬぞ。ぶつておいたがよい。あゝ腹立ちや。▲女なう〳〵、はらだちや〳〵。したゝか妾が手を打つた。扨も痛や〳〵。まことに紫塵の懶さは、蕨一手をと

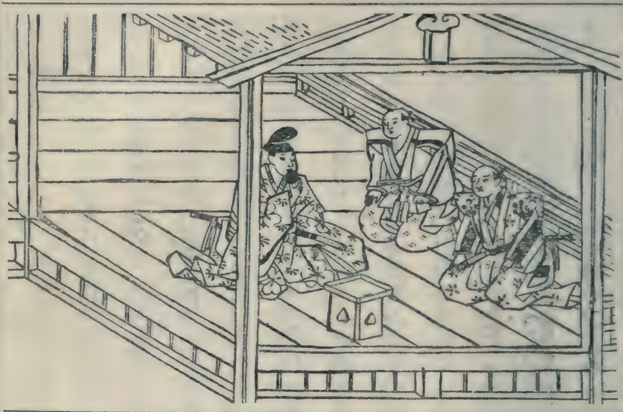
朗詠—藤原公任撰和漢朗詠集なり。

をなあ—女也娘即ちこの聟の妻

でござる。これは何と申す物でござる。▲しうと これは蕨餅と申すものでござるが、延喜の帝の御寵愛なされたによつて、官を下されて、蕨餅を岡大夫とも申します。すなはち朗詠の詩にも載つてござる。▲むこ 扨も〱、旨い物でござる。も一つ食べませう。▲しうと やい〱太郎冠者、も一つ進ぜ。▲冠者 いや、最早ござりませぬ。▲しうと はて扨、残多ござる。最早無いと申す。お歸りなされたら、この仕様を、をなあが存じて居ます。拵へさしてまゐれ。▲シテ 私はない物は食べませぬ。それなら歸りまして、宿で食べませう。最早かう參ります。▲しうと ござるか。何の御馳走もなうて、残多ござる。さらばさらば〱。ようござつた。▲むこ はあ、なう〱嬉しや〱。まんまと聟入すました。道行 まづ急いで歸つて、今の餅を食べませう。はやこれぢや。なう〱をなあ、今歸つたわ。▲女 やあ、はや歸らせられたか。早うござつた。▲むこ されば〱、舅殿も機嫌がようて、馳走にあうた。それにつき、何やら珍しい物を振舞はれたわ。▲女 それは何でござつた。▲むこ はあ、何やらであつたが。藤太夫とやら云はれたが、老子にも載つてあると云はれた。

いとしがらるゝ
─可愛がらるゝ也

方へ申せ。▲冠者 畏つてござる。二人下に居ると聟いづる。▲むこ 舅にいとしがらるゝ花聟でござる。今日は最上吉日でござるほどに、聟入を致さうと存ずる。まづ急いで參らう。道行 まことに聟入といふは晴なもので、人が見たがると申す。定めて、垣からも、窓からも、目ばかりでござらう。やあ、參る程に、これぢや。まづ案内を申さう。ものも。案内も。▲冠者 表に案内がある。案内とはどなたでござるぞ。▲むこ これは、これの花聟が參つたと申せ。▲冠者 畏つてござる。申し〳〵、聟殿の御出でござる。▲しうと 此方へ通らせられと申せ。▲冠者 心得ました。申し〳〵、此方へお通りなされませ。▲むこ 心得た。無案内にござる。▲しうと やあ、好うこそ御出なされた。待ちかねました。▲むこ されば〳〵、早々參りませう所に、何かと致して、遲なはりました。その段は、これのお娘子にめんじて、御免なされ。▲しうと いや〳〵、ちつとも苦しうござらぬ。太郎冠者、今の言ひ付けて置いた物を出せ。▲冠者 畏つてござる。三方に、蕨餅載せ出す。聟の前に置くなり。餅は黑き絹切にて丸めぬひ、のせおくなり。▲しうと さあ〳〵、これを參れ。▲むこ これは旨さうな物でござる。さらば食べませう。餅を取り食ふ態する。懷中へ入るゝ也。扨も〳〵、旨い物



續狂言記 卷之三

一　岡大夫

四人

シテ 聟　素襖、折烏帽子、小さ刀
をんな　箔小袖、ゆばうし
舅　長袴、小さ刀
太郎冠者　半袴、上下、腰帯

▲しうと 罷出でたる者は、この邊の者でござる。今日は最上吉日でござるによつて、聟殿の御出なされうとある。まづ太郎冠者を喚び出し、申し付けう。やい〳〵、太郎冠者あるか。▲冠者 はあ、御前に居ります。▲しうと 汝を喚び出すこと、別の事でない。今日は最上吉日なれば、聟殿の御出なさる筈ぢや程に、きれいに掃除をせい。御出なら此

がつきめ—餓鬼めと罵る也

この綱を引いて肩にかけたればうつたが、はあ、扨も〱、よう拵へたものぢや。この綱を引けば上る。下げると下る。ばつたり〱。さても〱可笑しい事かな。百姓は賢い者ぢや。これなれば氣遣ない。さらばも一度責められて見やう。行けど行かれぬ死出の山、行かんとすれば引止む。止まれんば、（杖にてちやうど打つ。）▲瓜主 面とり、がつきめ、やるまいぞ〱。▲瓜盗 あら悲しや。免させられ〱。

この樣なことぢや―骨惜しみをすると也

如何に罪人―責の文句

死出の山―冥途にありといふ山

たによつて、見舞はしたれども、人形ばかり立てて置いて、垣もその儘で戻つたものぢやあらう。總じて下々は、どれもこの樣なことぢや。殊にこの案山子は、ゆうべよりは猶よう人に似た。（こゝにて仕樣あり。下に居て、うそふきの面へ指ざしなどして哭うて、）その儘人ぢや。某をきつと見て居る。いや、思ひ出した。いつも盆になれば、若い衆が踊をせらるゝ。當年は中踊に、鬼が責める所をせうと云はれた。幸のこと、この人形をば罪人にして、某が鬼になつて、責めて見やう。わい〳〵。よい杖もある。急いで責めて見やう。如何に罪人、地獄遠きにあらず、極樂遙なり。急げとこそ。（かけりせめて）まづ鬼の責はこれが好からう。人形ぢやによつて、責力が無い。さりながら、これも鬮であらう。某が罪人に取當る事もあらう。この人形を鬼にして、身共が罪人になつて責められて見やう。幸よき引綱がある。あら悲しや。これほど參り候に、さのみな御責め候ひそ。行けど行かれぬ死出の山、行かんとすれば引止む。止まれんば、杖でちやうど打つ。▲瓜盗　これは如何なこと。何者やら飛礫を打つた。あたりに人は無いが、不思議な事ぢや。何者が打つたぞ知らぬ。合點が行かぬ。今

れば、扨も好い瓜ぢや、これはそちが手作かと仰せられたによつて、なか〳〵、私の手作でござると申したれば、扨も好い瓜ぢや。近頃無心なれども、客があるほどに、瓜をま四つ五つくれいと仰せらるゝ。何とも返事の致しやうがなうて、畏つてござると申した。某の手作でござると申したによつて、今更なりますまいとも申されぬ。是非に及ばぬ。今夜あれへ行て、瓜を取つて參らうと存ずる。この樣に又參らうとは知らいで、瓜畠を散々に荒して置いた。瓜主が見舞はぬ事はあるまい。見舞うたらば腹を立てて、今夜は番をして居る事もあらう。何とやら胸騷がして氣遣な。この畠ぢや。いや、ゆうべ垣を破つて置いたが、そのまゝある。定めて瓜主が見舞はなんだものであらう。見舞うたらば、この樣にしては置くまい。さればこそ、挘つておいた瓜蔓が、その儘である。嬉しい事ぢや。そろ〳〵人形の側へ寄り、見つけて大きに肝潰す。これは如何な事。不思議な事ぢや。ゆうべ人形をうちこかいて置いたが、又立てて置いた。これは思へば、瓜主が見舞はぬではない。合點がいかぬ。はあ、合點した。定めて内の者の業であらう。主が畠を見舞うて來いと云ひ付け

ろしにくらはれ—諺などなるべし未詳

いくせの事—色色の事

うせた—來たの意

お目をかけらるる方—自分を愛せらるる人也

（暗き時物を見る態して、人形と見付けて、）これは如何なこと。うしにくらはれ、さても〳〵よい肝を潰いた。瓜主かと思うて、いくせの事を思ひ、迷惑した。この様にようも〳〵、上手が作つたものぢや。その儘人のやうな。獸が見たらば肝を潰いて、あたりへは寄るまい。此奴故思ひも寄らぬ肝を潰いた。重ねて來る事ではなし、うちこかいて退けう。腹の立つ事ぢや。瓜蔓も引き挘つて退けう。よい仕合。急いで戻らう。（太鼓の側へ入る。）▲瓜主 昨日瓜畠へ參つた。まだ臍落が致さなんだ。今日は大方臍落がござらう。取つて參らう。内の者を遣れば、瓜を盗み居るによつて、某の毎日參らねばならぬ。これは如何な事。散々に畠を荒いておいた。これは扨、瓜蔓も引き挘つて置き居つた。その上人形も打ち倒いておきをつた。これはいかさま、獸の業ではない。瓜盗人め、ゆうべうせたものであらう。扨も〳〵腹の立つ事ぢや。今夜は某が案山子になつて捕らへう。定めてゆうべの味を得て、又今夜も取りに參らぬことはあるまい。（右の人形の様に烏帽子を著、面を被り、左に綱、右に竹の杖、床几に腰をかけ居る。）▲瓜盗 他所へ物を遣るとも、後前の分別して遣らう事ぢや。盗んだ瓜を、さるお目をかけらるゝ方へ進上致した

轉びをうつ—畠の上を轉びまはる也

眞平御免されませ—案山子を見て眞の人と思ふ也

邊にあつたが、どの畠ぢや知らぬ。これぢや。まづ桓杌を拔かう。（垣を二三本拔く態をして、腰かゞめて畠へはいる。）さあ畠へは這入つたが、番の者は無いか知らぬ。有るならば聲を立てうが、無いものぢや。晝見たれば瓜がいかい事見えたが、夜ぢやによつて見えぬ。これが瓜さうな。瓜かと思うたれば枯葉ぢや。（あそこ此所を捜して見て、）瓜にあたらぬ。この樣な事では、瓜を取る事はなるまい。何としたものであらう。思ひ出した。夜瓜を取るには、轉びをうつて取るものぢやと聞いた。さらばこれから轉びをうつて見やう。さればこそ、枕のやうにあたつた。（枕の時寐て居てわらふ。—つ潰れたわといふ。）扨も〳〵好い匂ぢや。此所にあるわ。後の方にもあたつた。この樣にして取らば、如何ほどなりとも取られう。（此所にて地唄ひの方にかゞせあり。その側へ轉びかゝる。人形を見て肝を潰す。）眞平御免されませ。私は盗人ではござりませぬ。こなたの畠が、餘り見事に瓜が生りましたと承りまして、見物に參りました。命の義を御免されませ。瓜二つ三つ取りましてござる。皆返しませう。御免なつて下されませ。申し、物を仰しやらねば、何とも迷惑でござる。重ねては最早參りますまい程に、平にゆるさせられて、返させられて下されませや。申し、なう。（手をあげて、）

臍落―蒂の落ちたるなり

人形―案山子なり

十　瓜盗人

二人　シテ盗人　半袴、上下、腰帯
　　　アド男　出立同前なり

▲瓜主罷出でたる者は、この邊の耕作人でござる。當年は瓜を作りてござるが、身共が仕合で、殊の外よう出來てござる。今日は畑へ見舞うて、臍落の致したを、ちと取つて參らうと存ずる。まことにこの邊方々に瓜を作りたれども、某がやうなはござらぬ。畑へは毎日見舞はねばならぬ。これが身共が畑ぢや。やれ〳〵嬉しや。夥しう生つた。思ひ出した。いつも畑へ獸がついて瓜を荒す。人形を作りおかう。人形を作る。一段好い。明日見舞うて臍落を取らう。太鼓座へ入る。▲瓜盗これはこの邊に住居致す者でござる。今日用所ござつて、山一つ彼方へ參つてござるが、道に見事な瓜が生つてあつた。私にお目をかけらるるお方に、瓜好な人がござるほどに、今夜あれへ參つて、四つ五つ取つて參らうと存ずる。方々に瓜畠が數多ござれども、今日見て置いたやうな、見事な瓜はござらぬ。この

はうちやう―鮑鳥(五位鷺)に庖丁を言掛く

今日はいかい御馳走でござる、殊にお茶と申し、御酒と申し、忝う畏り候、重ねては鯉をこそ持つて參らずとも、鮹なりとも、鮠にても、持つて參らう、さらば〳〵と、おしやるほど饗いて戻したいが、わごりよが鯉は獺が食うたとおしやる。某が鱸をはうちやうが食うたといふ。今の物語を食うた心をして、とつととお歸りそへ。▲をひ　面目もござらぬ。▲をぢ　ようおぢやつた。

猫の背をたてた如くに、立てないて振舞はう。▲をひ それは好うござりませう。▲をぢ 其處で其方が褒めてくれたがよい。▲をひ 何と褒めましたが好うござるぞ。▲をぢ 最前鱸を料理なされたお手許、近頃見事でござると存じましたれば、殊に御茶の湯の御手前、見事さうにござると、おりしきつて、褒めてくれたが好い。▲をひ なか〳〵。さやうに申して褒めませう。▲をぢ 總じて人は、乘せらるゝといへども、褒めらるゝは嬉しいものぢや。そこで某がふはと乘つて、いや、わごりよは、言はれぬ辭儀を云ふ人ぢや、親子の心安さは、この樣な時ぢや、ゆるりと居て、二服も三服もお飲みそいと申さうが、如何に其方が茶好でも、極を二服とえ飲むまいぞ。▲をひ 思ひも寄らぬ事でござる。▲をぢ 手前をさつと仕舞はうず。後にはなるまい。とてものことに、暇乞の樣子を教やう。お立ちやれ。▲をひ 畏つてござる。▲をぢ 最前の酒は、五盃と七盃と十二盃よ。▲をひ なか〳〵、十二盃でござる。▲をぢ 十二盃飮うだらば、如何にわごりよは、強いと云うたりとも、舌元も立つまいし、足元も定まるまい。▲をひ さやうでござらう。▲をぢ その時、科もない扇をひねりまはして、

ねらうて―飲むつもりになつて

とう―未詳

極―上品

今度は右を以て、七盃飲うでくれさしませ。▲をひ最前の五盃さへ迷惑に存じましたに、況やその大盃で、存じも寄らぬことでござる。御免なされて下されませ。▲をぢいや、わごりよはよう上戸を知つて、強ひる事ぢやに、是非ともに飲うでくれさしませ。▲をひそれほどに、強ひさせられますするならば、何卒ねらうて見ませうまで。▲をぢ狙うて見やう。▲をひなか〳〵。▲をぢそれは嬉しい。扨小盃を以て、ちよろ〳〵と廻さうか。さつと取らうか。▲をひいや、もう早うお取りなされませ。▲をぢそれならば、さつと取らうず。扨酒の上に、濃茶は好い物ではないか。▲をひなか〳〵、一段好いものでござる。▲をぢ某は宇治邊に知音を持つたが、今度このとうを營むとあつて、極を三袋くれた。折節一袋は、挽かせて置いた。其方が知る通り、身ども茶の湯に好いたによつて、奥の間に湯がりんりんと沸りすまいてある。これへ其方を同道してお茶を申さう。▲をひそれは忝うござります。▲をぢこれも其方にお立てそいと申さうが、茶は亭主の役ぢやによつて、某が立つるであらう。湯七分に泡八分、むく〳〵、やは〳〵、ぼら〳〵と、昔樣に中高に、

かいしき―南天の葉を敷くこと

香頭―吸物などにあしらふ吸口

これをさつと、かき韲にして振舞はう。魚の身の、厚い所を薄う見ゆるやうに作るが、庖丁人の腕でおぢやる。いかにも、かつつくばうて、刀ばやに、すはり〳〵、すは〳〵〳〵と作つて、生姜酢をもつて、きつ〳〵と韲へ、深草土器に、南天燭のかいしきを敷き、ちよぼ〳〵と盛うて、其方にも振舞はうず。身共も相伴せうが、何とこれは好い肴ではあるまいか。▲をひ仰せの通、これは一段と好うござりませう。▲をぢそれならばこれを肴にして、左をもつて五盃飲うでくれさしませ。▲をひ尤も肴は好うござりますれども、それはなりますまい程に、御許されて下されませ。▲をぢいや、酒と云ふ物は、強ひねば飲まれぬ物ぢや。是非とも飲うでくれさしませ。▲をひそれ程に、仰せらるゝ程に、下されても見ませうか。▲をぢ飲まう。▲をひなか〳〵。▲をぢ近頃満足した。扨勝手よりも、煎物こそ出來たれとて、柚の香頭に、貝杓子おつ取り添へ、持つて出やう。これをも好い所をよそうて、其方へも申さうず。某も相伴せうが、何とこれは、五盃目の盃には好うはあるまいか。▲をひないことでござらう。▲をぢそれ程に思ふならば、

かまひて―構へて也必ず也
手ねばな者―手のろき者
よしにあまり―十分氣取っての義歟

からず。御内の親は庖丁人、庖丁人のその子として、鱸にうちみ食はうなどというて、立居の人に笑はれ給ふな。かまひて無い事でをりやるぞ。▲をひ　扨は無い事でござりまするか。▲をぢ　なか〳〵。最前の鱸を、手ねばな者に云ひ付けたれば、暇がいる。やい〳〵、今の鱸を洗うたらば、早う持つて來いと云へ。扨最前の鱸をまんまと洗ひすまいて、切目尋常なる俎に、備前庖丁、青木の箸、紙一重おつ取り添へ、しつけ知つたる若者が、二人して持つて出やう。その時其方にお切りそへと申さう。其所でわごりよが云はうには、いや、伯父御の庖丁久しく見參らせぬ程に、一手遊ばされい、見物仕りたいと云はでは叶ふまい。▲をひ　なか〳〵。さやうに申しませう。▲をぢ　その時某がよしにあまり、板際にする〳〵と立ち寄り、箸、刀、おつ取つて、紙を三つに切り、二つを下へおしおろし、一つを俎へどうどおき、禮式の水こそげ、さつ〳〵と三刀する。するまゝに、一の刀にて魚頭をつき、二の刀にて上身をおろし、おろしもあへず、魚頭、俎頭にどうとおき、中打ちやう〳〵と三つに切つて、いざこれを煎物にして申さう。幸うはみ、したみがある。

身の仔細を知らぬと見えた。今の鱸を洗ふ内に、打身の仔細を語つて聞かせう。▲をひ それは忝うござりませう。▲をぢ 抑打身と云ふ事、寛和元年、その頃は花山の院の御代なりしに、四季折々の御遊、殊に越え、御狩に好かせ給ふにより、政頼に鷹をすゑさせ、國々へ御下向ある。折節遠江國、橋本の長が宿所に著き給ふ。長は出で合ひ、三獻の土器据ゑたりし時、板に鯉を出す。その時庖丁人は、四官の大夫忠政なり。忠政は三郎近き釣殿に出でて畏る。それ忠政とありしかば、忠政何とか思ひけん、板なる鯉をば切らずして、簀子の竹を一間外し、下なる魚を挾んで上げ、みさごの鰭を拂ひおろし、魚を離せば魚喜び、石菖の蔭に遊び隱れぬ。扨その後板引き寄せ、ずつぱと切つては、しつととうちつけ、すつぱと切つては、しつととうちつけ、竝居たまへる上北面、下北面、納言、宰相、檢非違使、黑袴の徒黨に至るまで、三刀づつうちつけ參らせしかば、忠政が只今の庖丁神妙なり、勳功は乞ふによるべしと、御感なりてより此方、打身と云ふ事始まりたり。されば打身は、海のものにては鯛、川のものにては鯉ならではあるべ

合うた事—叶へた事
一こん—魚一尾のこと
内證の者—内輪の者
打身—刺身

幸のこと、まづかう通らしませ。▲をひ 左様にござらば通りませう。▲をぢ なか〳〵。まづそれにゆるりと居さしませ。▲をひ 畏つてござる。▲をぢ 扨も〳〵、憎い奴である。あれは私の甥でござるが、何を云うても、百に一つも合うた事がござらぬ。今度も、鯉は定めて求めますまいが、某が何も知らぬと思うて、今の樣なことを申す。憎い奴ぢや。身共も、ちよつぽりと口で饗いて戻さう。やい〳〵、最前の鱸をどれなりとも一こん洗へと云へ。えい。いやなう、わごりよは慇懃にせずとも、平にゆるりと居さしめ。▲をひ いや、苦しうござりませぬ。▲をぢ 其方の仕合に、さる方より見事な鱸を三こん貰うた。其方に振舞はうと思うて、一こん洗へと云ひ付けた。とてもの事に、何なりとも料理を好ましめ。▲をひ いや、私は内證の者でござる。さやうの肴をば給はせられで、お客へ使はせられませ。▲をぢ いや、客も大方饗いて暇になつた。氣遣をせずとも料理を好ましめ。▲をひ さやうにござらば、打身で下されませう。▲をぢ いや、鱸でをりやるわいの。▲をひ 鱸でも打身が好うござる。▲をぢ 鱸でも打身が好い。▲をひ なか〳〵。▲をぢ 扨はわごりよは、打

淀一番の鯉―淀は鯉の名產地なり

片身さかうて―片身割きての意か

律義―嚴重正直などの意

肴物を下されて―方々より也

わざとさへ―わざわざさへ

内を乞はう。常の如く只今參りまする事、別の儀でもござらぬ。先日鯉の事を仰せ下されてござるによつて、方々才覺致して、淀一番の鯉を求めまして、とてもの事に生鯉に致いて、持つて參らうと存じまして、藤蔓にて繋ぎまして、淀の橋杭の二番目の杭に繋いで置いてござる。今日これへ參りさまに、そろり／＼と引き上げてござるが、何とやらん手當が輕うござつたによつて、不思議な事ぢや、鯉は水離れが大事ぢやと存じて、きつと引き上げて見ましてござれば、大事の事がござりまするは、片身さかうて、獺が食べてござるによつて、御祝儀に使はせらるゝに、疵のついた物はいらぬ事ぢやと存じて、持つて參りませなんだ。自然鯉をあてになされてもござらうかと存じまして、その申譯に參りました。▲をぢ 扨々わごりよは、遠路の所を來るに及ばぬに、律義な事ぢや。さりながら、肴物を下されて、客衆も大方もてないたによつて、鯉がなうても苦しうない。まづかう通らしませ。一つ饗いてやらうぞ。▲をひ それは忝うござりまする。さりながら、お忙しうもござらうず。まづお暇申しませう。▲をぢ わざとさへ呼びにやらう所ぢや。

くわんどなり—官途成りの義か出仕若しくは昇進などの祝事ならん



九　鱸庖丁

二人　シテ男　長袴、小さ刀さし
　　　アド男　半袴、上下、腰帯

▲をひ　これは淀邊に住居致す者でござる。某は都に伯父を持つてござるが、この間くわんどなりをするほどに、鯉をくれいと云うて狀をおこされてござる。何かと致して、今日まで鯉を求めませぬ。定めて鯉を當にしてござる事もあらう。何卒申譯を仕らう。さい〳〵用を申さるれども、何を一色調へた事もござらぬほどに、定めてこの度は腹をお立ちやる事があらう。さりながら、面白可笑しう申譯を仕らう。参るほどにこれぢや。まづ案

れまで後を追うてうせたなあ。見ればなか〳〵腹が立つ。打割つたがよい。（こゝにて鏡、舞臺の板へ投げて割る態。衣を下に投げて、割れたといふなり。）▲シテ汝は憎い奴ぢや。はる〴〵都より求めて來た物を、その如くにうち割り居つた。思へば憎い奴ぢや。目に物を見せう。▲女房おぬしが分では、妾に物を見する事はなるまい。▲シテ何のならぬと云ふ事があるものか。（こゝにて扇にて二つ三つ打つ。女常の通り腹を立てる。）▲女房これは如何なこと。思ふまゝ打擲をした。堪忍をせぬ。（シテに取つく。色々に組合うて、男を打倒して、）今こそおれが本望ぢや。（といふて樂屋へ入る。）▲シテ憎い奴。やるまいぞ〳〵。

この狂言殊の外むづかしきなり。尤もこれも四十よりうちにては、大方せぬ狂言なり。よくよく分別してすべし。女惡しければ不出來おほし。右出立、つき素袍、下、狂言袴、裾括り、寂びたる小さ刀よし

この鏡といふものを我が前に立てて見れば、我が形の善惡が目の前に映りて見ゆる。さるによつて、或は女の顔に白粉を塗り、紅鐵漿をつけて形を飾る。わごりよ達は、見た事もあるまいと思うて、求めて來た。これ見さしませ。▲女房 それは嬉しうござる。その樣な重寶な物は、遂に聞いたこともござらぬ。まづこれへ見せさせられい。こゝにて女鏡を見る。これは如何なこと。其方は都へ上つて長々の在京のうち、女を置いて慰まれたと見えた。▲シテ それはなぜに。▲女房 いや、さうあればこそ、この鏡とやらん云ふ物に、女の影がある。これは其方の都で置かれた女ぢやと見えたが、その執心が此所までついて來て、あると見えた。なう腹立や。彼奴を何とせう知らぬ。▲シテ 言語道斷の事を云ふ奴ぢや。その女の影は、おのれが影が見ゆる。それを知らぬか。これを見よ。身共が對へば某が影が映る。扇を映せば扇の影、これほど目の前に映す物の影が見ゆる。それが何が腹の立つことぢや。▲女房 いや〳〵さやうではない。あれ見さしませ。妾が腹を立つれば、彼の女奴が怖しい面をして、妾に向ひ居る。おのれ何としてくれう。よう妾が男を寝取つて、こ

これの人―こちの人などに同じく我が夫のこと

息災―無事

▲女房これの人の聲がするが、お戻りやつたかしらぬ。▲シテ女ども、今下つたわ。▲シテやれ〳〵嬉しや。この間は久しく便もなかつたによつて、殊の外氣遣をしたが、まづ息災で下らせられて、めでたうござる。▲シテなか〳〵。思の外埒が明きかねて、長々在京した。さりながら、内々の訴訟は、思のまゝに叶うて下つたほどに、喜ばしませ。▲女房それはめでたい事でござる。如何ほど暇がいつても、訴訟の事が叶はねば迷惑ぢやが、思の儘に叶うて、お下りでめでたうござる。▲シテそれについて、適都へ上つた事ぢや程に、何ぞ土産物を調へて下りたう思うたれども、長々の在京なれば、さやうの物をも調ふる事もならなんだ。▲女房何が、土産がいりませうぞ。まづこなたの息災で、訴訟が思のまゝ叶ひ、これほどの土産がござらうか。▲シテさりながら、其方には珍らしき物を求めて下つてをりやる。▲女房それは嬉しい。何と云ふ物でござるぞ。▲シテその事ぢや。鏡と云ふ物ぢやが、これは昔は神々の寶物で、人間の持つ物ではなかつたけれども、今は人間の嗜道具となつて、都では如何樣の賤しき者までもこれを持つ。その仔細は、まづ

第一の重寶—前に對して第二とあるべきか

いて、この世の善惡について心を盡さんより、來世の道こそ大事とて、頓て佛道に入りて、後世菩提を思ひよつて、後の世を願ひ、生死無常を知らするも、鏡の威德なり。或時は鏡に向ひ、鬚を剃り鬢を撫で、衣紋引繕ひ、見苦しき有樣を、われと知らすること、これ第一の重寶なり。又女は鏡に對ひ、顏に白粉を塗り、紅鐵漿をつけて、われと形を飾ること、高も賤しきも遍くすることなり。扨又わが心に嬉しき事あつて、罪も報もなく笑ふ處は、我が身ながら扨々賑かとも、うつゝなき。（此所にて鏡に對ひ笑ふべし）又心に腹の立つ事あつて、氣色を變へ、われと炎を燃やす。（此所にて怒る顏する）扨も〳〵怖しい事かな。我が身でさへ、すさまじく思ふ。かやうのことを思へば、人間は少々腹の立つこともあるとまゝよ、堪忍をせうことぢや。人に雜言を云へば、人も腹を立て、われも腹を立つ。慳貪邪見にして、佛になり難しとあれば、假初にも惡き心を持つ筈ではない。まことに鏡の德によつて、我が身の善惡を知ること、これ第一の重寶なり。急ぐ程に、これははや國許に著いた。女どもを喚び出さう。女どもは内に居るか。某が上方より今戻つた。早う出さしめ。

倭姫―原本「大和姫」に作る

つ事はおいて、見た事もござない。この度、某も在京のうちに、この鏡の仔細を懇に承りてござる。そのかみ、人皇十一代垂仁天皇の皇女、倭姫の尊、天照大神より御神鏡を頂き、日本を囘國あつて、われこの所をば、五十六億七千萬歳まで、國土安穩に治め給はうずるとあつて、そのしるしに、御神鏡を收め給ひ、代々御門にござあり。三種の神器のうち、内侍所と申すは、すなはちその時の鏡の由を申さるによつて、昔は御神物と申して、神々の御寶物として、人間などの持つ物ではなかつたと云ふが、今程は人間の重寶となり、上々は申すに及ばず、われ等如きの者まで、これをたしなむ事でござる。まことに珍しき物なれば、女どもに取らせうと存じて、漸う求めてござる。只假初の樣なれども、鏡の德によつて、わが身の善惡を知る事もある。その仔細は、まづ世上の有樣を見るに、高きも賤しきも、この世の利欲名聞に溺れて、死の近づいたも知らず、我が身の賤しきをも忘れ、老い衰へたるを知らず、徒に月日を送る。何となく鏡を見れば、はや何時となく衰へ、額に四海の波をたて、白髮たる有樣を見て、心ある人は打驚

土産の鏡―謠曲松山鏡參照

首尾致し―成功し

八　土産の鏡

二人　シテ男　つぎ素襖、下脚絆くゝり、腰帶
　　　女　　　箔小袖、ゆばうし

▲シテ　これは越後の國、松の山家の者でござる。某訴訟の事有つて、長々在京致いてござる。この度訴訟相叶ひ、滿足仕つた。急いで國へ罷下り、女子どもに喜ばせうと存ずる。まことに國許を出づる時は、都へさへ上りたらば、別義はあるまい、五日か十日の內には、埒もあかうやうにも存じてござるが、思の外逗留致してござる。さりながら、內々私の何とぞと存じたる事も首尾致し、この樣な嬉しい事はない。それについて、國許へ、何ぞ土產を調へて、一門の者共へ取らせたう存じたれども、長々の在京なれば、さやうの事も思ひながら、なりませなんだ。さりながら女どもの方へは、珍しき物を調へてござる。すなはちこの鏡と申す物でござる。これは大事の物で、昔はたやすく人間の持つ物では無かつたと申す。さやうにあればこそ、われ等の國許などでは、鏡と申す物を、持

弓矢八幡—誓言
したゝか—充分

事でござる。▲アド こりや此所に居るが見えぬか。▲シテ かつて見えませなんだ。▲アド 某もその見えぬ處が見たいほどに、そち被て見せい。▲シテ 最前も申す如く、主を思ふものでござれば、某の被ました分では見えまする。▲アド そちに遣る分にせうほどに、被て見せい。▲シテ いや／＼それでも見えます。とかくお藏へ納めませう。▲アド それならば、そちに最早遣るほどに、被て見せい。▲シテ それは定でござるか。▲アド なか／＼取らする。▲シテ いや／＼、見えぬ時は、こちへおこせいと仰せられませう。とかくお藏へ納めませう。▲アド 是非とも取らする。▲シテ 眞實。▲アド 弓矢八幡取らする。▲シテ それならば被て見ませう。▲アド 早う被て見い。▲シテ さあ被ましたは。▲アド おのれ、そりや見ゆるわ。▲シテ 見えは致すまい。▲アド 此所が見ゆるわ。▲シテ いや見えますまい。▲アド 扨はおのれは、都でしたゝか拔かれてうせ居つた。憎い奴の。やるまいぞ／＼。▲シテ あゝ悲しや、許させられ／＼。▲アド やるまいぞ。やるまいぞ／＼。

その樣に南無寶と云ふは、仔細がある事か、▲シテ 如何にも仔細がござる。語つて聞かしませう。▲アド 急いで語れ。▲シテ 心得ました。昔鎭西の八郎爲朝が、鬼が島へお出なされ、鬼共が取つて服せうと申した。いや〳〵、むざとは服せられまい。勝負をせうとあつて、勝負をなされたれば、悉くお勝あり、隱簑に隱笠、打出の小槌を取つて歸らせられた。乃ち隱蓑と打出の小槌は、方々の大名衆に買ひ取らせられた。又この隱笠は、賣るまいと申したを、何かと申して、漸求めて參りました。▲アド これが聞き及うだ隱笠か。▲シテ なか〳〵、さやうでござる。▲アド 扨又奇特は、どうした事ぢや。▲シテ されば、此笠を被ますれば、その被たものの姿が見えぬが不思議でござる。▲アド それならば被て見よ。▲シテ そこが寶でござる。これは主を思ふ物でござるによつて、私が被ますれば見えまする。こなた被てごらうぜ。▲アド それならこれへおこせ。汝は、見えぬか見ゆるか、それで見よ。▲シテ 畏つてござる。▲アド さあ太郎冠者、見えぬか。▲シテ いや見えませぬ。これは如何な事、都の奴が騙し居つた。▲アド 何と、見えぬが定か。▲シテ いかなこと。見えぬ

これは如何な事ー獨言也實際見ゆるを以て也

田舎の〳〵姿の見えぬまねして探す體也

▲シテ 餘り高い。負けて下され。▲スッパ 厭ならば置きやれ。▲シテ それならば買ひませう。扨奇特は、どうした事でござるぞ。▲スッパ 奇特は、それを被れば、その者の姿が見えぬわ。▲シテ それは重寶なる事でござる。それならば被てごらうぜられ。▲スッパ いや〳〵、そこが寶ぢやわ。これは主を思ふ故に、主が被れば見えぬ。又身共が被ると、なか〳〵見える。▲シテ それならば被て見ませう。▲スッパ 早う被やれ。▲シテ さあ被ました。▲スッパ 田舎の〳〵。▲シテ 此所に居ます。▲スッパ 何所に居やるぞ。▲シテ これ此所に居ます。▲スッパ はれやれ、被逃しやるかと思うた。▲シテ それならば、代物は三條の大黒屋で渡しませう。▲スッパ いかにも明日あれで受取らう。▲シテ さらば〳〵。▲スッパ ようをりやつた。▲シテ はあ。なう〳〵嬉しや〳〵、重疊の寶を求めてござる。まづ頼うだ人に見せませう。これぢや。ござりますか。▲アド えい、太郎冠者が戻つたさうな。歸つたか〳〵。骨折や骨折や。寶を見せい。▲シテ 心得ました。これでござります。▲アド この様な笠はいらぬ。まことの寶を見せい。▲シテ 扨はこなたも御存じないと見えた。南無寶〳〵。▲アド やい〳〵、

南無寶―寶を大切さうに尊び云ふ也

服せう―食べること

態ぢやが、何が欲しいぞ。▲シテ身共は、寶が求めたうござる。▲スッパして、その寶を知つて居やるか。▲シテ都人とも存ぜぬ。それを存じて居れば、それから〳〵參れども、知らぬによつてかやうに申します。▲スッパいかにも誤つた。賣つてやらう。それに待ちやれ。▲シテ心得ました。▲スッパこれ〳〵、これが寶ぢや。▲シテ此様な笠はいりませぬ。寶をくだされ。▲スッパ南無寶〳〵。▲シテその様に仰せらるゝには、仔細がござるか。▲スッパいかにも仔細がある。語つて聞かしませう。よう聞きやれ。▲シテ畏つてござる。▲スッパ昔鎭西の八郎爲朝と申す御方が、鬼が島へござつたれば、鬼どもが取つて服せうと云うた。いや〳〵、むざとは服せられまい。何にても勝負をせうと仰せられて、色々勝負にお勝あり、乃ち鬼が島で取つてござつた隱笠でをりやる。これにつき添うた隱蓑、打出の小槌は、方々の大名衆へ買ひ取らせられた、その殘でをりやる。其方が欲しさうなによつて、賣つて遣らうと云ふ事ぢや。▲シテ扨は聞き及うだ隱笠でござるか。▲スッパなかなか、これぢや。▲シテそれならば求めませうが、代物は何程ぞ。▲スッパ萬疋でをりやる。

さら／＼更に也少しも也

の見ゆる寶を競うとあるが、藏の内に寶があるか。▲シテいや存じませぬ。▲アドそれならば都にはあらうか。▲シテいかにも都にはござらう。▲アドそちは大義ながら都へ行て、寶を求めて來い。▲シテ畏つてござる。▲アドもはや行くか。▲シテなか／＼。▲アドやがて戻れ。▲シテはあ。▲アドえい。▲シテはあ。扨も／＼、急な事を申し付けられた。まづ都へ參らう。扨都へ參つたらば、それを序にして、此所彼所へ參らうと存ずる。都と見えて賑かにござる。さればこそ都ぢや。扨も／＼賑かな事かな。はつたと忘れた事がある。寶屋が何所やら、又名を何と云ふやら存ぜぬ。是から問ひに歸る事もはる／＼なり。何と致さう。扨も／＼都でござる。知らぬ事は、呼ばはれば知れるさうな。なう／＼其所許に寶屋はござらぬか。寶買はう／＼。▲スッパこれは洛中に心も直に無い者でござる。見れば田舍者やら、わつぱと云ふ。騙してやらう。これ／＼。▲シテこちの事か。何事でござる。▲スッパ如何にもそちの事ぢやが、洛中を何と云やるぞ。▲シテ田舍者なれば、聊爾は申さぬ。御免なれ。▲スッパいや／＼、其方がさら／＼聊爾を云ふではないが、何やら尋ぬる

寳の笠―一名隠れ笠

目の前に奇特の見ゆる―眼前に不思議の靈驗あること



七寳の笠

三人　シテ男　半袴、腰帯
　　　アド男二人　長袴、小さ刀さし

▲初アド 大果報の者。まことに天下治り、彼方此方の御參會お振舞は、夥しい事でござる。それについて、この度は、目の前に奇特の見ゆる寳を競うとある。某が藏の内に、さやうの寳があるか存ぜぬ。尋ねませう。やい〳〵、太郎冠者あるか。▲シテ はあ。▲アド 居たか。▲シテ お前に。▲アド そちを喚び出すこと、別の事でない。此中の彼方此方のお振舞は、夥しい事ではながつたか。▲シテ その通でござる。▲アド それについて、この度は、手前で奇特

▲初アド それは嬉しい。まづ云うて聞かせい。▲シテ やあ、申しますまい。▲初アド 早う云へ。▲シテ こなたのお太刀を、私に持たせておかせられたは、物になりました。▲初アド 何になつたぞ。▲シテ 青竹の杖になつてござる。▲初アド 言語道断の事ぢや。おのれが人に取られて、云はう様がなさに、何のかのとぬかすな。▲シテ さうではござらぬ。この杖になり上りました。▲初アド まだ理屈をいふ。あつちへうせい。▲シテ はあ。▲初アド えい。▲シテ はあ。

一定—必ずの意

かう云ふ内にも云々—獨言也

この杖も云々—これも獨言也

くちなは—蛇のこと

物ぎれ—切れ味の好きこと

これでもまだ元の太刀にならぬ—これも獨言也

の參らぬ、不思議な事でござる。まづ、嫁が姑に成上るは、ほどがござらぬ。▲初アド それは珍しうもない事の。▲シテ 又山の芋が鰻になるも一定でござる。その仔細は、大雨などが降つて、山などが崩れて、山の芋が川へ流れて、それが鰻になると申します。▲初アド その樣な事もあらう。▲シテ かう云ふ内にも、元の太刀になれかし。申し〳〵、又澁柹が熟柹に成上ります、ゐのころが親犬になりあがります。▲初アド それは汝が言はいでも知れた事ぢや。▲シテ まだござります。小僧が後には長老に成り上ります。この杖も元の太刀に成り上れかし。申し〳〵、まだござる。田邊の別當がくちなは太刀と申す事がござるが、御存じでござるか。▲初アド いや、知らぬ。▲シテ その太刀は、他人の目には朽繩に見えまして、いづかたに捨てて置いても、のいて通つて、え取らぬと申します。その上、名作物なれば、物ぎれでござると申す。これでもまだ元の太刀にならぬ。總じて人の樂しうならうとては、その人の太刀が、色々に化くると申すが、聞かせられましたか。▲初アド いや聞かぬ。如何やうの事ぢや。▲シテ こなたの御富貴にならせられう御瑞相がござる。

大參—大勢の參詣

あ、何かといふ内に清水へ著いた。さあ〳〵汝も拜め。▲シテ心得ました。▲初アドやい〳〵、今宵は通夜をする。汝も睡め。▲シテ畏つてござる。▲初アドやい、その太刀を取られぬやうにせい。▲シテ心得ました。▲アドこれはこの邊を走り廻る、心も直にない者でござる。今日は清水へ大參でござるほどに、あれへ參り、仕合を致さうと存ずる。やあ、これに一段の事がある。調戯致さうと存ずる。なう〳〵嬉しや〳〵。まんまと杖と太刀とを換へました。まづ一段の仕合ぢや。急いで退かう。▲初アドやい〳〵太郎冠者、夜が明けた。いざ下向せう。▲シテ好うござりませう。▲初アドさあ〳〵來い〳〵。▲シテこれは合點のいかぬ。扨は取られたものであらう。何と致さう。さりながら、賴うだ人は騙しよい、面白可笑しう申しなさう。申し〳〵、▲初アド何事ぢや。▲シテ夜前は夥しい通夜を爲る人がござつたが、身共があたりで、色々の雜談申したを、聞かせられたか。▲初アドいや、眠りて聞かなんだ。何を云うたぞ。▲シテ總じて、物の成り上ると申すこと、御存じでござるか。▲初アドいや何とも知らぬ。▲シテされば、物の變ずると申す事は、目前にあつて合點

六成上者

三人　シテ男　半袴、上下、腰帯
　　　ぬす人　同前
　　　主　長袴、小さ刀さし

▲初アド 罷出でたる者は、この邊に住居いたす者でござる。某常々清水の觀世音を信仰致し、參詣致す。今日も參らうと存ずる。まづ太郎冠者を喚び出し申し付けう。やいやい、太郎冠者あるか。▲シテ はあ。▲初アド 居たか。▲シテ お前に。▲初アド そちを喚び出す事、別の事ではない。常々清水の觀世音を信仰する。今日も參らうと思ふが、何とあらう。▲シテ これは一段と好うござりませう。▲初アド それならば太刀を持て。▲シテ お太刀持ちましてござる。▲初アド さあ〳〵、來い〳〵。▲シテ 畏つてござる。▲初アド やい〳〵、某も觀音を信仰する故、次第に仕合もなほる。この樣な嬉しい事はない。▲シテ 仰せらるゝ通でござる。▲初アド 取分今日は、夥しい參ぢやなあ。▲シテ 左樣でござります。▲初アド や

柹—染色也代赭の濃き色

ふ。角力の作法を知らずば、かまふなと云ふか。身共が知るまいと思ふか。總じて角力は、四十八手とは云へども、碎けば八十八手も、百手にもとる。鴨のいれ首、水車、反返、腕投、あをりがけ、河津がけ、この樣な手を知つて居る。何と、それ程ならば出てとれといふか。身共ぢやというて、とりかねうか。何と、小言を云うたらば飛礫をうたう。そちがうつたらば、この方からも參らせうまでよ。あ痛〳〵。これは堪忍がならぬ。やい其所な柹の帷子、柹の鉢卷、おのれ見知つたぞ。やれ子供もかゝつてくれ。えい、とうとう〳〵、南無角力御退散、又明年參らう。

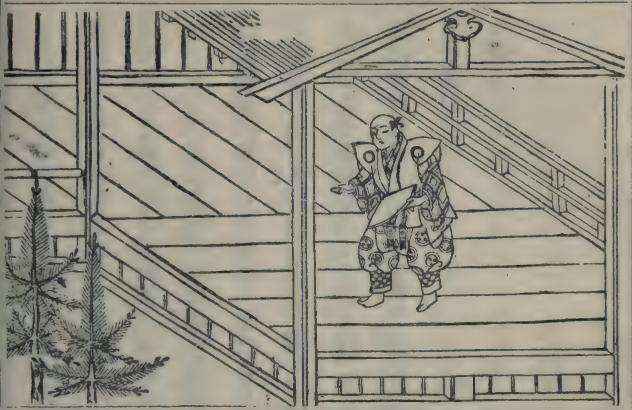
高麗緣―白地に雲形などを黑く染め出したり

先なは乘人と見えた。あれは誰でござる。何と梅の木原のすい右衛門殿。その後なは誰でござる。何ぢや、柿の本しぶ四郎左衛門。扨も〳〵、くひしばつて乘られたが、落ちられずはよからうが。ありや〳〵、ありやこそ、いふ言葉の下から落ちられた。扨も扨もをかしい事ぢや。何ぢや、其方は、身共が笑が苦になるか。何とおしやる。打たれうとお云やるか。其方に疵はつけまい。身共は町で隱れもない大いたづら者ぢや。おかまやるな。扨も〳〵、あれ〳〵、したゝか腰を打たれたやらして、ちんがり〳〵。扨も〳〵、可笑しい事ぢや。やあ、あの大勢人の寄つて居るは、何事でござるぞ。やあ子供が角力をとる。えい、身共は、小い時から角力が好きぢや。行て見物致さう。はあ、これは、どうも這入られまいが、まづこの笠を破つては、女どもが叱るであらう。まづこれをかうして、ちと御免なされませう。これ〳〵此處な人、草履の後を蹈むによつて、先へ行かれぬ。南無三寶、身柱の灸をむいてのけた。はあ〳〵、痛や〳〵。まづ這入つた。これ行司、腰が高い、下にござれ。何といふ、某をあばれ者と云ふか。やあ何とい

笠をとらせらるゝ—挨拶する也
巳午の刻—巳は午前十時午は十二時
とてものことに—いつその事に
十二因緣—生々相續の因果を十二等に分つ
八景—支那の瀟湘八景也
毗首—天竺の佛師毗首羯磨の事
達磨—天竺の僧支那に入りて禪を傳ふ
牧溪—宋人也範無準の弟子
うんけいべり—雲繝緣の訛

ぐつろ左殿と同道せねば、身共の慰がない。やあ身共に逢うて、笠をとらせらるゝはどなたぢや。やはり召せ。こなたは、祭は見物なされぬか。何ぢや、刀がない。なくば大事か。身共はこれ持たねばさしませぬわ。扨祭の刻限は何時でござる。何と巳午の刻ぢや。えい身共は一刻も二刻も早う出た。とてものことに、九條の古御所を、見物して歸らう。御馬屋を見やうか。えい、これが御馬屋ぢや。扨も〳〵見事なことかな。姫栗毛、額白、黑毛、白毛、あれからこれへ。扨も〳〵、これは十二因緣の心を以て立てさせられた。扨御所を見物致さう。はあ、是に八景の押繪がある。洞庭の秋の月、遠浦の歸帆、遠寺の晩鐘、平砂の落雁、瀟湘の夜の雨、寄する波に音なき夜の泊、さても〳〵見事な。これに掛物がある。何ぢや。毗首が達摩、東坡が竹、牧溪和尙の墨繪の觀音、三幅一對。扨も〳〵、見事〳〵。疊は皆うんけいべりに高麗緣、あれから是まで敷きつめられた。柱は黑塗柱に、蒔繪を書かせられたは、申さう樣もない事ぢや。何といふ馬子達、具足がかけるといふか。えい、身共はそれこそは見に來たれ。はあ、扨も〳〵、のつたり〳〵

深草祭—深草鄕の總社藤森神社の祭



五　見物左衛門

一人　男　半袴、上下、脚絆くゝり、背笠持

罷出でたる者は、この邊に住居致す、見物左衛門と申す者でござる。今日は加茂の競馬、深草祭でござる。毎年見物に參る。今日も參らうと存ずる。又某一人でもござらぬ。爰にぐつろ左衛門殿と申して、毎年同道致す人がある。今日も誘うて參らうと存ずる。道行 内に居られたらようござらうが、どれへも出ぬ人ぢや。定めて内に居らるゝであらう。やあこれぢや。ものもう。ぐつろ左殿、内にござるか。何とはや見物にござつた。やれ〳〵、

あらがふ—諍ふ

ものぢやと申しましたれば、取らぬとは云はせぬ、そちが取らいで、誰が取らうと申して、扨も強いおはしたでござつた。私の腕を捩上げました處で、私が、まづ夫は何でをりやるぞと申してござれば、大ぶとの金剛が見えぬ、返せ〳〵と申しました。それで私が、女ぢやと云うて、その様な粗漏な事を云ふ、田舍者ぢやと思うて侮つて云ふか、身共は知らぬと申したれば、まだあらがふかと申して、腕を頻に捩ぢあげました程に、餘り捩ぢられ、息がはづんで、物が云はれぬ。やれまづ物を云はせ〳〵と申してござれば、そこでちつとゆるめてござる程に、これかと申して懐から出し、返しました。▲アド これは如何な事。おのれは都へ上つて、盗をし居つたか。憎い奴の。やるまいぞ〳〵。▲シテ 許させられ〳〵。

大ぶとの金剛ー草履の一種、大ぶとは緒太の誤歟

てござる。▲アド それは何とも合點がいかぬ。汝が居たあたりには何があつた。▲シテ 私の居ましたあたりには、大ぶとの金剛がござつた。▲アド それは上座ではない。履脱と云うて下座ぢや。して何とした。▲シテ 時に腰元が、まづ盃を持つて出ました。何でも一つたべうと存じて居ましたれば、つゝと脇へ持つて行きました。又その次に、結構な蒔繪の重箱に、色々の肴を入れて持つて出ました。定めてこれは私が方へ持つて參ると存じてござれば、身共が鼻の先を、すりこすつて通つて、これも奥へ持つて參りました。ところで私も腹が立ちまして、とかく此樣な所に居ていらぬものぢや。酒はくれず、振舞は食はせずと存じ、それよりつゝと立つて歸りましたれば、後からおはしたが急に呼びました。やれ〳〵、歸れ、戻れ、用があると申して追ひかけました。身共の存じまするは、今まで居てさへ何もくれぬ、何の用があらう、戻る事ではないと存じ、聞かぬ顔して歸りましたれば、かのはしたが難なく追付きまして、其儘、私の腕を無手と取り、おのれは憎い奴の。今の盜んだ物を返せと申してござる。私は何も取りはせぬ。聊爾な事を云ふ

ほゝをかしら―一本ほう〳〵頭とあり

鸚鵡返し―先方の歌を少し變へて返歌する也口眞似の義

おめたは―怖(こは)がるは

ればまづ都は、北野へ參り、路次に見事な菊の花が咲いてござつたほどに、一枝折りまして、手に提げて參りたれば、萎れませうと存じ、頭にさいて參りましたが、それより祇園へ參らうと存じ、畷へ參つてござれば、都上﨟と見えて、華やかに出立ちて、腰元はしたなどを數多連れてござりました。通りさまに、私が頭にさいた菊の花について、歌を一首詠ませられてござる。▲アド それは何といふ歌ぢや。▲シテ 都には所はなきか菊の花、ほゝをかしらに咲きぞみだるゝと、なされた程に、私も返歌を致さずはなるまいと存じ、鸚鵡返しに、返歌を致してござる。▲アド 何としたぞ。▲シテ 都には所はあれど菊の花、思ふかしらに咲きぞみだるゝと、致してござれば、扨も〳〵、田舍者さうなが、優しい者ぢやと仰せられ、これより祇園清水へ參る程に、來いと仰せられ、私も參りましてござれば、東山の邊に、幕うちまはし、皆々その內へ入らせられた。身共にはこちへ這入れと申す者もござらぬほどに、田舍者のおめたは見苦しいものぢやと存じ、幕を攫み上げて內へはいつてござれば、私をこちへ來い〳〵と仰せられ、一の上座に置かせられ

かそうで—こつそりと

身の毛をつめて—恐るゝこと

▲シテ されば、一人召仕はるゝ下人の事でござれば、お暇と申したりとも、よもお暇を下さるまいと存じて、かそうで京内参致してござる。▲アド 何と、一人召仕ふ下人が、京内参すれば、主に暇を乞はぬ法でおぢやるか。▲シテ はあ。▲アド えい、憎い奴の。やれ扨、急度折檻を致さうと存じて、これまで立越えたれども、彼奴が京内参したとあれば、都の様子も聞きたうござる。まづこの度は、差置かうと存ずる。やい〳〵、存ずる仔細あつて許す。まづ立て。▲シテ それは誠とでござるか。▲アド 誠ぢや。▲シテ 眞實か。▲アド 眞實ぢや。▲シテ 一定か。▲アド おんでもないこと。▲シテ やら心易や。▲アド して、今の心は何とあつた。▲シテ その事でござる。いつもとは、御機嫌もかはり、お手討にもあふかと存じて、身の毛をつめてござる。▲アド さうあらう。身共もいつもとは云ひながら、今日は急度折檻をせうと思うて立越えたれども、汝が京内參したとあれば、都の様子も聞きたさに許した。急いで語れ。▲シテ 畏つてござる。まづ、天下治りめでたき折なれば、此所彼所の參下向が、夥しい事でござつた。▲アド さうあらうとも。まづ都は何所々々を見物したか。▲シテ

菊の花―北野參り或はぼろぼろ頭とも云ふ

をりそうて―出かけて

四 菊の花

二人　シテ　男　半袴、上下、腰帯
　　　主　長袴、小さ刀さし

▲アド　これは、この邊に住居致す者でござる。某一人召仕ふ下人が、身共に暇も乞はいで、何方へやら、參つてござる。承れば、夜前歸つたと申せども、未だ某に目見を致さぬ。言語道斷、憎い奴でござる。今日は彼奴が私宅へ參り、急度折檻を致さうと存ずる。道行　やれ扨、身どもに暇をくれいと申したら、五日や七日の暇は取らせうものを、暇を乞はぬ所が憎うござる。やあ、參るほどに、彼奴が私宅はこれでござる。某が聲と聞いてござらば、定めて留守を遣ひませう。作聲をして、喚び出さうと存ずる。ものも。案内もう。▲シテ　やら奇特や。夜前某が歸つたを、はやどなたにやら御存じあつて、表に案内とある。案内とは誰そ。どなたでござる。▲アド　退り居ろ。▲シテ　はあ。▲アド　俄の慇懃迷惑致す。ちとお手を上げられ。おのれは誰に暇を乞うて、此中は何方へをりそうて　あるぞ。

ぬわ。▲シテそりやこそあたらぬぞ。まづ雁は身共が取つて歸らう。なう〳〵嬉しや〳〵。▲アドやい〳〵、も一度射さして見よ。やれ待て〳〵。せめてその羽なりとくれ。▲シテ羽を何にするぞ。▲アド羽箒にするわ。▲シテいや〳〵、それもならぬぞ〳〵。▲アドやれ、それは聞えぬ。せめて羽をくれ〳〵。

てたもれ。▲所の者 その通云はう。これ〳〵、今のを聞かしましたか、無理な事を云ふわ。
▲アド されば〳〵、無理な事を云ひます。どうでも遣る事はならぬと云うて下され。
▲所の者 心得た。どうでも遣る事はならぬと云はるゝわ。▲アド 何と、遣る事はならぬ。それなら其所を退きやれ。この弓矢で射殺してくれう。▲シテ それ〳〵、止めてたもれ〳〵。危い〳〵。▲所の者 まづ待たしませ〳〵。身共がこれに居るからは、聊爾はさせぬぞ。兎角身共が思ふは、その様に云うては埒が明かぬ。この上は、彼の雁を元の所に置いて、も一度射て見さしませ。あたつたら其方取りやれ。若しあたらずば、そちへ遣る事はなるまい。▲アド それなら射やう程に、元の所へやつて置け。▲所の者 心得た。なう〳〵、今の通ぢや。身共次第にして射さしたら好からう。あの手許ではあたるまい程に、元の所へやつて置かしめ。▲シテ 心得ました。こなた次第に致さう。▲所の者 さあ〳〵、射て見やれ。
▲アド 心得た。射るぞ。これから射やうか。どこから射やうぞ。▲二人 これ〳〵、それは近い。初の所から射やれ。▲アド それなら、これから射やう。さあ射るぞ。南無三寶、あたら

聊爾—粗忽

人體—立派なる身分の意

て捕らうぞ。思ひ出した。飛礫をうたう。やあ、えい。さればこそあたつた。まづ雁はしてやつた。▲シテ やい〳〵、その雁はなぜに取つて行くぞ。▲アド これは、身共が飛礫で捕つたによつて、持つて行くが、何と。▲シテ いや〳〵、それは身共が最前から瞰み殺して置いた。遣る事はならぬ。おこせ。▲アド いや〳〵、身共が飛礫で捕つた。遣る事ではないぞ。▲シテ おのれ憎い奴の。おこさぬに於ては、この弓矢で射てくれうぞ。▲アド やれ危い。出合へ〳〵。▲所の者 やい〳〵〳〵。これは何事ぢや〳〵。聊爾をすな〳〵。これはどうした事ぞ。▲アド されば〳〵、能う聞いて下され。この雁を、身共が飛礫をうつて捕つたれば、己が雁ぢや、おこせといふによつての事ぢや。無理な事ではござらぬか。▲所の者 そちが飛礫で捕つたが定か。▲アド なか〳〵、定でござる。▲所の者 それなら、その通云はう。これ〳〵、其方は人體と見えた。あの者が飛礫をうつて捕つた雁を、おこせとはどうした事ぞ。▲シテ さればその事ぢや。身共が捕らうと思うて、この弓矢で最前から狙うて居たれば、大方瞰み殺したを、彼奴が取つて行く。どうでもこちへおこせと云う



三　雁争

三人　シテ大名　熨斗目、素襖、大臣烏帽子小さ刀
　　　アド男　半袴、上下、腰帯
　　　所の者　長袴、小さ刀さし

▲シテ　罷出でたる者は、この邊に隠れもない大名でござる。今日も野遊に參らうと存ずる。道行　まことに慰は多けれど、殺生ほどよい慰はあるまい。やあ、これに雁が居る。何でも此弓で射てやらう。これから射やうか。何處から射やうぞ。▲アド　罷出でたる者は、この邊の者でござる。某は急用あつてさる方へ參る。まづ急いで參らう。やあ、これに雁がある。これは捕りたいものぢや。何とし

あ。▲アド えい。▲シテ はあ。

夜も明けば―伊勢物語にあり、きつねはきつにはめなでははめなむの誤

る。その上此方にはまだござる。▲アド 有らば詠め。▲シテ 心得ました。夜も明けばきつねはめなでくだかけの、まだきに鳴きてせなをやりつる。▲アド それもうたふであらう。▲シテ いや〳〵、鳴くでござる。其上唐土にも鳴くといふ證據がござる。胡曾詩といひし者の詩にいはく、寂々函關鎖未レ開。田文車馬出レ秦來。朱門不レ養二三千客一。誰爲二雞鳴一得二放廻一。これは唐土に函谷が關と申す關がござる。鷄の鳴く聲を聞き關の戸を開く。孟嘗君と申す者、討ちもらされて隣國へ落ちて行く時、夜半時分に彼の關に到り、鷄の鳴く眞似をしければ、まことかと存じて關の戸を開く。かるがゆゑに、難なく隣國に著きたり。これにも空鳴きしつるとこそあれ、やはり唱ふとはござるまいぞ。▲アド いや、此方には歌にこそなけれ、鷄の唱ふといふ謠がある。謠うて聞かさう。よう聞け。▲シテ 畏つてござる。▲アド謠作 うちうたふ〳〵、ちまちの鷄がうちうたふ。▲シテ 頼うだ人の作謠をうたはるゝ。いたしやうがござる。主殿▲アド 何事ぢや。▲シテ 謠ちまちばかりの鷄はんないて、他所の鷄はなかぬか。▲アド 何でもないこと、あつちへうせい。▲シテ は

じて、隨分聞いて居ましたれども、終に鳴きませなんだけれども、日がたけてござる程に、まづ參つてござる。▲アド やあ、おのれ、鷄の唱ふ時分に來いといふに、なくとは何としたことぢや。鷄は唱ふことこそいへ、なくとはいはぬ。▲シテ いや〳〵、さやうではござらぬ。歌にも詩にも、鳴くとこそござれ、唱ふとはござるまい。▲アド さらば鳴くと云ふ事があらば云うて聞せい。▲シテ 畏つてござる。歌 とりが鳴く東の奥のみちのくの、小田守る山に黄金花さくと申す時は、鳴くではござらぬか。▲アド 汝が方に歌にあれば、こちにも唱ふといふ歌がある。▲シテ 有らば仰せられ。▲アド 鷄立の江の邊には、その鷄もうたふなりけり。▲シテ こなたに一首などはござらうが、此方にはまだござる。▲アド あらば急いで詠め。▲シテ なけばこそ別もうけれとりの音の、聞えぬ里の曉もがなと申す時は、何と鳴くではござらぬか。▲アド 此方にもまだある。▲シテ 有らば仰せられ。▲アド 鷄立の江の邊には、その鷄もうたふなりけり。何と唱ふではないか。▲シテ 扨はこなたの事でござる。▲アド こなたの事とは。▲シテ 褻にも晴にも歌一首と申すは、疑もなきこなたの事でござ

鷄立の江―作り言ならん立は泣の略より來る

なけばこそ―菅公の歌といふ

褻にも晴にも―よきにも惡きにも

時ざし―時刻を指定すること

今うせをつたか―今時分來たか

二　鷄立の江

二人　シテ男　半袴、上下、腰帶
　　　アド主　長袴、小さ刀さし

▲アド主　これは此邊に住居致す者でござる。某一人召仕う太郎冠者が、殊の外不精にござつて、使にやれども、時ざしをして呼ぶに、其時まゐりたる事もござらぬ。明日も、さるかたへ使に遣らうと存ずるほどに、前方より、參れと申し付けうと存ずる。やいやい、太郎冠者あるか。▲シテ太郎冠者　はあ。▲アド　居たか。▲シテ　お前に。▲アド　念なう早かつた。汝を喚び出すこと、別の事でもない。明日さるかたへ使に遣るほどに、一番鷄の唱ふ時分に必ず來い。▲シテ　畏つてござる。やあ、賴うだ人の、一番鷄の唱ふ時分に參れと申し付けられたを、臥り過いて、日の出させられた。何と致して好うござらうぞ。さりながら、賴うだ人は騙しよい御方ぢや。如何樣とも辯舌に任せて申さう。ござりますか。▲アド　太郎冠者か。言語道斷の奴ぢや。おのれは今うせをつたか。▲シテ　されば鷄が鳴くかくと存

打ちだす打出の小槌を、同じく取らせ。▲二人これまでなりとて、えびす大黒歸らんとせしが、猶も所の福神と、ならん〳〵と、この所にこそ納りけれ。

ゆゝしき—えらい立派な

衆徒—僧侶

いで〳〵—以下總て曲にかゝる

西の宮のえびす三郎殿と齋はれ、威光を現す。貧なる者には福を與へ、富貴に守る事なり。何ぼうゆゝしきえびす三郎殿にてはなきか。▲アド 御由來承り、いよ〳〵有難う存じます。又大黑殿の御由來を承りたうござる。▲大黑 なか〳〵、語つて聞かさう。好う聞け。▲アド 畏つてござります。▲大黑 抑比叡山は、尊き御山なり。此山に守護神なくてはかなはじと、傳敎大師祈り給へば、この大黑殿顯るゝ。傳敎、この山には三千人の衆徒あり、大黑は一日に千人を扶持し給へば、三千人を守り給ふ守護神をと、重ねて祈誓し給へば、其時この大黑殿、忽ち三面六臂と顯れければ、傳敎尊く思ひ、この大黑を、比叡山の守護神と齋ひ、佛法今に繁昌せり。信仰せよ〳〵。汝に福を與へうぞ。▲アド これは彌有難う存じます。▲二人 やい〳〵、汝、寶を與へて今よりは、大富貴になして取らせうぞ。▲アド はあ忝うござります。▲蛭子 謠舞働有り、鼓うちあげて。 いで〳〵寶を與へんとて 舞働あり。 〳〵、商 みやうが、作り冥加、萬の幸あらする釣針を、魚ながらこそは取らせけれ。▲大黑 謠舞働太鼓打あげて その時大黑進み出で、 舞働あり。 〳〵て、七珍萬寶入れおきたる袋を汝にとらせけり。猶も寶を

大黒と云々―與へん迄曲がかり

うと存ずる。まづ注連を張りませう。やあ、なか〳〵好うござる。（蛭子と大黒ときがりばにて出る）大黒と蛭子とこゝろをあはせつゝ、数の寶を取持つて、衆生にいざや與へん。この衆生にいざや與へん。▲アド　これへ四邊も輝く體にて御出でなされたは、どなたでござる。▲蛭子大黒二人　これは汝が常々信仰して歩を運ぶ、西の宮えびす三郎、比叡山の大黒殿にてあるぞとよ。▲アド　はあ、有難うござります。先これへ御來臨なされて下され。▲大黒　やい〳〵、汝は常常信仰するほどに、富貴になして取らせうぞ。▲アド　それは有難うござります。▲蛭子　やいやい、身共もそちを樂うして取らせうぞ。▲アド　忝うござります。それにつきまして申し上げたい事がござります。終に御兩殿の御由來を承りませぬ。語つて聞かさせられましたらば、愈信仰申したうござります。▲蛭子　はて扨、汝は今までそれを知らぬと云ふは、ちと不信心でをりやる。語つて聞かさう。よう聞け。▲アド　畏つてござる。▲蛭子　抑伊邪那岐、伊邪那美尊、天の岩倉にて、男女の御かたらひをなされ、日神、月神、蛭子、素盞嗚尊を設け給ふ。蛭子とは某がことなり。天照太神より三番目の弟なればとて、

大黑—大國主命に附會すれども天竺の神にて福神の一とす卽ち梵天の眷屬にて食厨の護神也
勸請—神を乞ひ受けて祀ること



續狂言記　卷之二

一　蛭子大黑天

三人

シテ大黑　大黑の頭巾、同面かけ、法被下半衿、脚絆くゝり、右に槌持、左に袋かたげ

蛭子　子同じく面かけ、折烏帽子、水衣、半袴くゝり、鯛釣竿持つ

アド男　長袴、小さ刀さし

▲アド　罷出でたる者は、津の國邊に住居致す者でござる。某富貴になりたう存じて、西の宮の蛭子三郎殿と、比叡山三面の大黒殿へと、祈誓をかけてござれば、まづ吉日を擇び、勸請せよと、示現を下させられてござる。幸今日は最上吉日でござる程に、注連などを張り、家内を淸め、勸請致さ

ねばならぬ。やるまいぞ〱。

才覺ー工夫考案

やく〳〵。申し〳〵ござれ。▲シテ何事ぢや。▲冠者こなたはまことになされぬによつて、私が、水と墨と取代へて置きました。あの顔を見させられ。▲シテまことにあれは汝が云ふ通りぢや。扨も〳〵、騙された。憎いことぢや。何とせうぞ。思ひ出した。この鏡を形見ぢやと云うてやつて、恥をかゝせう。▲冠者一段と好うござらう。▲シテなう〳〵、國元へ下つたらば、追付迎を上さうけれど、それまでの形身ぢやと思うて、この鏡を見てたもれ。わごりよにこれをやるぞ。▲女さても〳〵。彌悲しうござる。この様な形身を貰はうとは、夢にも思ひませなんだ。扨も〳〵、情ないことでござる。やあ、これは何者が、この様に墨を塗らし居つた。あゝ腹立ちや〳〵。こなたがしやつたか。腹立ちや〳〵。▲シテいや〳〵、己は知らぬ。太郎冠者が才覺ぢや。▲女知らぬとおしやつても聽かぬ。墨を塗らねばおかぬぞ。▲シテこれは何とする。顔へ墨を塗つて。やれ、ゆるせ〳〵。逃入る。▲女やあ、太郎冠者め。其所に居るか。おのれも塗つてやらう。▲冠者これは何とめさる。この様に塗られて、どう行なれうぞ。あゝ免さしやれ〳〵。▲女どちへ失せる。まだ塗ら

ながら、國へ下つたらば、追付迎を上すであらう。待つて居さしませ。（泣くなり。）▲女 さう仰せられても、こなたの心が、國元へござつたら變り、妾が事を忘れさせられうと思へば、悲しうござる。▲冠者 これは如何な事。まことに泣かるゝと思うたれば、顔へ水を塗つて泣かるゝ。憎い事ぢや。申し〱、一寸ござれ。▲シテ 何事ぢや。▲冠者 あれをこなたは、眞實泣くと思召すか。あれは、顔へ水を塗つて泣かれます。▲シテ 何のその樣な事が有らう。あれほど別を悲しがつて泣くものを。何を、譯もない事を云ひ居る。▲女 申し〱。どちへござります。お目にかゝるも、小しのうちでござる。こゝにござりませ。▲シテ されば、太郎冠者が、用があると云うたによつて、あれへ行たれば、譯もないことを云ひ居つた。▲冠者 これは如何なこと。あれほど水を眼へ塗つて泣くに、まだ氣が付かぬ。思ひ付けた。致しやうがある。墨と取代へて置きませう。（水入と墨とりかへる）▲女 扨も〱、悲しや〱。片時も離れぬやうに思ひましたれば、別になりまして、悲しうござる。▲冠者 扨も〱、可笑しい事かな。取代へ置いたを知らいで、墨を顔へ塗つた。あの顔は、扨も〱、をかし

どち風が吹いて—いかなる風の吹き廻しかと也
心もとなう—氣がかり也

▲冠者 畏つてござる。道行 ▲シテ さあ來い〳〵。▲冠者 參ります。▲シテ やい〳〵、この仕合を國元に聞いたら、今日か明日かと思うて、待ちかねて居やうぞ。▲冠者 さやうでござる。申し〳〵、何かと申す内にこれでござる。お出なされた通り申しませう。それにござりませ。▲シテ 心得た。▲冠者 申し、ござりますか。賴うだお方のお出なされてござる。▲女 やあ、珍しい聲がする。太郎冠者、何と、賴うだ人のござつた。▲冠者 なか〳〵、さやうでござる。▲女 なう〳〵珍しや。これはどち風が吹いてお出なされた。此中は久々見えませなんだによつて、心もとなう存じました。▲シテ いかにも此中は久しうをりやる。まづわごりよも息災で、滿足致した。それにつき、太郎冠者、今の事を云はうか。▲冠者 仰せられませ。▲女 何事でござる。心もとなうござる。▲シテ いや、別のことでもない。長々在京する所に、訴訟思ひのまゝに叶ひ、近日國へ下るほどに、今日は其方に、暇乞ひに來てをりやるわ。▲女 やあ〳〵、何と仰せらる。國元へ下る。それなら又、いつ逢ひませうも知れまい。扨も〳〵、悲しい事でござる。水入を側に置き、顏へ塗り泣く。▲シテ 其方の嘆は尤ぢや。さり

彼の人—情人

十　墨塗女

三人
シテ大名　熨斗目、素襖、大臣烏帽子、小さ刀
をんな　箔小袖、ゆばうし
アド男　半袴、上下、腰帯

▲シテ大名 遠國に隱れもない大名。長々在京するところに、訴訟思ひのまゝに相叶ひ、新地を過分に拜領致した。これほど嬉しい事はござらぬ。まづ太郎冠者を喚び出し、悦ばさうと存ずる。やい〱、太郎冠者あるかやい。▲冠者 はあ。▲シテ 居たか。▲冠者 お前に居ります。▲シテ 汝を喚び出す事別の事でもない。長々在京するところに、訴訟悉く相叶ひ、新地を大分拜領したは、めでたい事ではないか。▲冠者 これは御意なさるゝ通り、おめでたい事でござる。▲シテ それにつき、國元へ追付下るであらう。さうあらば、彼の人に又何時逢はうも知れぬ程に、今日は暇乞に、彼の人の方へ行かうと思ふが、何とあらう。▲冠者 これは一段と好うござりませう。▲シテ それなら、いざ行かう。汝も供をせい。

水損ー水害
旱損ー干魃

典藥の頭ー古宮内省に典藥寮あり共の長官也

やくしのけげんー藥師如來の化現

い。持合がなければ、此所に近付と云うてはなし、借つて遣らうやうもない。何とそれならば、身共に藥代のかはりに、何ぞ似合うた望はないか。▲いしや されば、何でござらうぞ。や、思ひつけた。この如く、田舍遠國を廻りますれば、今年は水損がいた、旱損がいたのと申して、藥代くれませぬ程に、今から旱損も水損もいかぬやうにして下され。

▲シテ それは何より易い事ぢや。身共が儘ぢや。水損旱損のいかぬやうにして、世の中の好いやうにしてやらうぞ。▲いしや それは辱うござる。▲シテ その上そちを、典藥の頭に祝うてやらうぞ。▲いしや いよ／＼辱うござる。▲シテ それなら、この樣子を謡に謡うて、天上せうほどに、汝も謡へ。▲いしや 心得ました。▲シテ 謡 太鼓打上、降つては照しつゝ、一千年が其間、水損旱損あるまじき、御身はやくしのけげんかや。中風をなほすくすしをば、てんやくのかみと云ひすてて、又なるかみは上りけり／＼。▲シテ ぴつかり／＼。

▲いしや くはばら／＼。

おとましや―疎ましのこと

つとしてござれ。▲シテ いや〳〵、痛うてどうもならぬ。早う抜け。▲いしや 心得ました。抜きますぞ。さあ抜きました。何とござる。▲シテ 扨も〳〵痛いものかな。はあ、今の針で、痛がすきとよいわ。▲いしや さうでござらう。それなら、ちと立つて見させられ。▲シテ 立つて見やう、手を執つてくれ。▲いしや 心得ました。手を執つて立たしませう。何とござる。▲シテ 立つて見てもよい。嬉しうこそあれ。最早身共は天上するぞ。▲いしや これ申し申し。▲シテ 何事ぢや。▲いしや 只今療治を致した、藥代を下され。▲シテ いや身共は、ふと此所へ落ちたによつて、持合がない。よい便宜におこさうぞ。▲いしや いや〳〵、それが何時の事やら知れませぬ。この如くに、私の遠國へ廻りますも、藥代を取り、身を立てう爲でござる。どうでも只今取らねばなりませぬ。▲シテ それでも無い物は是非がない。やあ、好い事を思ひ出した。物とせうぞ。▲いしや 何とでござる。▲シテ 今度夕立のする時に、其方が所へ落ちて、その藥代を遣らうぞ。▲いしや なう〳〵、おとましや〳〵。聞くも厭でござる。いやでもおうでも、今取らねばなりませぬぞ。▲シテ それは醫者殿、聞分がな

はつし—針を立つる音

經絡—血脈

すきと—すつきりと

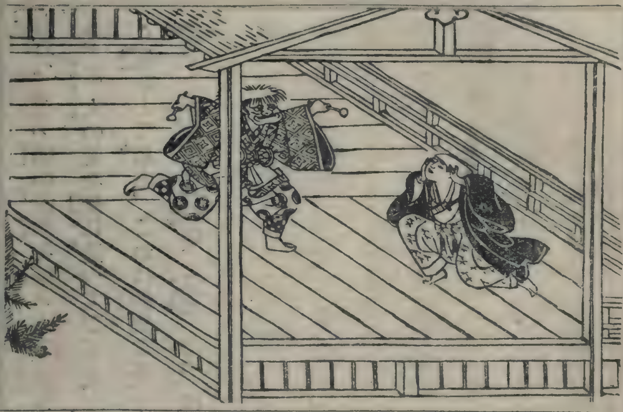
の如くに針を懐中して居ります。どこ許がようござらう。こゝは何とござる。▲シテなるほど其所が好い氣味ぢや。▲いしやそれならこゝに一本立てませう。はつし。▲シテあ痛あ痛。▲いしやはつし〳〵。▲シテあいた〳〵。やれ〳〵、痛いわ〳〵。早う拔いてくれ拔いてくれ、▲いしやこれは雷殿とも覺えませぬ。人間さへ立てます。經絡が違ひます。何と身を悶えなさるゝぞ。▲シテいや〳〵、堪忍ならぬ。早う拔いてくれ〳〵。▲いしや尤でござる。拔きますぞ。怺へさせられ。さあ拔きました。何とござる。▲シテはあ、さても〳〵痛いものぢや。さりながら今の針で、痛が餘程治つた。さりながら、まだ何所やら痛の殘つた所があつて、氣味が惡い。▲いしやそれなら、も一本立てたら、痛みも中風も、すきと癒しまして、根を切つて進じませう。▲シテそれなら、も一本立ててくれ。痛うない様にしてくれい。▲いしや心得ました。こゝが好うござらう。こゝに立てませう。はつし。▲シテあいた〳〵。▲いしやはつし〳〵。▲シテあいた〳〵〳〵。やれ〳〵、怺へられぬぞ。早う拔いてくれ〳〵。▲いしや今すこしでござる。待たせられ。拔きますぞ。き

攫殺してやらうぞ。▲いしや あゝ悲しや、眞平御免されませ。なるほど療治致しませう。まづ脈をうかゞひませう。▲シテ いかにも見てくれ。▲いしや さらば脈をとりませう。▲シテ やい〳〵、これはかはつた脈ぢやなあ。▲いしや その義でござる。人間の脈は手にござる。雷殿の脈は、頭脈と申して、頭でとります。▲シテ それ〳〵。それほど知つて居て、知らぬと云ふ。何とあるぞ。▲いしや されば、脈が殊の外高ぶりますが、こなたには、御持病があると見えました。▲シテ やあ、そちは大きな上手ぢや。なるほど己は持病がある。持病は何であらうと思ふ。▲いしや されば御持病は、中氣があると見えました。▲シテ 扨も上手ぢや。中風がある。何と中風も治り、又したゝか腰を打つたも、療治をして癒してくれまいか。▲いしや されば、中氣は、宿でござらば、藥を調合致しませうずれども、途中の事でござる。何ともなりますまい。腰の痛には、針を持合せました。針をいたしませう。▲シテ その針といふは、痛いものではないか。▲いしや いや〳〵、痛うはござらぬ。人間さへたてます。▲シテ それなら立ててくれ。▲いしや 畏つてござる。横にならせられ。こ

踏み外して一雲を也

仕合を致して上らうと存ずる。やあ参るほどに、これは廣い野へ出た。定めてこれは聞き及うだ、武藏野と云ふがこれであらう。扨も〳〵廣い事かな。やあ、今迄好い天氣であつたが、俄に暗うなつた。夕立がすると見えた。この野で夕立に遇うたら、何ともなるまい。はあ、どこやら雷の鳴る音もする。さればこそ夕立がして來た。雷も頻に鳴るわ。落ちはせまいか。桑原〳〵。▲シテ雷 ぴつかり〳〵。づでいどう。あゝ悲しや。これは踏み外して落ちた。さても〳〵、したゝか腰の骨を打つた。はあ痛や。やいやいそこな奴、おのれは何者ぢや。▲いしや 私は醫者でござりまする。東の方へ下ります所に、夕立に遇ひました。▲シテ 何ぢや、醫者ぢや。それは幸の事ぢや。身共不慮にこゝへ落ちた。したゝか腰を打つた。療治を爲てくれ。▲いしや 私も人間の療治は、形の如く致しましたが、雷殿の療治は、終に致しませぬ。御免されませ。▲シテ いや〳〵、人間の療治の、雷の療治のと云うて、別に違はあるまい。療治せい。▲いしや どうござつても、御免されませ。▲シテ おのれは憎い奴の。療治を爲ぬにおいては、たつた一攫に

針立雷—一名神鳴
やくしゆ—藥種
やぶくすし—藪醫者
きはだ—黃蘗



九　針立雷

二人　シテ　雷　鬼頭巾、ぶあくの面かけ、厚板、下半袴、脚絆、括り腰帶、前に羯鼓つけ、ばち持つ

アド　醫者　布頭巾、十德、下半袴、

▲いしや次第にて出づる　やくしゆも持たぬやぶくすし〲、きはだや頼みなるらむ。詞　これは都に住居いたす藪醫者でござる。都には上手の醫者が數多ござるによつて、身共がやうなる下手な醫者は、はやりませぬ程に、此度思ひ立ち、東の方へ稼ぎに參らうと存ずる。道行　まづ急いで參らう。やれ〲、久々住みなれた故郷をふり捨て、この如くに東へ下るは、何とも氣の毒な事でござる。さりながら、又追付

得た。▲二人 鴨の河原を通るとて、文を落したよの。風の便に傳へ届けかし。▲二人 扇げ〳〵。
▲主 兩人の者を使に遣つてござる。殊の外遲い。見に參らう。これは如何な事。おのれら何をして居る。これは如何な事。大事の文を引き裂き居つた。▲シテ いや、これは御返事でござる。▲主 何の、返事とは。扨も〳〵憎い奴の。どちへうせる。やるまいぞ〳〵。

むさとした―前後の分別無き意

須彌山―妙高山と譯す佛教にて云ふ極めて高き山

あいだてない―間隔て無き意

の重荷ぞ。▲シテ 戀の文は、如何樣な事が書いてあれば重いぞ。この文を披いて見まいか。▲次 むさとした事をいふ。頼うだ人が聞かせられたら、よいとはおしやるまい。無用にせい。▲シテ 見てから、元のやうに封じて置かうまで。▲次 いや〳〵、いらぬ事ぢや。無用にせいで。これは如何な事、早開いた。▲シテ さあ〳〵、そちもこれへ來て讀うで見よ。▲次 さあ〳〵讀まう。▲シテ 扨も〳〵、いつぞやの辱さ、海山々々。これ〳〵、重いこそ道理なれ、海山とあるわ。▲次 すれば、重いが尤ぢや。▲シテ まだあるわ。海ならば滄溟海、山ならば須彌山。これを聞け。扨も〳〵、あいだてないことを書き入れて置かれたわ。▲主 どれ〳〵見せい。▲シテ まづ待て。▲次 はて扨見せい。これは如何な事。引き裂いたわ。▲シテ それ〳〵、好いことを仕やつた。歸つてきつと申さう。▲次 わごりよが引いたによつてぢや。身どもは知らぬ。何としたらば好からうぞ。▲シテ されば何とせうぞ。▲次 思ひ出した。この破れた文、先へは持つて行かれまい。たゞどこから來たともなう、扇いでやらう。▲シテ 一段よからう。とてものことに、小歌節で扇がう。扇がしませ。▲次 心

戯する故ぢや。ちとたしなめ。▲次郎 そちが道寄をする故ぢや。▲シテ やあ、先にから、身共が持つた。ちと、そち持て。▲次 どれ〳〵、身共持たう。こちへおこせ。随分此度は早う歸らうぞ。▲シテ なか〳〵。その通ぢや。▲次 やあ、餘程持つた。さあ又汝持て。▲シテ はて扨重い物ではなし。すぐに持て。▲次 いや〳〵、持つ事はならぬ。下に置くぞ。▲シテ やいやい、それならよい事を思ひ付けたは。仕様がある。竹に結ひ付け。二人して荷うて行かう。▲次 これは一段よかろ。さあ〳〵結ひ付けさしませ。▲シテ 心得た。さあ、よいぞ。こゝを擔げ。身共も擔ぐるぞ。これ〳〵、是れでよいわ。やあ、いかう重たいと思へば、身共が方へばかり寄せて置いた。▲次 いや〳〵、寄せはせぬ。中にあるわ。▲シテ この文が重からう筈はない。不思議な事ぢや。戀の重荷といふがある。聞き及うだが、この文が戀の文ぢやによつて、重いと見えた。思ひ出した。この文の重うなつたにつけた、小歌を唱うて行かう。▲次 一段好からう。▲二人 よしなき戀をするがなる、富士でみれどもをられればこそ、苦しや獨寢の、わが手枕のかたかへて、持てどももたれず。そもこは何

八　荷文

三人　シテアド二人　半袴、上下、腰帯
主　長袴、小さ刀さし

▲主 罷出でたる者は、この邊の者でござる。兩人の者を喚び出し、さる方へ使にやらうと存ずる。やい〳〵、太郎冠者、次郎冠者あるか。▲二人 はあ、御前に居ります。▲主 早かつた。汝等を喚び出すこと、別の事でない。この文を左近の三郎殿へ、兩人して持つて行け。▲シテ 畏つてござる。この御狀ばかりでござらば、次郎冠者一人遣され。私は宿に居りませう。▲主 いや〳〵、一人遣れば道寄をするやら、遲い程に、二人遣る。返事取つたらば、早う歸れ。▲二人 畏てござる。▲主 行て云はうは、このぢうは打ち絶えて、人をも進じませなんだ。餘り床しさに、文を以て申しますと云うて、行て來い。▲二人 畏つてござる。▲主 早う歸れ。▲二人 はあ。▲主 えい。▲二人 はあ。道行 ▲シテ 次郎冠者、さあ來い來い。この文を遣さるゝには一人でも苦しうない事を、二人遣さるゝは、そちが常々串

た。見に參らう。これは如何な事。盗人が這入つて居る。申し〳〵、ござりますか。盗人が這入つて、若子樣を抱いて居ます。▲主 何といふ。盗人が這入つたか。心得た。表へ人を廻せ。何處に居る。一打にしてくれう。▲ろば はあ、危うござる。まづ待たせられませ〳〵。▲シテ これ〳〵、盗人ではないぞ。座敷を見物に參つた。▲主 まだおのれ、その樣な事をぬかすか。打ち切つてくれう。▲ろば あゝ悲しや、若子樣が危うござる〳〵、▲主 何の子どもに。切つてくれう。▲シテ これ〳〵、切るが實正なら、まづこの子から切りやれ。さあきれ〳〵。▲主 切らいでわ。何方へ失せるぞ。やるまいぞ〳〵。▲ろば なう〳〵、これは如何な事。若子樣を捨てて、逃げ居つた。なういとしや。此方へござれ〳〵。乳母が乳を進ぜませう。なう〳〵いとしや。疝氣が起らうか知らぬまで。

取らしたら―遣つたら

かひをつくつて―今昔物語に「かひをつくつて泣きければ」とありべそをかくをいふ

ゑのころ―犬の子

も扨も、よい道具さうな。どれを一色取つても、一元手はある。やあ、これに小袖がある。これは重疊のことぢや。此中、女どもが著る物を打ち込うだれば、殊の外機嫌が悪い。この小袖を取つて行て、取らしたら、喜ぶでござらう。まづとつて歸らう。これは如何な事。子が寢さしてある。扨も〳〵、乳母と云ふ者は横著な者ぢや。此所に寢さして置いて、何所へぞ遊びに行たと見えた。扨も〳〵、好い子ぢや。やあ、手を出して。抱かれうか。ちと抱かうか。さあ、おぢやれ。はあ、抱いたわ〳〵。はて扨好い子ぢや。何も藝はないか。かぶりはならぬか。かぶり〳〵〳〵。扨も〳〵、かぶりがなるわ。しをらしいことかな。まだ藝はないか。しほのめ〳〵〳〵。これは〳〵、しほのめもなるわ。扨も〳〵藝者かな。嘸親達が嬉しからうの。やあ、これはかひをつくつて、身共が笑ふ聲が大きかつたで、肝が潰れたか。さらば、ちつと賺しましよ。肩に乘せましよ。むかひ殿のゑのころは、未だ目があかぬ。ころ〳〵〳〵。や、さらば、ちつと笑はしましよ。やあ、くつ〳〵〳〵。はあ、機嫌が直つた。▲うば　若子様を、お座敷に寢さして置きまし

有徳な人―有福者

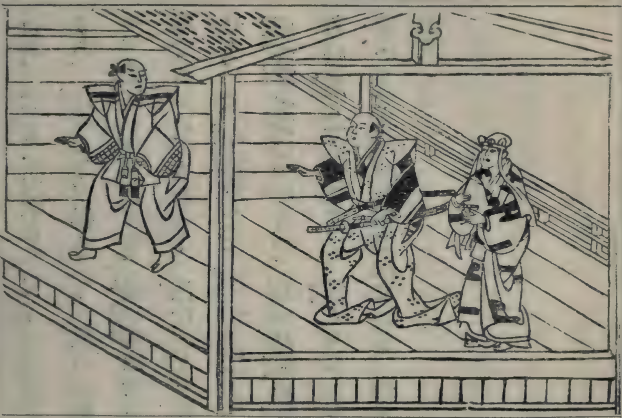
めり〳〵―葦垣を破る音

有明―行燈

ひ出した事がござる。玆に誰殿と申して、有徳な人がござる。これは、金銀米錢、大分持つて居らるゝ程に、今夜あれへ忍び入り、何なりとも取つて參り、も一勝負致し、仕合致さうと存ずる。まづそろ〳〵參らう。道行やれ〳〵、皆人の意見をめさるゝ時、思ひ止れば好うござるに、取返さう〳〵と思うて、うか〳〵致し、この體になつてござる。やあ參るうちにこれぢや。はや日が暮かたぢやによつて、確とは見えぬが、これは普請しられたと見えて、結構になつた。これでは表から這入られまい。裏へ廻らう。さればまた塀の、手が合はぬよ。この塀を越さずばなるまい。越されうか知らぬ。えい〳〵。なう〳〵嬉しや。塀は越しすました。これに葦垣がある。これを切破らう。めり〳〵〳〵、はあ悲しや。誰も聞かぬか知らぬまで。聞かぬやら、人も出ぬ。嬉しや〳〵。まづ垣を潛らう。やあ、潛りすました。此緣の戸を明くれば座敷ぢや。さらば戸を明けう。さらさら〳〵。はあ、これは有明がある。宵に客が有つたと見えた。人は聞かぬかしらぬ。誰も聞かぬと見えた。扨も〳〵、結構な道具取散らしてある。風爐釜、茶入、茶碗、扨

およる―今云ふ婦人語の如く寝ること

勝負師―博打



七子盗人

三人　シテ男　半袴、上下、腰帯
　　　をんな　箔小袖、ゆばうし
　　　アド男　長袴、小さ刀さし、太刀持

▲をんな 扨も〳〵、ようおよることかな。お座敷にそつと寝さしましよ。なう〳〵嬉しや。下に寝さしました。この隙に、ゆるりと茶をたべませう。▲シテ この邊に隠れもない勝負師でござる。此中いつものいたづら者共と寄合ひて、勝負を致したれば、さん〴〵仕合が悪うて、金銀は申すに及ばず、女共が衣類まで、悉く打ち込うでござる。これでは何共致さう様もない事でござる。それにつき、思

ささう―盃を也

瀧飲―ぐい呑みのこと

つゑとりばへ―杖を持ちての亂暴沙汰

いわ。▲女も一つ飲ましめ。▲シテいかさまこれは、一つや二つでは堪忍がならぬ。さあさあ、注げ〳〵。扨も〳〵、飲めば飲むほど旨い。そちもちと飲まんか。ささう。▲女いや、妾はいやでござる。最早酔はせられたさうな。▲シテいや〳〵、この様な事で、酔ふ事ではない。さあ〳〵、注げ〳〵。飲めば飲む程好い氣味ぢや。いざこの上は、瀧飲にせう。▲女心得ました。後から注ぐぞ。▲シテこれは如何な事。いかに瀧飲ぢやと云うて、頭へ酒を浴びせ居るか。おのれ憎い奴の。兎角打ち殺すぞ。▲女又々酒に酔うて、あれあれ、足も立たぬなりで、杖とりばへをしやる、あのなりは。▲シテおのれ可笑しいか。何所へうせる。やる事ではないぞ。やるまいぞ〳〵。酒に酔ひ、ひよろ〳〵して、追ひかけ入るなり。

うつけた人―たはけもの

酒ばやし―酒旗のこと酒屋のしるし也杉の葉を用ゐる

うその様なことおしやる。そなたが何かと邪魔を入れて、酒を買はうと云ふ人にも、賣らせぬやうにしやる。鳥目があらう筈がない。うつけた人ぢや。それは誰が損ぢや。そこな人。▲シテ何ぢや。鳥目が一錢もない。おのれは憎い奴の。商をせずに、遊び歩いて居ると見えた。その上男をうつけたとぬかす。おのれ堪忍がならぬ。打ち殺してくれう。▲女これは如何な事。又その酒ばやしを取つて、それで打擲するか。あゝ悲しや。あ痛〳〵。やあ思ひ付けた。これ〳〵、まづこれを一つ飲うで、打ちなりとも、叩きなりともしやれ。まづ飲ましめ。▲シテ何のおのれ。人の飲まうといふ時は飲まさいで。最早今は飲まぬ。その盃も徳利も、打破つてくれうぞ。▲女あゝこれ〳〵、それは短氣な。打破らうよりは、まづ飲ましませ〳〵。▲シテ何と云ふぞ。打破らうより飲めと云ふか。いかさま、そちが云ふ通り、破つて捨つるも費ぢや。それなら一つ飲まうか。▲女はて扨、飲ましませ〳〵。下にござれ。▲シテさあ〳〵、茲へ注げ。▲女心得ました。注ぎましよ。▲シテさらば飲まうか。扨も〳〵、これは好い酒ぢや。今日は念を入れたやら、いつもより酒が好

は、河原太郎と申す者でござる。某の女房どもに、河原の市へ、酒を賣りに遣してござる。先程參り、一つ飮まして見よ、好い酒か、きいて見て賣らせうと申せど、いやまだ賣初致さぬと申して、飮ましませぬ。扨も〳〵、憎い奴でござる。あれへ參り、身共が邪魔を入れ、致し樣がある。やあ、何人やら大勢酒買ふ人がある。これ〳〵、其處な人、こちへござれ。用がある。皆ござれ〳〵。▲三人何事ぞ〳〵。▲シテいや、別の事でもないが、身共も、あの酒を、最前知らいで飮うで見たが、酢を飮むやうで、酸うて飮まるゝ事ではない。必ず飮ませらるな。あたりませうぞ。▲三人扨はさやうでござるか。よう知らせてたもつた。それなら他所でたべう。いざこちへござれ〳〵。▲女申し〳〵、あれは嘘でござる。なるほど好い酒でござる。惡くば代りを取りませぬ。これ〳〵。これは扨、はや歸りやつた。▲シテやあ、嬉しや〳〵。まんまと邪魔を入れて往なした。致し樣がある。やあ女ども、又見舞うた。何と今日は、大分の人であつたほどに、商があらう。鳥目を繫がうと思うて、緡を持つて來た。さあ〳〵錢を此所へ出さしめ。▲女其處な人、よ

きいて見て―飮みためすこと

代り―代金

出さしめ―出せに同じ

諸白―極上品の酒

六　河原新市

五人
シテ男　半袴、上下、腰帯
をんな　箔小袖、ゆばうし
アド男三人　長袴、小さ刀

▲女 妾はこの邊の者でござる。今日は河原の新市でござる。いつもの如く、酒を賣りに參らうと存じます。道行 まことに今日は天氣も好うござる程に、夥しい人でござらう。參る程にこれでござる。此所許に店を出しませう。竹の先に杉葉つけ、腰掛に持たせかけ置く。徳利一つ側に置くなり。▲アド 罷出でたる者は、この邊の者でござる。今日は河原の市でござる。あれへ參り、賣物を見物いたさうと存ずる。何れも若い衆ござるか。▲二人 なか〳〵。これに居ります。▲アド いざ、河原の市へ參りましよ。▲二人 一段好うござらう。▲アト さあ〳〵、ござれ〳〵。や、何かと云ふうちに是でござる。これに酒を賣つて居る。いざ、酒をたべませう。さあ〳〵、これへござれ〳〵。▲女 何れも、酒參れ〳〵。諸白の好い酒でござる。▲シテ これへ出でたる者

胴慾—無慈悲

なう、嬉しや〳〵。思ひもよらぬ仕合ぢや。太刀、刀、鳥も持つて、急いで歸らう。▲シテ なう、これ〳〵、それは餘り胴慾ぢや。それなら、鶯こそ差し損なうたれ、歌を一首思ひよつた。この歌を聞いて、その鶯をくれまいか。▲アド これは優しい事をおしやる。如何にも歌によつて、やることも有らうが、してその歌は、何とでをりやる。▲シテ 物と。▲アド 何と。▲シテ 初春の太刀も刀も鶯も、差さでぞ歸るもとの住家にとした。鶯をたもれ。▲アド 尤も歌は出來たが、鶯はやる事はならぬぞ〳〵。▲シテ やい〳〵、それは餘り情ないことぢや。せめて、も一度差さしてくれ。やれ胴慾者。やるまいぞ〳〵。

かけろく―賭祿

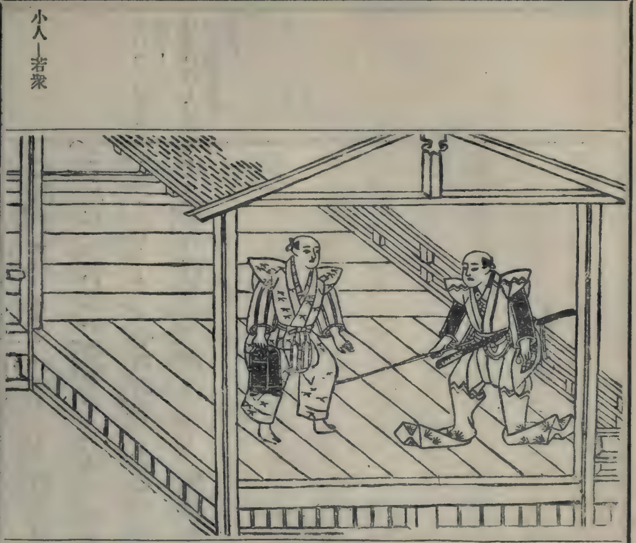
れた。餘り嬉しさに、こなたの御用なら、命なりとも進上と申したれば、その義なら、別に望もない、鶯の好いがあらば欲しいと仰せらるゝ。それ故この如くに、差しに出た事ぢや程に、平に差してたもれ。▲アド 尤もそれは聞えたれども、あれは某が祕藏の鶯ぢや。差さす事はならぬ。▲シテ はて扨、それは氣の毒ぢや。それならかけろくにしてたもらうか。▲アド されば、かけろくには何をするぞ。▲シテ 此太刀を、え差さずばわごりよにやらうぞ。▲アド それなら、なるほど差させう。差いて見やれ。▲シテ 心得た。太刀は是に置くぞ。扨どれから差いてよかろぞ。此所から差さう。狙ひすまして差いてくれうぞ。南無三寶、差し損なうた。▲アド そりや、よう差さぬわ。まづ、この太刀はおれが物ぢや。嬉しや／＼。▲シテ なう／＼、餘り殘多い事ぢや。今度はこの刀をやらうほどに、差してたもれ。▲アド 又え差しやらねば、その刀を取るぞ。▲シテ 如何にもその通ぢや、さらば差しまするぞ。何でも今度は差いてくれう。黐をよう延して置いて差さうぞ。はあ、これは如何な事。又差し損なうた。▲アド さあこそ、この刀も身共が物ぢや。なう

差さう—黐竿にて捕ること

三光—啼聲を月星日に譬へて三光といふ也

聊爾—粗忽

色と縁を以つて申してござれば、情深い御方で、お盃を下されてござる。このやうな嬉しい事はござらぬ。餘り嬉しさに申す事は、こなたの御用ならば、如何やうの事なりとも仰せられ、命の御用になりとも、立ちませうと申したれば、彼のお若衆の仰せらるゝは、その義ならば別に望な事もないが、鶯の好いがあらば欲しいと、仰せられた程に、それこそ易い事でござる、進上申さうと申して、請合ひました。それにつき、今日は鶯を差さうと存じて、この如くに、竿まで持つて罷出でてござる。道行 どこ許になりとも、よい鶯があれかし。差いて進ぜたい事でござる。やあ、これに鶯がある。扨も／＼よい鳥かな。あれは世間に重寶する三光とやら云ふ鳥であらう。何でも差いてくれう。何所から差さうぞ。此所から差さうか。こちらから差さうか。▲アド やい／＼／＼。これは聊爾な事をする。身共が祕藏の鶯を、なぜに差すぞ。▲シテ これはそなたが鶯か。▲アド なかなか。身共の鶯ぢや。狼藉な人ぢや。▲シテ されば、これには仔細がある。聞いてたもれ。身共はさるお若衆に心をかけ、いろ／＼と申したれば、情ある御方で、お盃を下さ



五　鶯

二人　シテ男　長袴、のしめ、小さ刀、ゑさし、竿持
　　　アド男　半袴、上下、腰帯

▲アド 罷出でたる者は、この邊の者でござる。某は鶯を好いて飼ひます。今日は殊の外天氣も好うござるほどに、鶯に水を浴びせうと存じ、罷出でた。この先に、谷水の流るゝ所がござる。あれへ持つて參らう。道行 まことに、諸鳥樣々ござれども、鶯ほど重寶な鳥はござるまい。やあ、此所許がよかろ。まづ此所に置いて、身共はあれから見物致さう。鶯籠は、圓床几を持出るなり。▲シテ 罷出でたる者は、この邊に住む者でござる。某さる方で小人を見初めまして、色

参つた―相手を投げし也
三番の物―三番にて勝負を決する意

には参らぬ。▲アドいや〳〵、取らぬにおいては、後へも先へもやる事ではないぞ。▲シテそれなら、いざ一番取らう。▲アドさあ、をりやれ。▲二人やあ〳〵。▲シテこれは何とするぞ〳〵。▲アドやあお手。まゐつたの。▲シテやい〳〵、今のでは勝負が知れぬぞ。角力は三番の物ぢや。戻れ〳〵。勝負をせい。やるまいぞ〳〵。

さまたにかけ―三俣に掛け歟、相撲の手の稱なるべし、一説に「さ」は「て」の誤にて「引廻して」にて句

て投げた。最早今日の角力もこれまでぢや、いざ去なうと云うて、皆々見物が戻つた時に、いや〳〵、まだ角力こそあれと云うて、東の方から出た。それを何者ぞと思うたれば、わごりよではなかつたか。身共の思ふは、いらぬ所へ出られた、勝たるればよいが、笑止なと思うて、角力も立ちかたと、手に汗を握つて見物して居たれば、行司があはすと思うたれば、やあと云うて、手合をすると否や、彼の小男が、わごりよが腕を取つて右へはきり〳〵、左へはきり〳〵と引き廻し、さまたにかけ、ずでいどうと、とつて投げた。その時のなりを思ひ出せば、笑止なやら、をかしいやら、扨も〳〵をかしい事かな。

▲アド これ〳〵、總じて角力と云ふものは、勝つも負くるも、時の仕合でをりやる。それがその様にをかしいか。▲シテ 可笑しうなうてならうか。其方が大きななりで、小い男に投げられて、したゝか腰を打つたと見えて、痛さうにして、かたやへ、ちと御免なりませ〳〵、と這入つたなりを思ひ出せば、可笑しうてならぬ。▲アド なう〳〵、それほど可笑しくば、わごりよと、いざ角力をとらう。▲シテ いや、身共は茶の湯に參つた。角力取り

れあれ、飛ぶところを危い〳〵とおしやる。とかく身共は、これから最早歸りましよ。▲アドこれ〳〵、これまで來て、去ぬると云ふ事があるものか。平にござれ。▲シテやあ、こなたは又こちらへ飛ばせられたか。それなら、いざ手を引合うて飛びましよ。▲アド一段ようござらう。いざ手を引きましよ。さあ、飛びますぞ。飛ぶぞ。さあ、身共は飛んだ。▲シテはあ、悲しや〳〵。陷りました。これは〳〵、ずんぶりと濡れたわ。▲アド扨も〳〵、あのなりは。これほどの所をよう飛ばいで、あのなりは。なう〳〵、をかしや〳〵。扨も笑止なことかな。▲シテなう〳〵、これ〳〵、そなたは聞えぬ。身共がはまつたら、共々に笑止がつてくれう人が、その如くに笑ふと云ふ事があるものか。總じて人の身の上には、をかしい事があるものでをりやる。わごりよの事も、云うたら恥をかきやらう。▲アドいやいや、身共が身の上に、何も覺えはない。有らばおしやれ。▲シテそれならば云うて聞かさう。それ、いつぞや、上野に角力のあつたわ。その時身共も見物して居たれば、西と東と立て分つてとつた。西の方より、小い小男が出て、出るほどの者を、片端皆取つ

なるほど參りましよ。▲アド それならござれ〳〵。▲シド 參りまする。道行 ▲アド なう〳〵、茶の湯と申すは、さま〴〵次第のある事でござる。節々見て置かせられ。▲シテ いかにも左樣に承つてござる。▲アド やあ、參るほどに、これに大きな溝川がある。さあ〳〵、飛びませう。こなたも飛ばせられ。▲シテ こなたは早飛ばせられたか。身どもはどうやら飛びかねます。こはうござる。▲アド はてさて、これほどの溝川を飛びかぬるといふ事が、あることでござるか。飛ばせられ。▲シテ やあ、思ひ出しました。とかく走りかゝつて、この樣な所は飛びましよ。▲アド どうなりともして飛ばせられ。▲シテ これから走りかゝつて飛びましよ。さあ、飛びますぞ。▲アド あゝ、これ〳〵、危い〳〵。▲シテ あれ、飛ぶ處を、危い〳〵とおしやるによつて、え飛びませぬ。▲アド それでも今のは、その儘はまりさうに見えた程に、危いと申した。▲シテ いや、とかくこの目と云ふものが、臆病なものぢや。目を塞いで、走りかゝつて飛びましよ。▲アド どうしてなりと飛ばせられ。▲シテ 是から目を塞いで飛びましよ。さあ、飛びますぞ。飛ぶぞ。▲アド あゝ、それ〳〵、危い〳〵。▲シテ あ

新發意―新に發心せる人又小僧也

四　飛越新發意

二人　シテ新發意　布頭巾、上十德、下半袴、腰帶
　　　アド男　長袴、小さ刀さし

▲アド　罷出でたる者は、この邊の者でござる。今日は去方へ茶の湯に參る。それにつき、こゝに某の存じた新發意がござるが、何方へなりとも、心安いところへ、茶の湯に參るなら知らしてくれ、稽古の爲、樣子を見たいと、申されたほどに、今日は誘うて參らうと存ずる。まづそろ〳〵參らう。道行やれ〳〵、宿に居らるればようござるが、何と內に居られうか知らぬ。やあ、參るほどにこれでござる。まづ案內を申さう。ものもう。案內も。▲シテ　やあ、表に案內がある。どなたでござる。▲アド　私でござる。▲シテ　えい、こなたか。ようこそ御出なされた。まづ此方へ通らせられ。して、只今は何と思召して御出ぞ。▲アド　されば、別のことでもをりない。さる方へ茶の湯に參る。こなたも、內々見習ひたいと仰せられた程に、誘ひに參つた。▲シテ　それは辱うござる。內々望でござる。

▲シテ これは如何な事、餘り嬲り過ぎ、耳を引き、打擲したれば、喧嘩になつた。これは出ずばなるまい。申し〳〵、御尋ねの居杭は是に居ります。▲アド あれ〳〵、あれでをりやるわ。▲算置 あれでござるか。あれ〳〵、逃ぐるわ。やれ、捕へさせられ。やるまいぞ〳〵。

大事の家の書物—家傳の祕書也

言分—口論

うとした。致しやうがある。この八卦も引きちらし。算木を取りましたら、算は合ひますまい。▲アドなう〳〵、そなたは初とは違うて下手ぢや。一つも合はぬ。▲算置これ〳〵、合はぬこそ道理でござれ。只今まで、數多あつた算木が、二三本になる。その上大事の家の書物を、この様に引き散らかして、こなたが隙ぢやと云うて、算置を嬲らぬものでござる。▲アドこゝな者は、算はえ置かぬくせに、身共に無實を云ひかくるか。▲算置無實とはこなたならで、外にせう人がない。算置と思うて侮つても、方々に旦那があるぞ。▲シテ面白いことかな。言分になりさうな。この算木を、頭の上から落さう。▲アドこれはなぜに身共に打ちつける。▲算置そなたが取つたによつて落したわ。これは身共に打ちつけるか。▲アド身共が指もさいたか。皆そちが手前から落つるわ。これは耳を引くか。▲算置何を云ふ。手もさゝぬに。あ痛〳〵。これは身共を打擲するか。▲アド何を云ふぞ。どこに打擲した。▲算置これは堪忍ならぬ。討ち果してくれう。▲アドおのれ、物を言はして置けば、憎い奴の。身共が胸ぐらをとつて何とする。おのれに負ける事ではないぞ。

きんこく云々—金剋木と剋致して、金木相剋にて見えぬとなるべし

ざるまい。この占の面に、確かさうござるが、まことに、こゝにきんこくもくと、こく致して見えぬ所がござる。たとへ目には見えずとも、捜して見させられ。居りませう。▲アド それなら捜して見よ。いや〱、何も居りないわ。▲シテ 扨も〱危い事かな。既に捕へられうとした。ところを變へて見物致さう。二人の眞中に居やう。▲算置 不思議な事でござる。慥占の面に、左の方にあるとござるが、それなら、も一度置いて見ませう▲アド 一段よからう。▲算置 今度置いたらば、慥に置き出しませう。大水出れば堤のよわり、大風吹けば古家のたより、何と聞えましたか。▲アド 尤なことでをりやる。▲算置 犬土走れば、猿木へ登る。鼠桁走れば、猫急度白眼む。にらむとあるによつて知れました。今度は彼奴が所變へて、この二人の間に居て、占の面を、しろ〱見て居るとござる。▲アド いやいや、見やれ。二人の間には何もない。▲算置 いや〱、彼奴は、佛力を得た奴でござる。目には見えずとも、今度は兩人して捜しましよ。▲アド それなら捜さうか。そちには居ぬか。▲算置 そちへは參らぬか。▲算置 いや〱、何もない。▲シテ 扨も〱、又捕へられ

ありやう—有りやう也實正也

御祈禱—五き十の語路

もれ。▲算置 何時頃の事でござる。▲アド 只今の事ぢや。▲算置 何と、只今の事ぢや。これは知れました。生類でござらうが。▲シテ 扨も、彼奴は上手ぢや。疑もない生類ぢや。▲アド そなたは上手でをりやる。なるほど生類ぢや。とてものことに、何處許に居るぞ。一算置いてたもれ。▲算置 これは一算置かずばなりますまい。總じて、この失せ物と申すは、とつと置き悪いものでござる。さりながら、私の算は、違ふ事が無いと、何方にも仰せられて、私の名はいはずに、たゞありやう〳〵と仰せられます。▲アド さうでおらう。上手ぢや。▲算置 さらば一算置きませう。▲アド なう〳〵、これはかはつた算でをりやる。▲算置 これは天狗の投算と申して、他の家にはござらぬ算でござる。追つつけて算を置き出しませう。▲アド 一段よかろ。▲算置 一とく六がいの水、右七えうの火、三しやう八なんの金、四ぜつ九やくの木、御祈禱の土〳〵。知れました。これはこなたの左の方にあるとござる。▲アド いや〳〵、左の方には何もない。又左に居て見えぬ者ではない。▲算置 それは何でござるぞ。▼アド 人でをりやる。▲シテ これは如何なこと。人ならば見えぬと云ふ事はご

御指圖―家作の構へを云ふ
輕薄―世辭追從

ります。▲アドえい、そちは何處へ行たぞ。▲シテあれに人が逢はうと申しましたほどに、逢ひに參りました。▲アド久しうて來て、逢ひに行くと云ふ事があるものか。とかく奥へ通れ。▲シテ畏つてござる。通りませう。▲アドやい〳〵、久しうで來たほどに、ゆるりと居て話をせい。▲シテ心得ました。やあ、又頭巾を著ませう。▲アドこれは如何な事、又見えぬ。何所へ行た知らぬ。居杌々々。▲算置占ひ算。占の御用。しかも上手なり。うらやさん〳〵。▲アドこれへ一段の者が參つた。見て貰はう。▲シテやあ、算置を呼ばるよ。見物致さう。▲アドなう〳〵、これ〳〵。▲算置此方の事でござるか。何事でござる。▲アドちと見て貰ひたい物があるほどに、こちへ通らせられ。▲算置畏つてござる。これはこなたの御屋敷でござりますか。まづは目出度い御指圖でござる。五百八十年、萬々年も、御富貴御繁昌の御屋敷でござるよ。▲シテこれは如何なこと、算置が例の輕薄を申す。▲アドいや、そなたがその樣におしやれば、身共も滿足いたした。まづ下に居さしめ。見て貰ひたい事がある。▲算置それは如何やうの事でござる。▲アド失物でをりやる。見てた

頭巾―此の頭巾は隠れ簑の類にて隠形の臉ありとす

いで参らう。道行 やれ〳〵、人には色々の癖がある。頭をはるといふは、悪い癖でござる。やあ、参るほどにこれぢや。ものもう。案内もう。▲アド 表に案内とある。どなたでござる。▲シテ いや、私でござります。▲アド えい、居杌か、ようこそ來たれ。何としてこの間は見舞はぬぞ。▲シテ されば、節々参りたう存じますれども、この如くに、参る度々に、頭をはらせらるゝによつて、え参りませぬ。▲アド それはそちが悪い合點ぢや。憎う思うてははらぬ。可愛さが餘つてはる。心に掛けずとも、節々見舞へ。▲シテ 尤もこなたにはさやうでござらうけれども、世間から見まして、あの如くに頭をはられても、御出入申さねばならぬかと申します。この前が迷惑にござる。▲アド 兎角世間は何と云ふとも、かまはず再々見舞うてくれい。▲シテ やあ、頭巾を著ませう。▲アド 居杌、これは如何な事。今これに居た居杌が見えぬ。不思議の事ぢや。どちへ行たぞ。居杌々々〳〵。▲シテ これは不思議な事でござる。この頭巾を著たれば、身共が姿が見えぬさうな。扨も調法な事かな。▲アド その許へ。居杌は参らぬか。居杌々々 ▲シテ さらば頭巾をとつて参らう。これに居

居杌―昔猪首某と云ひし人姓により居杌と轉用せしとぞ、此の狂言古く耳引と云へり

頭をはらせらる―はるは打つ也



三居杌

三人　シテ居杌　半袴、上下、腰帶、頭巾持
　　　アド男二人　長袴、算置腰に算袋下げ

▲シテ　罷出でたる者は、この邊に住居致す、居杌と申す者でござる。爰に誰殿と申して、御出入致す御方がござる。これへ參れば、よう來たとあつて、御馳走はなさるれども、參る度々に、頭をはらせらるゝ。何とも迷惑に存じて、このぢう、淸水の觀世音へ、祈誓をかけてござれば、何と思召してか、この頭巾を下されてござる。これを著れば、定めてはらるゝ時、痛う無いものでがなござらう。今日はこれを持つて、御見舞申さうと存ずる。急

寒いものぢやー衣類までも褒美に取らせたる後なれば也

は古の小歌の心であらうなあ。太郎冠者。▲冠者その歌は何と申します。▲シテ小歌節雨の降るにはござるな。傘故に名のたつに。扨も〳〵、秀句といふものは、寒いものぢや。なう〳〵、寒や〳〵。

扶持―抱へて祿を遣すこと
辱う―傘を擔ぐ事よりの口合也
すかさう―外さう

なら、扶持をなされうず。又秀句を聞かうとある。あれへ御出やれ。▲遠畏つてござる。▲シテ秀句、最前は肝潰したであらう。今の秀句は聞き事ぢや。さあ〳〵、又秀句を云うて聞かせい。此刀は、秀句の出來た褒美に取らすぞ。まだ秀句を云へ。▲遠これは思も寄りませぬ。御刀を下され、辱うござる。▲シテ扨も〳〵、面白い。傘について、辱うござるは出來た。をかしい秀句ぢや。この上下小袖を脱いでやつて、秀句聞かう。▲冠者これは御無用でござる。▲シテ何が惜しかろ。これ〳〵、この上下小袖は著古したれども、これもそちにやるぞ。▲遠これは又、重ね〴〵拜領致しありがたうござる。▲シテ扨も扨も、をかしい事かな。傘の秀句にありがたいとは出來た。扨も〳〵、秀句はをかしいものぢや。▲遠なう〳〵、太郎冠者殿、この傘は私が張りました。これを貴方へ上げますと云うて、上げて下され。▲冠者心得た。▲遠一段の仕合でござる。すかさうと存ずる。▲冠者申し〳〵、これは秀句が手張にはりました傘でござる。差上げますと申します。▲シテこの傘をくれう筈はないが、何と思うてくれた。合點が行かぬ。定めて、これ

島—傘の中骨を加賀にてはしま骨と云ふとぞ
骨折つて—骨は傘の縁語也今も世話に傘屋の手間で骨折つて叱られたと云ふ
かみげ—上氣と紙とを掛く
え申すまい—得に柄を掛く
早速の利いた—頓智の働く

から參つた。▲シテ遙々大義ぢや。まづ早う秀句が聞きたい。▲遠骨折つて參つた。▲シテ骨折であらうと、秀句云へ。▲遠かみげに候。▲シテかみげとは。▲遠え申すまい。▲シテ退り居ろ。やい太郎冠者、彼奴は秀句を云ふかと思へば、何やらかみげに候、え申すまいとぬかす。あの樣な奴は、何の役に立つまい。早ういなせ。▲冠者こなたには、何も御存じないによつてでござる。あれが申す事は、あの傘についての、皆秀句でござる。島から參つたと申すは、傘にしまと申す所ござる。かみげは、紙の事、皆傘についての秀句でござる。▲シテ扨はさうか。恥かしや。何も知らぬ者ぢやと思うて、あれが笑うであろ。何としやうぞ。行て云はうは、秀句に、側で使はうと思うて、心を引き見ん爲、刀の柄に手をかけたれば、傘で受けて外したは、早速の利いた事ぢや。堪忍するなら扶持をせう。その上まだ秀句を聞かうと云うて、是へ出せ。▲冠者畏つてござる。なう〳〵、居りやるか。▲遠これに居ります。▲冠者秀句に、賴うだ人の仰せらるゝは、側近う使はうと思うて、刀の柄に手をかけたれば、傘で受けて外したは、早速なことぢや、堪忍をする

一つ二つは申しましよ。▲冠者 それは一段の事ぢや。御意に入るであらう。やあ、何かと云ふうちにこれぢや。これに待たしませ。同道した通り申さう。▲遠 心得ました。▲冠者 申し〳〵、賴うだ人ござりますか。▲シテ やあ、太郎冠者が戻つたさうな。戻つたか〳〵。▲冠者 只今歸りました。▲シテ 何と、秀句をいふ者を抱へて來たか。▲冠者 なか〳〵。抱へて參りました。▲シテ やい、始あることが終もある。くわを云はう。答へ。▲冠者 畏てござる。▲シテ やい〳〵太郎冠者、居るか。▲冠者 はあ。▲シテ 居るか。▲冠者 御前に。▲シテ 今の聲を聞かうぞ。▲冠者 なか〳〵、承りましよとも。▲シテ 行て云はうは、秀句に、遙々の所よう來た、これへ出て目見をせい、その上秀句を聞かうと云うて、これへ出せ。▲冠者 畏つてござる。なう〳〵、居さしますか。▲遠 これに居ります。▲冠者 只今賴うだ人、廣間へ出させられた。あれへ出て、目見をめされ、その上秀句を聞かうと仰せらるゝわ。▲遠 心得ました。▲冠者 さあ〳〵、出さしませ。秀句これへ出ましてござる。▲シテ これが秀句か。遙々の所ようこそ來たれ。早う秀句を聞きたい。わごりよはどれから來たぞ。▲遠 島

秀句―秀句を云ふ者を直ち秀句と名づけ云へる也

他生の縁―前世からの因縁

やれ〳〵、俄な事を仰せつけられた。海道へ參り、何卒して抱へて參らう。道行 まことに今までは、私一人で暇もござらぬ。秀句を抱へさせられたら、ちと休息致さう。やあ、參るほどに、海道ぢや。まづこゝに待ちましよ。▲遠國者 罷出でたる者は、遠國方の者でござる。某上方を見物致さぬほどに、この度都へ上らうと存ずる。又好ささうな所があらば、奉公をも致さうと存ずる。まづ、そろり〳〵と上らう。▲冠者 やあ、これへ好ささうな者が參つた。言葉をかけて尋ねましよ。なう〳〵、これ〳〵。▲遠 此方の事か。何事でござる。▲冠者 なか〳〵。そなたのことぢや。そなたはどれからどこへ行く人ぞ。▲遠 私は遠國の者でござる。奉公の望で都へ上ります。▲冠者 それは幸の事ぢや。某が賴うだ人は、お大名ぢや。これへ申して出さうが、只今でもをりやらうか。▲遠 なか〳〵。參りましよ。▲冠者 それなら、さあ〳〵、をりやれ〳〵。▲遠 參ります。道行 ▲冠者 假初に言葉をかけて、よい縁であらう。▲遠 これは定めて、他生の縁でござらう。▲冠者 なう〳〵、そなたは、何と秀句がなるか。▲遠 されば、秀句は、この擔げて居ます傘についてなら、

秀句大名—秀句傘

秀句—口合、洒落

二　秀句大名

三人　シテ大名　のしめ、素襖、大臣烏帽子、小さ刀
　　　アド男二人　半袴、腰帯

▲シテ 八幡大名。此中の彼方此方の御參會は、夥しい事でござる。それにつき太郎冠者を喚び出し、尋ねることがある。やい〱、太郎冠者あるかやい。▲冠者 はあ、御前に居ります。▲シテ 汝を喚び出す事、別の事ではない。此中の彼方此方の御參會は、夥しい事でないか。▲冠者 御意の通、夥しい事でござる。▲シテ それにつき、汝に尋ねる事がある。各の一所に寄つて、何やら云うてどつと笑ひ、笑ひ召さるは何事ぢや。▲冠者 あれは秀句を云うて、それが可笑しいとあつて笑はせられます。▲シテ して、汝は、その秀句を知つて居るか。▲冠者 いや、私は存じませぬ。▲シテ 身共も秀句を稽古して云ひたいが、何としたらよかろ。それなら汝は、海道へ行て、秀句を知つた者が有らば抱へて來い。▲冠者 畏つてござる。▲シテ 最早行くか。▲冠者 參ります。▲シテ 頓て戻れ。▲冠者 はあ。▲シテ えい。▲冠者

さつくり―梨を割る音

酢だまり―たれ、梨の汁をいふ

毘沙門云々―以下曲がかり

けなりや―羨しや

汝等は小刀があるか。▲二人 いや、小刀は持ちませぬ。▲シテ たしなみのわるい者共ぢやな。それなら、この鉾で割つてやらうが、これで割つたら錆が來う。研賃をするか▲初アド それほどの事はいだしまよ。▲シテ これは戯事ぢや。これはなんばの鉾と云うて、錆びる鉾ではをりない。さらば配分をしてやらう。いで〱、ありのみわらんとて、なんばのほこを取直し、まん中に押し當て、さつくり。扨も〱、片割も無う好う割れた。さあ取れ。汝も取れ。餘り見事なありのみで、酢だまりが出來た。これは、多聞天が得分にして食べう。扨最前聞けば、なにやら連歌をした。その連歌はいかに〱。▲二人 謡 毘沙門の、福ありのみと聞くからに、くらまぎれよりむかでくひけり。▲シテ 謡 毘沙門、連歌のおもしろさに、舞動有 おもしろさに、悪魔降伏、災難をはらふ矛を、汝に取らせけり。▲アド やら〱、けなりや、けなりやな。われらも福をたび給へ。▲シテ ほしがる事こそ尤なれ〱と。▲三人 謡 兜を脱いで汝に取らせ、これまでなりとて毘沙門天は〱、この所にこそ納りけれ。

くらまぎれ―暗まぎれに鞍馬を掛く
むかでくひけり―剣かでに蜈蚣を掛く、蜈蚣は毘沙門の使はしめ也
一セイ―一聲は謠節の名
せりあふ―爭ふ

聞くからにと、致してござる。この下の句を付けさせられ。▲アドされば何と致さうぞ。くらまぎれよりむかでくひけりと、致してござる。▲初アドこれはめでたう好う付けました。いざ、吟じて見ませう。▲二人毘沙門の福ありのみときくからに、くらまぎれよりむかでくひけり。▲シテ一セイびしやもんの、光を放つてところがら、くらまぎれより現れたり。▲二人これは異香薫じて、只ならぬ御方でござるが、こなたはどなたでござるぞ。▲シテ身共は、汝らが常々信仰する多聞天、現れ出でてあるぞとよ。▲二人はあ、有難うござる。まづこれへ御來臨なされて下されませ。▲シテ床几をくれい〳〵。▲初アド畏つてござる。これへお腰掛けられませ。▲シテやい〳〵、汝等は毎年々々相變らず、年籠をするほどに、富貴になして取らせうぞ。▲初アド有難うござります。▲シテ汝も樂しうなして取らせうぞ。▲アドそれは辱うござります。▲シテそれにつき、夜前福ありのみを與へたれば、わがの人のとせりあふ、それをこちへおこせ。好いやうに配分のしてやらうぞ。▲アドそれそれ、早う上げさしませ。▲初アドこれでござります。上げます。▲シテこれへおこせ。

ありのみ—梨の實のこと

明けた。起さう。申し〳〵、夜が明けた。いざ下向致さう。▲アド まことに夜が明けました。下向致さう。▲初アド さあ〳〵、ござれ〳〵。▲アド なう〳〵、夜前こなたは夜半の頃、何やらわつぱさつぱと仰せられた。何事でござつた。▲初アド いや、別のことでもござらぬ。夜前は、多聞天より、御福を下されてござる。▲アド それはめでたい事でござる。何を下されたぞ。▲初アド 福ありのみを下されてござる。▲アド それはこなた一人に下されたではあるまい。兩人参るからは、兩人の内へと下つた物ぢや。まづそれは此方へおこさせられ。▲初アド いや〳〵、身共一人に下された。やる事はなりませぬ。▲アド どうでも取らねばならぬ。▲初アド その義なら、も一度、多聞天の御前へ戻りて、御前で連歌をして、その句柄によつて、どれへなりと取らうと思ふが、何とあらう。▲アド これは一段ようござろ。「さあ〳〵戻りましよ。早これでござる。下にござれ。さらばこなたから連歌をなされ。▲初アド いやまづなされまいか。▲アド 是非こなたなされ。▲初アド されば、何と致して好うござろぞ。かうもござらうか。▲アド 何とでござる。▲初アド 毘沙門の福ありのみと

御前—廣前

す人がござる。これもいつもの事でござるほどに、待つて居らるゝでござらう。誘うて參らうと存ずる。そろり〳〵と參らう。道行やれ〳〵、毎年々々相變らず、かやうに年籠致すは、めでたい事でござる。參る程にこれぢや。ものもう。内にござるか。▲アド表に案内がある。どなたでござる。やあ、ようこそ御出なされた。定めて今夜は、年籠に御出なされうと存じ、待ちかねて居ました。▲初アド仰せらるゝ通でござる。待ちかねてござらうと存じて參つた。いざ參りましよか。▲アドなか〳〵。御供致しましよ。▲初アドさあさあ、ござれ〳〵。▲アド心得ました。道行▲初アド何と思召す。こなたも身共も、互に無事で、相變らず年籠致すは、めでたい事でござるなう。▲アド仰せらるゝ通でござる。多聞天の御蔭で、次第に仕合も好うなつて、このやうな嬉しい事はござらぬ。▲初アド左樣でござる。やあ、參る程に、はや御前でござる。拜ませられ。▲アド心得ました。▲初アド扨、いつもの如く、年籠致さう。▲アド好うござろ。ゆるりとござれ。ちとまどろみましよ。▲初アドあゝ、あらありがたや。南無多聞天〳〵。扨も〳〵ありがたや。やあ、夜が

多聞天—毘沙門



續狂言記

卷之一

一　連歌毘沙門

三人　シテ　毘沙門　唐冠　毘沙門面かけ、鉾持、かみそばつぎ、半袴、脚絆、腰帶
　　　アド男二人　長袴、のしめ、小さ刀、扇持

▲初アド　これはこの邊に住居する者でござる。まことに一日々々と送るほどに、今日は早、大晦日になつてござる。それにつき今夜は、鞍馬の多聞天へ年籠いたす。當年も相變らず參らうと存ずる。又某ばかりでもござらぬ。こゝにいつも同道致

うち返し―再び勝つこと

緡―錢を貫くこと百緡は百文さし貫緡は一貫文ざし也

未申―西南の方角也、斜の意

日勝負をしたと思へ。この近年ない、うち返しやうして、刑部三郎が所へも、最早算用もする。▲冠者 いかほど、して、勝たつしやれましたぞ。▲庄大夫 いや、何かは知らず、座敷は亂し錢で、山の如くぢや。▲冠者 はあ、それは繫いで置かつしやれませいで。▲庄大夫 いや緡がなうて、え繫がなんだ。緡繩を綯うて吳れい。▲冠者 畏つてござる。綯ひませうが、刑部三郎は何處に居られまするぞ。▲庄大夫 いや、裏の門から往なれた。▲冠者 やあ、一段でござる。綯ひませう。▲庄大夫 やい〱、百緡に綯はずとも、貫緡に綯へ。己が持つて居らうほどに。▲冠者 申し殿樣、持たつしやれませい。扨も〱、あの刑部三郎と云ふ奴は、憎い奴でござる。まづ、酒杯などは仕居らいで、繩を綯へと云ひましたによりて、なにが、手中風ぢやと云うて、綯ひませなんだ。鳥を追へと云ひましたほどに、なにが、口をば未申へ歪めて、かうして見せたと思はしやれませい。え、刑部三郎樣でござりまするか。あゝ、許さつしやれませい。はあ、許さつしやれませい。▲刑部三郎 憎い奴の。やるまいぞ〱。

内。▲庄大夫　やら奇特や。案内がある。え、刑部三郎殿か。何と思うて出さつしやれてござる。今朝は、冠者を進ぜてござるが。▲刑部三郎　されば〳〵、冠者について參つた事でおぢやる。あのやうな病者をおこして、迷惑をさしやる事ぢや。縄を綯はすれば、手中風が起つたといふ。鳥を追はすれば、口中風が起つたといふ。ひよんな者をおこしやつた。▲庄大夫　はて、彼奴はその様なる者ではござらぬが。して、連れてはござらぬか。▲刑部三郎　いや、門に待たせて置いておぢやる。▲庄大夫　え、一段でおぢやる。物蔭からごろんぢやれい。身共がどうぞして、縄を持つて居て、彼奴に綯はして見せうほどに、こなたよい時分に出さつしやれて、持ち代へて居さつしやれい。さうして折檻の加へて、つかまつしやれい。▲刑部三郎　や、これが一段でおぢやろ。急いで呼うで、綯はしやれい。▲庄大夫　やい、太郎冠者、何故にわれは這入らぬぞ。▲冠者　え、何を仰しやる。よう博打の質に、おれを遣らつしやれたなう。▲庄大夫　いや、われが腹立つるも道理ぢや。最早やらぬほどに、堪忍のせい。▲冠者　何とさしやれましたぞ。▲庄大夫　われが叱ろずれども、さる者と今

かだ—不服の意

きはめること—算用すべき事

▲刑部三郎 來い。見せう。こりや〳〵。▲冠者 はあ、見事な花でござりまする。▲刑部三郎 よい花ぢやな。▲冠者 いやはや、申す所もない花でござりまする。▲刑部三郎 やい〳〵太郎冠者、花に鳥がついたわいやい。あれを追うてくれい。▲冠者 は。いや私は、鳥をつひに追うて見た事がござりませぬ。▲刑部三郎 ほう〳〵と云うて追へば、よいわいやい。▲冠者 畏つてござる。扨も〳〵、人を使ふ人の智惠は違うてござる。手で爲ることに、かだを申せば、又口で云ふ事を申しつけらるゝ。これも致しやうがござる。口中風〳〵。▲刑部三郎 やい、冠者。それは何として、口が歪うだぞ。▲冠者 いや、これも中風でござりまする。▲刑部三郎 いや、それもどうぞ、癒しやうがないかいや。▲冠者 鳥を追はずば癒りませう。▲刑部三郎 いや、追はせまいほどに、急いで癒せ。▲冠者 畏つてござる、▲刑部三郎 癒つたか。▲冠者 なか〳〵。癒りました。▲刑部三郎 はてさて、嬉しや。さうあれば、汝が頼うだる者に、きはめることがあるほどに、供に來い。▲冠者 畏つてござる。▲刑部三郎 來い〳〵。や、ほどなうこれぢや。汝は其所に待つて居れ。▲冠者 畏つてござる。▲刑部三郎 ものも。御案

もつけな事—思ひもよらぬこと
跡式—財産
ちのあまりに—諺に末の子は血の餘り
坪の内—庭

とした事でござりまする。▲刑部三郎 をゝ、われはよい所へ氣がついた。繩が足らいで、しさいて置いたほどに、繩を綯うてくれい。▲冠者 畏つてござる。▲刑部三郎 こりや〳〵、この藁で綯へ。▲冠者 心得てござる。これは扨、まことにひさ〳〵も使はうずる人が、ようこそ來た、などと云うて、酒杯などとあらうずるものが、はや、繩を綯へと云はるゝ。致しやうがござる。あ痛〳〵。▲刑部三郎 やい〳〵、何としたぞ。▲冠者 いや、手中風が起りました。▲刑部三郎 はて扨、もつけな事ぢや。して、それは、いつも起るか。▲冠者 なかなか。身どもが親が、子を三人持つてござるが、兄二人には、跡式をやられまする。身どもは、ちのあまりに可愛いが、取らせう物がないほどに、せめて、中風なりと取らせうあつて、くれうてござる。▲刑部三郎 して、それは、どうも癒しやうはないか、▲冠者 いや遊んでさへ居れば、癒りまする。▲刑部三郎 いや、それこそ易いことよ。遊ばして置かうほどに、急いで癒せ。▲冠者 はあ、癒りましてござる。▲刑部三郎 はて扨、嬉しやな。やいやい、某がまだ坪の内は見まいな。▲冠者 いや、まだつひに見た事がござりませぬ。

づ這入れ。▲冠者　いや、お返事をなされずば、歸りませう。▲刑部三郎　いや〳〵、汝を去なす事はならぬ。まづ這入れ。▲冠者　いや、それは何とした事でござる者と、某と、勝負得をしたれば、汝までをば、打込まれたによつて、某が所へ質に取つたほどに、まづ這入れ。▲冠者　何と仰しやるぞ。物の質などと云ふものは、財寶たからか。輕物の類などこそは取ると云ふ事があれ、人を質に取ると事はあるまい。かまへてやさつしやれたら聽くまい。▲刑部三郎　やい〳〵冠者、な其樣にも腹立てそ。頼うだ者に使はれうよりも、某に奉公をしたらば、末々は目をかけてとらせう。▲冠者　いやはや、この樣に申すのも、御前にうらみは、そつともござらぬ。頼うだ者に恨がござる。某に、かうかうぢやとおしやるならば、恨もござらぬが、騙しておこされたと思へば、腹が立ちまする。▲刑部三郎　おう、冠者が腹立つるは尤ぢやが、己に奉公を爲い。隨分な、目をかけてとらせうぞ。▲冠者　畏つてござりまする。は、これは近うに、普請をなされたと見えました。▲刑部三郎　それよ〳〵。▲冠者　まだ此處には、これは壁下地をしさいてござるが、何

輕物—絹物

しさいて—仕掛けて中止して

緡縄—一名縄綯

刑部—原本形部とあれど今刑部に改む

立板へ水云々—能辯の譬

十　緡縄

三人　殿　長袴、小さ刀
冠者　半袴
刑部三郎　長袴、小さ刀

▲庄太夫　罷出でたるは、心も直に無い者でござる。思ふ仔細がござるほどに、のさ者を呼び出し、申しつけうと存ずる。あるかやい。▲冠者　御前に。▲庄太夫　念なう早かつた。汝は此状を持つて、刑部三郎が所へ行て來い。▲冠者　畏つてござる。口上はござりませぬか。▲庄太夫　いや。委しいことは状の内にあるほどに、急いで行て參れ。▲冠者　畏つてござる。▲庄太夫　え。▲冠者　は。扨も〳〵、頼うだる人は、立板へ水を流すやうに、物を言ひ付けられまする。まづ參りませう。や、程なうこれでござる。ものも。御案内。▲刑部三郎　やら奇特や。表に案内がある。誰も出ぬかい。え、太郎冠者か。ようこそ來たれ。待ち兼ねて居たわいや。▲冠者　は。御状が參りましてござる。▲刑部三郎　いや、状までも及ばぬぞ。ま

はじかみ—生姜の古名

▲上京の者　はて、卒爾なことを申したなう。この手をば捕へて居るほどに、そちらの手を見しや。▲下京の者　して、こちらは何ぢやと思やるぞ。▲上京の者　しやうがぢやわ。▲下京の者　しやうがではない。▲上京の者　何ぢや。▲下京の者　物ぢや。▲上京の者　何ぢや。▲下京の者　はじかみぢや。▲上京の者　何でもない事。とつとと行け。

しやうが一手のなきものを生姜と云ふ

▲下京の者 心得てござる。▲上京の者 なう〳〵、こなたは又、片手ではなぜに拜ましやる、▲下京の者 いや、兩手で拜うだも、片手も、心同じことでござろ。▲上京の者 さうでござる。そろ〳〵下向いたそ。さあ〳〵、ちつと今度は又、こなた先へござれ。▲下京の者 心得ました。▲上京の者 ござれ〳〵。彼奴はしやうがさうにござる。これを返しに申さうず。なう〳〵、先程の返歌を致そ。▲下京の者 して、出ましたか。▲上京の者 なか〳〵。▲下京の者 何と。▲上京の者 卽ちこれは、芥川でござる。芥川につけてやりませう。▲下京の者 ようござろ。▲上京の者 かうもござらう。▲下京の者 何と。▲上京の者 芥川ちりかき流す手を見れば、あしのもとよりなほぞをかしきと、詠みました。▲下京の者 はあ、一段出來ました。▲上京の者 ようござろの。この句は、芥川もとりて捨て、とかくこの、ちりかきながすので持つた句でござる。▲下京の者 其方は指さし手さしをして、をかしさうなが、して、人をば片輪かと思やるか。▲上京の者 いや、片輪にではあるまいが、そちらの手は、しやうがではないか。▲下京の者 いや、しやうがではない。▲上京の者 どれ、したら見しや。▲下京の者 これ〳〵。

あれまづ―原本「あれ申づ」とも讀むべし然らば「あれ申さうず」か

あし―蘆に足を掛く

わ。碁を打ちませう。▲上京の者 いやこれは、歩き〳〵ば、どうもなりますまい。▲下京の者 をを、こりやなりますまい。▲上京の者 あゝ、思ひ付けましたわ。口慰をまゐらう。▲下京の者 いや、これが一段でござろ。どちらからなりとも、出た方から申し得でござる。▲上京の者 なかなか。▲下京の者 いや、彼奴めは跛でござる。あれまづ。なう〳〵、早出てござるわ。▲上京の者 出ましたか、▲下京の者 なか〳〵。即ち、これが津の國ぢでござる。津の國について致そ。▲上京の者 一段好うござろ。▲下京の者 かうもござらうか。▲上京の者 何と。▲下京の者 津の國の難波入江にあらねども、あしのもとこそをかしかりけりと、致してござる。▲上京の者 はあ出來ました。▲下京の者 好うござるの。▲上京の者 なか〳〵。▲下京の者 この句は、津の國も入らず、なには入江も入らず、あしのもとで持つた句でござる。▲上京の者 おう、いかう出來たと思うて御感でござる。頓て身共も、出たら申そのう。程なう、これは芥川へ著いてござる。はれ、いかい高水ぢやが、越されますまいほどに、これから、いざ、拜うで下向致そ。▲下京の者 神は見透し、これがようござろ ▲上京の者 さあ〳〵拜ましやれい。

脛薑—一名芥川

芥川—攝津
歩を運ぶ—參詣に行く

九　脛薑

二人　しやうが　半袴
　　　ちんば　半袴

▲下京の者　罷出でたるは、下京邊の者でござる。某芥川の天神の信仰致し、月次歩を運ぶやうにござる。まづそろ〳〵參ろ。▲上京の者　罷出でたるは、上京邊の者でござるが、芥川の天神の信仰致し、常に歩を運ぶやうにござる。まづそろ〳〵參ろ。や、あれへ行かるゝは、天神參りさうにござる。呼び懸け、道連に致さうと存ずる。しゝ、申し。▲下京の者　こなたの事でござるか。▲上京の者　なか〳〵。▲下京の者　何の御用でござるぞ。▲上京の者　いや見ますれば、こなたも天神參りさうにござる。道も寂しうござる程に、連立たうと思うての事でござる。▲下京の者　身共も、連欲しいと存ずる所に、一段でござる。さあ〳〵ござれ〳〵。▲上京の者　參る〳〵。▲下京の者　して、何と、道すがら淋しうござるが、何ぞ、慰事がして參りたうござるの。▲上京の者　されば、何が好うござろの。▲下京の者　思ひ付けまじた

せが立つ｜腹に對して背が立つと口合を云ふ也

てこなたも、ま一度問うてござれ。▲庄屋なう御坊、いや先程に承りたが、忘れましたこなたの名は、何と云ひまするぞ。▲僧はて、腹立てずの正直坊と云ふわいの。▲庄屋それや、腹立てるわ。▲僧いや、腹は立てぬ。▲庄屋それや、腹立てるではないか。▲僧腹は立てぬいの。せが立つわいの。▲庄屋何でもないこと、とつとと行かしませ。

ざらぬが、子供を數多持ちてござるが、いろはなども、ちと敎へさつしやれて下されまする樣に、是を賴みまする。▲僧何がさて、坊主に似合うた事でござる。▲庄屋して、こなたのお名は、何と申しまするぞ。▲僧いや、それに待たしやれい。やれさて、師匠をとらぬ坊主でござれば、終に名を付きませぬが、何と致さうず。あゝ、思ひつけた。檀那衆が、腹を立てぬ坊主ぢや、正直な坊主ぢやと仰しやつてござる。是を申そ。▲庄屋なう〳〵御坊、して、名は何と申すぞ。▲僧身共が名は、腹立てずの正直坊と申す。▲庄屋さても〳〵、殊勝なる御坊かな。それに待たしやれい。なう月行事殿、あの御坊の名は、腹立てずの正直坊と云ふといの。▲月行事なう庄屋殿、何程さうおしやろとも、生身に腹を立てぬといふ事はあるまい。繰返し〳〵名を問うたらば、どこぞでは腹を立ちやうず。それに立てずば、正直坊よと、まづ行て身どもが、問うて來うず。なう御坊樣、こなたの名は、何と申しまするぞ。▲僧いや、庄屋殿に申しました。▲月行事いや、身共も承りたうござる。▲僧腹立てずの正直坊と申す。▲月行事あゝ、出家に似合うた名でござる。なう庄屋殿、行

風に木の葉の云云—所定めぬ意

三界—慾界色界無色界也、又三千世界の義にも云ふ

坊が行かるゝ。問うてごろんぢやれい。▲月行事 心得ましてござる。しゝ、まをし。▲僧 此方の事でござるか。▲月行事 なか〳〵。してこなたは、どれからどれへござる坊様でござる。▲僧 身共のこれからどれへと申したら、風に木の葉の散る如くでござる。▲月行事 意は。▲僧 三界に家がござらぬ。▲月行事 いや、近頃殊勝にござる。こなたをば呼びかける、別義でござらぬ。在所も、百軒ばかりの在所でござる。其所の草堂に足を休めさつしやれますまいかと存じて、呼びかけましてござる。▲僧 いえ、それこそ望む所でござる。▲月行事 はてさて、過分にこそござれ。それに待たつしやれ。庄屋殿に引合せませう。なう〳〵庄屋殿、あの御坊の草堂へ坐らうとおつしやる。これへ出て遇はつしやれい。▲庄屋 いえ、身共がやうなる在所へ坐ろと仰しやつて下さるゝ。辱なうござる。▲僧 して、庄屋殿でござるか。萬事の義を頼みまする。▲庄屋 何がさて、御坊のことならば、何とやうな御用なりとも、承らう。▲僧 辱なうこそござれ。▲庄屋 いや、又御坊様も頼まねばならぬ。▲僧 出家に似合うたことならば、何なりとも仰しやれませい。▲庄屋 いやはや、別の事ではご

月行事——月番の世話役

草堂——寺のこと

八　腹たてず

三人　庄屋　長袴、小さ刀
　　　月行事　半袴
　　　僧　頭巾、衣、數珠

▲庄屋　罷出でたるは、所の庄屋でござる。ちと談合をする事がござる程に、月行事を喚び出しませう。月行事殿ござるか。▲月行事　えいこゝな、何と思うて、出さしやれてござるぞ。▲庄屋　いやその事でござる。彼の草堂の事につけて參つてござる。▲月行事　まことにいつぞや仰しやられたが、あれは明き寺にして置いてはなりますまい。似合はしい御坊はござりませぬかいの。▲庄屋　いや、身共が方にもござらぬ。某が思ふに、こなたと連れ立ちて、鎌倉海道へ參り、似合はしい御坊の通りやるならば、呼び掛けて据ゑうと存ずるが、月行事殿。▲月行事　これが一段でござる。▲庄屋　さあ、したら、ござれ。一段これが好ささうにござろ。この所に待ちませう。▲僧　南無阿彌陀佛。▲庄屋　いや、あれへ好ささうな御

と降る所でござる。▲目代 扨はすりに相極つてある。一寸もやるまい。▲すり 御免なつて下されい。▲目代 御免なれとは。一寸も遁すまいぞ。▲すり 御免〳〵。▲目代、田舎者 どつこへ。やるまい〳〵。

高聲高ーわざと重ねていふ語法

▲すり あゝ尤でござる。あの盗人ゆゑに、難義をかけまする。その代りに鞘と柄とは、目代樣に上げませうほどに、中な身は、某に渡さつしやれませい。▲田舍者 これはかゝる迷惑でござりまする。私の、今合點がまゐつてござる。私は田舍者で、何を申せども、高聲高にござるによつて、かれが聞き取つてさやうに申すと存じまする。今度は寸の長さを彼がえ聞かぬやうに、呫いて申しませう。聞かしやれて下されい。▲目代 これもかうぢや。然らば寸尺を申せ。▲田舍者 はつ。お耳を寄せさつしやれて下されい。寸は二尺五寸でござりまする。▲すり 南無三寶、呫いてぬかいた所で、え聞かなんだ。何とせう。知らぬまでい。▲田舍者 えい、今度はえ聞くまい。疾うから呫かうものを。▲目代 やい〳〵、あの者は寸を申してあるが、汝も寸を申せ。▲すり 畏つてござる。▲目代 さあ申せ。▲すり 備前でござりまする。▲目代 それは出所の事、寸尺を申せ。▲すり 長光でござる。▲目代 それは銘、寸尺を申せ。▲すり みつはひかる、長はながいでござる。▲目代 こゝな狼狽者めが。寸を申せ。▲すり 霜月師走の薄氷でござる。▲目代 狼狽者。寸をぬかせ。▲すり ちらり〳〵

中から云々—捌き難き故中人の物とせんと也

みつは光でござる。あの盗人が知つたか。問はつしやれて下されい。▲目代　やい〳〵、あの者は、太刀の出所、銘を存じてあるが、汝も申せ。△すり　はつて、私が太刀でござりまする物を、それを存ぜぬ者がござらうか。▲目代　早う申せ。▲すり　まづ、出所は備前でござる。銘は長光、ながは長、みつは光でござる。▲目代　これは不思議な事ぢや。兩方ながら同じよに申す。不思議な事ぢや。拔いて見ませう。はあ、かれらが申す如く、備前長光でござる。不思議な事ぢやまでい。やい田舍者、して又、肌は如何樣にあるぞ。▲田舍者　はつ、肌は、霜月師走の氷の上、薄雪がちらり〳〵と、降りかゝつたが如くでござりまする。これをばあれが、え知りますまい。▲目代　やい、其處な者、あの者は肌を申してあるが、汝も急いで申せ。▲すり　彼の盗人めさへ存じましたものを、太刀の主が、それを知らぬと云ふ事がござりうませうか。▲目代　急いで申せ。▲すり　まづ、肌は、霜月師走の氷の上へ、薄雪がちらり〳〵と降りかゝつたる如くでござりまする。▲目代　やい〳〵田舍者、兩方ながら同じやうに申す。これでは埒が明かぬ。とかくこの太刀は、中から身が太刀にせう。

する。晝強盗よ。出合へ〳〵。▲目代 やい〳〵、これは何事ぞ。▲田舍者 はつ、これは所の目代様ではござりませぬか。▲目代 おう、目代にてあるが、汝等は何事を仕る。▲田舍者 はつ、目代様ならば、聞かつしやれて下されい。私が主は遠國の者でござる。買物を仕れと申し付けられて、この店で買物を仕る所へ、この盜人めが、私の持つて居りまする太刀のとりおびを、己が腰に結ひつけて、私を盜人ぢやと申しまする程に、聞き分けて下されませい。▲すり 扨々、嘘を云ふ盜人めかな。この太刀は私の太刀でござる。買物を致しまする處へ、あの盜人めが、太刀を拔いて取らうと致しまする。きつと仰せ付けられて下されませい。▲目代 これはどちらも埒が明かぬ。身がきつと埒を明けてとらせう。その内、太刀を身が預らう。▲田舍者、すり 畏つてござる。▲目代 兩方水掛合のやうに云うては、埒が明かぬ。身が分別で、明けてとらせう。やい〳〵田舍者、この太刀の出所銘は何にてあるぞ。▲田舍者 それは易い事でござる。私の太刀でござる處で、よく存じてござる。▲目代 さらば云へ。▲田舍者 まづ、出所は備前でござる。銘は長光、ながは長、

水掛合—所謂水掛論にて曲直分明せざる也

出所は備前—長船のこと

長光—藤原姓左近將監とて長船の一派也、鎌倉末葉の人以下代代あり

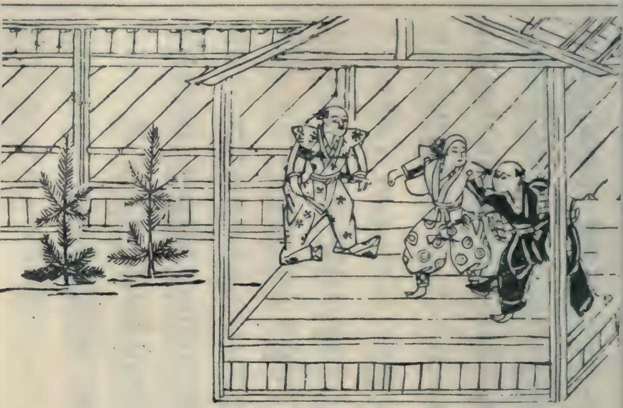
子いくら。やあ、それは高いの。ま、まつと負きや。いや、ならぬ。はつて、負きやらいでの。▲すりやあ、あれに田舍者と見えて、何やらわつぱと申す。見れば、黄金作の太刀を持つて居る。ちとたづさはつて見ませう。▲田舍者亭主、此所にあるは何ぞ。何、起上小法師ぢや。子供達の土産にこれが好からう。値は幾らで。やあ、何も高いの。さう云はずと、負けてお賣りや。これはいかな事、人の後へ何者やら來て、此太刀に目を懸けて、うろ〳〵するが、好かぬ奴ぢやまでい。まづ妥許をすかしまして、上の町へ行て買はませう。▲すり扨々利口な奴ぢや。これ、騙されまい。いや、何卒して、あの太刀をしてやりませう。▲田舍者はあ、この店も、見事な店の。この櫛箒は幾らぞ。やあ、下町も高いが、上の町も高いまでい。まつと負けて賣りや。是非とも負きや〳〵。平に〳〵。これは何者ぞ。▲すり何者とは。おのれは何者ぞ。人の大事の太刀に手を掛くるぞ。▲田舍者これは如何な事。人のとりなはを己が腰へ結ひつけて、人の太刀に手を掛くるとは、おほきい盜人めぢや。晝強盜。出合へ〳〵。▲すり人の佩いて居る太刀を、拔いて取らうと

たづさはつて―かゝりあうて

してやりませう―とつてやらう

櫛箒―櫛の垢を取去る道具

すつぱ―もと忍びの者を云ふ、こゝなるはごまのはひの類也



七　長光

三人　田舍者　半袴、太刀を提げて出る
　　　すり　北叟頭巾、括り袴
　　　目代　長袴、小さ刀

▲田舍者　某が賴うだる者は、遙遠國の者でござる。長々在京仕り、只今本國に罷下るやうにござる。某に土產物などを調へいと申され候。町屋へ行て、土產物を買はうと存ずる。まづ急ぎませう。▲すり　かやうに候者は、この邊のすつぱにてござる。このほどは打ち續き、仕合の惡しい儀ぢや。町屋へ出でて、仕合を致さうと存ずる。▲田舍者　はあよ、出いたり／＼、いろ／＼の賣物があるよ。この張

苔猿―年經たる猿
ついつくばうた―うづくまつた
捨てゝもおかれず云々―此の文句謡曲松風に出づ

樣の、いつ御意なされぬ事を仰せられた。こなたのかみ樣の姿が見たうござろなうと、仰しやれた。そこで某が、山の神が姿を小歌に謠うた。小歌人の妻見て我が妻見ればく、深山の奥の苔猿めが、雨にしよぼぬれて、ついつくばうたにさも似た、と申し謠うてあれば、どつと笑はつしやれた。又この小袖は、花子樣の形見なれども、山の神が見たらば、好い事はあるまい。只捨てう。謠捨てゝもおかれず、取れば面影に、立ちまさり、起臥分かで枕より、あとより戀のせめくれば、せんかたなみだに、ふし沈むことぞ悲しけれ。とかく汝に遣るほどに、かまへて山の神に見せるな。この座禪衾を取れ、身がいり代るぞ。▲上﨟なに山の神に見せるな。よい座禪ぢやの、そなたの座禪は。▲とのはつ、これは如何な事。▲上﨟如何な事と云ふ事はあるまい。▲との悋へてたもれ。御免々々。▲上﨟どこへ。やるまいく。

物と─或言葉をいひ出づるに先だつて軽くいふ語

おきりもの─御著物

あれへ参ると、何とやら窃にあつたほどに、不思議な事ぢやと思うて、そつとさし寄つて、内の様子を聞いてあれば、花子様の聲にて、物と仰せられた。小歌 燈暗うして、物のさびしき折ふしに、君が來るにや、と仰しやれた。これは辱い事ぢやと思うて、妻戸をほと〳〵と叩いてあれば、その時又物と仰しやれた。小歌 いとゞ名の立つ折ふしに、誰そや妻戸をきり〳〵す、と仰しやれた。そこで、某も返歌を致した。小歌 雨のふる夜に、誰が濡れて來ぞの。誰そよと答むるは、人二人待つ身か。そこで、内よりも花子様の出さつしやれて、某が手を執りて、奥の間へ連れて、扨も〳〵、雨の降るに好うござりました、まづ上を脱がつしやれいとて、おきりものを著せて下されて、色々の積る物語、舞うつ、謠うつ、遊ぶ程に、はや夜明の烏が鳴いた。まだ半時もせぬのに、夜明の烏が鳴きまする、最早御暇申すと云へば、その時花子様、物と仰しやれた。小歌 こゝは山かげ森の下〳〵、月夜烏はいつもなく、しめておよれの夜は夜中、と仰しやれた。御意ではござれども、夜も明けますれば、人も見まする、頓て参らうと申してあれば、そこで花子

されませう。▲上臈 おのれめは、殿はこはうて、妾はこはうはないか。て、打ちころそ。▲冠者 あゝ、著せませう〳〵。命の有つてこそ。著せませう。▲上臈 急いで著せい。やい冠者、殿の姿に好う似たか。▲冠者 その儘殿様でござろ。▲上臈 おう可愛の者や。汝は上京の伯母が所へ行け。殿の機嫌を見て喚びに遣らうぞ。早う急いで行け。▲冠者 畏つてござる。よき時分に人を下されませい。扨も〳〵、なさけない事に遇ひました。まづ上京へ參ろ。

▲との （小袖を打かけ、つぼをつて、掴き髮、小歌にて出づる。）小歌 綾の錦の下紐は、解けてなか〳〵よしなや。柳の糸の亂れごころ、いつ忘られぬ。小歌 はる〴〵と送り來て、面影のたつかたを、かへり見たれば、月細く殘れりたり。名殘惜しやの。はつ、某が面白きまゝに、獨言を申してある。太郎冠者が待ちかねう。まづ歸つて喜ばせうと存ずる。やれ〳〵、人の主にはなりたい者ぢや。某が申しつけた如く、すご〳〵と居まする。やい太郎冠者、今歸つてあるわいやい。何とて物は云はぬぞ。さぞ窮屈にあらうな。さりながら、汝も嬉しいと思へ。お目にかかると、まづ汝が事を問はつしやれてあるぞ。序に此程の樣子を語つて聞かせう。まづ

斟酌申す―辭退申す

居るぞ。なう腹立や。殿はどちへやつたぞ。云へ。云はずばおのれ打ち殺すぞ。▲冠者 ああ、申しませう〱。命があつてこそ。申しませう〱。▲上臈 早う云へ〱。なう腹立や。▲冠者 殿様は、花子様へ行くほどに。▲上臈 やい、おどれさへ、花子様とぬかすか。▲冠者 いや、花子めへござりました。この衾を被りて居よと、仰せられてござるほどに、いろいろ斟酌申しましたれば、刀を抜いて、斬らうと仰しやれた。厭と申せば、忽ち斬られまする。是非に及ばず、斯様に致しましてござる。私のやりましたではござりませぬ程に、命を助けて下されませい。（こゝにて泣く。）▲上臈 扨は厭と云うたれども、斬らうとしたによつて、是非に及ばなんだといふか。▲冠者 なか〱。其通りでござる。▲上臈 これは此うもあらう。又妾が頼みたい事があるが、きいてくれやうか。▲冠者 あの、仰しやる事わいやい。かみ様の御用ならば、命なりとも捨てませう。▲上臈 おう、嬉しや。それならば、この座禪衾を妾に著せて、汝が如くにして置いてくれい。▲冠者 これは、ひよんな事を仰せられる。殿様の歸らつしやれたらば、又私を殺さつしやれませう。これは御免さつしやれて下

紅梅—花子の腰元

笑止—氣の毒

頓て歸らつしやれませいや。▲との はつて、氣づかひを爲るな。▲冠者 殿樣々々、慮外ながら、花子樣へござりましたら、御内の紅梅に、傳言申したと仰しやれて下されませい。▲との まことにそれよ〳〵。今度は汝を連れて行き、紅梅に遇はせうほどに、嬉しいと思へ。▲冠者 あゝ、辱うござりまする。▲との やれ〳〵嬉しや。まづ急いで、花子樣へ參らう。中入 ▲上臈 妾が殿御は、一七日が内、座禪へ入らせらるゝとて、妾に暇を貰ひ、湯をも水をも參らぬが、餘り笑止に思ひまする。座禪の内、妾にも見舞ひまするなと仰せられてはござれども、餘り怺へられませぬほどに、よそながら樣子を見ませうと思ひまする。扨も〳〵、座禪衾を被り、窮屈にござらう。申し〳〵、その若いなりで、何の經が入りませうぞ。それでは命もない事でござる。何にてもちと參りませいなう。あゝ、きやうこつや。ものをば仰しやれいで、かぶりばかり振らつしやるわいやい。厭といふ事はござるまい。この衾を取らつしやれませい。是非とも取りまする。▲冠者 あゝ、悲しや悲しや。免さつしやれませい。▲上臈 これは扨、殿と思うたれば、おのれめは何して此處に

皺を延さう―うさを晴さう

かみ様―奥様

して、暇を貰うた。その騙しやうは、一七日が内、座禪の致すほどに、その内身が前に參るなと、いろ〳〵騙してあれば、やう〳〵合點のしておるほどに、某は花子樣へ參り、この程の皺を延さうと思ふ。汝はこの座禪衾を被つて、某が歸るまで、座禪をしてくれい。若し山の神が來て、何かと云ふとも、かぶりばかり振つて、物ばし云ふな。必ず〳〵顯れぬやうして居よ。賴むぞ〳〵。▲冠者 これは迷惑な事でござる。若し顯れましたらば、かみ樣の、私を打ち殺さつしやれう。この義に於ては、なりますまい。▲との やあ、なるまいとは、某は怖しうなうて、かみさまが怖しいか。それへ直れ。討つて捨てう。▲冠者 まづ待たつしやれませい。かみ樣より、殿樣こそ怖しうござれ。如何樣とも、御意次第に致しませう。▲との 確と、さうか。▲冠者 なか〳〵、何の詐がござりませう。▲との おうおう、可愛い者よな。これも花子樣へ參りたさに、嚇しにこそは云ひつれ、その儀ならば、萬事賴むぞよ。さあ、この座禮衾を被つて見よ。樣子を見やう。一段々々。身は、も參る。頓て戻らうぞよ。必ず〳〵物ばし云ふな。さらば〳〵、頓て歸ろ。▲冠者 殿樣々々、

花子―一名座禪衾

今めかしい事―今更めきたる事

山の神―今俗に云ふ如く妻のこと



六　花子

三人　殿　白衣、脇差
　　　冠者　半袴
　　　上﨟　小袖うちかけ出る

▲との　冠者あるかいやい。▲冠者　御前に。▲との　この程は、花子樣へ參らぬほどに、心變かとて、不審のなされうわいな。▲冠者　まことにさやうでござりまする。▲との　身は今晩、花子樣へ參るほどに、汝を賴みたいことがある。きいてくれうか。▲冠者　これは今めかしい事を御意なされるものかな。何なりとも仰せつけられませう。▲との　おう、嬉しいものかな。いや別の義ではないが、内の山の神を騙

いふ―原本ゆへに作る

どしに参ろ。これも句よ。▲との 殿様は御句に詰つて、背中を叩きあて句をなされまする。
▲との 秀句までをでかした。はつといふ聲にも汝怖よかし。▲冠者 啄木腹立つりや鶫喜ぶ。
▲との 何でもないこと、退り居れ。えつ。▲冠者 はつ。

山吹の云々—古今集素性の歌
ばんば—馬場也

れる佛とぞ見る。▲との 山吹の花摺衣主は誰そ。▲冠者 かうもござらうか。問へど答へず口なしの花。▲との 黒きものこそ三つ並びけれ。▲冠者 かうもござらうか。中は子か右や左は親烏、黒きものこそ三つ並びけれ。▲との やい冠者。山王は、程遠いかいやい。▲冠者 即ちこのばんばを越えれば、さうでござる。▲との 手水おくせい。▲冠者 はつ。▲との 汝もそれで拜め。▲冠者 はつ。▲との やい冠者、山王のお前で、一句致そ。▲冠者 一段でござろ。▲との かうもをりやらうか。山王の前の鳥居に丹を塗りて。▲冠者 はつ、かうもござらうか。赤きが顏の色にこそ似れ。▲との 退り居ろ。憎い奴の。猒といふ酒をくれ居つて、顏の赤いが可笑しいか。▲冠者 いえ、殿樣の面の事ではござらぬ。お猿樣のお顏のことでござる。▲との いよ〳〵のことをぬかす。某がは面、猿がは顏とは。▲冠者 そのお事でござる。今日は山王の御緣日でござる。猿は山王の使者でござり、まづ崇まへてござる。▲との ふん、これはかうぢややい。汝と某と、千日千夜、詰め合ひを云うたとも、埒はあくまい。あの向なる一本薄まで、飛び懸るうちに、はや句を以て參ろ。▲冠者 早句は迷惑にござる。▲との めいわく

うみわたる—海に熟する意を掛く

かた下にかた〳〵。▲との上もかた〳〵下もかた〳〵。▲冠者かうもござりませうか。▲との何と。▲冠者空木を本末たゝく啄木鳥、上もかた〳〵下もかた〳〵。▲とのやい其處な奴ちつとはおのれも、負け居つたがよいな。▲冠者いや負ける事はなりませぬ。▲とのおのれがやうな奴は、難句を以て参ろ。▲冠者難句、迷惑にござる。▲との迷惑ともに参ろ。かうもをりやらうか。西の海千尋の底に鹿なけば。▲冠者かうもござりませうか。鹿子斑に立つは白浪。▲との奥山に船こぐ音の聞ゆるは。▲冠者申し殿様、最前、西の海の鹿をば、山へやらつしやれ、奥山の船をば、西の海へやらつしやるれば、よい句が二つござりまする。▲との成らざ成らぬと云へ。▲冠者いえ、つけまする。▲との急いで付けい。▲冠者今のは何と。▲との奥山に船漕ぐ音の聞ゆるは。▲冠者かうもござりませうか。四方の木の實やうみわたるらんと、致してござる。▲との一段出來した。おのれが様な奴には、青黄赤白黒、五色に問はうず。かうもをりやらうか。年寄の白髪に紛ふ綿帽子。▲冠者かうもござらうか。飛ぶ白鷺は雪にまがふか。▲との蓮の葉の青きが上の青蛙。▲冠者かうもござらうか。緑青塗

山王—近江の日枝神社也原本三王とあれど今改む
うしよ—來れ

ておぢやる。どれ〱。今日は山王の縁日。山王へ向けて社參する。▲冠者 御供に參りませうか。▲との ふん、して、供をせまいといふことか。▲冠者 あ、いや、參りまする。▲との うしよ。その上、道すがらの句でおぢやる。句にお負きやつたら松を取るぞ。▲冠者 畏つてござる。▲との かうもをりやらうか。後なるものよしばし止まれ。▲冠者 あら、心利や。▲との やい其處な奴、なぜにおのれは、それに休んで居るぞ。▲冠者 そのお事でござりまする。しばし止まれと御意なされましたによつて、是に休んで居りまする。▲との 句でをりやる。▲冠者 句なら句と、疾う御意なされいで。かうもござりませうか。▲との 何と。▲冠者 二人とも渡れば沈む浮橋よ、後なる者よしばし止まれ。▲との おう 句は出來た。その腕は何事ぢや ▲冠者 仕方でござりまする。▲との 仕方置き居ろ。上にかた〱下にかた〱。▲冠者 かうもござりませうか。ひと手矢を、片手は天へくりあげて、上にかた〱下にかた〱。▲との 上にかた〱下にかた〱。▲冠者 申し殿樣。夫は最前の句と似た樣なものでござる。▲との 成らざならぬといへ。▲冠者 いや、付けまする。三日月の水に映らふ影見れば、上にかた

つまり居つた—窮すること

答和—上句下句の附合

の御酒がござりまする。一つあがりませう。▲との 退り居ろ。酒は飲みに來ぬ。▲冠者 そのお事でござりまする。是を參りますれば、富士禪定なされたと同じ事でござりまする。▲との その儀ならば、一つ飲まう。急いで持つて來い。▲冠者 はつ。やい〳〵、女ども、頼うだお方のござつた。酒を出せ。何、酒がない。その土器色も、茶の袷も、持ててちやつと代へて來い。▲との 太郎冠者めがいかうつまり居つたと見えた。▲冠者 はつ、一つあがりませう。▲との ふん、持つて來たか。新盃ぢや。一つ飲まう。やい冠者、聞くか。これにつけて、答和を出さうほどに、句におつきやつたらよし、句をおつきやらぬにおいては、松をば根拔にするぞ。▲冠者 はあ。▲との かうもをりやろか。手に持てる土器色の古袷。▲冠者 燗の加へて參りませう。▲との 急いで加へて來い。▲冠者 はつ。やい〳〵女ども、汝が物を高聲に云ふにより、殿の聞かつしやれて、答和になされた。以來をたしなめ。はつ、加へて參りました。▲との して、今のはつけるか。▲冠者 何となされてござる。▲との 手に持てる土器色の古袷。▲冠者 酒ごとにやるつぎめなりけりと、致してござる。▲との おう、出來

さら〱―障子などを開く樣子

見やげ―見上げ

二王三郎―宗三郎清綱周防吉敷の刀匠應永比の人

▲冠者 扨も〱幼いは、何を仰しやれうも存ぜぬことでござる。人のをばことづかりましてござりました。▲との ことづかり松なりとも、見る分な苦しうあるまい。急いで見せい。▲冠者 畏つてござる。これへござりませう。さら〱。あの見付の松でござる。▲との やい冠者。扨も〱、見やげましておぢやる。庭がいかう見事でをりやる。某も汝が留守の間に、庭を造つた。あの松を直したい所があるほどに、急いであれを抜いで來い。▲冠者 いや、あれは人のでござりまする。▲との その儀ならば、うちものにいたそ。▲冠者 それは何とござりませうぞ。▲との 代物といへば同心でおりやるの。何とがな。かやうな、はあ、思ひ付けた。二王三郎の、小反刃の長刀と代よ。▲冠者 はつ、身共も錆びてはござれども、一ふり持つて居りまする。▲との はあ。したらば、鹿毛の馬と代よ。▲冠者 これは好い代物でござれども、繋ぎ所がござりませぬ。▲との この家に繋げさて。▲冠者 名馬でござれば、すは驅け出してござるならば、いつつに引き崩しませうものを。▲との あゝ、これもかうぢや。その儀ならば、最早かう戻るぞ。▲冠者 申し殿樣。▲との 何ぢや。▲冠者 これに、富士

かそうてーそつとの意
富士禪定ーもと禪定は寂靜三昧の意こゝは富士登山して行をなすこと
はあー恐れ入る也

富士松ー落葉松
かな法師ー子供のこと

さる下人の事でござれば、下されまいと存じ、かそうで、富士禪定致してござる。▲との して、富士禪定すれば、主に暇を乞はぬ法でおりそふか。▲冠者 はあ。▲との やれ扨、唯今手討にも致したいと存ずれど、富士禪定致したと申し、一つは神の御事、又富士の樣子も承りたうござり、まづ差し置かうと存ずる。やい其處な奴、立ち上れ。許す。▲冠者 それは誠でござりまするか。▲との おんでない事。▲冠者 あら心安やの。▲との やい其處な者、只今の心は何とあつた。▲冠者 されば、いつ〳〵もよりも、お氣色が違ひましたによつて、すはお手討にも遊ばすると存じ、身の毛をつめてござる。▲との 以來をたしなめ。その上問ふ事がある。つつとこれへ寄れ。▲冠者 はつ。▲との して何と、富士の樣子は、何とあるぞ。▲冠者 その事でござりまする。日本一のお山でござれば、參り下向の人々は、峯から谷へひきもちぎらず、夥しい事でござる。▲との おう、さう有らうわいやい。それにつき汝は、富士松とやらをば拔いで來た。あるか。ちつと見せい、▲冠者 いえ、某が事ではござりますまい。▲との 嘘をつかぬ者が云うた。▲冠者 誰が申しました。▲との かな法師が云ふわ。

おりそひて一行きたること、おりは下りそひては候ひての約なるべきか

五富士松

二人　殿　長袴、小さ刀
　　　冠者　半袴

▲との　罷出でたるは、あたりの者でござる。さやうにござれば、一人使ふ下人めが、某に暇をも乞はず、何方へやら、おりそひてござる。聞けば、夜前歸りたる様子でござるほどに、かれが私宅へ立ち越え、折檻を加へうと存ずる。まづ、そろ〱參らう。やれ扨、憎い奴でござる。某に暇と申すれば、五日十日は苦しうもござらぬ。以來の爲もござる。思ふ様折檻の致そ。いや、程なう彼が私宅はこれでござる。某が聲と知つてござるなら、定めて逢はぬでござらう。作聲を致し、喚び出しませうず。ものも。お案内。▲冠者　やら奇特や。表に案内がある。案内は誰そ。はつ、殿様でござりまする。▲との　退り居ろ。主の聲をば聞き紛ふならば、不奉公ではあるまいか。その上、某に暇をも乞はず、何方の遊山であつたぞ。▲冠者　その御事でござりまする。殿様に御暇を申したりとも、一人仕は

なかつたか。▲武悪 されば〳〵、其方の蔭で嬉しうおぢやる。思ひもよらぬ路銭までを貰うた。▲冠者 急いで落ちさせませ。▲武悪 心得ておぢやる。後を頼む。さらば〳〵。

いで—さあ、と誘ふ語

てうぎ—調戯か今云ふ狂言の意か

せう。素襖、袴、扇までをよこさつしやれませいと仰しやれました。▲大名 をゝ、心得た心得た。やい太郎冠者、脱がしてくれい。皺がよりましたれども、召さつしやれて下されいと申して、これを持つて行け。冠者。▲冠者 これや武惡、取つて行け。▲武惡 なう〳〵冠者殿、取るものは取りましたが、殿の直に御目に掛つて申せと、仰しやれた事がござる。▲冠者 申し〳〵、殿樣、武惡が直に申したいと申しまする。▲大名 やあ、何とした事ぢやな。▲武惡 申し殿樣。▲大名 何でござるぞ。▲武惡 祖父御樣の仰しやれまするのは、狹い娑婆にござりませうよりも、廣い所へお供して來いと、仰しやれました程に、どうござろと、いで、ござりませう。お供して參ろ。▲大名 やい〳〵武惡、祖父御樣に、狹うても此所が好うござる、つつと今度參らうと申してくれい。▲武惡 どうござつても、身共がかう申すからは、手を引いてなりとも、連れまして參らねばなりませぬ。▲冠者 申し殿樣、あの態ならば、武惡めが手を引いて參ろほどに、まづ、急いで逃げさつしやれませう。▲大名 やい、それよ〳〵。冠者も逃げい。▲冠者 申し〳〵、さればこそ殿は逃げられた。武惡、好いてうぎで

娑婆云々ー曲がかり

いくさつしやれーおこさつしやれ也

の網が來さつた。覺悟した。▲冠者 なう〳〵、急いで樣を變へて出さしませ。幽靈のやうにして。▲武惡 なか〳〵。心得ておぢやる。中入 ▲冠者 申し殿樣、ござりまするか。今のは武惡がやうにござりましたが、追つ懸けて參ると見失ひましてござる。▲大名 やい〳〵冠者、あれや〳〵、又出居つたわ。▲冠者 扨は、も、幽靈に紛ひはござりませぬ。▲武惡 白小袖を著て、白小袖を打かけ、つぼをつて、杖をつき、さばき髮、額に紙を當てて出る。娑婆にも行かず、冥土にも、六道の衢にまよふ。▲冠者 あゝ、申し申し、武惡が亡靈には、隱れもござりませぬ。▲武惡 申し〳〵。▲冠者 あれ〳〵、武惡が呼びまする。▲大名 行て何といふぞ、聞いて來い。▲冠者 いや、行で殿樣聞かつしやれませい。▲大名 われ行て聞いて來い。▲武惡 申し〳〵、祖父御樣からお使に參りましたのに、好い所で御目に懸りました。朝夕閻魔樣へ、出仕をなされまするのに、御太刀が無うて、迷惑なされまする。身どもに參つて、取つて來いと仰しやれましたほどに、いくさつしやれませい。▲大名 やい〳〵、館でならば、熨斗つけを進ぜうずれども、道で逢うた儀でござるによつて、さし荒したれども、これを進ずると申してくれい。▲武惡 さやうには申しま

等閑なうして―隔てなく懇意にすること

物忘れ―うさ晴し

六道―死人のあの世への分れ道

は、やい太郎冠者、常に等閑なうして、甲斐もない、めこ子供にも見せて、内では討つてくれいで、曲もないものぢやと申して、いかう恨みましてござる。扨も〱、奉公と云ふものは、物憂いものでござりまする。少しの違がござると、あれでござる所で。▲大名 やい、まことに汝が云ひつる如く、思へば家久しい者をば、むざと討つて捨てた事ぢや。▲冠者 殿様も、さやうに思はつしやれまするか。▲大名 汝が泣くので、おれも討つまいものとは思へども、最早討つた者は、戻るまいほどに、身も涙を止めるぞ。われも泣き止め。やい、かうして居たらば、面白い事もないほどに、いざ来い。物忘れに、清水へ参ろ。汝も供に来い。▲冠者 畏つてござる。▲大名 はて扨、思へば惜しいことをしたわいやい。▲冠者 御意の通りでござりまする。▲大名 やい太郎冠者、彼の向から来るは、武悪ではないか。急いで見て参れ。▲冠者 あゝ、此所は六道でござりまする處で、迷うてがな居るものでござろ。行て見て参りませう。やい〱、今殿の見付けられたが、急いで落ちはせいで。▲武悪 己もさて、一期の名残ぢやと思うて、清水へ参つて見つけられた。天

鰐の口云々—危き所を遁れたる也

手者—腕きゝ

ぶちはなして—首を也

でかいた—えらい事をした

まことでおぢやるか。▲冠者 なか〳〵。▲武悪 したら、後の儀を頼む。▲冠者 片時も急いで落ちさしませ。▲武悪 やれ扨、鰐の口を遁れた。最早今が都の名殘でおぢやるほどに、清水へ暇乞に參りませう。入中 ▲冠者 まづ急いで殿の前へ參らうず。殿樣ござりまするか。▲大名 してやい〳〵、何とした。討つて來たか。▲冠者 なか〳〵、討ちましてござります。▲大名 して何として討つたぞ。▲冠者 その御事でござりまする。彼奴は手者と思はつしやれませい、又身どもは、何にも存ぜぬ者の事でござれば、騙さずばなるまいと存じ、朋輩衆の仰しやるゝ、殿の御前へ、言ひ直さう程に、殿も川狩に出さつしやるほどに、其方も急いでお出やつたら好からうと、申してござれば、それを序に言ひ直してくれうと、仰しやる事かとて、嬉しがつて、何が川へでまして、深い所で草寄せを致します處をば、身どもがこのお太刀でもつて、何がござらうぞ、水もたまらず、ぶちはなしてござる。扨も〳〵、よう切れるお太刀でござる。▲大名 よう切れたか。▲冠者 なか〳〵、よう切れましてござる。▲大名 でかいた〳〵。やい、して、別に何も云ひは爲なんだか。▲冠者 そこで申しますのに

す－魚の寄るところ
覺悟せい－斬らんとする也
鳥の目を云々－殘忍なるふるまひの譬
曲もない－つまらないこと
めこ－妻

あ、好いすを見付けておぢやる。いかいことの雜魚でおぢやる。なう〳〵、失念した事がおぢやる。餘り嬉しいまかせに、網をも持たずに、ひよいと出たわいの。▲冠者 なう〳〵、何としたものでおぢやろ。▲武惡 あゝ、身が草寄せといふ事を知つておぢやるほどに、さあさあ、その方から逐うてくれさしめ。▲冠者 心得ておぢやる。▲武惡 身はこれからおして行くぞ。▲冠者 殿の仰ぢや。覺悟せい。▲武惡 やい太郎冠者、汝が云ふ事まことと思うて、ひよつと出たれば、まことに鳥の目を縫うて放したやうなことをして、曲もないものぢや。宿でも、かうと云うてくれるならば、めこ子供に、言ひ置きたい事もあるのに、曲もないものぢや。是非に叶はぬ。急いで討たせませ。▲冠者 其方が歎きやるのをば思うては、今日は人の身の上、明日はわが身の上、世の中に、宮仕などをせうものではない。▲武惡 物を思はせずとも、早う討つてくれいやい。▲冠者 いやゝ、討たうとは思うたれども、何として身が討たうぞ。（二人共に泣く）冠者 急いで落ちさせませ。▲武惡 いや〳〵、物思はせずとも、早う討つてくれさしめ。▲冠者 命が物種ぢや。急いで落ちさしませ。▲武惡 それは、して、

さしまへ―刀のこと
覺えが云々―切味覺束なし
不興を蒙り―叱られること
覺えの者―ころなるは重用せる者の意
お前を直さう―好きやうに取りなさう

とらずば、首を打つて來い。▲冠者 畏つてござる。さりながら、身共がさしまへは覺えがござらぬ。御前の御太刀を貸さつしやれませう。▲大名 をゝ。これや〳〵、急いで、討ち損なはぬやうに、討つて參れ。▲冠者 畏つてござる。扨も〳〵、迷惑な事を言ひ付けられた事かな。まづ參らずばなるまいが。程なうこれでござる。ものも。お案内。▲武惡 やら奇特や。聞いたやうな聲ぢやが、案内は誰そ。いや、太郎冠者か。▲冠者 なか〳〵。内にござるか。▲武惡 やい、太郎冠者、殿の不興を蒙り、汝が來たとても、心はゆるさぬ。▲冠者 はてさて、ひよんな事をおしやる。皆御朋輩衆寄らつしやれて、武惡といふ者は、家久しう覺えの者をば、斯樣にして置かつしやるのは、殿の違ひぢやとあつて、皆仰しやるのには、お前を直さうと仰しやるほどに、其方は急いで川狩に出やつて、雜魚を取つて、御前へ持つて出やつたら好うおぢやろ。又殿も、今日は川狩に出らるゝ。そこで、御朋輩衆が、申し直さうと仰しやるほどに、急いで出やす。▲武惡 はれさて、嬉しや。その儀ならば行かうほどに、さあ〳〵、其方も來てくりやれ。▲冠者 心得ておぢやる。▲武惡 あ

覺えの者ー腕利きの者、剛の者、



四　武悪

三人　大名　立烏帽子、素襖、小さ刀
　　　冠者　半袴
　　　ぶあく　半袴

▲大名 罷出でたるは、隠れもない大名。さやうにござれば、某使ふ下人に、無奉公を仕居る奴がござる。太郎冠者を喚び出し、搦取りに遣らうと存ずる。あるかやい。▲冠者 はつ、御前に。▲大名 念なう早かつた。汝を喚び出す餘の儀でない。武悪めを、汝急いで、からめとつて參れ。▲冠者 あゝ、さりながら、あれも御館では覺えの者でござれば、えからめとりますまい。▲大名 まつこと、えからめ

居らいで、大事の主殿に大骨を折らせ、大汗をかゝす事、汝は前代未聞の曲者。この度

折檻の加へうずれども、重ねて折檻の加へうずる。其所立ちて退り居ろ。▲冠者　はつ。

水もたまらず—刀の切れ味の鋭利なる云ふ

めのと—守役

ぶんざう—豐三義安のこと

うんざうのかい—溫糟粥也即ち無菁の葉餅栗を入れ甘酒を加へたる雜炊なりと云ふ

せずしてこの刀、運の盡きばの間かや、目釘穴よりほつきと折れ、波打際にざつぶと入る。眞田は、上に呆れて居たりし處に、長尾新五新六下り合ひて見れば、武者二騎むんずと組んであり。やあ、上なるが股野か、下なるが股野か、名乘れ〳〵とありし時、下より竊に申すやう、上こそ眞田下こそ股野よと申しければ、上なる眞田が首、水もたまらず打ち落し、下なる股野を引立て、鎧につきたる塵、ほつほさつ〳〵と打ち拂うて、三人目と目をきつと見合せ、につこと笑うて立ちし處に、遙渚を見てあれば、老武者の白糸縅の腹卷に、白柄の長刀かいかうで、尾花葦毛の馬に乘り、薄の中を押し分けかきわけ、この邊に眞田殿やましますか、與市殿やましますかと尋ぬる處に、股野はきつと見て、御分は誰そと問へば、苦しうも候はず、眞田殿のめのとに、名をぶんざうと答ふ。

▲冠者　あゝ、その文藏のことでござりまする。▲との　いや、おのれが、言葉の末にて聞き取つてある。汝が食べたは、うんざうのかいであらう。▲冠者　いよ〳〵、うんざうかいでござりました。▲との　某が内にあらうずる奴めが、ぶんざう、うんざうのわけ差別も知り

川原毛—白くして土器の如き色

ほつき—打つ音と

人擇つて出す。一人は大庭が舍弟股野の五郎景久、今一人は長尾の新五新六なり。股野の其日の裝束は、いつに勝れて結構なり。肌には白き帷子に、白檀磨の臑當に、緋縅の鎧を著、同じ毛の五枚兜に、高角打つてぞ著たりける。黃金作りの太刀を佩き、二十四さいたる小烏羽の征矢、筈高にとつてつけ、塗籠籐の弓の眞中握り、これも川原毛の馬に、金覆輪の鞍おかせ、引寄せゆらりと打乘りて、揉みに揉うでぞ馳け合はせ、馬の上にてむんずと組み、兩馬が間へどうど落つる。所は難義の惡所なれば、譬へば、板屋の霰に玉散るが如く、えいやとはぬれば、ころりと轉ぶ。ころり〳〵ころ〳〵〳〵と轉ぶところは、遙谷底に轉ぶ處を、眞田が下になる。股野が下になる。然れども、眞田は力勝りのしるしにや、取つて壓へ、矢負際にむんずと乘り、腰の刀をひん拔いて、首掻けども掻かれず、取れども取られず、不思議さよと思ひ、雲透に刀振り上げ見てあれば、實にも、鮫鞘巻の鞘つまり、栗形挽げて鞘共にあり。老武者ならば、口に啣へて拔くべきが、若武者の悲しさは、冠の板に押し當てて、二打三打、ほつき、丁々と打ちければ、拔けは

精好—今の仙臺平の如き織地

尖よりも火焰の出し、さん〴〵に合戰したる所ばし食うてあるか。▲冠者 いや、さやうの物でもござりませぬ。▲との 又、晝のいくさは、まづ互角にも見えければ、夜軍になり、對手組をぞ定めける。源氏の方には、眞田の與市擇つて出す。與市がその日の裝束は、いつに勝れて花やかなり。肌には、みなじろをつて一重、精好の大口に、副將軍より賜つたる、赤地の錦の直垂を、始めてこそは著たりけり。紫裾濃の鎧を著、同じ毛の五枚兜に、高角打つてぞ著たりける。太刀は三尺三寸の、いか物造りの太刀を佩き、二十四さいたる大中黑の征矢、筈高にとつてつけ、重藤の弓の眞中握り、馬は坂東に隱れもなき、ひぐらしと云ふ名馬に、金覆輪の鞍おかせ、豹の皮のはりくらに、虎の皮の切付に、熊の皮の障泥をさし、引寄せゆらりとうち乘つて、大木戸開かせ切つて出づる。土肥の杉山に、高根を出でし月影に、打物のひらり〳〵とするのは、あれこそ晝の强者よ。やあ眞田よ、與市よと、一度にどつと感じたる所ばし食うてあるか。▲冠者 いや、さやうの物ではござりませぬ。▲との かくて平家には、眞田一騎擊たんとて、大剛の武者三

きか　腹當た　剣當に聞こ給ふて　に[illegible]にんにし食ふておえた　おに[illegible]

ぱし食うてあるか。▲冠者　いや、さやう長い物ではござりませなんだ。何やら、旨い物をたべてござる。▲との　退り居ろ。汝がやうな胡亂な奴は、何も物によそへては覺えぬか。▲冠者　今思ひ當つてござりまする。殿樣の四疊半座敷へ、とり籠らしやれまして、讀まつしやれまする物の本の内に、確と有るかと存じまする。▲との　某が好いて讀むのは、盛衰記を好いて讀む。紙二三枚讀まうずる間、有らばあると、頓て答へ。床几。▲冠者　はつ。▲との　扨も、石橋山の合戰と云つぱ、頃は治承三年八月朔日の事なるに、兵衞佐頼朝は、北條蛭が小島を打つ立ち給ふ。僅御勢は、三百餘騎には越えざりしを、土肥の杉山は、要害よき所なればとて、城郭を構へ籠り給ふ。茲に平家の侍に、大庭三郎と云つし者、これは三千餘騎の兵を引具して、石橋山一ばいかわよご六のだんに陣を取る。平家の勢は三千餘騎。源氏の勢は三百餘騎。三千餘騎と三百餘騎と、物によく〳〵譬ふれば、十分が一分にも足らねども、人の腑は一つに揃うて追つつまくつつ、鎬をけづり鍔を割り、鋒

しやうれうかん—不詳
點心—間食の料
糟鷄—蒟蒻を切りて淡き醬油にて煮る
けいらん—鷄卵ならん
けしめん—芥子麪ならん小麥粉を固くねりて碁石の如くし煎豆の粉を衣に掛くと云ふ
天神—點心の語路にて云ふ
庭訓—庭訓往來

べたるものは、菓子の類であらう。▲冠者 はつ、さやうの物でもござりませう。▲との それ菓子の部類にとりては、蜜柑か、柑子か、橘か、金柑か、榧か、椎か、榛か、石榴か、胡桃か、搗栗か。さては苦い所ばし食うたか。▲冠者 いや、左樣の苦い物ではござりませぬ。何やら、旨い物を食べてござる。▲との 扨は、汝が食べたは、點心の部類であらうぞ。▲冠者 はつ、さやうな物でござりませう。▲との 點心の部類にとりては、索麵か、糟鷄か、溫飩か、けいらんか、けしめんか、饅頭か。さては、北野の天滿天神ばし食うてあるか。▲冠者 いや、さやうの、神臭い物でもござりませなんだ。▲との 扨は、汝が食べたるは、讀物の類であらう。▲冠者 さやうの物でもござりませう。▲との それ、讀物にとりては、庭訓か、式狀か、古今、萬葉、伊勢物語、論語、朗詠、方等十二部。お經ばし食べてあるか。▲冠者 いや、さやうの佛臭いものではござりませなんだ。▲との 扨は、汝食べたるは、武具の類であらう。▲冠者 さやうの物でもござりませう。▲との それ、武具の道具にとりては、太刀刀か、鎗か、長刀か、鐵砲か、弓か、刺股か、鎌か、棒か、十文字か、わきび

はつたと—確と

さんぼうぜん—不詳

砂糖やうおんかん—砂糖羊羹ならん

鼈羹—山の芋を原料とす等羊羹か

ちくれうかん—竹葉羹か

大寒小寒—羹の語路にて云ふ

三　文藏

二人　殿　長袴、小さ刀
　　　冠者　半袴

▲との　御存じの者。太郎冠者あるかやい。▲冠者　お前に。▲との　汝は臺所もとにて、何やら旨い物を食べたといふが、何を食べてあるぞ。▲冠者　いや、何やら旨い物を食べてござる。▲との　何やら旨い物食といふが、何にてあるぞ。▲冠者　いや、はつたと忘れてござる。▲との　汝は伯父御様の方へ、いつ時分に參つたぞ。▲冠者　元日早天に參つてござる。▲との　そんならば、羹の部類であらう。▲冠者　さやうな者でもござりませう。▲との　したらば羹の部類を、一つ二つ云ひ立てて見やう程に、有らばあるとやがて答へ、▲冠者　はつ。▲との　それ、かんの部類にとりては、さんぼうぜんには、砂糖やうおんかんか、鼈羹か、しやうれうかんか、ちくれうかんか、へつかんか、霜月師走の大寒小寒ばし食べてあるか。▲冠者　その樣な物でも、ござりませなんだ。何やら、旨い物を食べてござる。▲との　さあらば、汝が食

ごろぜ―御覽ぜよ
山の端にかゝつた―日が西山に沒せんとする也

通さぬ。▲道行人 はてこれは、氣の氣な事かな。國には里がなうてかなはぬものぢや。里の名を云うて見よ程に、思ひ當つたら答やろ。▲冠者 あゝ、其方は才覺な人ぢや。急いでおしやれ。▲道行人 えい〱、いの字の付いた里の名〱。いの字のついた里ならば、生駒の里の事かの。▲大名、冠者 それにても候はず。思ひもよらぬ里の名。▲道行人 神變や。奇特や。扨は何處の里ぞの。いの字の付いた里なら、伊勢寺もとの事かの。▲冠者 おう、それそれ、その伊勢寺もと〱。▲大名 さらば吟じて見よ。▲大名、冠者 こひしくばたづねてきませい伊勢の國、いせ寺もとに、住むぞわらはは。▲道行人 これまでなれや關守、さらば暇申さん。▲大名、冠者 あら、名殘惜しやの。▲道行人 こなたも名殘惜しければ、あの日をごろぜ。山の端にかゝつた。▲三人 めい〱ざらりと、梅はほろびて落つるとも、松は枝に、とまつた〱。ほつぱい、ひやろ、ひつ。

思ひもよらぬ云々ーふしがかり以下倣之

いで詰らうとーいを萠として燈心に續く

つがしやーつがせよ

歌の後をついで通りやれ。▲道行人 その使は、何者がしたぞ。▲冠者 この賢い太郎冠者。▲道行人 賢い太郎冠者さへ知らぬもの、道行人が知らう事は。退け。通ろ。▲大名 太郎冠者太郎冠者、歌の後をつがずば、通すな〳〵。▲道行人 これは迷惑な事かな。その歌の先は何と。▲冠者 戀ひしくば、問うても來ませい、いゝまでは覺えたが、後は忘れた。▲道行人 これはいの字の附いた國であらうほどに、一つ二つ云うて見ませう。思ひ當つたら答へさつしやれい。▲冠者 然らば云うてごろんじやれい。▲道行人 思ひもよらぬ關守になかうどするぞをかしき。▲地 をかしき。▲道行人 えい、いの字のついた國の名〳〵、いの字のついた國ならば、伊賀の國のことかなう。▲大名、冠者 えい、それにても候はず。思ひもよらぬ國の名。▲道行人 扨は何處の國ぞの。いの字のついた國なら、伊勢の國の事かなう。▲冠者 おう、その伊勢の國〳〵。▲大名 さあらば吟じて見よ。▲大名、冠者 戀ひしくば尋ねて來ませい、伊勢の國いゝ。又いで詰つた。なう〳〵、又いで詰つた。▲道行人 いで詰らうと、とうしんで詰らうと、某は急ぎの使ぢや。又後から來る者につがしや。▲冠者 厭でも應でもつがねば

氣の毒—迷惑の意

鳥目—錢のこと

申し妻—乞ひ願ふ妻也、申し子と云ふと同じ語法

ひしくばたづねてきませせい、いゝいと仰しやれたと思ひましたれば、つい歸らつしやれてござる。▲大名 そのいゝの後は無かつたか。▲冠者 何やらまだ、ぐち〳〵と仰しやれてござる。▲大名 これは歌さうな。何とした物であらうぞ。氣の毒な事ぢや。思ひ付けた事がある。この所に關を据ゑ、何者なりとも、この後をつがせうと思ふ。▲冠者 天下太平めでたい御代に、關と事はござるまい。▲大名 鳥目を取らぬ程に、苦しかるまい。▲冠者 まことにさうでござる。▲大名 さらば此所に關を据よ。▲道行人 かやうに候者は、早使の者に候。急ぎませう。▲冠者 さあ掛つた。▲道行人 掛つたとは、鳥獸のやうに、何事ぞ。▲冠者 これは關でおぢやる。▲道行人 天下太平めでたい御代に、關とは何事ぞ。▲冠者 されば、鳥目を取りませぬよ。▲道行人 まづ安堵致いた。何の爲の關にておぢやるぞ。▲冠者 その事でおぢやる。あれに立たせられたは、某が賴うだ人でおぢやる。あの年まで、定まる妻がないによつて、清水の觀世音に申し妻をしてあるが、案の如く妻を下された。この上﨟の、歌をよまれ、どちへやらおぢやつた。この歌の後をつがせう爲の關でおぢやる。急いで、

譜代の者—歴代仕る家人

伊勢寺—飯高郡ある村名

こひしくば—此の歌ふしにかゝる

こゝな狼狽者めが。ありがたい御夢想が有つたわ。汝が妻にならう者は、西門の階に居るぞ。連れて歸れと仰せられた。いざ西門へ行かう。▲冠者 これはめでたい事かな。急いでござりませい。▲大名 あれや、あれに立つてござるわ。急いで連れまして來い。▲冠者 畏つた。殿樣々々、こなたござりませい。私は恥しうござる。▲大名 何の恥しい事が有るぞ。急いで負うて參れ。▲冠者 畏つた。いかに上臈へ申す。輿乗物を進じませうけれど、某が背中を乗物と思召し、これへ負はれさつしやれい。私は、殿樣の譜代の者でござる。今よりは目をかけて、可愛がつて下されい。早う負はれさつしやれいませい。▲上臈歌 こひしくばたづねてきませせい伊勢の國、伊勢寺もとに住むぞわらはは。▲冠者 はつて、その物語は、晩の寢物語になされい。早う負はれさつしやれい。これは如何な事。今上臈は、何方やらお去ねやつた。殿樣々々、ござりました〳〵。▲大名 どれ〳〵、對面せう。▲冠者 あちへござりました。▲大名 それは何事を云ふ。▲冠者 さればその事でござる。なにやら小言を仰しやれて、何方へやらござりました。▲大名 それは何と仰しやれた。▲冠者 こ

子安の塔ー清水寺門前に在り天平二年建立本尊觀音也泰産寺といふ
おかつ様ー奥様
たはけー痴者
よものー夜者にて夜番か又よい者甘い奴の意か

い。▲大名 それはこれに限らず、皆人毎に、惡口を云ふものぢや。氣にかけな。急いで供を仕れ。▲冠者 殿様々々、これは子安の塔でござる。拜まつしやれい。▲大名 はて、まづ清水へ參ろ。急げ。▲冠者 はて、無分別な事を仰しやる。おかつ様の喜びさつしやる折に、安う生れさつしやる、子安の塔ぢやほどに、拜まつしやれいと云ふ事でござる。▲大名 おうおう、めでたし／＼。下向に拜まう。急げ／＼。はや御前ぢや。まづ鰐口に取り付かう。ぢやぐわん／＼。いかに申し上げ候。某定る妻を持ちませぬ。定る妻を授けてくだされい。あら、尊とや／＼。やい冠者、身はこゝにて通夜を致さう。汝は番をして、鷄が唱うたら起せ。▲冠者 これは如何なこと。主は寝て、某は起きて居つて番をせい。これが淋しうて、起きて居られうか。殿様々々。▲大名 何事ぢや。鷄が唱うたか。▲冠者 はつ、鷄が唱うやら、今欠伸しました。▲大名 こゝなたはけは、欠伸はいらぬ。唱うたら起せ。▲冠者 人をよものにするまでい。あはゝ。それを知らぬ者があらうか。いや／＼、某も眠たい。ちと睡みませう。▲大名 はあ、太郎冠者々々々々々。▲冠者 はつ、鷄が唱ひましたか。▲大名



二　伊文字

四人

大名　立烏帽子、素襖、袴、小さ刀
冠者　半袴
道行人　括り袴
上臈　小袖かづき出づる

▲大名 太郎冠者あるか。▲冠者 御前に。▲大名 汝が知る如く、この年になるまで、定まる妻がない。清水の觀音は、妻觀音と承る。これへ參り、定まる妻を申し受けうと思ふ。供を仕れ。▲冠者 これは一段でござらう。皆人の云ひまするは、そちの主は、牛か馬の生れ變であらうと申しまする。心はと問へば、定まる妻がない程にと申しますをば、私も口惜しうござりまする。急いで參らつしやれませ

むげないーすげない

しなしたるなりかなー土鍋の破れて失敗せるを云ふ

つてござる。さりながら、あの羯鼓を貸せと、仰しやれて下されい。▲目代 いや心得た。▲羯鼓 いやはや、これで承りました。面々の物で打てと仰しやれませい。したが、何は嫌、彼は嫌と申すれば、彼奴がむげないと存ぜうほどに、この桴は貸すと仰しやれませい。▲目代 をゝ、やい〳〵、羯鼓はならぬ、桴は貸すといふぞ。▲わさなべ 扨は彼奴も、ちつとは心が直つたと見えました。▲目代 急いで打て。▲わさなべ 畏つてござる。はあこゝな。▲目代 何としたぞ。▲わさなべ 心が直つたと存じたりや、破らする工でござつた。▲羯鼓 ちつと、さうもおぢやるまい。▲わさなべ 申し〳〵、出て見よ。打つとおつしやれませい。ほつひや、とうろ、ひやり。とうろ。ろうろ。やつと打ましてござる。▲目代 おう、一段打つた。▲羯鼓 申し〳〵、あの者も見事打つてござる。今度は相打に致しませう。▲目代 やい〳〵、急いで相打に打ちませい。▲わさなべ 畏つてござる。▲二人相打 ほつひや、とうろ、ひやり。とうろ。ろうろ。▲わさたべ 南無三寶、しなしたる形かな。

面々の物―各自の物、轉じて自分の物

せうが、あのわさなべ賣も振らうか、問はつしやれませい。▲目代やい〳〵、あの者は棒を振らうといふが、汝も振らうか。▲わさなべあの者さへ振りませうならば、何とやうにも振りませう。まづ、急いで振れと仰しやれませい。▲目代これへ出て振りませい。▲羯鼓畏つてござる。いや、えい〳〵、いやつと振つてござる。▲目代やい〳〵、汝も急いで振れ。▲わさなべ畏つてござる。あの棒を貸せと、おつしやれて下されい。▲目代心得た。やい〳〵、あの者に棒を貸せ。▲羯鼓面々の物で振れと仰しやれませい。▲わさなべあゝ、承りました。きつい奴でござる。わさなべでなりとも振つて見ませう。これへ出て見さしませい。▲羯鼓急いで振れいの。▲わさなべいや、えい〳〵、いやつと振つてござる。▲目代はあ、見事振つた。▲羯鼓申し〳〵、某は羯鼓を打ちませうが、彼奴も打たうか。問はつしやれませい。▲わさなべ申し〳〵、承つてござる。急いで打てとおつしやれませい。▲目代やいやい、あの者は打たうと云ふ程に、急いで打て。▲羯鼓畏つてござる。えい〳〵、打つてござる。あれにも急いで打てと仰しやれませい。▲目代汝も急いで打て。▲わさなべ畏

ざる。まづあの者に、有らば云へと、御意なされませい。▲目代心得た。▲羯鼓申し〳〵。承つてござる。即ちこの羯鼓などと申するは、兒若衆達が、羯鼓遊、八桴などと申してござりまする。その上、炮碌遊などと申す事ござりますまい。▲目代おう、これもかうぢやわいやい。汝聞いたか。▲わさなべなか〳〵、承りました。如何ほどあれがあのやうに申すとも、この中な物をば參らずば、兒若衆達も、羯鼓も八桴も、いることではござりますまい。▲目代おう、これもかうぢやわいやい。やい〳〵、あの者が言分を聞いたか。▲かつこなか〳〵、承りました。又この羯鼓は、古歌にも引いてござる。かつこ苔深うして、鳥驚かずと申して、世話にのつてござるが、あの土炮碌がのつてあるか、問はつしやれませい。▲わさなべ申し〳〵、あの者が、世話にのつてあると申すれば、某ものつてござる。まづ、高きやにのぼりてみれば煙立つ、民のかまどは賑ひにけりと、申す時には、これものつてござる。▲目代扨は、系圖は組んで落ちた。して、も、系圖はないか。▲羯鼓いや、これから勝負得に致しませう。▲目代おう、これが一段であらうぞ。▲羯鼓身どもは棒を振りま

この中な物―食物のこと

かつこ苔深うして―かつこは實は諫鼓なり大江音人の詩に諫鼓苔深鳥不驚

世話にのつて―人口に膾炙して

組んで落ちた―好い取組となつて落着せる也

▲目代 いや、所の目代ぢや。▲羯鼓 はあ、存じませなんでござる。お禮申しまする。▲目代 禮まではいるまい。何事なれば。▲羯鼓 その御事でござりまする。一の棚を飾つてござれば、あの者めが棚先に居つて、退くまいと申すによつて、かやうの通りでござりまする。

▲わさなべ 申し〱、あの羯鼓張が申す事は、僞でござる。某が、一の棚を飾つてござる。その證據がござる。札を拜領致してござる。▲羯鼓 申し〱、あのわさなべ賣めが申すので知れてござろ。身どもは、夜深に參じたによつて、札が何處に揚つてござるも、存じなんでござる。▲目代 ふん、これもかうぢやわいやい。▲羯鼓 それにつきまして、この羯鼓などの傍に、何ぞよ、土炮碌などは、飾らする物ではござらぬ。づつと、市末へやらしやれませい。▲目代 して、その羯鼓には、系圖があるか。▲羯鼓 なか〱、系圖がござる。▲目代 その義ならば、どちらなりとも、系圖に負けた方が、市末へ行たが好いわ。▲羯鼓 さやうでござりまする。まづ、あの土炮碌にも、系圖があるか、問はつしやれませい。▲目代 心得た。▲わさなべ 申し〱、これで承つてござる。このわさなべ樣には、殊の外系圖がご

わさなべ―土鍋炮碌の類

退かざ―退かずば

銀などを商ふやうにと存ずる。まづ、そろ〳〵參らう。ほどなう市場さうにござる。扨も〳〵、繁昌の市は、箕の手形に立つと申すが、あれからこれへ、これからあれへ、扨も〳〵、好い場でござる。まづ、市頭へ參ろ。はあ、こゝもとが好ささうにござる。まづ、棚を飾りませう。夜も深さうにござるほどに、ちつと睡みませう。▲わさなべ罷出でたるはわさなべ賣でござる。所富貴につき、新市を御立てなさるゝと、承つてござる。いや、程なう市場でござる。何所許に札が揚つたぞ。いえ、此所にある。まづ、拜領致さう。扨も〳〵、某よりも先へ來う者はあるまいと存したれば、羯鼓張がきよろりとして居る。あの先へ飾りませうず。▲羯鼓はあ扨、久しう寢た事かな。これは如何なこと、人の棚の先に。して、何事ぢやぞ。▲わさなべいや、某は商賣人ぢやい。▲羯鼓やい、商賣人なら、傍へ寄つて商うたが好いわいやい。▲わさなべはあ、お主傍へ寄つて商へ。▲羯鼓實正退かぬか。退かざ退かするが。▲わさなべして、そちが、何とせうと思うて。▲羯鼓や、此處な奴は。出合へ〳〵。▲目代これは何とした事ぢや。▲羯鼓御前はどなたでござりまするぞ。

羯鼓炮碌—一名鍋やつばち
札なり—札の様子
羯鼓—横にして両の枹にて打つつゞみ也
棚—店
萬雜公事—年貢諸役



狂言記 巻之五

一 羯鼓炮碌

三人　羯鼓賣　半袴、棒の先に羯鼓を付けて擔ぐる
　　　炮碌賣　半袴、炮碌さげて出る
　　　目代　長袴、小さ刀

▲目代　罷出でたるは、所の目代。所繁昌につき、新市を立てうと存ずる。まづ札を揚げませうず。一段札なり見事にござる。まづ、宿へ歸ろ。▲羯鼓　罷出でたるは、羯鼓張でござる。さやうにござれば、所富貴につき、新市をお立てなされると、承つてござる。今は、斯様のものをば商ひまするとも、一の棚を領じ、萬雜公事を免され、末々は、金

おきやがりこぼし—玩具の起上小法師也

京に〳〵云々—此の小歌曲がかり

すき慰—好き慰の誤歟

よさりのほしをとれ—宵の星を取れ、欲しを星に掛く

い慰みかな。そのぴらひらとした物、脱いで、こちへおこそ。▲右京 大名の、これは脱ぐものではない。▲下京者 實正、おのれ脱ぐまいの。▲右京 あゝ、脱ぎます〳〵。▲下京者 おのらが脱ぎ居つて、蹲うて居るなりは、そのまゝたゞ、おきやがりこぼしのやうな。おきやがりこぼしの眞似をせい。▲右京 某は知らぬいやい。▲下京者 知らずばをすよ。それで見居れ。▲ふし こうた 京に〳〵はやる、おきやがりこぼし、よい殿見れば、殿さへ見れば、やよ、は、合點か、がてんか、つい轉ぶ、と云ふ事ぢや。▲右京 何として、そないな、頭を振つてせうぞ。▲下京者 知らずば某が眞似をせう。さあ。▲こうた 京に〳〵はやる、おきやがりこぼし、よい殿見れば、殿さへ見れば、やよ、合點か〳〵、つい轉ぶ。▲下京者 扨も〳〵すき慰みぢや。なう、侍。して、この太刀が欲しうおぢやるか。▲右京、左京 おんでない事。▲下京者 ほしくばよさりの、ほしをとれ。▲右京、左京 やい〳〵、やるまいぞ〳〵。

はいてうせう―佩いて行け也

ものが違はうぞ―町人が怒り出せる也

やい危い―町人が刀を拔いて大名に手向へば也

つくばうて―蹲ること

町太郎―たゞ町人を呼べる名

に、これを提げて來てくりやれ。▲下京者 畏つてござる。▲右京 來い〳〵。やい〳〵、おのれは、それは油筒を提げたやうに、何とした持ちやうを爲るぞ。はいてうせう。▲下京者 はあ。▲右京 やい〳〵、がた〳〵云ふと思へば、まことに、脛にはいてうせをる。▲下京者 は、かうでござりまするか。▲右京 持ちやうを知らずば、をすやう。金の太刀は、右の手にさしあげて持つものぢややい。▲下京者 かうでござりまするか。▲右京 おう、さうよ〳〵。來い〳〵。▲下京者 やれ扨、にくい事を致する。二人の奴等、がつき逃すまいぞ。▲右京、左京 はて扨危い。これは何事をするぞ。▲下京者 おのれが、町人ぢやと思うて、なぶつたと、ものが違はうぞ。▲右京、左京 やい、危い。何をするぞいやい。▲下京者 やい、えい、お大名の、兩方につくばうて居るなりを見れば、そのまゝたゞ雞のやうな。其所で蹴合ふ眞似をせよ。この太刀を取らせうぞ。▲右京 やい、其處な町太郎、大名が鷄の眞似などをするものではない。▲下京者 して、定せまいか。▲左京 はて〳〵、右京殿、さつしやれいの。▲下京者 急いでせう。▲右京、左京 あゝ、くわつ〳〵、くわ〳〵くわつくわ、▲下京者 扨も〳〵、好

作病―假病
供にうせなんで―うせは参るを卑しく云ふ
廿五日―天滿宮の緣日也
これでもせまいか―刀に手をかけなどして嚇す也

なたは、人を連れさつしやれぬか。▲左京 作病を起し居つて、供にうせなんでござる。▲右京 なう、某が者も内に居らず、何と致したものでござろぞ。▲左京 いや、思ひ付けました。道へ出ましたら、如何樣な者も、とらまへて、無理に供に致さう。▲右京 これが一段ようござろ。▲下京の者 罷出でたるは、下京邊の者でござる。今日は廿五日、北野へ参らうと存ずる。まづそろ〳〵参ろ。▲左京 なう、あれをごろんぢやつたか。似合はしさうな奴が通る。彼奴を供に連れうと存ずる。▲右京 一段でござろ。▲左京 やい〳〵。▲下京者 此方の事でござりまするか。▲左京 おんでない事。▲下京者 何の御用でござりまする。▲左京 して、そちは、どれからどれへ行くぞ。▲下京者 北野へ参りまする。▲左京 一段の事ぢや。某も参る程に、同道致そ。▲下京者 いや、お侍と私は、似合ひませぬ。先へ参りまする。▲左京 確と供をせまいか。これでもせまいか。▲下京者 あゝいや、お供致しませう。▲左京 いや、かやうに致したは、戲事ぢや。さあ〳〵、おぢやれ〳〵。▲下京者 はあ、参りまする。▲左京 なう〳〵、右京殿、こなたの持たつしやつた太刀を、彼奴に持たさつしやれい。▲右京 おう、まこと

北野參—天滿宮參詣



十二人大名

三人　右京　素襖、立烏帽子、太刀を持つ
　　　左京　素襖、立烏帽子
　　　下京の者　半袴

▲左京 罷出でたるは隠れもない大名。さるお方と、北野參を致そと、約束を致してござる。まづそろそろ參り、誘はうと存ずる。いや、程なうこれでござる。内にござるか。▲右京 えい、こゝな、何と思うて、お出でござるぞ。▲左京 内々、約束を致した北野へ參りませう。▲右京 まことにさうでござる。まづ、這入らつしやれい。▲左京 いやまづ參りませう。▲右京 したらば、某も參りませう。して、こ

あはす或はさはすとも云ふ

きまぶり—木守りの訛也菓物を取りたる枝にわざと幾つか殘し置くさすれば翌年多く生ると云ふ

かしらをかきの—頭を搔くと言掛け串に柹を掛く

しあり。腹立ちや。わがうその吹かれぬ口をかきむしり、後悔しつる、かしらをかきの、串柹にあらねども、拾ひ入れたる柹を持ち、我が家をさして、かへりけり〳〵。なうそこ許へ、かきめされ候へ。

いくせ―おくせの訛歟

代り―代金

澁柿食てからは云々―當時の諺なり澁柿を食へば口笛の吹けぬを云ふ

かへせや―以下かへりけり迄曲にかゝるる

合せ柿―醂柿也

な者、見かけよりも旨い柿ぢやわい。その前な柿をいくせ。も一つ食て見よに。▲柿賣 え、これは、は、代がいりまする。▲目代 は、代がいらば、如何ほどなりともやらう。▲柿賣 はあ、したらば、あがりませう。▲目代 こりやおのれ、甘いかよ。▲柿賣 はあ、頤の離れるほど、甘うござる。▲目代 こゝな奴、離れざ、おのれ、きかんぞよ。▲柿賣 はて、甘うございまする。▲目代 やい其處な奴、澁うて食はれぬわ。▲柿賣 はて、ひよんな事を仰しやれまする。甘うござりませうがの。▲目代 したらば、おのれ食うて見よ。▲柿賣 どれ、いくさつしやりませ。甘いが、あんまり甘うて、物が云はれませぬ。▲目代 はて憎いことをぬかに澁柿。食てからは、うそのふかれぬものぢや。急いでうそをふけ。▲柿賣 はあ。▲目代 なぜにふかぬぞ。▲柿賣 待たしやれませう。吹きまするわいの。▲目代 急いで吹け。▲柿賣 あんまり甘うて、うそも吹かれませぬ。▲目代 憎い奴の。おのれのやうな奴は、柿をかうしたがよい。▲柿賣 やい〳〵、今の男、柿返せ。節 かへせや、合せ柿と、呼ばはれど〳〵、取殘されし、きまぶりの、古の人丸は、柿のもとに住みながら、歌を案ぜし、そらうそふかせ、ため

目利―鑑定
おんでない事―勿論
さつまわろう―未詳
庖丁人―料理番
だんないか―大事無いか

はうと存ずる。はあ、柿賣が居るぞ。やい其處な者。▲柿賣 何でござるぞ。▲目代 そりや何ぢや。▲柿賣 お見やつたがよい。▲目代 やい其處な者、身をば知つたか。▲柿賣 いゝや、そなたは知らぬわいの。▲目代 目利をせい。▲柿賣 某は柿賣こそすれ、遂に人の目利をして見たことがござらぬ。▲目代 厭でもさする、應でもさする。▲柿賣 はて、其處な人は、無理な事を言やる人ぢや。して、せねばならぬか。▲目代 おんでない事。▲柿賣 したらば、あちら向きやつす。なう見たわ。▲目代 何と見たぞ。▲柿賣 そなたはさつまわろうであらうず。▲目代 あいや、さうではないわ、まつと見直せ。▲柿賣 したら、其處で一つまはらせませ。おう、見たわ。▲目代 何と見たぞ。▲柿賣 常に袴を離さぬ人ぢやほどに、庖丁人か、碁打か、將棊さしかであらう。▲目代 いや、これでもないわい。▲柿賣 おう、したらば、知らぬ。▲目代 所の目代ぢやが、知らぬか。▲柿賣 え、目代樣でござりまするか。これを一つあがりましよ。▲目代 目代などと云ふ者が、市や町やなどで、柿など食ふものではない。▲柿賣 いや、かやうの物はあがりましても、苦しうござりませぬ。▲目代 だんないか。一つ食はうに。やい其處

目代―國司の代官
富貴―ふうきを音便にてふつきと云ふ
萬雑公事を免さう―年貢諸役を免除する也
札なり―札の體裁
へぐり谷―平群谷か

九　柹賣

二人　目代　長袴、小さ刀
　　　柹賣　半袴、柹を持つ、

▲目代　罷出でたるは所の目代。富貴につき、新市を立てうと存ずる。何にはよるまい、一の棚を飾つたるものは、萬雑公事を免さうと存ずる。まづ急いで高札を揚げませう。ここかどが好ささうにござる。え、一段札なり好ささうにござる。まづ戻りませう。▲柹賣　罷出でたるは、丹波の國へぐり谷の柹賣でござる。都富貴につき、新市をお立てなされるとうけ給はつてござる。まづそろ〳〵參らう。今はかやうの物を商ひまするとも、一の棚を飾り、萬雑公事を許され、末々は、金銀などを商ふやうに致したいと存ずる。とかう申すうちに、市場はこれさうにござる。扨も〳〵、末繁昌の市は、弓の鉾形に立つと申すが、あれからこれへ、これからあれへ、箕の手なりに立ちてござる。まづ、市頭へ參らう。柹は〳〵。▲目代　やれ扨、市も嬉しいことぢやわ。賑かさうにござる。まづ見舞

山田やばせの―謡曲三井寺の文句、曲にかゝる

まらせたと見えました。▲との やれ扨、いらぬ冠者と古歌立を申して、殊の外迷惑を致す事でござる。や、思ひ付けた事がござる。やい冠者、汝が方に、ふなといふ古歌が数多なれば、某が方には、ふねといふことを謡にまで作りて、置かつしやれた。▲冠者 ござりませうば、謡はしやれませい。▲との 山田やばせの渡船の、夜は通ふ人なくとも、月の誘はばおのづから、ふねもこがれていづらん。こがれ出づらん、とはないか。▲冠者 申し殿様。▲との 何ぢや。▲との その末は、ふな人もこがれ出づらんとはござりませぬか。▲との 何でもない事。退り居ろ、えゝ。▲冠者 は。

ほの〴〵と—古今集に人麿の歌ならんとして載す

ふな人は云々—此れは源氏物語玉葛巻にあり但し初句舟人も也

猿丸犬夫のはや歌—いゝ加減な事を言へる也、はや歌は調子の速き歌といふ迄のことか足利時代の早歌は音讀すべき語の如し

ふなぎほふ—此の歌萬葉集第廿巻に出づ

須磨の上野に秋風ぞ吹く、と申す時には、ふなではござりますまいか。▲との やい其處な奴、汝か方にあれば、某が方にもある。ほの〴〵と明石の浦の朝霧に、島がくれゆくふねをしぞ思ふとあれば、おのれ、ふねではあるまいか。▲冠者 いや、此方にはまだござりまする。▲との あらば詠め。▲冠者 ふな人は誰をこふとかあふしまの、うら悲しげに聲の聞ゆる、と申す時は、ふなではござりますまいか。▲との やい、其處な奴、まだ此方にはある。▲冠者 あらば詠まつしやれませい。▲との ほの〴〵と明石の浦の朝霧に、島がくれゆくふねをしぞ思ふ。▲冠者 申し殿樣、いや、それは最前のお歌でござりまする。▲との 最前のは、人丸のあそばした歌、只今のは、猿丸太夫のはや歌ぢや、▲冠者 いや申し殿樣、まだ此方にはござりまする。▲との も、おぢやるまいがの。▲冠者 いやござりまする。▲との あらば詠め。▲冠者 ふな競ふほり江の川の水際に、きゐつゝ鳴くは都鳥かも、と申す時は、ふなではござりますまいか。▲との それは、ふねぎほふであらうがな。▲冠者 いや、殿樣の、古歌を直さつしやれまする事、なりにくうござりませう。▲との それに待ち居ろ。▲冠者 殿の、早つ

殊の外、景の多い所でござりまする。▲との こりや面白からう。やい、此所にいかい川がある。▲冠者 これは殿様御存じござりませぬか。▲との いや、知らぬ。▲冠者 これは、神崎の渡と申すは、これでござりまする。▲との これは徒歩渡りにはなるまいが、渡守はないか。▲冠者 いや、ござりまする。▲との あらば急いで呼べ。▲冠者 畏つてござる。や、いつも此所に居るが。はゝ、上に見ゆる。ほうい。ふなやい。▲との やい、其處な者、渡ならば何故に船と云うて呼ばぬ。▲冠者 いや、殿様のお合點の參る事ではござらぬ。ふなやあい。▲との や、左様に呼うだ分では來まいぞ。ふねと云うて呼べ。▲冠者 いや、殿様に申し上げたい事がござる。彼方の著場と、此方の著場を、何と申しまするぞ。▲との それな、ふねつきといふは。▲冠者 さやうでござるによつて、お合點が參らぬ事でござる。ふなつきなどとは申せ、ふねつきと申す事はござるまい。それにつきまして、ふなどとは古歌にもござれ、ふねと申す古歌はござりますまい、▲との いらぬおのれが古歌立ではあるまいか。さりながら、あらば申せ。▲冠者 畏つてござる。ふなでしてあとはいつしかとほざかる、

ふなやい—船をわざとふなと呼ぶなり

古歌立—古歌を證として爭ふこと古歌立の立は腕立の立に同じ

ふなでして云々—此の歌出典不明

のさ者—のさばり者

八　舟ふな

二人　殿　長袴、小さ刀
　　　冠者　半袴

▲との 罷出でたるは。この邊の者でござる。此中何方へも慰みに參らぬ。今日は何方へぞ遊山に出でうと存ずる。のさ者を喚出し、申し付けませう。あるかやい。▲冠者 は。▲との 誰かある。▲冠者 お前に。▲との 念なう早かつた。汝を喚び出すは餘の義でない。今日は遊山に出やうと思ふが、何とあらう。▲冠者 内々は、御意なうても申し上げうと存ずる處に、一段でござりませう。▲との されば、西山東山はいつもの事ぢや。どうぞ樣子の違うた處へ行きたい。▲冠者 されば、何處もとがようござりませう。あゝ、思ひ付けましてござりまする。西の宮へ參らしやれませい。▲との これが一段の所であらうほどに、供の用意を仕れ。▲冠者 最早用意を致してござりまする。▲との 一段うい奴ぢや。來い〱。して、西の宮といふ所は面白い所か。▲冠者 いやはや、浦山を抱へまして、上り下りの船などを眺め、

水莖のあと―筆蹟のこと
ほえんこと―泣かんこと
思へば云々―曲にかゝる
五百八十年―長命の祝言
おぢやらせ―在れの敬語

さ うなら、さうとは云はいで、えい、肝を潰さした。▲長 いざ、これへ寄らせませ、相讀せう。▲源 いざ、これへ寄らせませ。▲源 心得ておぢやる。▲二人ふし この儘此處にて死するなら、上り下りの旅人に、蹈み殺されたと思ふべしとて、書留めし水莖の、あとに殘れる女房や、娘子供のほえんこと、思ひやられて悲しやな。▲源 いやはや、其方の歎きやるも尤でおぢやる。某も名殘惜しいことは山々でおぢやる。いざ、ちつと死ぬることを延べまいか。▲長 これは一段でおぢやる。▲源 如何ほど延べうの。▲長 いや、年の三年も延べまいか。▲源 三年過ぐれば、又この如くでおぢやろの。▲長 これも餘り本意ない事でおぢやるほどに、とかくたゞ生きられ次第生きやう。▲源 いや、これがはや一段でおぢやる。▲長 めでたく和歌をあげて歸らう。▲源 心得ておぢやる。▲二人ふし 思へば無用の死になりと、二人の者は中直り、手に手を取りて、わが宿に、いぬじにせでぞ歸りけり。五百八十年めでたうおぢやる。おぢやらせませ〱。

たしなみ―身だしなみ

ひよんな事―奇怪なる事

み殺されて死んだと云へば、名も惜しい事ぢや程に、いざ、書置をして死ぬまいか。▲長 いや、これは一段の事であらうが、最早この體になつてからは、如何も離されまいが。▲源 いざ、三つ拍子で離さう。一、二、三。▲長 やあ、いざこの太刀の柄も、三つ拍子で離しやれ。▲源 三つ拍子までもいらぬこと、某が方から離するさ。これへ寄らせませ。▲長 なうなう其方、して、硯は持たせましたか。▲源 いや、某は持たぬ。▲長 たしなみのない事でおぢやる。某はこれに矢立を持つておぢやる。▲源 したらば、それで書かせませ。▲長 心得ておぢやる。扨文章は何と書かうの。▲源 されば、何と書いたものぢやあらうの。あゝ思ひ付けた。▲長 何と。▲源 便宜ながらと書いては。▲長 はれ、ひよんな事をおしやる。書置に、便宜などと書く事はあるまい。某が心得て書かう。▲源 一段でおぢやる。書かせませ。▲長 書いておぢやるわ。▲源 したらば、それで讀ませませ。▲長 心得ておぢやる。今朝かりそめに家を出で、山だちしそんずるのみならず、結句傍輩と口論し、退くなよ、われも逃さじと、刀の柄に手をかくる。▲源 心得ておぢやる。▲長 やい〳〵。それは何事

男がならうか―男が立たうか

れば、なんぼうの損をするぢや知れぬ事ぢや。今からしては參り合はぬぞ。▲源やい其處な者、參り合ふまいなら、參り合ふまいであらうず。なぜにあの、鎗は捨てたぞ。▲長いや、あれ心があつて捨てた。知らずば云うて聞かせう。汝をば、あれで打つと思うて捨てた。▲源よう捨てたな。▲長やい〳〵、なぜに又われは弓矢を捨てたぞ。▲源汝をば、踏むと思うてすてた。▲源、や、此處な者は、踏まれて何と男がならうか。來いおのれ。▲源何ぢや。▲長やい〳〵、餘り押すないやい。後は茨むろぢやわい。▲源死ぬる者が、茨むろが何の、こゝな。▲長やい〳〵。▲源何ぢや。▲長や、餘り押すな。山の崖ぢやわい。▲源や、死ぬる人の、崖がいろか。何とこゝな者は。▲長やい。▲源なんと。▲長お主と己と組合うた擬勢は、好いぎせいではないか。▲源おう、まことに男とあらうずる者には、煎じても吸はせたい勢でおぢやる。▲長やい、其處な者、かうして死ぬるが、手柄の樣子をば、ちつと女子共に見せたいものぢや。▲源や、まことにお主が妻子どもと云へば、思ひ出した事がある。▲長何と。▲源かうして死ぬれば、往き來る者も、又は妻子どもも、踏

知音―知り合ひ
合言葉―隠語
同心―仲間になること



七文山賊

二人　源太夫　尖頭巾、括り袴、刀をさし、弓に矢を加へ出る、
　　　長兵衛　北叟頭巾、括り袴、刀をさし鎗をおつとり鎗に持つ

▲源太夫 やるまいぞ〳〵。▲長兵衛 やれ〳〵〳〵。やい其處な者、何故にやらなんだ。▲源 やれと云うたによつて、知音近づきにてもある事かと思うて助けてやつた。▲長兵衛 やい其處な者、山賊の合言葉を知らぬか、あの者が財寶たからを、取つてやれと云ふ事ぢや。▲源 さうなら、さうとは云はいで、あれ、とつとと行くわ。▲長 やい其處な者、往なしたれ者が行かいで何とせう。われがやうな者と同心す

ひゞにまさりて—ひゞ（皸の小きもの）に日々を言掛く

慮外な奴—無禮者

かうしたがよい—水に陷るゝ也

盆の窪—襟首の眞中の窪める所也頸窩也

と。▲冠者 あかゞりは戀の心にさも似たれ、ひゞにまさりて思はれぞずる。▲との やい冠者、句は出來たが、おのれがやうなる慮外な奴は、この深い所で、まつかうしたがよい。▲冠者 はゝ、南無三寶、爪先を濡らすまいとしたれば、盆の窪まで濡れた。しなしたる姿かな。

出てあるか―文句が考へられたか
あかがりも云々―皸に雁を掛け葦に足を掛く
うづきわたりて―疼きに卯月を掛く

負うて苦しうない。急いで詠め。▲冠者 さらばちと按じませう。▲との いかほども按じよ。▲冠者 はあ。かうもござりませうか。▲との はや出てあるか。▲冠者 は。▲との 何と。▲冠者 あかがりも春は越路に歸れかし、冬こそあしのもとに住むともと、致してござる。▲との おう、一段出來た。も一句急いでよめ。▲冠者 いや、最前さへ汗かきましてござる。▲との いや〳〵、そちが口では、汗かく口ではない。急いで詠め。▲冠者 かうもござりませうか。▲との 何と。▲冠者 あかゞりは彌生の末のほとゝぎす、うづきわたりてねをのみぞなくと、いたしてござる。▲との おう、一段でかした。急いで負はれ。はゝ、これは何とする。▲冠者 いや、戴きまする。▲との 許すといふのに、負はれ居ろ。▲冠者 畏つてござる。申し〳〵殿樣、あゝいや、深さうにござりまする。上か下かへ、廻らしやれませい。▲との 氣遣ひんはすな。覺があるぞ。▲冠者 はゝ、あぶなうござります。▲との やい冠者、この川中で、ま一句聞きたうおぢやる。▲冠者 いや、まづ、向へ越さつしやれませい。▲との 實正よむまいか。▲冠者 あゝ、申し〳〵、詠みまする〳〵。▲との 急いで詠め。▲冠者 かうもござりませうか。▲との 何

六根—佛語、眼耳鼻舌身意の六つをいふ全身の意に用ふ

又かれいのかた—又もや例の横著な事をの意か

負ひこそう—「負ひこさう」の誤か

慮外な事—失禮也恐縮する意

お前負ひまする事はさて置いて、身ども一人もえ渡りますまい。▲との なぜにさやうに申すぞ。▲冠者 そのお事でござりまする。慮外な義でござりますれども、皸がござりまする處で、そつとも水の中へは、え這入りませぬ。▲との いやいや、皸などには、水がかゝれば、殊の外和いで好いと云ふ沙汰を聞いた程に、急いで負ひ越せ。▲冠者 いや、人のはどうござつても、身どもがは、少しなりとも水がかゝりますると、六根へこたへて疼きまする。唯今お手討になると申しても、え渡りますまい。▲との 何ぢや、手討になるともえ渡るまい。▲冠者 はつ。▲との それに待ち居ろ。やれ扨、彼奴めは常に横道者でござる程に、又かれいのかたを申すものでござろ。ならぬ事を申しつけうと存ずる。やい冠者、確とえ渡るまいな。▲冠者 はつ。▲との いや、其義ならば、某が負ひこうわいやい。▲冠者 これは又、慮外なことでござりまする。▲との いやいや、苦しうない事があるぞ。歌を詠め。負うて渡そ。▲冠者 いやはや、お歌はともかくもでござりまする。殿様に負はれまするが、何とも迷惑にござりまする。▲との いや、歌だに詠めば、けふの歌人のうちぢやによつて、

六　あかゞり

二人　殿　長袴、小さ刀
　　　冠者　半袴

▲との　罷り出でたるは、この邊の者でござる。さやうにござれば、さる方よりも、お茶を下されうとござる程に、のさものを喚出し、申し付けうと存ずる。あるかやい。▲冠者　はつ。▲との　誰かある。▲冠者　お前に。▲との　念なう早かつた。汝を喚び出すは餘の義でない。さるお方よりも、お茶を下されうとある程に、供の用意を致しませい。▲冠者　最早致してござる。▲との　一段うい奴ぢや。來い〳〵、やい。いづれもの使はさる者どもは、茶の湯などとあれば、掃除に氣をつくるといふが、汝はさやうの事はなるまいな、▲冠者　いやはや、殿様にも、せつ〳〵數寄を遊ばされまするならば、ぬかりは致しますまい。▲との　おう、それよ〳〵。やい、これはいつなれぬ所に、いかい大水が出たな。▲冠者　はゝ、上が降つたものでござりまう。殊の外な洪水でござる。▲との　やい、急いで負ひ越せ。▲冠者

のさ者―のさばりもの、無作法なる冠者のことをいふ

數寄―風流

上―川上

舞立—舞ひ乍ら出立する事
地藏舞を見まいなー以下曲にかかる地藏は菩薩の一なり
麴の花が目にあがりー酒に醉ふこと

ら私は舞立に致さう、囃いて下されい。▲宿　何と囃しませう。▲僧　地藏舞と囃いて下されい。▲宿　心得てござる。地藏舞を見まいなく〳〵。▲僧　地藏の住し所は、伽羅陀山に、安養界。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人天にあまねく、罪の深き衆生を救はんと思召し、錫杖をおつ取つて、かいすくうてぼつたり、ひつすくうてぼつたり。昔釋迦太子の、御說法のありし時、辱くも如來の、黃金の御手をさしあげ、善哉なれや善哉と、地藏坊が頭を、三度まで撫で給ふ。今より後に、衆生を地藏に預け置くなりと、仰せ罷り蒙り、走りまはり廻れど、誰やの人かあはれみ、お茶一服くれざるに、このざしきに參りて、七斗入にたふ〳〵、緣日にまかせて、二十四杯飮みければ、麴の花が目にあがり、左の方へよろ〳〵、右の方へよろ〳〵、よろり〳〵と、よろめきわたる地藏坊が、踊つたを見さいの。ほつひやり〳〵。ほつぱい、ひやろのひつ。

肴—酒の肴として舞ふをいふ

ふし—此の文句曲がかり

一のせどの云々—一の背戸の人は所在の人での意か

て苦しからぬ。一つ盛らつしやれい。▲宿これは酒醬過ぎませう。▲僧なう御亭樣、こなたもところの法度を破り、宿を貸さつしやれた。私も五戒破りて、一つ飲べませう。▲宿一段のこと。夜と共酒盛して遊びませう。▲二人ざゝんざ。▲宿なう御坊、一つ肴を致さう。▲僧あゝ、それは面白うござろ。▲宿何にても小舞を舞ふ。▲僧あゝ扨も〳〵、しほらしいことかな。さあらば慮外申しませう。▲宿なう御坊、何ぞ肴が見たうござるの。▲僧私は出家の事にてござれば、御經ならでは存じませぬ。▲宿いや、何にても、立姿が見たうござる。▲僧この上からでござるほどに、一つ舞ひませう。ふし一のせどのはしよだいない人で、え踊らぬ。われにをどれとおしやる。踊りてふりを見せまゐらせう〳〵。くわんこ〳〵、くわんこや、てれつくに〳〵、したんに、たゝたんに、たつほゝ、たつほゝ。たつほ〳〵たつほゝ、えいはらに〳〵、えいきりに〳〵、からりちんに、ひゆやに〳〵、ちやうらくに、ひゆやに、ついや〳〵、ついやろに、ちやうらくに、ひつ。▲宿扨も〳〵、しほらしう面白い事かな。▲僧ま一つ下されう。なう〳〵御亭樣、最早夜も明けてござる。これか

氣の藥な―面白く慰みになる

夜と共―夜と共に、夜通し

ろくしやう―六條豆腐の事か

▲宿こゝが出た、▲僧どつこい。▲僧いや、こゝが出た。▲僧いや、心得た。▲僧あはゝ、扨も〳〵氣の藥な坊主ぢや。一夜を貸しませう。なう〳〵。▲僧何でござる。▲宿餘り不憫にござるほどに、一夜を貸しませう。笠を取つてゆるりと休まつしやれい。▲僧いえ、御亭樣の、笠を取らせて、追ひ出さうと思うて。▲宿弓矢八幡まことでおぢやる。▲僧この上からは、まづ家主から下しませう。あら、窮屈や〳〵。▲宿扨も〳〵、御坊は面白い人ぢや。夜と共話しませう。▲僧扨も〳〵、辱うござる。▲宿なう〳〵御坊、酒を一つ參ちぬか。▲僧辱うはござるが、私は五戒を保ちまする。取り分け飲酒戒とて、殊の外酒を戒めてござる。下された同前でござる。辱うこそござれ。▲宿扨々尊い御出家かな。是非に及ばぬ。某ばかり寢酒をたべませう。御坊一つ參らぬの。▲僧念もない事念もない事。なう御亭樣、その肴は何でござろ。▲宿ろくしやう、若布でござる。▲僧さあらは、その肴ばかり、ちとこれへ下されい。▲宿まことに氣がつきませなんだ。▲僧さらばその酒を、この若布にかけて下されい。▲僧御坊は、禁酒にてはござらぬか。▲僧いや、酒醬と

おんでもない―勿論

はつつて―削つて

宿は借つたものぢや。まづこの笠を著て、一夜を明しませう。はあ、最早御經時ぢや。經を讀みませう。▲宿 あら不思議や。座敷に經聲がするが、何者ぢや知らぬまでい。これは如何なこと、最前の坊主が、座敷の眞中に、松茸の生えたやうに、笠を被て居る。其處に居られるは、最前の坊主ではないか。▲僧 なか〳〵、最前の坊主でおぢやる。▲宿 誰に宿をかつて居るぞ。▲僧 なう〳〵、御亭に尋ねたいことがござる。▲宿 何事ぞ。▲僧 このお家はどなたの御家でござる。▲宿 これは身が家でおぢやる。▲僧 このお家の内は、こなたのまゝでござるか。▲宿 おんでもないこと。家の内の物は、皆身どもがまゝでおぢやる。▲僧 この笠は、誰が笠でおぢやろの。▲宿 それは其方の笠でおぢやる。▲僧 宵より預けましたは、合點でおぢやるか。▲宿 をゝ、笠ばかりは預かつておぢやる。▲僧 笠を預けたは定。笠の下は笠がまゝよ。身は、笠に宿借つておぢやる。▲宿 これは如何なこと。坊主奴が理詰に仕居つた。して又、笠より出た處はなんと。▲僧 それは、其方の屋敷の内ぢやほどに、欠いてなりとも、はつつてなりともお取れやろ。▲宿 確とか。▲僧 なか〳〵。

一人出家—供人なき坊主
法度—禁制の掟
ならざ—ならずば
わごれう—汝

れて候間、一夜の宿を貸して下されい。▲宿易い事にて候が、この所は、一人出家に宿貸す事が禁制にてござる。なりますまい。▲僧法度はもつともにて候へども、出家の悪いことは致さぬものでござる。一夜是非とも貸して下されい。▲宿いやなりますまい。▲僧確となりますまいか。▲宿はて、ならぬと云へば。▲僧ならざ、ようおぢやるわいの。▲宿はて、すこすい坊主の。▲僧わごれうが宿貸さぬとて、夜を明かさずに居やうか。と申しても、いづくへ參らうやうもならず。どうぞ分別で、宿借りませう。又お案内も。▲宿また案内がある。最前の出家ぢやよ。▲僧はつ、最前の坊主でござる。私はいづくに臥せつても、苦しうござらぬ。この笠ばかり預けたうござる。一夜あづからつしやれて下されまいか。▲宿をゝ、笠ばかりは苦しからぬこと、何處になりとも置きやろ。▲僧いや、大事の笠でござるほどに、座敷のまんなかに置いて下されませい。▲宿ふん、それは何處になりとも置きやろ。▲僧はつ、辱うござる。さあらばこゝもとに置きませう。▲宿なうなう、夜が明けたらば、早々取りにおぢやれや。▲僧畏つてござる。さらば〳〵。はつ、

笠の下—一名地藏舞

次第—並に地謡共に曲にかゝる

道行—曲がかりの文句謡曲とは異なり例の狂言を弄せり



五　笠の下

頭巾、衣、笠をきる

二人

宿　長袴、小さ刀

▲僧次第われは佛と思へども〳〵、人は何とか思ふらん。▲地思ふらん〳〵。▲僧かやうに候者は、貴い出家にて候。われ未だ都を見ず候ほどに、唯今都へ上り候。道行住み馴れしわが古寺をひよつと出て〳〵、足に任せて行くほどに、そんじよう其處に著きにけり。急ぎ候ほどに、何處ともなく著いてござる。日の暮れて候ほどに、あれなる在所に立ち寄り、一夜を明さばやと存ずる。ものも。▲宿誰そ。やあ。▲僧これは旅の出家にてござる。日の暮

てんと—きつぱり

おとごぜ—乙御前、醜婦のことをいふ

まする。こなたと私とは、一期末代、所帶が先ぢやぞや。この被衣を取らつしやれい。對面いたさう。▲下女 いや〳〵。▲冠者 てんと聞えぬ。この上からは、恥かしい事もござるまい。是非とも被衣取つて、對面致さう。あはゝ、恥しいが道理々々。私さへ恥しうござる。いざござれ、負うて往にませう。殿様々々、先へ參つてこしらへまする。早うござれ。▲との 太郎冠者めが喜ぶが道理々々。某も對面致さう。この被衣を取らつしやれい。▲上臈 いや〳〵。▲との いやと云ふ事はあるまい。是非とも取らつしやれい。これはいかなこと、其方はおとごぜか。あらこはやなう。▲上臈 怖いと云ふことがあるものか。やるまい〳〵。▲との 三郎殿もきこえぬ人ぢや。やい〳〵、太郎冠者、おかつさまがかはつたは。そちのをこちへ返せ。▲上臈 返せと云ふ事はあるまい。▲との なう、おそろしや。▲上臈 やるまいぞ〳〵、

釣ろよ云々—曲がかり
御かつさま—奥方樣
めん／＼—面々也、もの／＼
ふるまひ—酒宴

けめは、何事を云ふぞ。某悟つた。總別三郎殿は、何にても欲しいものは、釣針にて釣らせらるゝと承る。これは釣針であらう。これにて釣れと仰しやる事ぢやあらう。汝急いで釣れ。▲冠者 はあ、まことによい悟でござる。さらば釣つて見ませう、えい。はやしごと釣ろよ／＼。御かつさま釣ろよ。申し／＼、掛りさうにござるが、年頃は幾つばかりなを釣りませうぞ。▲との はて、こゝな奴めは、彼方次第にして釣れ。▲冠者 それならば、殿樣のは五十計、私のは十七八のを釣りませう。▲との 云はれざることを云はうより、三郎殿次第にして釣れ。▲冠者 畏つた、えい。はやしごと、釣ろよ／＼。おかつさま釣ろ。下女添へて釣ろよ。十七八を釣らうよ。ありや、掛つたわ／＼。殿樣々々、掛り事は掛つたが、何としませう。▲との いや、輿乘物と云うても俄になるまい。めん／＼の背に負うて往なう。▲冠者 それが好うござろ。さらば、對面さつしやれい。定めて先なはおかつさま、後なは下女でござろ。めん／＼に對面致さう。▲との やい太郎冠者、汝は先へ連れて往ね。身は後から往なうほどに、ふるまひの用意をして置け。▲冠者 畏つてござる。いかに申し

鰐口―社寺の前に懸けたる圓き鉦にて參拜人の打鳴らすもの

たわけめ―馬鹿者

る。▲との 然らばお前へ參ろ。手水々々。▲冠者 はつ。▲との まづ、鰐口取りつかう。ぢやぐわん〱。いかに申し上げ候。これまで參ること餘の義にあらず。この年まで、定まる妻を持ちませぬ。えびす三郎殿のおかげにより、定まる妻を授けて下されい。あら、尊とや〱。やい、太郎冠者、汝も拜め。▲冠者 畏つてござる。ぢやぐわん〱。いかに、きびす三郎殿へ申し候。私も定まる妻を持ちませぬ。私に似合ひました妻を授けて下されませい。あら尊と〱。▲との やい太郎冠者、二夜三日通夜をせう。汝もまどろめ。▲冠者 畏つてござる。▲との やい太郎冠者。はや御告があつた。汝が妻になる者は、西門の一の石階にあらうほどに、連れて歸れと仰せられた。ありがたいことな。▲冠者 これはいかなこと、私がお告も、すこしも違ひませぬ。いざござれ。西門へ參ろ。▲との 早う來い〱。これはいかなこと、妻ではなうて、何やら竹の先に繩が付けてある。不思議な事ではないか。▲冠者 あゝ、合點でござる。殿樣の、その年して女房狂ひはいらざるほどに、この繩で首括つて、死なつしやれいと仰しやることでござろ。▲との こゝなたわ

卒爾―輕卒

木で作つた云々―きびすと云へるも例の狂言也

長い名―之れも一種の興言也

此年まで定まる妻がござらぬ。序ながら申し受けませう。急いでござりませい。▲との はつておのれは、卒爾な事を云ふ者ぢや。えびす三郎殿とこそいへ、どこにかきびす三郎殿と云ふものぢや。▲冠者 殿樣は何にも知らしやれませぬ。繪に書いた折には、えびす三郎殿。木で作つた折にはきびす三郎殿。あの西の宮のは木で作りました處で、それできびす三郎殿と申しまする。▲との あゝ、いかい物識でおぢやるよ。それはともあれ、急いで參ろほどに、供を仕れ。▲冠者 畏つてござる。▲との やいく、身はこの道不知案内な程に、道すがら、名所舊蹟どもを語れ。▲冠者 まづ、此所が山崎でござる。▲との まことに聞き及うだよりは名所さうな。▲冠者 はや此所が尼が崎、あれに見えるが西の宮でござる。▲との はあ、いかう早う來たな。向の山は何山ぢや。▲冠者 はつ、あれは山でござります。▲との こゝな奴は、山は山ぢやが何山ぞ。▲冠者 はて、何山でござる。▲との 扨は名を知らぬと見えた。▲冠者 いや、名は覺えました。淡路の島山漕ぎ來る船はおもしろや、でござる。▲との はて、長い名ぢやな。して、西の宮はまだか。▲冠者 最早、この森の内でござ

釣り女—一名釣針

妻がない儀—無いと内儀の洒落

西宮—攝津國なり、姪子な祭神と云ふ

げんふくしやー現福者、福を授くる神



四　釣女（つりをんな）

四人

殿　長袴、小さ刀
冠者　半袴
上臈　乙御前の面、小袖をかづく
下女　小袖をかづく

▲との　冠者（くわじや）居たか。▲冠者　はつ、御前（おまへ）に。▲との　汝（なんぢ）が知（し）る如く、この年まで定（さだ）まる妻（つま）がない義（ぎ）ぢや。承（うけたまは）れば、西宮（にしのみや）のえびす三郎（らう）九郎殿（らうどの）は、げんふくしやと承（うけたまは）る。これへ参（まゐ）り、妻（つま）を申し受けうと思ふ。汝（なんぢ）供（とも）を仕（つかまつ）れ。▲冠者　まことに仰（おほ）せらるればさやうでござる。西（にし）の宮（みや）のきびす三郎殿（らうどの）は、げんふくしやでござる。是（これ）へ参らつしやれて、定（さだ）まる妻（つま）を申し受けさつしやれたらば、ようござろ。幸（さいはひ）私（わたくし）も、

餅を飲うて―飲むと食ふとを間違へて言へるが狂言也

じければ、源氏は箙を叩いて、射たりや射たり與一とて喜ぶ。その時判官餘りの嬉しさに、小額はつたと打つて、いとほしの與一や、よう射させた、けなもの、こちへ來て、餅を飲うで、酒を食へと御諚あつたとぞ申しける。

三月十八日―平家物語には二月とあり
ゆうぜん―湯泉大明神也
小兵―小男
十三束―矢の長さ
扇のくまで―平家物語には要際一寸許とあり

金覆輪の鞍置かせ、わが身輕げにゆらりと乘り、重籐の弓の眞中握り横へ、渚に向つて歩ませ行く。その時御前にありあふ人々、只今の若者こそ、一定仕るべき由、御申しなされ候へば、判官頼もしげに見やり給ひ、につこ〳〵笑ひ給ふ。その時與一、馬の太腹の浸るほど、海にざつぶと乘入るゝ。頃は三月十八日のことなるに、波風烈しく吹いて、磯うつ浪高かりし。浮きに沈みの扇もさだかならず。その時與一、潮を掬んで手水とし、眼を塞ぎ、南無歸命八幡大菩薩、別して〳〵わが國の那須はゆうぜん大明神、本國に還さんと思召さば、この矢外させ給ふなよ、若し射損ずるものならば、弓三つに切り折り、海中に飛込み、毒龍となつて、源氏方の氏神にさゝはりを爲さん事必定なりと、眼を開き見てあれば、浪風とうとしづまつて、扇も射よげにこそ見えにけり。その時與一、小兵とは云ふ條、三人張に十三束、よつぴいてひやうと射た。この矢過たず、扇のくまでをひいふつと射切つて、鏑は海に入り、皆紅の扇は、春風に一揉み二揉み揉まれ、雲にあがつて海にざつぶと入る。その時平家は舷を叩いて、射たりや射たりと感

ければ、判官聞召し、扨味方に射つべき者は誰か〳〵。その時實基、御味方に射つべき者は、數多ござ候、中にも、下野の國の住人那須の太郎資高が子に、與一宗高と申してござ候が、翔鳥などを仕るに、三つに二つは、射おふせ申し候と申し上げければ、扨その與一といふ者は、何處に居た、與一〳〵とありしかば、その時與一、二十ばかりの男なるが、おほくち端袖、色へたる直垂に、萠黃威の鎧を著、兜を脱いで高紐にかけ、君の御前に畏る。判官御覽じて、やあ、如何に與一、あの沖に立つたる扇をば、定めて味方の軍兵に、射よとの謀にてあならんめな。あの扇の眞中、一矢射、敵味方に見物させよ、與一〳〵とありしかば、その時與一、畏つて候、さやうの分のもの、いまだ仕りたる事なく候間、一定仕るべき者に、仰せつけられ候へと、申し上げければ、その時判官、それ鎌倉を立つて、西國に向はんずる兵が、少しも義經が命を背くべからず、疾うとう退いて鎌倉へ下り候へ、急ぎ御下り候へ。その時與一はつちやこはもの、はつと心に存じ、御前を罷立つて、その頃那須のこぐろとて聞うる名馬に、まるほやすつたる

おほくち―平家物語にはおほくび(衽)とあり

一定―必ず

はつちやこはもの―これは怖いこと

まるほやすつたる―寄生木のさまを貝にて摺りたる鞍かといふ

三　那須の與一

一人　男　長袴、小さ刀

さても四國の兵、平家を反き、源氏に參る侍、此處彼處の方よりも、十騎二十騎走せ集まり、程なく判官の御勢、三百餘騎になり給ふ。今日は日暮れぬ、明日のいくさと相定め、引退きし處に、沖の方より小船一艘、尋常に飾り、陸に向つて、えいや〳〵と押させける。渚七八段ばかりおき、船を横さまになす。怪しやと見る處に、船の內には、年の比十八九ばかりなる傾城の、千入の袴ふみくゝみ、皆紅の扇の日を出したるを、船の脊欋に、よさ〳〵と插み立て、陸の方をぞ招きける。その時判官御覽じて、後藤兵衞實基を召され、あれは如何にと御諚ある。實基承つて、さん候、あれは陸の大將軍の矢表にたて、傾城を御覽じられ候處を、てだれの射手を船底に隱し置き、射落し申さんとの謀にてあるらん、いつかう、あの扇をば、此方より射させられ候へと、申し上げ

押させ―艪を也

傾城―傾國に同じ、美人

皆紅の扇云々―眞赤なる扇に金にて日輪を描く

脊欋―舷に設けたる棚

てだれ―手練

舞節—此の文句曲がかり

鞘走り—人の逃げたるを刀の秀句にて云ふ、居付く事を鏽付く事と云ひたるなり

しなしたるなり—一つやられた姿かなと悔ゆる也

どに、喚うで見よ。▲すり はつ。▲大名 粟田口。▲すり お前に。▲大名 藤右馬允。▲すり これに候。▲大名 粟田口。▲すり 御前に。▲大名 藤右馬允。▲すり これに候。▲大名 扨も〳〵、あゝ、をかしい事かな。疾う抱へうものを。其方にかゝつて、聲もかれる。ちつと早う喚ぶほどに、これも持つてくりやれ。▲すり はつ。▲大名 大小ながら持たしたれば、身も輕うなつて。さあさあ、喚ぶぞ。粟田口。▲すり お前に。▲大名 藤右馬允。▲すり これに候。▲大名 なう〳〵、今度は長う、節で呼ぼ。▲すり はつ。よい時分でござる。外しませう。▲大名 舞節 粟田口、藤右馬允。粟田口。これはさて、居らぬわ。なう〳〵、そこもとへ、粟田口は鞘走りませぬか。そこもとへ、粟田口は鏽付きませぬか。節 行きくるに、藤右馬允、太刀も刀もあはだ口、都のだましにだまされた。しなしたるなりかな。

掘り出し—今も云ふ如く珍奇の品を探し出すこと

藤右馬允—粟田口則國の字なればこゝに用ゐたるなり

さいみやう—在名か

しんどな—草臥れて苦しい

いやい。▲冠者 畏つてござる。なう〳〵、殿の召さつしやるほどに、これへおぢやれ。▲すり 畏つてござる。はあ。▲大名 して、粟田口とは、其方のことでおぢやるの。はて扨、遠路の所をば、おぢやつてたもり、その上書に合うて嬉しうおぢやる。さりながら、其方の名は何々と云ふぞ。▲すり 藤右馬允と申しまする。▲大名 扨は、其方は總領筋でおぢやるの。扨、名字は何と申すぞ。▲すり いや、私が住家が、粟田口と申すによつて、粟田口と申しまする。▲大名 ふん、扨はこれは、さいみやうでおぢやるの。さりながら、其方を求めて嬉しいほどに、伯父御の、求めたら見せい〳〵と、仰せられたほどに、大義ながら來てくりやれ。▲すり 畏つてござりまする。▲大名 やい〳〵、太郎冠者、おのれは此中の草臥であらう。粟田口さへおぢやれば、好いほどに、おのれは内に居つて休め。さあ〳〵、おぢやれ。粟田口をりやるか。▲すり 參りまする。▲大名 藤右馬允來るか。▲すり お前に。▲大名 はれ扨、其方は才覺な者ぢや。疾う抱へうものを。はあ、いかうしんどな。この刀を持つてくれさしめ。▲すり 畏つてござる。▲大名 なう〳〵、さきへ行ても、名を忘るれば惡いほ

岩岩石—わざと重ねたる語

上作は兩銘—名刀には二ッ刻まれたりと也銘を姪に言掛く

女な子—女の子に同じ

たつしりと—ちやうどの意

才覺—才能有ること

風呂を致さぬによつて、隨分古いと申しまする。▲大名 ふん、こりや、古うはあらうが、穢い奴ぢやな。やい、刃が堅かるべいとあるが、はが堅いか、問うて參れ。▲冠者 なう〳〵、はが堅うおぢやるかといの、▲すり されば、若い折には、岩岩石でも、嚙み割つてござる。今もまだ、茶臼の二つや三つは、嚙み割ろとおつしやれませい。▲冠者 申しまする。▲大名 何とした。▲冠者 若い折には、岩岩石でも、嚙み割つてござるが、今も茶臼は二つや三つは、嚙み割らうと申しまする。▲大名 はあ、こはい奴ぢやな。粟田口には、上作は兩銘あるべしとあるが、銘が有るか。問うて來い。▲冠者 なう〳〵、上作は兩銘あるべしとあるが、銘がおぢやるかと問はせらるゝ。▲すり されば、かみに姉、下京に妹を持つてござる。兩方女な子がござる。いかにも兩姪ござりまするとおつしやれませう。▲冠者 申しまする。▲大名 何とした。銘があるか。▲冠者 なか〳〵、上京に姉、下京に妹を持つてござるが、どちらにも、女な子がござるによつて、兩姪、たつしりと有ると申します。▲大名 やい冠者、おのれは才覺な奴ぢや。上作を掘り出し居つた。行て喚うで來い。遇はうわ

鐔元―刀劍の鐔の上下に貫きたる金具也それを脛衣(はゞき)に言掛く

身―刀身と人體とに言掛く

る。▲大名 ふん、これか。行て申さうずるには、大義にこれまでようをりやつた。さりながら書に合はするほどに、さう心得と云うて來い。▲冠者 畏つてござる。なうなう都人、殿の仰しやるには、大義にようこそをりやつたれ、さりながら、書に合はするほどに、さう心得て給ふと仰しやる。▲すり 畏つてござる。何といになりとも、合はさつしやれいと仰しやれませい。▲冠者 心得ておぢやる。申し殿樣、何といになりとも、合はさつしやれいと申しまする。▲大名 やい冠者、引き拔いて、鐔元黑かるべいとあるが、行て、黑いか問うて來い。▲冠者 はあ。なうなう、はゞきもと黑うおぢやるかと。▲すり なかなか、繻子の脚絆のして居るによつて、黑いと仰しやれい。▲冠者 申しまする。繻子の脚絆のして居りまするによつて、黑いと申しまする。▲大名 おう、こりや、かう有らうわいやい。身が古かるべいとあるが、行て、古いかと問うて來い。▲冠者 はつ。なうなう、身が古うおぢやるかといの。▲すり なかなか、生れましてこの方、湯風呂を致さぬよつて、隨分古いと仰しやれませい。▲冠者 問うて參りました。▲大名 何と云ふぞ。▲冠者 生れましてこの方、湯

申し合はせ—昵懇の意
寄り親—養子を寄り子養親を寄り親と云ふ

の事はあるまいけれども、若し軍陣の口などで、某が御馬の先へ立てば、冬の大雪の上へ、湯をかけるが如く、夏の虻蜂をば、大團扇にて扇ち除けるが如くでおぢやるによつて、それで大名小名の、抱へさつしやれ、都の重寶に、某一人殘して置かつしやれたれども、其方の餘り欲しさうなほどに、行かうかと申す事でおぢやる。▲冠者 はれ扨、これは辱うこそござれ。ござつてさへ下されまするならば、御供申しませう。まづ前へござれ。▲すり まづござれ、案内者の段でござるほどに。▲冠者 かう參りまする。申し〳〵、今からは申し合はせませうぞ。▲すり 何が扨、寄り親どのでござるほどに、何かの義を頼みまするぞ。▲冠者 心得ました。とかう申す内にこれでござる。それに待たつしやれい。▲すり 心得てござる。▲冠者 殿樣ござりまするか。▲大名 やい〳〵、冠者、戻つたか。▲冠者 歸りましてござる。▲大名 して、その粟田口は。▲冠者 御門外に待つて居りまする。▲大名 やい、冠者、粟田口と云ふものは、人か。▲冠者 あ。▲大名 やい、そのいつぞや、伯父御樣の方から、粟田口の書が來たは。それを取ん出せ。合はして見ように。▲冠者 はつ。これでござります

どんどと―前にわつぱとどある如く田舍者の喚び歩く聲を譬ふ

小名―大名よりも領地の少き者

致した。粟田口屋をば、問はなんでござるが、何と致さうぞ。あゝ、欲しい物は喚ばはるていと見えた。某も喚ばはりませう。粟田口買を〳〵。▲すり 罷出でたるは、洛中に住居仕るすりでござる。さやうにござれば、此中仕合が惡しうござるほどに、何物にはよるまい、さわたり、仕合を直さうと存ずる。いえ、とかう申す内に、田舍者と見えて、何やら、どんどと申すほどに、さわたつて見ませうず。なう、其處な人、何をどんどとおしやるぞ。▲冠者 いや、田舍者でおぢやるが、粟田口屋を知らいで、かやうに申す。▲すり はれ扨、其方は仕合な人ぢや。なう〳〵、仕合と云うて、袖褄についてあるものではない。▲冠者 して、何でござるぞ。▲すり いや、某に逢やつたが仕合でおぢやる。▲冠者 して、こなたは粟田口屋でござるか。▲すり なう、粟田口屋といふ事はない。某が粟田口でおぢやる。▲冠者 して、こなたが粟田口か。▲すり なか〳〵。▲冠者 して又、大名小名の、何とてこなたをば重寶をなさるゝぞ。▲すり して、其方は知りやらぬか。▲冠者 なか〳〵、存ぜぬ。▲すり いや、知りやらずば、語つて聞かせう。まづ天下太平めでたい御代ぢやほどに、さやう

寶競—寶物を見せ合ふこと
私等てい—私等ふぜい
粟田口—刀鍛冶の名家後鳥羽の朝に國安則國久國などの名匠あり隨つてその作れる名刀を云ふ
七萬寶—夥しき寶物の事

二　粟田口

三人　大名　立烏帽子、素襖袴、小さ刀
冠者　半袴
すり　括り袴、黒き脚絆

▲大名 罷出でたるは遠國の大名。太郎冠者あるか。▲冠者 お前に。▲大名 念なう早かつた。此中の寶競は、夥しい事ではなかつたか。▲冠者 なか〳〵、夥しい事でござりました。▲大名 いづれもの寶に負けいで嬉しいな。▲冠者 いやも、私等ていまでが、嬉しうござりまする。▲大名 それよ〳〵。さりながら明日は、粟田口を比べさつしやれうとある。して、某が寶の内に、粟田口といふ物はないか。▲冠者 されば、殿樣の七萬寶のたからの中に、粟田口はござりませぬ。▲大名 やい冠者、これに負ければいかゞぢや。汝は都へ參り、急いで求めて來い。▲冠者 畏つてござる。▲大名 急げ。▲冠者 はあ。扨も〳〵、けはしい事を、いひつけられてござる。まづ參らう。え、とかう申す内に、都へ著いてござる。はて扨、失念の

尼が崎―攝津
おかた―奥方也 嫁のこと
そぶり―そんぶり、水の中を歩く形容
あら〱云々―曲がゝり

あ、一段出來ましてござる。▲聟 あゝ、不調法致しました。▲舅 さらば、聟殿に進ぜう。▲聟 はあ、一つ受けてござるほどに、舅殿の立姿が見たうござる。▲舅 畏つてござる。さりながら、身ども幼少な時より、冠者をば供に連れて、寺へ參つたによつて、相舞でなければなりませぬ。▲聟 これ一段ようござりませう。▲舅 やい、冠者立て。舞はうよ。尼が崎から聟が來るやら、かさをさいて居らうぞ。おかたは何處へ。播磨の明石へ、螺ふみに、そぶりそ〱、こゝまでからげた。恥かしや。▲聟、左兵衛 おう、一段出來ましてござる。▲聟 やい冠者、いづれもへつらりと進ぜたか。▲冠者 なか〱、進ぜました。▲舅 めでたう取りませう。▲聟、左兵衛 一段でござらう。▲聟 末繁昌に和歌をあげて、歸らう。▲舅 一段でござらう。▲聟、左兵衛 連舞 あら〱をかしや、をかしやな。昔が今に至るまで、一人の袴を二人著て、一人の袴を二人著て、相舞舞うてぞ、歸りけり。

立姿—舞ひのふりをいふ

さゞら波—さゞら波に同じ

人ながら、一時に出さつしやれませうず、とおつしやれまする。▲聟 おう、こりや何としたものであらう。▲左兵衛 はあ、思ひつけた。こなたこゝへ、足をはいらさつしやれい。▲冠者 申し殿様、面白い事をなされまする。▲舅 何とした。▲冠者 一人の袴をば、お二人して召してござりまする。▲舅 やい冠者、聟の恥は舅の恥、舅の恥は聟の恥、われも此所へ来い。さあ〳〵、こゝへ足を入れい。はて扨左兵衛殿は、彼方へ此方へさつしやるゝ。太郎冠者、聟殿のござつたか。▲冠者 あゝ、あれにござりまする。▲舅 盃を出せ。▲冠者 畏つてござる。▲舅 まづそれ聟殿に進ぜい。▲聟 まづお前参りませい。▲舅 したが、まづ参らいで、いや、左兵衛殿に進ぜう。橋が無うて渡りがない。▲左兵衛 まづ、其方参りませい。▲舅 さう、飲べて申そ。一つ受持ちてござるが、めでたう聟殿の立姿、見たうござる。▲聟 はあ、申しまする。身どもと左兵衛殿とは、同じ寺へ参りたによつて、連舞でなければなりませぬが。▲左兵衛 身どもと一緒に舞ひませう。▲舅 これが一段でござろ。▲聟、左兵衛 連舞 すゑの松山、さゞら波は越すとも、御身とわれとは千代ふるまで。▲舅 は

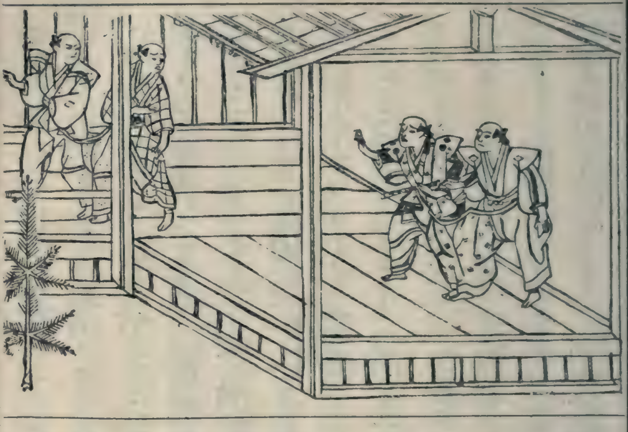
ぬかるな—手落をするな

る。▲舅やい冠者、だまして、聟のわせたものであらうぞ。ぬかるな。お這入りなされませいといへ。▲冠者畏つてござる。お這入りなされませい。▲左兵衛いえ、内方にござりまするよ。▲舅いや、此中は久しう出さつしやれなんだ。して、何と思うて、出さつしやれなんだぞ。▲左兵衛いや、されば、今日俄事でござれども、聟殿と同道申してござる。▲舅して、それは何處にござりまするぞ。▲左兵衛いや、表にでござる。▲舅やい冠者、此方へと申せ。▲左兵衛なう〳〵冠者、待ちや〳〵、おれが喚びに行く。なう〳〵、さあ〳〵、これを著させませ。▲舅やい冠者、行て喚びまして來いやい。▲聟はつ、をゝ其處へ行く。舅殿でござりまするか。▲舅これは聟殿でござるか。ようこそ出さつしやれたれ。▲聟はあ。▲舅やい冠者、左兵衛殿は何處へぢやいやい。やい、行て喚うで來い。▲聟待ちや待ちや、おれが行く。なう〳〵、さあ〳〵、これ著さしませ。▲舅やい太郎冠者、何とこれや、見えつ隱れつさつしやるぞ。▲冠者あゝ、いや、見て參りませう。▲舅やい、行て申さうには、兩人ながら、一時に出さつしやれいと云へ。▲冠者畏つてござる。申し〳〵、兩

聟入—聟が舅に近付になりにゆく禮

かを—乞はんの轉語か

ようおぢやつた。して、何と思うてお出やつた。▲聟 されば、今日は日もよいと申すほどに、こなたと連れ立ち、聟入を致さうと思うて、參つてござる。▲左兵衛 ふん、これはよい思立ちでござる。して、今ござるか。▲聟 なか〳〵。▲左兵衛 なぜに、したらば、上下は著さつしやれぬぞ。▲聟 いや、最早聟入を致そと思ふばかりで、上へも下へも寄りませなんでござる。▲左兵衛 はて、何を仰しやるぞ。これ、身どもが著て居るやうな物ぢやが。▲聟 はあ、いや、その樣なものは持ちませぬ。▲左兵衛 はて扨、代もなし、何と致さうぞ。ああ、思ひつけた。どうぞ、先で間を合しませう。ござれ〳〵。參るほどに、これでござる。それに待たつしやれい。案内をかを。ものも。お案内。▲冠者 表に案内があるが、誰ぢや知らぬまで。いえ、ようこそ出さつしやれました。▲左兵衛 いや、太郎冠者、内にござるか。▲冠者 なか〳〵、内にでござる。▲左兵衛 某が來たやうすをおしやれ。▲冠者 畏つてござる。殿樣、ござりまするか。▲舅 何事ぢやぞ。▲冠者 その御事でござりまする。左兵衛樣の御出でござる。▲舅 して、左兵衛殿ばかりか。▲冠者 いや、お兩人連でござります



狂言記　巻之四

一　相合袴

男　長袴、小さ刀
冠者　半袴
四人　聟　白衣
媒　半袴、小さ刀

▲聟　罷出でたるは、この邊の者でござる。さやうござれば、今日は最上吉日でもござり、聟入を致さうと存ずる。こゝに又、媒を爲されたお方がござるほどに、これへ參り、同道致さうと存ずる。いや、ほどなうこれでござる。ものも、お案内。

▲左兵衛　やら奇特や、案内は誰そ。いえ、右兵衛殿。

見えました。なう佛師、あれも惡うござるほどに、早う直さつしやれい。▲佛師 心得ました。さ、來て拜ましやれい。▲田舍者 いやこりや佛師ではないか。橫著者、やるまいぞ〳〵。

頃合―原本ころわひに作る

やつと―掛聲

れ。▲田舍者 心得ましてござる。▲佛師 まんまと佛は受取つてござる。某は、楊枝一本削つたことがござらぬが、何とがな致さうぞ。あゝ思ひ附けました。某が、佛の面の被て參らうと存ずる。よい時分には引つ外さうず。▲田舍者 いや、最早佛も出來ませうず。そろそろ參ろ。▲佛師 え、田舍人ござつたか。▲田舍者 なか〳〵。佛は出來てござるか。▲佛師 なかなか出來ました。あれに荒薦が掛けてござるほどに、そつと明けて、まづ出來を拜まつしやれい。▲田舍者 畏つてござる。はあ、これは、はあ、頃合はよいが、まちつとどうやらお手許が惡い。直して貰を。なう佛師殿。▲佛師 やつと。▲田舍者 まちつとお手許が、どうやら氣に入りませぬほどに、あれを直して下されい。▲佛師 いえ、膠の干ぬ内は、好きなやうにして進ぜう。さ、行て拜ましやれい。▲田舍者 は、此處な。佛師殿。▲佛師 やつと。▲田舍者 あれは何とやら、物欲しさうにござろ程に、直して下されい。▲佛師 心得ました。さ、來て拜ましやれい。▲田舍者 はあ。これも惡い。佛師、あれも惡ろござる。▲佛師 心得ました。さあ來て拜ましやれい。▲田舍者 はあ、これも惡い、これは佛師奴が面を被て、騙すと

文殊—菩薩也人の智惠を守る

こぎる—値切ること

おみぐし—御首

因幡堂—京都にあり藥師を祀る

それはどのやうな佛でござる。▲佛師 まづこの様におぢやる。▲田舎者 あゝ又、いやはや、その様なこはい佛は、子供も怖ぢませうほどに、どうぞ餘の佛を作りて下されい。▲佛師 ふん、心得てござる。現世後生を守らしやる文殊を作りて進ぜう。▲田舎者 はあ、それは一段ようござりませう。して又代物はいかほどでござる。▲佛師 萬疋でござる。▲田舎者 價はこぎりますまい。いつごろ出來ませう。▲佛師 されば、十年ばかりせずは出來ますまい。▲田舎者 はあ、いやそれほど待つ事はなりませぬ。▲佛師 いや、其儀でござるならば、明日出來して進ぜう。▲田舎者 いやこれは又、如何したことでござろ。▲佛師 いや、不審な御尤もでござる。ながう申すのは、某一人して刻もと存ずる。又急ぎなれば、數多の弟子が集まつて、おみぐしをけづり、御手を刻み、衣の襞を取り致すのをば、拙某が膠を以つて、ひた〳〵とつけますれば、時の間に出來まする。▲田舎者 はあ、かうもござろ。してこなたのお宿は何處許でござる。▲佛師 宿と申したと、知らしやれますまいほどに、因幡堂の後堂で渡しませう。▲田舎者 ふん、これで受取りませう。さらば〳〵。▲佛師 明日ござ

運慶—鳥羽院の時の人東大寺の大佛師

湛慶—建長比の人東大寺の大佛師

安阿彌—快慶と云ふ東大寺の大佛師建久比の人

愛染—明王也三目六臂にして頂に獅子面あり人をして佛法を愛する心を起さしむ

仕合を直さうと存ずる。え、田舍者が佛を買をと申す。どうぞあれに、さわたつて見ませうず。なう其處な人、何をわつぱとおしやるぞ。▲田舍者 いや、田舍者でござるが、佛を買ひに上り、佛屋を存ぜいで、かやうに申す。▲佛師 はて、其方は仕合な人ぢや。▲田舍者 ええ。▲佛師 いや、仕合と云うて、袖褄に附いてあるものではない。某に逢やつたが仕合でおぢやる。▲田舍者 いやそれは何と。▲佛師 いや、某は佛師でおぢやる。▲田舍者 はあ、こりや仕合でござる。してこなたは、どの流でござるぞ。▲佛師 されば、運慶、湛慶、安阿彌と云うておぢやる。某は安阿彌でおぢやる。▲田舍者 あゝ、聞及びました。して、佛の出來合がござるか。▲佛師 いや〳〵、先の望み次第に作りてやりまする。▲田舍者 あゝ、まことにかうもござろ。して佛は、何がようござりませうの。▲佛師 いや、堂はどれほどにおぢやるぞ。▲田舍者 いや、一間四面の堂でござる。▲佛師 あゝ、其儀ならば、身が立つて居るほどながようござろ。▲田舍者 はあ、これほどながようござる。▲佛師 して、佛は、どなたを作りませうの。▲田舍者 されば、何がようござろの。▲佛師 あゝ、愛染を作りて進ぜう。▲田舍者

一間四面—一間四方
光り堂—金色堂
ほぞん—本尊
買ひす—買ひますの略



十　佛師

二人　田舍者　半袴
佛師　半袴、地藏の面

▲田舍者　罷出でたるは、遙か遠國の者でござる。佛法繁昌につき、一間四面の光り堂を建てゝござるが、未だほぞんがござらぬ。都へ求めに上らうと存ずる。まづそろ〳〵參ろ。いえ、ほどは參らねども、はや都へ著いてござる。佛師を存ぜぬほどに、これから呼ばはりませう。佛買ひす。佛買を。

▲佛師　罷出でたるは、心も直にない者でござる。さやうにござれば、渡世を送らうやうにもござらぬによつて、樣を變へてござる。何者にもさわたり、

れ、これをお手前に出そ。▲九郎次郎 何でござりまするぞ。▲庄右衛門 いや、お手前のこれは借状でおぢやる。▲九郎次郎 はて扨、遅なはつたさへ悲しう存ずるに、其方に留置かつしやれて下されい。やがての内に、きつと御算用を相立てませう。▲庄右衛門 して、厭でをりやるか。▲九郎次郎 は、いや申し、厭ではござりませぬ。▲庄右衛門 その義ならば、只もえ取りやるまいほどに、句を附けておまつしよ。餘り慕へば文をこそやれ。▲九郎次郎 忝うこそござりまする。▲庄右衛門 又用ある折は云うてをりやれ。▲九郎次郎 はつ。謡 やさしの殿の心やな。いつなれぬ花のすがた、色あらはれて、この殿の、かり物をゆるさるゝ。たぐひなの殿の心やな。やれさて、これさへおはねば心すつきり。

うき雲と、致したい句でござる。▲庄右衛門 いや〳〵、これは、なせのせの字で持つた句かと思ふ。▲九郎次郎 しからば、かうもござりませうか。幾度も霞にわびん月の暮。▲庄右衛門 かうもをりやらうか。こひせめかくる入相のかね。▲九郎次郎 あゝ申し。▲庄右衛門 何とめされたぞ。▲九郎次郎 さればの事でござる。お前の金を負ひましたのは、最早案じ暮すによつて、かねのねの字、あゝいかう耳へ響きました。さりながら、かうもござりませうか。鷄もせめてわかれはのべてなけ。▲庄右衛門 人めもらすな戀の關守。▲九郎次郎 名の立つに使な告げそ忍び妻。▲庄右衛門 お立ちやれ。▲九郎次郎 何がお氣に障つてござる。▲庄右衛門 其方のところへ、いつか名の立つほど使をたてゝをりやるぞ。▲九郎次郎 申し、何と聞かつしやれてござるぞ。お前のは戀の句ではござらぬか。▲庄右衛門 なか〳〵。▲九郎次郎 戀などと申すは、間の使が洩らしますれば、必ず名の立つものでござる。したによつて、名の立つに使な告げそ忍び妻と、いたしてござる。▲庄右衛門 扨も〳〵、聞き誤りておぢやつた。出來た句でをりやる。何がな其方に褒美が出したいが、はあ何がな。や、これこ

發句―第一句也脇は第二句のこと

ごめんなれかし―負債免除をきかす

遠のき―暫く連歌を詠まぬこと

櫻になせや―負債を濟す意をきかす

▲庄右衛門 おう、稽古の爲ぢやほどに、互どくに直そ。▲九郎次郎 ようござりませう。まづ遊ばしませい。▲庄右衛門 いや〱、客人發句に亭主脇といふことがある。まづ其方からおしやれ。▲九郎次郎 畏つてござる。かうもござりませうか。▲庄右衛門 何と。▲九郎次郎 花ざかりごめんなれかし松の風と、致しましてござる。▲庄右衛門 わあ、これは見事でをりやるわいの。▲九郎次郎 遠のきましてござるほどに、何とござりまするぞ。▲庄右衛門 いや、出來てをりやる。さりながら、そつと字がさすわいの。▲九郎次郎 さらば直さつしやれませい。▲庄右衛門 花まではようをりやる。この御めんの免字を取つて捨てゝ、御免なさじや松の風が、ようをりやる。▲九郎次郎 いえ、字さへ餘りて大事ござらずば、御めんの字は、百も二百も云ひたいところでござる。▲庄右衛門 したら、かうもをりやらうか。櫻になせや雨のうき雲と、致してをりやる。▲九郎次郎 扨も〱流石でござる。出來さつしやれてござる。さりながら、慮外ながら、ちつと直したい所がござりまする。▲庄右衛門 あらば直しやれ。▲九郎次郎 櫻まではようござりまする。なせのせの字を取つて捨てゝ、さくらになすな雨の

手─筆蹟
かなん法師─子どものこと

百句か二百句か─連歌の百韻二百韻の事
表八句─懐紙の第一面に八句しるすこと
字がさす─文字の差合

やうな事にたづさはりましたる故をもち、今に遲なはり、迷惑いたすでござる。▲庄右衛門 なう、其方は見上げた事を云ふ人ぢや。して、今もならうか。▲九郎次郎 何が扨、この時分に參つてござるならば、下の句などは致して見ませうものを。▲庄右衛門 いよ〱の事を云はします人ぢや。して、この手は見知りやつたか。▲九郎次郎 されば、懐紙の位は、大方合點でござるが、お手は見知りませぬ。▲庄右衛門 見知りやらぬは道理、かなん法師が手でをりやる。▲九郎次郎 いえ、このお手が、かなん法師樣の遊ばしましてござるか。これは扨、親御よりも生れ上らつしやれた事でござる。あの連の字の撥ねた勢などは、見事でござりまする。▲庄右衛門 ようをりやるかの。▲九郎次郎 なるほど結構なお手でござる。▲庄右衛門 して何も、まそつとも上らうと思やるか。▲九郎次郎 このお手は、屋根さへなくば、天までも上らう御手でござる。▲庄右衛門 はれ扨、戲事をいふ人ぢや。いざ若い衆を集めて、百句か二百句か致さう。▲九郎次郎 これは又餘りざやうな事でござる。お前と身共と表八句致しませう。▲庄右衛門 これがようをりやらう。▲九郎次郎 字がさゝば、直しどくに致しませう。

懐紙―歌を書く料紙を掛軸にしたる也

屋固―普請祝

つと算用を仕りませう。▲庄右衛門 なう九郎次郎、其方のやがて〳〵は、いつぞやからの事でをりやる。逢うたこそは幸なれ。算用を致そ。▲九郎次郎 どう仰しやれても、今日はなりませぬ。▲庄右衛門 なう九郎次郎、ならぬとおしやつた分では、埒が明くまい。某が方へ向けておぢやれ。▲九郎次郎 私が参つたとても、錢金にはなりますまい。▲庄右衛門 ならうとなるまいと、おぢやれ。▲九郎次郎 おう、参れなら、参りませう。▲庄右衛門 おりやれ〳〵。▲九郎次郎 はつ。▲庄右衛門 程無うこれでをりやる。▲九郎次郎 扨も〳〵、御普請をなされたによつて、お家も見忘れてござる。この時分をば存じましたらば、手傳に参りませうものをば。▲庄右衛門 をゝ過分にをりやる。手傳人は數多多うはおぢやつたいの。▲九郎次郎 何が、さやうでござりませう。わ、床をさゝつしやれてござる。▲庄右衛門 されば床を入れておぢやろ。▲九郎次郎 定めてこれは懐紙がかゝりましたが。屋固の懐紙でござりませう。▲庄右衛門 なう九郎次郎、わが身の懐紙だては、早いぞや。▲九郎次郎 これは扨、迷惑なことを御意なさるゝ。お前の銀子を負ひましたのも、悪い事に費うたでもござらぬ。若い折に、か

わすれば―來れば

口上が上つた―口前がうまくなつた

その儀ならば、庄右衛門用あつて參りたれども、お目にかゝらいで戻つたとおしやつてたもれ。▲九郎次郎畏つてござる。▲庄右衛門やれ扨、今のは九郎次郎が聲でござつたが、留守をつかうてござる。彼奴めは、平常裏道へ外すと申す、裏道へ向けて參らうず。▲九郎次郎やれ扨、あぶない事かな。すでに會はうと致した。又わすれば惡い。裏道へ向けて外しませうず。▲庄右衛門いえ、此處な。▲九郎次郎はつ。嬉し悲しうようござりました。▲庄右衛門なう九郎次郎、人にさし逢うての言葉は、數多多うおぢやる。嬉し悲しいとはどうした事ぞ。▲九郎次郎さればの事でござる。お前御出の由を承つたによつて、會はいで叶はぬ御方ぢやがと存じ、裏道へ追つかけまするとて、蹴躓きましたが、悲しうござるやら、只今お目にかゝつたが嬉しうござるやらで、嬉し悲しいと申してござる。▲庄右衛門なう九郎次郎、いかう口上が上つたの。それにつき、某が來るは別義でをりやらぬ。彼の事に參つた。算用をしてたもれ。▲九郎次郎さればの事でござろ。身どももどうぞ算用を致したいやうに存じたれども、かれこれいたして遲なはつて、迷惑にござろ。やがての内に、き

ひかへて—用立てて

彼のして—彼の人

九　八句連歌

二人　庄右衛門　長袴、小さ刀
　　　九郎次郎　長袴、小さ刀

▲庄右衛門　罷出でたるは、邊の者でござる。さやうにござれば、九郎次郎と申す者に、少し米錢のひかへてござる。度々人を遣りますれども、つひに算用を致さぬ。今日は自身参り、算用を致さうど存ずる。やれ扨、憎い奴でござる。用ある折は色々追従などを申し、今は却つて悪口などを申しまするげな。いや〳〵、とかう申すうちにこれでござる。某が聲と聞いてござるなら、定めし逢はぬでござろ。作聲をいたし喚び出しませうず。ものも。お案内。▲九郎次郎　やら奇特や、表に案内がある。案内は誰そ。▲庄右衛門　庄右衛門でをりやる。九郎次郎殿内にござるか。▲九郎次郎　南無三寶、彼のしてでござる。留守をつかひませう。九郎次郎、唯今小用ござり、他所へ参られてござる。お這入りなされませい。▲庄右衛門　さうおしやるは誰でをりやるぞ　▲九郎次郎　いや隣の者でござる。▲庄右衛門

ぬは―ずばの意に解すべし

どづいて―打つて

わゝ―笑聲

やい菊一、われればかり飲むか。なぜにおれにはくれぬぞい。▲きく一 これもござらぬは、樽かぶらしやれい。▲道行人 扨も〱、座頭といふものは面白い者でござる。ちと諍はしませう。▲勾當 やい此處な菊一めは、酒くれぬのみならず、汝はなぜにくはせたぞ。▲きく一 勾當様飲み隱しさつしやるさへぢやに、何とさつしやる。▲勾當 いや。おのれ憎い奴の。▲きく一 これやなんとめさるぞい。▲道行人 扨も〱よい慰でござる。どづいて諍はするこんな面白い事はござらぬ。▲きく一 なう勾當様、今のを聞かしやつたか。▲勾當 さればいやい、今思ひ附けた。▲きく一 酒飲うだり、くはしたり、負はれたも彼奴でござりませう。▲勾當 菊一、捕まへ。▲きく一 勾當様ござりませい。おのれ何處に居るぞ。▲勾當 やるまいぞやるまいぞ。▲道行人 わゝ。

おどれ―おのれに同じ

たんませう―たべませう、飲ませう

ちやうと―酒の盃に滿ちたる形容

こしめして―きこしめしの略か

今のほど負ひ越したに、足のまめな、なぜに又そちらへ行かしやつたぞ。はれ扨物好な、目の見えぬ者をば、あちらへこちらへさするが面白いかぢやまでい。さ負はれさつしやれい。いえ扨又、負はれさつしやれ。面白ござろの。▲勾當 何を云ふぞいやい。▲きく一 何いふと事があるものでござるかいの。はゝ、深い所へはいりましたわいの。▲勾當 これおどれ、何事仕居つたぞ。▲きく一 轉びましたわいの。▲勾當 やれ扨くつと濡らし居つた。▲きく一 はじめので置かつしやりやよい事、二度三度さつしやる所で、えゝ、濡れて寒やな。▲勾當 やい菊一、今の竹筒は流れはせなんだか。▲きく一 腰に結はへ著けて置きました。▲勾當 どりや一つ飲まうに。▲きく一 わしもたんませう。參りませい。▲道行人 いや座頭が酒を飲む體でござる。負はれた上に、又酒も飲みませう。▲きく一 勾當樣、參りませう。ちやうとござりまする。わしも一つ飲べませうよ。▲勾當 やい其處な奴、おれにもくれいで、なぜに飲むぞい。▲きく一 今のほど、こしめしてから、飲み隱しばかりさつしやる。▲勾當 飲まう事わい。▲きの一 いやこれ參りませいの。ござりまするか。又私もたべませうよ。▲勾當

かい川―紙屋川也晉川とも云ふ北野と平野との間を南流す
瀬踏―川瀬の深淺を試みること
こな樣―こなた樣、あなたさま

筒を持つたら、ようおぢやらうものを。▲きく一 これに心得て持ちました。▲勾當 ふん、好う氣が付いた。おぢやれ〳〵。▲きく一 參りまする。▲勾當 なう菊一、彼のとんといふは川ではないか。▲きく一 あゝこれはかい川と云ひまする。▲勾當 いかう水が出たさうなぞや。▲きく一 待たしやれませい、瀬踏をして見ませう。石は無いかぢやまでい。いえ、あるわ。ま此處へ打つて見ませう。どぶ〳〵。あゝいかう深さうな。上手へ打つて見ませう。やえい。どぶり、かつちり。はあ勾當樣、上へ廻らしやれませい。上が淺うござりまするぞ。▲勾當 やい菊一、負うて渡せ。▲きく一 こな樣も渡らしやれませいさて。▲道行人 罷出でたるは道通でござる。いや座頭が座頭を負うて渡すと見えた。某が負はれて渡りませうず。▲勾當 やい菊一、おのれを連れるは、この樣な川なども、負はれて渡らうと思うて連れよ。急いで負へいの。▲きく一 こゝへござりませい。あゝいかう深うござりまするぞ。やう〳〵の事して渡つたよ。▲道行人 やれ扨、まん〳〵と負はれて渡りました。▲勾當 やい菊一、おのればかり渡つて、なぜに某をば置いて行たぞいやい。▲きく一 わ、勾當樣、又

勾當―盲官の一にて檢校と座頭との間なり

竹筒―酒器



八　どぶかつちり

三人　勾當　沙門帽子、衣、撞木杖
　　　菊一　下ばかりさくり杖
　　　道行人　半袴

▲勾當 罷出でたるは、この邊に住居仕る勾當の坊でござる。さやうにござれば、今日はきく一を連れ、嵯峨へ參らうと存ずる。きく一あるか。▲きく一 これに居りまする。▲勾當 其方を呼び出すは別のことでもない。嵯峨へ參らうと事ぢやが、參りやらぬか。▲きく一 勾當樣の參らさしやれまするなら、參りませう。▲勾當 おぢやれ〱。▲きく一 行きまする。▲勾當 なう菊一。▲きく一 何でござりまする。▲勾當 竹

て。▲大名 やい其処な奴、何とするぞ。縛れいやい。▲冠者 待たしやれませいの。さあ、おのれ此處へ足を入れ居れ。はあ、臑の利いた奴ぢやわ。▲大名 やい何とし居りや。それ首へ掛けいやい。▲冠者 心得た。こりや掛けたい。▲大名 いや、こりやおれぢやが。▲冠者 はあ、殿樣でござるか、許さしやれませい。▲大名 やるまいぞ〳〵。

がつき—餓鬼也人を罵り云ふ詞

重代—家寶

と事が—といふ事が

彼奴が提げて居る太刀を、身共取つて參りませう。▲大名をゝ、行て取りて來い。▲冠者お前のその刀を、おこさつしやれませい。▲大名こりや／＼、急いで取つて來い。▲冠者畏つてござる。がつき遁すまいぞ。▲男心得た。おのれその拔いてかゝつた刀をば、よこしをるまいか。▲冠者あゝ、進ぜませう、／＼。▲男鞘に納めておこし居ろ。▲冠者あゝ。▲男いやその柄頭の方を差出せ。▲冠者厭ならおきやいの。▲男定おこし居るまいか。▲冠者あゝ、進ぜませう。▲男はあ、こりや好い仕合でござる。▲冠者殿樣々々、取りました／＼。▲大名どりや。▲冠者刀をあちへ取りました。▲大名やい、それは重代ぢやが、とつと行たか、取り返そ。來い／＼。▲冠者ありや／＼、彼奴でござる。▲大名默れ／＼。さあ捕まへたは。▲男こりや何とする。▲大名何とすると事があるものか。やい冠者、その太刀も、刀も取れ。▲冠者はあ、取りました。▲大名その繩をこしらへえ。▲冠者畏つてござる。まじつへいあてませう。▲大名やい、繩をおこし居れやい。▲冠者はつ。ぢつと捕まへてござりませいの。繩綯ひまするわいの。▲大名早う綯ひ居れ。▲冠者まづおのれ、この繩にこすりをかけ



北野―天満宮也
縁日は二月廿五日菜種の御供七月六日御手水會九月四日祭禮

七　太刀奪

三人　大名　立烏帽子、長袴、小さ刀
冠者　半袴
男　半袴、太刀を持つ

▲大名 罷出でたるは、隠れもない大名。太郎冠者あるか。▲冠者 御前に。▲大名 念なう早かつた。汝を喚び出だす餘の義でない。今日は北野の縁日、社參致さう。供に參れ。▲冠者 畏つてござる。▲大名 來い來い。▲男 罷出でたるはこの邊の者でござる。賴うだ人を迎に參らうと存ずる。▲大名 やい冠者、あれ何者やら、手に太刀を提げて通る。汝にも持たせて、供に連れたらよからうものを。▲冠者 申し殿樣、

青海苔の引干ー忠度の名を海苔と聞違へたるなり

たうござる。▲僧　後は平家の公達薩摩の守、はあ今、思ひ付けた。▲船頭　何と。▲僧　物と。
▲船頭　何と、▲僧　青海苔の引干。▲船頭　何でもないこと。とつとと行かしませ。

得を取るより名を取れ—當時の諺なり利益よりも名譽を尊べとなり

公達。▲船頭いや、小言を云はずとも、渡しやれいの。▲僧いや、秀句で渡そ。▲船頭いや、何とおしやるぞ。某が秀句を好くと事が、關東まで聞えておぢやるか。▲僧なか〱、神崎の渡守、秀句好きぢやといふ事は、關東に知らぬ者はおぢやらぬ。▲船頭扨も〱、それはまことでおぢやるか。眞實か。わはゝ、扨も〱、得を取ろより名を取れぢや。秀句で受取うませう。して何と。▲僧平家の公達薩摩の守。面白おぢやるか。▲船頭あゝ面白ござるは。して後は。▲僧向で渡そ。▲船頭なか〱、向で受取りませうぞ。後が面白ござろの。▲僧面白いことでござる。▲船頭はて扨、こなたのやうなる御坊とも存ぜず、乘せうの乘せまいのと申した。又下向道には二日も三日も留めまして、船遊をさしませうぞ。▲僧忝うこそござれ。▲船頭身拵をさつしやれい。頓て船は著きまするぞ。▲僧心得てござる。▲船頭さあ、上らつしやれい。して今の後は。▲僧平家の公達薩摩の守、薩摩の守、かみでをりやる。▲船頭いやその後が聞きたうおりやる。▲僧はつて、茶屋が何とやら云うたが。▲船頭なう坊、秀句に茶屋はいるまい。後わいの、何とめさるぞ。いや後が聞き

先達—案内者

御坊、して其の百人の道者は。▲僧いや、皆は後から來る。某は先達ぢやによつて、先へ行かねばならぬ。渡してたもれ。▲船頭何をおつしやるぞいの。一人や二人を渡す所ではおぢやらぬいの。▲僧なう船頭、百人の船賃の渡さうほどに、乘せてたもれ。▲船頭いやそんなら渡しませう。さあ〳〵乘らつしやれい。なう〳〵こなたは、今のやうな乘りやうがあるものでおぢやるか。船がいかう不案内と見えてをりやるよ。▲僧なう船頭、この船には、底に穴やなんどはないか。▲船頭はあ、彼の坊の云はしますことわい。穴があつてよいものでをりやるか。して御坊は、どれからどれへござるぞ。▲僧いや關東から天王寺へ參る者でおりやる。▲船頭お若うござるが、近頃殊勝にござる。して御坊、云ひたい事がござる。▲僧何でかござるぞ。▲船頭いや、船賃の貰ひませう。▲僧いや、向へ著いてから進ぜう。▲船頭なう御坊、元もさう云うて、乘逃が數多うおぢやつた。今はそれぢやによつて、川中で取りまする。それにおくしやらぬ人は、向な島へうち上げて置きまする。▲僧あゝこはい事をおしやる。船賃の、したら渡そ。▲船頭受取りませう。▲僧平家の

は忝うこそござれ。さらばこれへ下されい。▲茶屋 なう御坊、いや某船賃の進ぜうと申するは、別の事ではござらぬ。彼の渡守は、秀句好きでござるによつて、こなたにたゞ乗せる秀句を、教へて進ぜうと云ふ事でござる。▲僧 はれ扨、忝うこそござれ。して、それは何と申しませうぞ。▲茶屋 あれへござつたらば、まづ船に乗らつしやれう。その時に、船賃と云はう時に、平家の公達薩摩の守たゞのりぢやとおつしやれい。▲僧 はあ、出來ました。たゞ乗るによつてたゞのり。はあ忝うこそござれ。此う参りまする。▲茶屋 下向道には寄らつしやれい。▲僧 はあ、さればこそよ、茶屋の云ふ如く、大きなる渡がある。渡守が居ぬが、何處許に居るぞ。▲船頭 罷出でたるは、この所の渡守でござる。今日は日並もようござるほどに、定めて乗手もござらう。そろ〱参らう。▲僧 いや、あれへ渡守と見えて、居りまする。呼びませうず。ほうい。▲船頭 何ぢややい。▲僧 船に乗らうやい。▲船頭 この所は大事の渡ぢやによつて、一人や二人は乗せぬいやい。▲僧 道者は數多多いわいやい。▲船頭 幾人程あるぞ。▲僧 百人も居りやるわいの、▲船頭 いやそんならば乗せう

秀句—口合のことにて謎、洒落などを云ふ

たゞのり—忠度に只乗を掛く

乗手—乗客

道者—修行者巡禮などのこと

ほん〳〵に—本当に

神崎の渡—攝津神崎川の渡

神佛は見透し—天に僞なしの意

れは熱うござる。▲茶屋畏つてござる。うめて進ぜませう。▲僧あゝ扨、喉渇きにござつたに、ちやうどようござる。も此う参る。▲茶屋ござりまするか。▲僧忝うこそござれ。此う参る。▲茶屋申し御坊、何も忘れはなされませぬか。▲僧されば、数珠もをりやり、笠もある。いえ何も忘れは致さぬ。▲茶屋なう御坊、茶代を忘れさつしやれた。▲僧ふん、その茶には代がいりますか。▲茶屋はれ扨、茶屋の茶に、銭のいらぬと云ふ事がおぢやるか。一服一銭でおりやるわいの。▲僧はれ、したらば、飲むまいものをば。なう〳〵茶屋殿、銭は持合せませぬほどに、この数珠を置いて参ろ。▲茶屋して、ほん〳〵にござらぬか。▲僧なか〳〵をりやらぬ。▲茶屋して又こなたは、どれへ向けてござる。▲僧いや、かう天王寺へ参ります。▲茶屋まちつと行かしやれば、神崎の渡とて船がござるが、それは何と遊ばつしやるぞ。▲僧いやそれは渡つて参ろ。▲茶屋渡るやうな川ではござらぬ。▲僧いやその儀ならば、船賃は持たず、神佛は見透し、これから下向致そ。▲茶屋なう〳〵、見ますれば餘り痛はしい義でござる。船賃の進ぜう。▲僧これは扨、茶の銭進ぜぬ上に、船賃まで

六 薩摩守

三人　僧　頭巾、衣、笠
茶屋　長袴、かづら桶の蓋
船頭　半袴、さし棹

▲茶屋 罷出でたる者は、邊の茶屋でござる。往き來る人に、今日も茶を賣らうと存ずる。扨も〳〵今日はさびしい事かな。人通もござらぬよ。▲僧 罷出でたるは、關東邊の愚僧でござる。さやうにござれば、諸國修行を致し、又これよりも、大阪天王寺へ參らうと存ずる。まづそろ〳〵參らう。▲茶屋 なう、申し御坊、お茶參らぬか。▲僧 これは扨、知らぬ人の茶をくれうといやる。立ち寄つて飲べうと存ずる。扨も道を歩けば、彼のやうなる慈悲深い人もござるほどに、はあ、唯今はお茶飲めとおつしやる。一つたべませう。▲茶屋 いや、身どもが手茶でござりまする。▲僧 も一つたべませう。▲茶屋 はあ、參りませう。▲僧 扨も〳〵、これは好い茶でござるの。▲茶屋 はあ、なんぼなりとも參りませう。▲僧 こ

天王寺―四天王寺聖德太子御建立

力叶はぬかとて、一禱ぞ禱つたり。▲山伏 橋の下の菖蒲は、誰が植ゑた菖蒲ぞ。▲柿主やい山伏、可笑い事せずとも往ね。▲山伏 やい、定云ふか。も一禱ぞ禱つたり。ぼうろぼんぼうろぼん〳〵。そりや見たか、山伏の手柄には、物に狂ふは手柄ではないか。

くすろうて―藥す即ち療治すること
おつとせて―音せて即ちそつとといふ意なるべし

な事ぢや。▲山伏 わ、某を猿ぢやと云ふが、はあ、こりや身ぜせりしませうず。▲柿主 ふん、猿に紛ふ所はない。猿なら啼かうぞえ。▲山伏 はあ、こりや啼かざなるまい。きや〳〵。▲柿主 はあ、猿に紛ふ所はない。猿かと思へば犬ぢやげなわいやい。▲山伏 はあ、又こりや犬ぢやといふ。▲柿主 犬なら啼かうぞよ。▲山伏 はあ、又こりや啼かざなるまい。びよ〳〵。▲柿主 はあ、犬ぢや〳〵。犬かと思へば鳶ぢやげなわいやい。▲山伏 はあ、又こりや鳶ぢやといふ。▲柿主 鳶なら飛ぼぞよ。▲山伏 飛ばざなるまい。▲柿主 鳶なら飛ぼぞよ〳〵。ありや飛んだわ。▲山伏 あ痛、痛。やいそこな者、某が木のそらに居れば、貴い山伏を、いや犬で候の、猿で候のと云うて、なぜに腰を抜かしたぞ。急いでくすろうて返せ。▲柿主 やい其處な者、柿を喰て恥しくば、御免なれと云うて、おつとせで往ね。▲山伏 やい其處な者、山伏の手柄には、目に物を見せうぞよ。▲柿主 柿盜みながら小言を言はずとも、急いで往ね。▲山伏 定云ふか。ものに狂はせうが。▲柿主 山伏おけ。なるまいぞ。▲山伏 定云ふか。それ山伏といつぱ、役の行者の跡を續ぎ、難行苦行、こけの行をする。いまこの行

次第—例の如く曲にかゝる

物欲しう—食べ物を望む意

猿奴が上つて—わざとなぶる詞

身ぜせり—體をこせ〳〵すること

五 柹山伏

二人 山伏 兜巾、篠懸、數珠
柹主 長袴、小さ刀

▲山伏 次第大峯葛城踏分けて、わが本山に歸へらん。罷出でたるは、大峯葛城に參詣いたし、只今下向道でござる。よき序なれば、檀那廻をいたさうと存ずる。まづ〳〵そろそろ參らう。やれ扨、何とやら物欲しう存ずるが、まだ先の在所は程遠さうにござる。何と致さうで。いえ、此處に見事な柹がござるほどに、一つ取つて食べうと存ずる。▲柹主 罷出でたるは、この邊の者でござる。今日も行て又柹を見舞はうと存ずる。何と致してやら、鳥がついて迷惑致す。いえ、こゝな、鳥が食ふかして、蔕が落ちたが、わゝ、核も落つるが、上に鳥が居るか。いえ、山伏が上つて居るが、何と致さうぞ。いや、彼奴をなぶりませうぞ。はあ、上に猿奴が上がつて居る。▲山伏 はあ、柹主奴が見つけ居つた。何と致さうぞ。▲柹主 はあ、あれは猿ぢやが、身ぜせりをせう事ぢやが、身ぜせりせぬ。異

見め—容貌

おこと—そなた

女房を—以下曲がかり

いかはこひしの御聲や。さりとては歸りあり、きやうきをやめてたび給へ。▲女房 見めのわるきは生れつき、一度去られし中なれば、何しに歸りあふべき。▲市兵衛 みめのわるきも、色の黑きも、たゞ醉狂のあまりなり。おことはみめもよきものを。▲女房 それはまことか。▲市兵衛 なか〳〵に。ふしなかんなかに、いよち人のみめのよきは、田中權の守、まむすめ、聟になりたやなむ三寶、そゞろいとしうてやるせなや。▲女房 さあらば、その儀で候はゞ、急いで誓を立てたまへ。▲市兵衛 諏訪八幡も御示現あれや。元の女に媒なしと、太刀を取つて打ち擔げ、笠を取つて打ち被せ、女房を先に立て、我が家に歸る嬉しさよ、嬉しさよ。

曲もござらね—つまらぬ

まづ—以下戀ひしき迄曲がかり

十德—素襖に似て腋を縫ひつけ胸紐あり

山にも見えず—以下やるせなや迄曲がかり

どもが女房を去つたと仰しやれまするか。▲五兵衛 なか〳〵。▲市兵衛 はれ、ひよんな事を仰しやる。あれは假令うち出すと云うても、去ぬることではござらぬ。▲五兵衛 その證據がある。一腰がおぢやるまいぞ。▲市兵衛 申し、まことに、夢のやうに覺えました。身共が酒に醉ひまして、假令去りまするとても、お前の止めては下されいで、曲もござらぬ。▲五兵衛 なう〳〵、その樣に泣いて居た分では、埒が明くまい。女子の事ぢやほどに、まだ程遠うは行くまい。急いで追つかきやす。▲市兵衛 畏つてござる。後を賴みまする。ふし まづ、法師が母が能には、あらきにつるをはぐるが如く、春は蕨折り、さて又夏は田を植ゑる。秋は稻扱き、冬は又、背戸の窓の明りにて、萠黃の布を織るとの。おりたる布はなに〳〵。素襖袴十德、布子の表小帷子。今よりしては誰が織りてくれうなう。法師が母ぞ戀ひしき。なう其處許へ物を問を。二十ばかりな女房が、手に太刀を提げ、物案じ姿にて、その方へは行かぬか。ふし 山にも見えず。里にも見えず。あら法師が母ぞこひしき。▲女房 法師が母只ひとり、夢のさめたるこゝちして、親のもとにぞ歸らん。▲市兵衛

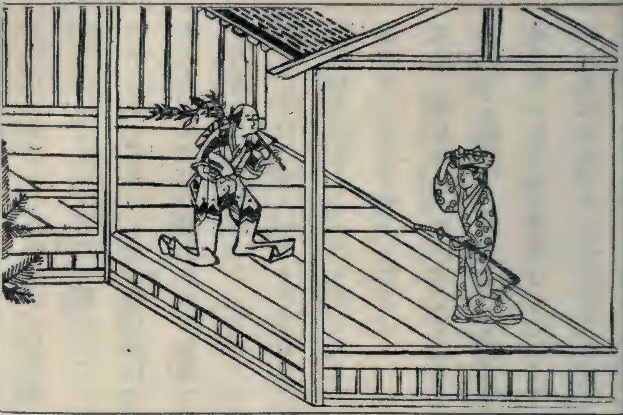
ぬかいて―ぬかすは云ふ事を卑しく云ふ
暇をおくしや―暇を呉れよ
一腰―帶刀
すつきりと―さつぱりと
かな法師―子どものこと

人なり。情ないとぬかいて、男の喉を止め居る。出てうせ居れ。▲女房 なう市兵衛殿、去ねならば去なうほどに、暇をおくしや。▲市兵衛 いや、暇を欲しがりやる上﨟様の顔は、いや〳〵。▲女房 なうそのいな事いはぬとも、急いで暇をおくしやいの。▲市兵衛 をゝ、何なりとも、おのれが欲しいものを取つてうせい。▲女房 をゝ、その一腰をおくしや。▲市兵衛 を、去る女に何が惜しからうぞ。さあ、取てけ。女房を去つたれば、心がすつきりとした。まづちと寢ませうず。▲女房 妾は暇を取りましてござるが、一人あるかな法師が、纔ませう。▲五兵衛 罷出でたるは、この邊の者でござる。さやうにござれば、市兵衛と申す者に、女房を媒致してござるが、又去りましてござるか。女房は泣いて通つてござるが、行て見舞はうと存ずる。されぱこそ、たべ醉うて臥せつて居る。なう市兵衛起きやれ。▲市兵衛 いえ、ようござりました。やい〳〵女ども、茶を立ていやい。▲五兵衛 なう市兵衛、それは何とおしやるぞ。其方は女房を去つたげなが。▲市兵衛 何とおしやれまするぞ。身

法師物狂―一名法師が母

ていど―きつと

盛らつしやる人―酒を勧める人



四　法師物狂

三人　男　長袴、小さ刀
女房
媒　長袴

▲市兵衛 ざゝんざ、はま松の音は。あゝいかう酔うたことかな。▲女房 妾はこの邊の者でござる。身ども連合は、殊の外の酒呑みでござる。又遅うござるほどに、ていど又酔うてゞがなござろ。迎に参らうと思ひまする。なう市兵衛殿、何處でその様に酔はつしやれたぞ。情なやな。呑む者は畜生でも呑むが、盛らつしやる人が恨めしい。▲市兵衛 やい、其處な女め。盛らつしやる人こそは、結構な

土中につきこめて—埋葬のこと
阿難尊者—白飯王の子、十大弟子の一、名聞第一なり
うせ居ろ—來れの意

土中につきこめてあれば、塚の上よりも、茗荷一本生えてある。即ちこれを、愚鈍第一の塚より出たれば、鈍根草とつけられてある。又釋尊の御弟子に阿難尊者と申するは、智恵第一の佛にてあつた。釋迦如來靈鷲山にて、四十餘年の御説法を、一字一點も殘さずに受け取りなされたる、第一にてあつた。これも終には悟道をなされ、土中にこめてあれば、その塚から、蓼一本生え出づる。即ちこれをば利根草とつけられてある。神の御前ともいはせず。腹を立てさせ居る。下向をする。うせ居ろ。▲冠者 はあ。▲殿 來るか來るか。▲冠者 參りまする。▲殿 やい冠者。某はも一度御前へ戻らずばなるまい。▲冠者 何となされました。▲殿 いや物を忘れて來た。▲冠者 はあ。蓼を參りましたほどに。何も忘れはなされますまいが。▲殿 蓼を喰たれども忘れた。▲冠者 身どもは茗荷を喰べましたれども、物を拾ひました。▲殿 何ぢや見せい。▲冠者 これでござりまする。▲殿 それはおれがぢや。よこし居ろ。▲冠者 欲しうござりまするか。なりますまい。▲殿 やい〳〵。やるまいぞ〳〵。

藏の一こゝにあれば御菩薩池と書きて美曾呂池と訓むとも云ふ

▲殿 やい、某は今宵はお通夜を申すほどに、汝はそれに起きて居つて、雞が唱うたら起しませい。▲冠者 畏つてござる。申し殿様。▲殿 何ぢや。▲冠者 宿坊から、重の内が参りました。▲殿 やい、某が忍びて参りたをば、何としてか存じあるぞ。御使は。▲冠者 いや、置いて帰られましてござる。▲殿 どりや〳〵、寒いほどに一つ飲まうぞ。▲冠者 上りませい。▲殿 肴は何ぢや。▲冠者 茗荷と蓼とがござりまする。▲殿 どりや、その蓼をおこせい。▲冠者 はあ。▲殿 汝もそれで飲め。▲冠者 畏つてござる。▲殿 やい〳〵、おのれは肴に何を喰うたぞ。▲冠者 茗荷を喰べました。▲殿 憎い奴の。いとゞ鈍な奴めが、茗荷を喰ひ、いよ〳〵鈍になつて、使はるゝ事であるまい。▲冠者 はあ、茗荷を喰べますれば、鈍になりまするか。存じませなんでござる。▲殿 知らずば語りて聞かせう。これへ寄つて聞き居らう。▲冠者 は。▲殿 扨も、釋尊の御弟子に周利槃特といふ人あり。この人愚鈍第一の人にてあつた。我が名だに覚えいで、杖の先に書いて歩き、其方の名はと尋ぬれば、これよと云うて差し出すほどなる愚鈍な人にてあつた。然れども、人間の習にて、終には悟道をなされた。

高野河―若狹より出て叡山の麓を過ぎ高野村を流る

御泥池―上賀茂神地にあり此の水濁れる故の名と云ひ又は六地

三鈍根草

二人　殿　長袴、太刀を持つ
　　　冠者　半袴

▲殿　罷出でたるは、この邊の者でござる。さやうにござれば、いつも鞍馬へ、冠者を代參に參らするやうにござる。今日は某が、社參致さうと存ずる。太郎冠者を喚び出だし、申し付けうと存ずる。太郎冠者あるか。▲冠者　お前に。▲殿　念なう早かつた。汝喚び出だす別義でない。鞍馬へ今日は參らうと思ふほどに、供の用意を致しませい。▲冠者　支度致してござる。▲殿　來い〳〵。汝は道すがらの名所古跡があらば語れ。▲冠者　畏つてござる。とつとござりました。▲殿　この河は何と云ふ。▲冠者　高野河と申しまする。▲殿　ふん、高野河と云ふはこれか。▲冠者　なか〳〵。▲殿　聞き及うだよりいかい河ぢや。▲冠者　即ちこれが御泥池でござる。▲殿　はて、いかい池ぢやな。來い〳〵。▲冠者　はあ、ほどなう御前でござります。▲殿　手水おくせい。▲冠者　畏つてござる。▲殿　やい、汝もそれにて拜め。▲冠者　はあ。

上な衣ーかづき

あら恐しやー娘の醜婦なるに驚く詞

し、その上な衣を取らしやれい。なぜにいやと仰しやらるゝぞ。千年末代添はうずる人が、是非とも衣を取らしやれい。あゝ悲しや。こりやなんでござる。はあ、悲しや。

振舞云々―酒宴の用意をなさしむること

あなた―先方のこと、娘を云ふ

ませい。▲一聟 心得てござる。かうもござりませうか。▲舅 何と。▲一聟 播磨紙いかなる人がかく抄いて、筆はしれど文字はとゞまると、致してござる。▲舅 あゝ、一段出來てござる。扨次な、遊ばせ。▲二聟 畏つてござる。かうもござろか。信濃なる淺田の小田をかく鋤いて、一本植ゑて千本をぞ刈ると、致してござる。▲舅 あゝ、一段出來てござる。扨次な、遊ばせ。▲三聟 畏つてござる。かうもござろか。▲舅 何と。▲三聟 西の海千尋の網をかく結いて、水は洩るれど魚はもらさじと、致してござる。▲舅 一段出來てござる。身共は振舞を申し付けませうほどに、彼の娘と對面なされ。どなたなりとも、御縁のある方が、止らしやれませい。▲三人の聟 畏つてござる。▲一聟 さて何れも、早うござれども、身共が先でござるほどに、まづ身共が對面致さうず。▲二聟 一段でござろ。こりやなぜに歸らつしやる。▲一聟 身共は、あなたに厭とお御意なさるゝほどに、何れもそれに寛りとござれ。▲三聟 扨こなたござれ。▲二聟 畏つてござる。いや身共もかう歸りまする。▲三聟 これは如何なこと、あなたに身共をと思召すものであらうず。まづ行て、ちと見ませうず。申

順の舞―列座の人順々に舞ふこと
立姿―舞のふり

▲男 扨いづれもに申す。娘は一人ござる。どなたなりとも、藝の立つたるを聟に取りまするほどに、さやうに心得さつしやれ。▲三人の聟 畏つてござる。▲男 太郎冠者。盃を持て來い。▲冠者 畏つてござる。▲男 まづそれ何れもへ進ぜい。▲一聟 いやまづ御前あがりませう。▲男 その義でござるならば、これから飲べて申そ。一つ受持つてござるほどに、何れも順の舞に、立姿が見たうおぢやる。▲三人の聟 畏つてござる。▲一聟 まづこなた舞はつしやれい。▲二聟 先でござるほどに、まづこなた舞はつしやれい。▲一聟 したらば、無調法ながら身共が舞うて、廻しませう。▲男 はゝ、よう出來ました。さて次の、舞はしやれい。▲二聟 畏つてござる。▲男 はゝ、さりとてはよう出來ました。さ、こなたも舞はつしやれい。順でござる程に。▲三聟 舞ひまする。▲男 いや、さりとてははや、見事でござる。どれをどれと申しやうもござらぬ。扨此上からは、娘を喚びまするほどに、とかくはたゞ、御縁次第がようござろ。このとかくと云ふかくにつけて、歌を一首宛聞きたうござる。▲三人の聟 畏つてござる。▲一聟 何といづれも遊ばしませうか。▲二聟 まづ其方から詠うで廻さつしやれ

今からは云々―今後御懇意にといふ挨拶

こりやは―これはに同じ

ざつたれ。まづ下にござりませい。▲二聟 は、こりやどなたでござりまするぞ。▲一聟 は、いや、身共も聟でござる。▲二聟 は、存じませなんだ。▲一聟 今からは申し合せませう。▲二聟 互でござる。▲三聟 罷出でたるはこの邊の者でござる。此中は何といたしたやら、仕合も悪うござるほどに、承れば有徳人があり、聟のいる由を承るほどに、參り、聟にならうと存ずる。ものも。お案内。▲冠者 や、又表に案内がある。お案内はどなたでござる。▲三聟 いや、札の面について參つた者でおぢやる。▲冠者 あゝ、合點でござりまする。それに待たしやれませい。申し、ござりまするか。▲舅 何であるぞ。▲冠者 又聟樣のござりました。▲舅 此方へと申せ。▲冠者 お這入なされませう。▲三聟 太郎冠者、案内者をせい。▲冠者 畏つてござりまする。あれにござりまするが、舅殿でござりまする。▲三聟 不案内にござる。御免なりませう。▲舅 聟殿でござるか。ようこそござつたれ。まづ下にござれ。▲三聟 は、こりや、何れも樣は、こりやどなたでござりまするぞ。▲一聟、二聟 いや、最早私等も、聟の望で參つた者でござる。▲三聟 はて扨、こりやは、いかい事いらつしやることでござりまする。

札の面―高札に聟所望とある文面をいふ

不案内云々―挨拶の詞

内。▲冠者やら奇特や、表に案内がある。こりやどなたでござりまするぞ。▲一聟札の面について參つておぢやる。其方は御内の冠者でおぢやるか。▲冠者は。▲一聟その義ならば、某が來た樣子を奥へおしやれ。▲冠者畏つてござる。申し、ござりまするか。▲舅何事である。▲冠者聟樣の御出でござりまする。▲舅なぜに此方へと申さぬ。▲冠者畏つてござる。御這入なされませう。▲一聟心得た。あれやどなたぢや。▲冠者舅殿でござる。▲一聟不案内にござりまする。▲舅はて扨ようこそござつたれ。まづ下にござりませい。▲二聟罷出でたるは御存じの者でござる。某が藝を表に、立札の面につき、聟入を致さうと存ずる。いやまづ、そろ〳〵參ろ。や、程なうこれでござる。ものも。お案内。▲冠者や、又表に案内がある。これはどなたでござりまする。▲二聟いや、札の面について參つておぢやる。合點でおぢやろ。▲冠者は、それにござりませう。上へ申しませう。又聟樣のござりました。▲舅なぜにこなたへと申さぬ。▲冠者畏つてござる。お這入なされませう。▲二聟をゝ心得てある。あれにござるは舅殿か。▲冠者は。▲二聟不案内にござりまする。▲舅ようこそご

高札—聟所望の立札
わせ—來ること
有德人—金滿家

二　かくすい

六人
男　長袴、小さ刀
冠者　半袴
聟三人　長袴、小さ刀
娘　乙御前の面、小袖かづく

▲男 罷出でたるは、この邊の者でござる。さやうにござれば、美人の娘を一人持つてござる。何にはよるまい、藝のたつたる、和歌の心のあらうずる人を、聟に取らうと存ずる。まづ太郎冠者を喚び出し、申し付けうと存ずる。あるかやい。▲冠者 お前に。▲男 念なう早かつた。汝喚び出だすは餘の義でない。彼の内々云うたる高札をあげい。▲冠者 畏つてござりまする。札を上げてござる。▲男 聟のわせたらば、これへと申せ。▲冠者 畏つてござる。▲一聟 罷出でたるは、この邊の者でござる。この山の彼方には、有德人がある。何にはよるまい、藝のたつたる、和歌の心のあらうずるものを、聟に欲しがるゝと申す。まづ何かは知らず、行て見ようと存ずる。いや、程なうこれでござる。ものも。お案

ようか酒―八日酒なるべし

ひやろ〳〵―笛の譜にて留め

やよ、げにもさうよの。買物にはぬかれたが、まづ此方へこけ入つて、鰻の鮨をばえいやつと頬張て、ようか酒を飲めかし。げにもさあり。やよ、げにもさうよの。何かの事はいるまい。人がかさをさゝうなら、おれにもかさきせやれ。ひやろ〳〵、ほつぱい、ひやろ、ひい。

覺えたか―傘の柄にて主を尖く時の詞

買うてうせ居り―買ひ來れることを罵り云ふ詞

ひよんな―奇怪な

ぬぎませなんだ―全くだましたに非ずと也

かさをさすならば―囃物なり曲がゝり

かすがやんま―春日山也山をやんまと云ふは濱をはんまといふ類

かみのちかひ―神の誓に紙の違を掛詞とす

や、覺えたか。▲大名 や、これは何をし居るぞ。▲冠者 いや申し、この柄でかうして戲れるをもつて、ざれえと申しまする。▲大名 やい其處な奴、しておのれは知らぬが定か。▲冠者 は、いや存じませぬ。▲大名 知らずばこれへ寄り居ろ。末廣とは扇の事、これはおのれ古傘を買うてうせ居り。いや末廣で候の、戲繪で候の。某が前へは叶ふまい。退り居ろ やれさて憎い奴かな。▲冠者 まことに賴うだ人の云はるれば、これはさし傘ぢやげなものを。ぴよんな事をいたした。さりながら、都の者も皆まではぬぎませなんだ。機嫌直しを敎へてくれた。まづ急いで申して見ませうず。はやし いえい、かさをさすならば、かすがやんま、これもかみのちかひと、人がかさをさそなら、おれもかさゝうよ。げにもさあり。やよ、げにもさうよの。いえい、かさをさすならば、かすがやんま、これも神のちかひと、人がかさをさすなら、おれもかさゝうよ。げにもさあり。やよ、げにもさうよの。やよ、げにもさうよの。▲大名 いかにや〱太郎冠者、買物にぬかれて囃物をするとも、前代の曲者、身が前へは叶ふまい。げにもさあり。やよ、げにもさうよの。

御目にかけうず —御目にかけんと思ふ也

うおしやつたがようおぢやろ。▲冠者 扨も〳〵忝うこそござれ。▲すり ようをりやつた。
▲冠者 やれ扨、まづ頼うだ者に、急いで御目にかけうず。殿様ござりまするか。▲大名 太郎冠者、戻つたか。▲冠者 歸りました。▲大名 やら大儀や、急いで見せい。▲冠者 はつ。▲大名 こりや何ぢや。▲冠者 末廣でござりまする。▲大名 これがや。▲冠者 はあ、殿様のお合點が參らぬこそ道理でござりますれ。かう致しますると、きつう廣がりまする。▲大名 ふん、まことにこれはいかい末廣ぢやわいやい。しておのれは注文に合はして來たか。▲冠者 なかなか、あはせましてござる。それで讀まつしやれませい。▲大名 急いで合せ居ろ。まづ地紙好しと。▲冠者 はあ、それこそ念を遣ひましたれ。この紙の事でござろ。師走狐の如く、こんこんといふほどはつてござりまする。▲大名 して又、骨磨は、▲冠者 はつ、この骨の事でござる。信濃木賊をかけて磨いてござるによつて、滑々致しまする。▲大名 要元締めては。
▲冠者 かう廣げまして、この金で締めるをもつて、これが要元締めてと云ふ所でござる。
▲大名 繪は、戲繪は。▲冠者 それにこそ念のつかひましたれ。それに待たつしやれませい。

これへ—傘の柄の所をさして云ふざれ繪とざれ柄と掛詞とせり

高直—直段の高きこと、安きを下直と云ふ
萬疋—昔廿五文を一疋と云へり
ぬいて—割引いて

代物—代金

自然とも—萬一にも

これ田舍人、これへ寄らつしやれい、えい。▲冠者 なう〳〵、其方は田舍人ぢやと思うて、打擲めさるか。▲すり いや打擲ではおぢやらぬ。こなたと某と、かうして戲れるを以て、則ち戲繪といひまする。▲冠者 扨も〳〵、注文に合うて嬉しうござる。して價は如何程でござるぞ。▲すり 高直におぢやる。▲冠者 幾らほどでござるぞ。▲すり 萬疋でをりやる。▲冠者 是又高いことでござる。ちつとねぎりませう。▲すり おう、すこしなどはぬいてやりませう。▲冠者 百ばかりになりますまいか。▲すり なう其處な人、その樣な下直な物ではない。ようお買やるまいぞ。▲冠者 申し〳〵、何と聞かつしやれたぞ。萬疋の内をば、百ばかりもぬいて下されまいかと云ふ事でござる。▲すり はあ、聞分けました。五百ぬいて進じよ。▲冠者 忝うこそござれ。▲すり して代物は、何處で渡さつしやれまする。▲冠者 三條の布袋屋で渡しませう。▲すり これで受取りませう。▲冠者 忝うござる。さらば〳〵。▲すり なう〳〵。▲冠者 何でかござるぞ。▲すり 其方は定めし主持でござろ。▲冠者 なか〳〵。▲すり 人の主は機嫌の善い事もあり、又惡しい事もある。若し自然とも、機嫌の惡しうおぢやろそうば、斯

て仕合な事でござる。して末廣の出來合はござるか。▲すり なか〳〵ござる。▲冠者 急いで見せさつしやれ。▲すり 心得てござる。それに待たつしやれ。▲冠者 は。▲すり やれ扨、賣らうとは申してござるが、何を賣りませうぞ。思ひ付けてござる。これに傘がござるほどに、之れを持てて賣りませう。なう〳〵田舍人、それにござるか。これ〳〵。▲冠者 や、は、これが末廣でござるか。▲すり なか〳〵。▲冠者 どれ見せさつしやれ。▲すり これ、ごろんぢやれ。▲冠者 はゝ、まことに廣げさつしやれたれば、はていかい末廣でござる。さりながら、頼うだ人が注文のおこされてござるほどに、これに合うたらば買ひませう。▲すり さらば讀まつしやれい。▲冠者 先づ地紙好くとしてござる。▲すり これ〳〵、地紙好くとは、この紙の事でをりやる。師走狐の如く、こん〳〵といふほど張つてござる。▲冠者 骨磨とござる。▲すり これ〳〵、骨磨とは、この骨の事、信濃木賊をかけて磨いたによつて滑々致す。▲冠者 要元締めてとござる。▲すり かなめ元締めてとは、斯う廣げて、この金でもつてじつと締めるによつて、此處の事でござる。▲冠者 繪は、戲繪としてござる。▲すり ふん、これ

ゐかい―大層な

注文―末廣の注文狀なり

地紙―扇の地紙をいふ

師走狐云々―十二月頃の狐也こんこんとは狐の啼聲と紙の貼り工合とを掛けて云ふ

信濃木賊―木賊は信州の名産

下からは云々―當時の諺なり目下の者よりは目上の者の心中が察せられぬなり

ゆひつけ―いひつけなり、命令

ていてーていに欸

さわたつてーかかりあふこと

わつぱと―聲高に

されば、何が好うござりませうぞ。▲大名 やい、思ひ付けた。下からは、上が計らはれぬものぢや。某は末ひろがりを出さうと思ふが、何とあらうぞ。▲冠者 ようござりませう。▲大名 汝は大義ながら、上方へ上り、急いで求めて參れ。▲冠者 畏つてござる。▲大名 急げ。▲冠者 はつ。扨も〳〵某が頼うだる者は、立板に水を流すやうに、物をゆひつけられまする。まづ急いで參らう。とかう申すうちに、都さうにござりまする。やれ扨失念の致した。末廣屋を存ぜぬが、何と致さうぞ。えい、欲しいものは呼ばはるていて見えてござる。某もこれから呼ばはりませうぞ。末廣買はう〳〵。▲すり 罷出でたるは、洛中に住居する、心も直にない者でござる。何者やら、どんどと申す程に、さわたつて見ませうず。なうなう、其方は何をわつぱとおしやるぞ。▲冠者 その事でござる。田舍者でござれば、末廣屋を存ぜぬによつて、かやうに申す事でござる。▲すり なう其方は、末廣と云ふものをお見知りやつたか。▲冠者 なう都人とも見えぬ。知つたればこれを買はうといふ。▲すり なうなう、誤りました。某は末廣屋の亭主でをりやるによつて、懇に問うてをりやる。▲冠者 は

いづれもを申し入れう—お客を招待すること

引出物—酒宴の際客への贈物



狂言記 巻之三

一 末ひろがり

三人
大名　立烏帽子、素襖、袴、小さ刀
冠者　半袴
盗人　括り袴、傘

▲大名 罷出でたるは、隠れもない大名。太郎冠者あるか。▲冠者 御前に。▲大名 念なう早かつた。汝を喚び出すは別なる事でない。明日はいづれもを申し入れうと思ふが、何とあらうぞ。▲冠者 まことに内内は御意なうても、申し上げうと存ずる處に、一段でござりませう。▲大名 よからうな。▲冠者 はつ。▲大名 さうあれば、引出物には何をか出さうな。

かどのみなと毛抜―加賀の湊の名産の鑷子か

御教書―下し文

うの、口をためさんと、各々申せしが、我が君は親兄の禮を重んじい給へば、如何はさることのあるべきと、都へ引つれ、御上りなされ候。やはか野心はござ候まい。又君の討手にてござらうずるならば、一門に旗を立てさし申し、うつてむかひござらうずるものが、何ぞや、土佐坊と申せしは、こんのう丸といひし童をば法師になし給ひ、御前まじはりあやまりと、京童が、とり〴〵に申し候と申しければ、その時賴朝、至極の道理にせめられて、とかうの返事ものたまはず、かどのみなと毛抜にて、髯を抜き〳〵、仰せ出さるゝには、汝は心中の善き侍かな、あの梶原といひつる者は、一門の内を切つて出る者と聞いてある、汝今日よりも、判官に奉公すべからず、賴朝に奉公肝要なり、その爲には、御教書をば下さるゝ、疾々國に歸られ候へ、下られ候へ。畏つて候、皆々、御免なされ候へ。

違例—病氣

土佐坊—昌俊

ざんそう—讒訴か或は讒奏か奏の字の誤用必ずしも咎むべからず

て候とて、某紀州藤代に、老母を一人持つて候が、以ての外に違例し、君判官殿のおまへは、少しも離れ申さぬ鈴木奴にては候へども、少しの御暇を申し受け、此の間藤代へ歸りしが、奥よりも、熊野山伏の申せしやうは、わが君は、奥州高館の城に、取籠らせ候へば、賴朝よりも、御攻ある由を承はり、參り討死仕らんと思ひしに、道にて梶原奴に生捕られ、あすの露と消えべく命を長らへて、御前まで引き出され、首はねらるゝこと、なんぼう口惜しき次第にて候と申し上ぐる。その時賴朝、汝縄のざいに至つて、健氣立は入らざることよ、賴朝義經、野心のある間をば、思ひ直させしとせしところに、堀川にて、土佐坊を撃ちたるは、何ぼう不思議なることではないか。その時重家、御諚にては候へども、我が君は、賴朝の御代官として、西國へ御向あり、驕る平家をば、三年三月に攻め滅し、剩へ以つて、大將宗盛父子共に生捕り申し、鎌倉へ渡さるゝをば、囚人は受取り、わが君を腰越よりも追つ返し給ふ、その折御前に在りしは、龜井、片岡、伊勢、駿河、武藏坊辨慶、かう申す鈴木奴先として、鎌倉へ亂れ入り、梶原奴がざんそ

すゞき―魚の鱸のことに云ふ

判官殿―義經の事検非違使尉なればなり

なんめ―汝奴の意

十　生捕鈴木

一人　男　長袴、小さ刀、床几、折烏帽子

扨も、梶原平三景時は、御前間近くに參り、高聲に申し上ぐる。只今すゞきを、生捕つて候と申す。その時頼朝、それは調法のものよ、猫の食はぬやうにしておけ、後ほどに、芥子酢にて辛々とし、戴かんと仰せければ、その時梶原、大の眼に角を立て、何と、君は聞召し誤らせ候ぞ。判官殿のお前なる、一騎當千のつはものの、鈴木三郎重家と申し上ぐる。その時頼朝、それは大强のつはものと聞いてあるが、よくこそ生捕りてあれ、すこし遇ひたき仔細の候間、その者此方へ召せ。畏つて候とて、御前をずんと立ち、重家が小手の繩を免し、高手ばかりにて、御前にひきすゆる。又その時頼朝、なに鈴木三郎重家とは、なんめがことか、義經、頼朝に野心のあるにより、汝等まで繩をかゝりゐるよな、今生に、思ひ殘すことあらば、ありのまゝに、包まずに申せ。その時重家、畏つ

なから―なかかちの誤なるべし

しらけな―白けること興さむる也

谷の坊、ことにめいゑんしけるは、あかいの坊のぼうさきを、十斤ばかり買ひ取り、この壺に打ち入れ、後にき、▲すりき、又二人このきつと背負うて、國を指いて下れば、昆陽野の宿の遊女が、袖をぢい、▲すりぢい、又二人とひかへて、いやあ、今樣は朗詠、しをりはぎを唱うて、おさへて酒を強ひたり。酒に醉ひて寢たるを、日本一の大ふの、あの、▲すりあの、又二人博打が來て、我が物と申すを、判斷なしてたび給へ。▲目代兩人の者、つつと是へ寄れ。聞く、昔よりも論ずる物はなから取るといふ。某がにするぞ。▲壺主やいやい、しらけな。▲すりおのれこそ、しらけ。▲壺主やるまいぞ〳〵。

しをり萩―謡物の名

檢斷―檢斷職として取扱く役

曲事に行ふ―罪に處す

の坊、谷の坊、ことにめいゐんしけるは、あかいの坊のほうさきを、十斤ばかり買ひとり この壺にうち入れ、後にきつと背負うて、國を指いて下れば、昆陽野の宿の遊女が、袖をぢつとひかへて、いや、今様は朗詠、しをり萩を唱うて、おさへて酒を強ひたり。酒に醉ひて寢たるを、日本一の大ふの、古博打が來て、我が物と申すを、判斷なしてたび給へ。所の檢斷殿。▲目代 おう、よう申した。汝も急いで申せ。▲すり 畏つてござる。右の曲舞を同じやうに舞ふ。▲目代 やい〳〵、彼の者が舞うたのも、汝が舞うたのも、大方似たやうな。今度は、連舞に舞ひませい。少しなりとも違うた方を、曲事に行ふほどに。▲壺主 畏つてござる。▲すり 彼のすりめが。▲壺主 おのれこそすりなれ。▲目代 論ないゐまい、急いで舞へ。▲壺主、すり 我が物ゆゑに骨を折る、心のうちぞをかしき。さ候へば、かうこそ〳〵扨も我が主殿、中國一の法師にて、日の茶を立てぬことなし。いや。▲すり いや、又二人 一族の寄合に、ほんの茶を立てんと、五十貫のくりを持ち、多くのあしを費うて、兵庫の津にも著きたり。▲すり 著きたり。又二人 兵庫立つて二日に、栂の尾にも著きしかば、峰の坊

曲舞―當時行はれたる一種の舞

我が物云々―所の檢斷殿まで曲にかゝる

あし―料足也、錢のこと

にて、大御酒に食べゑひ、道とも存ぜず臥せつてござれば、彼のすり奴が、連尺へ手をそつと入れて、側に臥せつて居つて、某がぢやほどにやるまい、出合へ〳〵と申してござる。きつと仰せ付けられて下されい。▲目代 扨は汝がさうなわいやい。▲すり あゝ、わしがでござる。▲目代 それに待て。やい、其處な者、して最早彼れにつけて、證據はないか▲壺主 別に證據はござりませぬが、茶の銘、某が出所を舞ひませうず。したが彼の者も舞ふか、問はつしやれて下されい。▲目代 やい〳〵、彼の者は、曲舞ぶしにかゝつて云はうと云ふが、汝も云はうか。▲すり 彼のすりが申す事は、しやうはござりますまいが、さりながら、有らば申せと仰しやれませい。▲目代 をゝ心得た。やい〳〵、これへ出て、急いで申せ。▲壺主 畏つてござる。次第 我が物ゆゑに骨を折る〳〵、心のうちぞをかしき。さ候へばかうこそ、さ候へばこそ。扨も我が主殿、中國一の法師にて、日の茶をたてぬことなし。いや、一族の寄合に、ほんの茶をたてんとて、五十貫の、くりを持ち、多くのあしをつかうて、兵庫の津にも著きたり。兵庫立つて二日に、栂の尾にも著きしかば、峯

栂の尾―山城國明惠上人初めて茶を植う

某に預け。▲すり 御前はどなたでござるぞ。▲目代 いや、所の目代ぢや。▲すり はあ、存じませなんだ。御禮申しまする。▲目代 禮まではいるまい。まづ放せ。▲すり 畏つてござる。

▲目代 やい〳〵、して汝は、何とて一人として持つて居るものを、兩人しては論ずるぞ。

▲壺主 その御事でござりまする。まづ聞かせられて下されい。某は中國の者でござる。賴うだる者は、殊の外の茶好でござる。毎年栂の尾へ、茶を詰めに參る。當年も相變らず參りてござれば、昆野野邊にて大酒を食べ、道とも存ぜず臥せつてござれば、彼のすり奴が、某が連尺に手を掛け、出合へ〳〵と申してござる。これに紛ふ處ござりませぬ。仰せ付けられてくだされい。▲目代 ふん、汝がさうな。それに待て。やい、其所な奴、彼の者は、言分の云うたが、おのれは言分はないか。▲すり 彼のすりめは、申しましたか。

▲目代 なか〳〵。▲すり 扨も〳〵、すりと申す者は、何を云はうも存ぜぬ事でござる。聞かつしやれて下されい。まづ某は、中國の者でござる。賴うだる者は、茶好でござるによつて、栂の尾へ毎年茶をつめに參る。當年も相變らず、つめに參りましてござる。路次

連尺―荷物をつけて負ふ具

目代―國司の代りを勤むる役

仕合を致さうと存ずる。いえ、こゝな、何者やら、道端に伏せつて居る。行て見て參らうず。扨も〳〵、寢て居るこそは道理なれ、はれ、きつう醉うて居る。見ればよささうなものを背負うて居るが、あれをば、どうぞこつちへつれましたいと存ずるが、まづ起して見ませう。やい〳〵、街道ぢやが、起きて行かいでな。これは扨、賢いことをして居る。まだ片一方は、連尺を放さぬ。某も、片一方を掛けて、彼處に臥せりませうず。や、えいとな。▲壺主 あゝ、扨も〳〵久しう寢たことかな。はあ、いかう日も晩じた。まづ參りませう。なう〳〵此處な人、連尺が掛かつたわいの。起きさせませ。▲すり あゝ、扨これは、某がぢやわい。▲壺主 いえ、某がぢや。▲すり 何と。▲壺主 出合へ〳〵。▲目代 やい〳〵、これは何事ぢや。まづ某にこれを預け。批判の聞いてから渡さうほどに。▲壺主 御前はどなたでござりまするぞ。▲目代 いや、所の目代ぢや。▲壺主 はあ、この樣子を御ろんじやつてくだされい。彼の者に渡さつしやれて下されな。▲目代 をゝ、心得た。まづ、こゝな者も放せ。▲すり いや、こりや、私がのでござりまする。▲目代 汝がであらうとまゝよ。まづ

ざゝんざ云々—酒宴の歌

昆陽野—攝津國
さわたつて—かかりあふこと



九　茶壺

三人　壺主　半袴、壺を負うて
　　　すり　半袴
　　　目代　長袴、小さ刀

▲壺主 ざゝんざ、濱松の音はざゝんざ。あゝ、いかう酔うたことかな。▲すり めがゆく〳〵、御目がゆき候。扨も〳〵、平常は道が一筋あるが、あゝ、幾筋も見ゆる。これでは行かれまい。まづちつと、や、えいとな。あゝ、寝た。▲すり 罷出でたるは、心も直にない者でござる。さやうにござれば、此中は何と致してやら、仕合が悪しうござる。今日は昆陽野の市へ参り、何にはよるまい、さわたつて、

するぞや。▲八兵衛 なかなか。済んでおぢやる。▲七兵衛 さりながら、未だ済まぬことがおぢやる。▲八兵衛 何でかおぢやる。▲七兵衛 いや、借銀を負ひ、胸板などを折られたなどといへば、男もならぬ。其方のを、折り返さねばきかぬ。▲八兵衛 はて、荒いことをおしやる人ぢや。▲七兵衛 何の荒い。打ち折つて見せう。▲八兵衛 許せ許せ。▲七兵衛 やるまいぞやるまいぞ。

弓矢八幡—誓の詞

手形—證文

すきと—すつきりと也全くの意

摺り倒して、肋骨が打ち折れた。出合へ〳〵。▲八兵衛 なう〳〵七兵衛、まづ靜まつてたもれ。利の分は免さうほどに、堪忍の爲てくりやれ。▲七兵衛 やい八兵衛、人の命が二百目や三百目やで、買はるゝものか。やい、人殺し〳〵。▲八兵衛 なう〳〵七兵衛、利元共に免さう程に、堪忍のしてくりやれ。▲七兵衛 よう、われがやうな者が、免さうわいな。▲八兵衛 弓矢八幡免するぞ。▲七兵衛 それはまことでござりまするか。▲八兵衛 なか〳〵。▲七兵衛 あゝ、ちつと胸が寛いだやうにござる。▲八兵衛 はて、嬉しや。ようおぢやるか。▲七兵衛 あゝ、ちつとようござりまするが、短册の巾ほど、あいた〳〵。人殺しよ〳〵。▲八兵衛 あゝ思ひつけた。これを出すからは、ようおぢやろぞ。▲七兵衛 そりや何でござりまするぞ。▲八兵衛 いや、御手前の手形でおぢやる。▲七兵衛 一目見せさつしやれてくだされい。いやはや、紛ふ所はござりませぬ。その身共が名判の所を、引裂かつしやれて下され。▲八兵衛 をを、好きなやうにしておませう。これ〳〵。▲七兵衛 はゝ、最早、すきとようござりまする。▲八兵衛 はて、嬉しうおぢやる。▲七兵衛 してまづ、銀子の義は、濟みましてござりま

薑の食ひ合せ—當時の諺

金こそ負うたれ—借金こそしたれ

出合へ〳〵—人を呼ぶ也

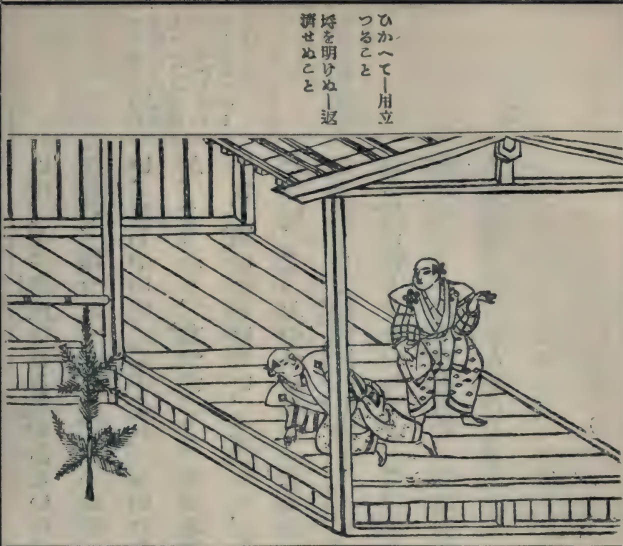
由を承り、御目にかゝりたいと存じて、表から出ましたら、遲からうと存じ、裏道へ向けて追つかけまするとて、蹴躓きましたが、悲しうござるやら、遇うたが嬉しうござるやらで、嬉し悲しいと、申すでござる。▲八兵衛 おう、薑の食ひ合せとやらで、そないな事もおぢやろ。いや、某がかうして來るも、別義でもおぢやらぬ。彼のいつぞやの算用を致そ。▲七兵衛 いやはや、こなたの仰しやれぬとても、忘るゝといふ事はござりませぬ。やがての内に算用をいたしませう。▲八兵衛 其方のやがても、いつぞやからの事でおぢやる。どうであらうとまゝ、今日は算用をいたそ。▲七兵衛 いや、さう仰しやつたというても、無い物が、算用がしられませうか。▲八兵衛 いや、さうおしやつた物では、埒が明くまい程に、したらば某所へおぢやれ。▲七兵衛 いや、金こそ負うたれ、其方の所へ行かう筈はおぢやらぬ。▲八兵衛 して、實正來まいか。▲七兵衛 何の行かうぞ。▲八兵衛 連れて行て見せう。▲七兵衛 成らば連れて行け。▲八兵衛 實正來まいか。▲七兵衛 あ痛〳〵、あいた、人殺し。出合へ〳〵。▲八兵衛 なう〳〵七兵衛、何とめさつたぞ。▲七兵衛 この如くに引

南無三寶—これはしたり

彼のして—其の人といふ意

おむしやつてたまふ—御申しあつて下されの意

てござるならば、定めし逢はぬでござろ。作聲をいたし、喚出だそと存ずる。ものも。お案内。七兵衛殿内にござるか。▲七兵衛 南無三寶、彼のしてがわせた。留守をつかひませう。どなたでござりまするぞ。▲八兵衛 いや、八兵衛でおぢやるが、七兵衛殿へ、御目にかゝりたうて參りておぢやる。▲七兵衛 今日は留守でござる。▲八兵衛 さうおしやるは、誰でおぢやるぞ。▲七兵衛 隣の者が、留守居りまする。▲八兵衛 その儀でおぢやるならば、これまで用ありて參りたれども、御目にかゝらいで歸つたと、おむしやつてたまふ。▲七兵衛 畏つてござる。おはいりなされませいで。ようござりました。▲八兵衛 やれ扨、今のは七兵衛でござるが、留守をつかうてござる。きやつめは、何時も裏道へ外すと申すほどに、裏へ向けて參らう。▲七兵衛 やれ扨、すでに逢はうといたしたよ。彼のしては、小戻を爲られまするほどに、裏道へ外しませう。▲八兵衛 え、こゝな。▲七兵衛 え、嬉し悲し。ようござりました。▲八兵衛 え、人にさしあふての言葉は、數多おほからうに、嬉し悲しいとは、どうしたことでおぢやる。▲七兵衛 いや、只今歸りましてござれば、お前の御出での



八胸つき

二人　七兵衛　半袴
　　　八兵衛　長袴、小さ刀

▲八兵衛　罷出でたる者は、この邊の者でござる。さやうにござれば、七兵衛と申す者に、米錢のひかへてござれば、たび〳〵人を遣りますれども、埒を明けぬやうにござる。今日は自身参り、算用を致そと存ずる。やれさて、憎い奴でござる。用のあるをりには、いろ〳〵追從など申し、今は某が前へ、面見せも致さぬ。遇うてだにござるならば、思ふ儘に、算用をいたそ。やは、とかう申す内に、彼が私宅はこれでござる。某が聲で案内を請う

いの。▲おこ最屓めさる筈があるいの。▲女房なう、最屓するはずは、なにとしたことでござるぞ。聞きたうござる。▲おこいや、云うたら恥であらうぞ。▲女房なう、恥なことはない。おしやいの。▲おここれ、おのれな、いつぞや、刑部三郎が所に、神明講がなかつたか。▲女房おう、有つた。▲おこその時に、おれが見ぬかと思うて、左近とつゝやき、さゝやき、聞いたぞいやい。▲女房なう、おこ殿、そりや誰が恥ぞいの。わが身の恥ではないかいの。▲おこおのれが恥よ。▲女房おれもその様に、みづくさう思はれてからは、いらぬほどに、さこ殿の所へ行きまするぞ。▲おこ何ぢや。さこが所へ行かう。おれありながら、よう行きたうをりやつたの。▲女房何の行かいでは。▲おこさあ、行て見よ。やることではないぞ。▲女房わ男腹立ちや。おのれがやうな奴は、まつ此うしたがよい。▲おこなぜに、こかし居つた。やるまいぞ〳〵。

神明講―神明は神特に天照大神を申す其の講中
つゝやき―つゝめく也さゝやくこと

公事とざま—とざまは表沙汰也
埒が明くは方がつくこと
大事の御年貢云云—田と牛とを言ひ間違ふ
うろたへ者—あわてもの
おかつしやれい—およしなさいの意

やうにして居さしませ。▲女房 心得てござる。▲おこ 扨も〳〵、利發な女房を持つは、よいものでござる。公事とざまの埒が明きさうにござる。又これも御門よと。はあ、訴訟の者でござりまする。通りまする。許さつしやれませう。まづ、番所は過ぎた。はあ、訴訟の者でござりまする。▲女房 訴訟は何者ぢや。▲おこ は、いえ當所に住居仕る、はあ、おこと申す者でござりまする。▲女房 おこは、して、何の爲に來てあるぞ。▲おこ その御事でござりまする。大事の御年貢、はかりまする牛をば、さこが田が來て、食べましてござりまする。▲女房 いや、おのれが言分では、埒が明かぬ。あの、うろたへ者奴が。▲おこ はあ、許さつしやれませい。▲女房 縛れ〳〵。▲おこ はあ、悲しや。▲女房 なう、おこ殿、これや、何とさつしやれたぞいの。▲おこ 其方は此所へは又何として、をれやつたぞ。▲女房 なう、何事を仰しやるの。内でござるわいなう。▲おこ して、今の地頭殿はわが身か。▲女房 なう、その様に目をまはかすなりで、公事はなりますまいぞや。おかつしやれい。▲おこ われがさう云ふも、この方に思ひつけたことがある。▲女房 なう、思ひつけたとは、何でござるぞ

理分になる—我が道理の立つ様に

番所—番人の詰所

分けて取らせう—裁判をしてやらう

儘でおぢやる。▲女房さ、したらば、云うて見さつしやれい。▲おこ依估贔屓のないやうに、よう聞きやれ。▲女房隨分理分になるやうに、云はつしやれい。聞きませうぞ。▲おこ心得ておぢやる。まづ、地頭殿へ行くやうにして見たがよい。まづ此處が門よと。これからが番所。はあ、歴々の御番でござりまする。訴訟の者でござりまする。▲女房訴訟は如何やうなるものぢや。▲おこいやそのおこつでござりまする。當所に、おこと申す者がござりまする。かれが田をば、ちと身どもが牛が、食べてござれば、牛を取らうと申しまする。何とも迷惑にござりまする。仰せつけられて下されませい。▲女房ふん、今度の公事日に、兩人ともに參りませい。その折に分けて取らせう。▲おこはあ辱うござりまする。なう〳〵、して今のをお聞きやつたか。▲女房なか〳〵、聞きました。こなたは、物言はずかと思へば、なう、よい物言でござる。これでは理分になりませうほどに、又今度は、こなたの言分を、隨分云うて見さつしやれい。▲おこいや、人の事さへもつて、今のほどに云うたものをば、おれがことは、何とやうにあらうと思やるぞ。まづ急いで、地頭殿の

内沙汰―内々裁判をしてみること

調法なほどに、御前沙汰では負になりませう。▲おこ えい、こゝな人は、理を持ちながら負けるといふ事はないよの。▲女房 いや、さうな仰しやつそ。理が非になるは、公事の習ひでござる。▲おこ え、餘のいつけんな聽かうが、この意見とては、えきくまい。いや、某は行くぞ。▲女房 なう、おこ殿、その儀でござるならば、まづ内沙汰にして見さつしやれい。▲おこ をゝ、まことに、これもかうでおぢやる。誰を賴うで、聞いて貰はうの。▲女房 いや、妾が聞きませうわいの。▲おこ いや、可笑しい事をおしやる。其方は、おれが爲には女房なれば、物が心やすうて、これは役には立つまい。▲女房 あの、おしやることわいの。地頭殿のやうに、樣を變へて、聞きませうわいの。▲おこ をゝ、まことにこれが一段でおぢやろ。さあ、急いでこしらへい。▲女房 てん〴〵に、手傳うて下されい。▲おこ 心得ておぢやる。まづこの烏帽子を著さしませ。地頭殿は太刀を佩いて居さつしやる。まづこの太刀をはきやす。これ〳〵、これに腰を掛けて居させませ。地頭殿は、わがみは知りやるまいが、一段高い所にござるぞいの。▲女房 なう、よう似ましたか。▲おこ はゝあ、その

内沙汰—一名右近左近
これの—女房を呼ぶ詞
もつけな事—思ひ設けぬ事
公事—訴訟
沙汰—裁判
物言—能辯

七 内沙汰

二人 右近 半袴
女房 金風折の烏帽子、太刀、扇

▲おこ 罷出でたるは、當所に住居仕る、右近と申す者でござる。さやうにござれば、思ふ仔細がござるほどに、女どもを喚び出し、談合をいたさうと存ずる。これの、居やるか。▲女房 妾がことでござるか。何でござるぞ。▲おこ いや、そちを喚び出すは別義でもおぢゃらぬ。もつけな事が出來た。▲女房 なう、何事でござるぞいの。▲おこ いや、うへのの田をば、左近が牛が食らうたと思やれ。したによつて、腹は立ち、牛を、引き取りにせうと云うた。されば、よこそまいといふ。したによつて、己が公事に爲ようと云うた。したればさこめが、公事になりとも、汰沙になりとも、せいと云ふほどに、おれは地頭殿へ行くほどに、よう留守をしやす。▲女房 なう、おこ殿、さこが言ひ分な、腹は立てども、まづ待たつしやれい。▲おこ 何でおぢゃるぞ。▲女房 彼のさこは物言なり、こなたは、口不

た。これはいかな事、傘がある。刀は何處へいた。これはいかなこと、これも無いわ。こりや何ぢや知らぬまでい。はて、可笑しいものがあるが、あゝ、これは禪僧の持たせらるゝくふひんぶつなどのある時に、かう頤に當てゝ、案じ柱のじよろと云ふ物ぢや。小袖はどこへいた。こりや何ぢや。衣ぢや。はて合點のいかぬものぢや。あゝ、思ひつけた。いかう路次で出家をとらまへて、惱めたが、某が惡をつくるならば、憫に思召し、釋迦か達摩の、心を和げんが爲に、斯樣に遊ばしたと見えた。佛の敎にまかせて、發心の起しませう。謠 おもひよらずの遯世や。小袖にかへし、衣を著、刀にかへし、じよろを差し、長刀にかへし、傘を擔げて、頭陀にいでう〳〵。行脚の僧に鉢をいれさつしやれい。ばつち〳〵。

いかな事―いかなる事かと怪しむ意

とらまへて―つかまへて

謠―此の文句曲がかり

頭陀―行脚

鉢を入れる―施物を鉢に入れ

じよろ―助老とて坐禪の具なり

て、離しやれてや。▲僧 はゝ。▲悪坊 御坊、して、今のさへやうが面白うおぢやる。その傘の切口を見せう。▲僧 はて、置かつしやれませい。▲悪坊 あゝ、使はうとは思へども、酒に醉うたによつて、脛がながれて使はれぬ。これでは行かれまいほどに、ちとこの所にまどろも。御坊、この小袖を跡へ打ち掛けて、腰を打つてくりやれ。▲僧 あ。▲悪坊 やい其處な坊主、今のは何といな打ちやうぢや。おのれ坊主でなくば首を刎ねうずれども、ゆるす。來てとく〱と打ち居れ。▲僧 あ。扨も嬉しい事がござる。まん〱と寢入らせました。扨も〱憎い奴かな。何と致したものでござらう。あゝ、思ひつけた事がござるまづこの長刀を、こちへ取りませう。おのれ代に傘を呉れるぞ。はゝ、まづ刃物は取りました。まだ刀がある程に、これも取りませうず。さあ取つたぞ。さ、代にはじよろをやるぞ。序に小袖も取らうぞ。さ、代には、衣を呉れるぞ。この様な仕合のよいをりには、早うまづ退いたがようござる。▲悪坊 えゝ、あゝ、扨も〱、いかう寢た事かな。茶を一杯おこせい。いや内かと思へば、様子が違うたは、野中に寢て居た。長刀は何處へい

かいこうだ―抱へること
おかしやれ―およしなされ

義でござれば、似合はぬ連でござるほどに、まづ某は先へ參りませう。▲悪坊しかとして道連になるまいと云ふことでおぢやるか。▲僧いや、さやうではござりませぬ。似合はぬやうにござるにより、かやうに申す。▲悪坊いや〳〵、其儀でおぢやるならば、出家侍と云うて、いかにも親しうせいで叶はぬものでおぢやるほどに、どうぢやあらうとまゝよ、同道申さう。▲僧その儀でござりませうならば、先へござりませい。▲悪坊いや〳〵、出家を供に連れると云ふことはない。其方先へおぢやれ。▲僧は、それなら參りまする。▲悪坊なう〳〵御坊、さる御方で酒を飲うだが、我は醉はぬと思へども、歩かれぬほどに、手を引いておくりやれ。▲僧いやはや、手は引きませうが、その長刀がいかうあぶなうござりまする。▲悪坊ふん、杖についたがあぶなうおぢやるか。持ちやうがおぢやる。かうでは何とおぢやる。▲僧は、いやはや、それでは氣遣もござりませぬ。▲悪坊御坊、かいこうだ長刀の出樣は、早からうか、遲からうか。▲僧何とござりませうぞ。▲悪坊手を離しやれ。一手使うて見せう。▲僧は、いや、おかしやれませう。▲悪坊は



六　悪坊

二人
僧　頭巾、衣、數珠、傘擔ぐる
悪坊　末社頭巾、小袖つぼをつて打懸け、刀をさいて長刀を擔ぐる

▲僧 罷出でたるは、西近江から東近江まで、ちと用有て參りまする愚僧でござる。さやうにござれば、日和のよいに傘を擔げたは、不思議に思召さう。出家に傘は似合うたものさうにござる。まづそろそろ參らう。▲悪坊 なう〳〵御坊、どれからどれへ行かします。▲僧 いや、私が事でござるか。▲悪坊 なかなか。▲僧 いや、西近江から東近江へ參ります。▲悪坊 某も參るほどに、同道申さう。▲僧 いや、御前を見ますれば、お侍さうにござる。身共は坊主の

いのず―去なんず歸ろう

き、茶碗を投げてござれば、扨も無躾の奴のとあつて、尺八をおつ取り直し、打擲なされたるお手許と、今殿樣の、おのれ討つて捨てうと仰しやるゝお手許が、あゝよう似ましてござる。▲大名 何といふぞ。親ぢや者の手許と、某が手許と、似たといふか。▲冠者 ああ、よう似ました。▲大名 やい、汝討つて捨てうと思へども、討つ太刀も弱る。最早許するぞ。▲冠者 それはまことでござりまするか。▲大名 太刀を鞘に收むるぞ。▲冠者 その如くに、御心の早う直らしやれまするが、よう似さつしやれましてござる。▲大名 やい、かう廻るも似たか。行くも似たか。▲冠者 あゝよう似さしやれました。▲大名 この太刀を取らするぞ。▲冠者 その下さるゝお手許は、その儘でござりまする。▲大名 この脇差も取らする。▲冠者 その儘でござりまする。▲大名 餘り似たく／＼と云ふぞ。昔が思ひ出されて悲しいに。やゝ大名とあらうずる者が、斯樣に歎くところではあるまい。いざ、めでたう笑うていのず。▲冠者 是れは一段でござりませう。▲大名 これへつゝと寄れ。まだよれ。わはゝ。

なのめに—斜なゝずに同じ

おなりそへ—御直り候への路」ほゆる—泣くこと

めこ—妻

長柄をたうくとうち、二千石の松にこそ、千歳をいはふ後までも、その名は朽ちせざりけれと、おし返し三反うたふ。大將なのめに思召し、三盃汲んでほし給ふ。程なう敵を平げし、天下一統の御代を爲したまふも、ひとへに謠の故なりとて、かやうなる御謠をば、乾の隅に壇の築き、石の唐櫃きつてすゑ、一つうたうてどうと入れ、二つうたうてどうと入れ、石の唐櫃のふたの、ぶつとするほどうたひ入れ、七重に注連をはり、南無謠の大明神と額を打つて崇むる謠をば、何ぞやおのれめが、何時の間にかな盜み取り、謠うたことは曲事。▲冠者 いや、都にはやりまする。▲大名 何、洛中までうたひ廣げ居つたこと、いよくおのれは憎い奴の。それおなりそへ。やれ扨、只今討つて捨てうと云ふのに、ほゆるは、國本に殘し置いたるめこ子どもに、名殘が惜しいか。鎺本鋒先に、申し分があるか申せ。その後討つて捨てう。▲冠者 いやはや、お太刀に御難もござりませず、めこ子どもに、名殘も惜しうござらぬが、殿樣の只今、直れ、打つて捨てうとおしやれますするお手許は、おほぢご樣のお前にて、御茶の給仕を致したるをりに、疊の縁に蹴躓

二千石—支那にて太守の祿二千石なれば大名の緣に比く云へるなり此の文句曲にかゝる

せいじやうかい—大藏流本に盛昌我意と書す

八幡殿—源義家

引合—鐙の右の脇にて引合す所

びに遣らうか。▲冠者 いや、身どもが心拍子でうたひませう。▲大名 一段のことであらう。急いでうたへ。▲冠者 二千石の松にこそ、千歳を祝ふのちまでも、その名は朽ちせざりけり、〳〵。扨も〳〵、一段御機嫌に申し合はせたる事かな。も一つうたひませう。やれさて、一段の御機嫌に申し合はせたることかな。▲大名 退り居ろ。その謠は、いはれを知つてうたふか。知らいでうたふか。▲冠者 え、何とござるも存ぜぬ。▲大名 いや、知らぬといふを討つて捨つればいかゞ。いはれを語り、その後討つて捨てう。これへつゝと寄りをれ。▲冠者 は。▲大名 扨も某が親の親は祖父よな。その親は曾祖父よな。とつとのあなたの代のことなるに、安倍の貞任は、奥州衣川にて城郭を構へ、せいじやうかいにまかせらるゝ間、都よりも、討手の大將下さるゝ。その大將な、八幡殿にてありしよな。攻めも攻め、耐へも耐へたる前九年後三年、合せて十二年三月といふものを攻めらるる。ある折に、御大將に御酒宴のはじまりし、先祖のおほぢお酌に參り、大將たぶ〳〵と受け、祝言一つとありしとき、畏つて候とて、鐙の引合より、扇抜出だし、銚子の

請はぬ法でをりそうか。え、それに待ち居ろ。やれ扨憎い奴でござる。只今手打にも致さうやうに存ずれども、京内參と申すれば、都の樣子も承りたう存ずる。まづこの度は差置きませう。やい其處な者、つつと是れへ寄れ、問ふ事がある。▲冠者 は。▲大名 扨この度折檻の加へうずれども、重ねて折檻の加へうずる。都の樣子は何と。▲冠者 いやはや、天下治り、彼方の花見、此方の遊山とあり、此處彼處にひら幕打たせられ、謠ひ、舞ひ、酒もり、舞ひ遊ばつせること、夥しいことでござりまする。▲大名 ふん、さうあらうずる。それにつけ、別に珍しき事はなかつたか。▲冠者 いや、謠を習うて參つてござりまする。▲大名 それは何と思うて習うて來たぞ。▲冠者 いやはや、殿樣はお大名の事でござりますれば、御一門の參會にも、上座をつめさしやれまする。すは亂舞也なりますると、下座へ下らしやりまするのが見つらう存じて、教へませうと存じて、習うて參つてござりまする。▲大名 はて扨、一段うい奴ぢや。確と覺えて居るか。▲冠者 なか〱、覺えて居りまする。▲大名 さらば謠へ。聞かう。床几おくせい〱。▲冠者 はつ。▲大名 して、囃子物を呼

くわは申せども━くわは華の意大名などと立派な事は申しても

かそうで━假裝か、忍びて、こつそりとの意なるべし

五二千石

二人　大名　立烏帽子、長袴、小さ刀
冠者　半袴

▲大名　罷出でたるは、隠れもない大名。かやうにくわは申せども、つるゝ下人なたゞ一人。一人の下人めが、某に暇をも請はず、何方へやらをりそへてござる。聞けば、夜前歸りたる様子でござる。かれが私宅へ立ち越え、折檻の加へうと存ずる。程なうかれが私宅はこれでござる。某が聲で案内を請うてござるならば、定めて留守をつかふでござらう。作聲をいたし、喚び出そと存ずる。ものも。お案内。▲冠者　やら奇特や。表に案内がある。お案内どなたでござる。▲大名　退り居ろ。▲冠者　は。▲大名　おのれは、主の聲を聞き紛ふならば、不奉公といふものではあるまいか。その上某に暇をも請はず、何方へ遊山で候ぞ。▲冠者　いやはや、一人使はされまする冠者の義でござれば、御暇と申したりとも、下されまいと存じ、かそうで、京内参を致してござる。▲大名　ふん、京内参をすれば、主に暇を

やるまいぞ―逃すまい

おのれや、それや、こちら向くげな。▲伯母 あゝいや、見ませぬ。▲甥 やい、今年は酒が好いわいやい。あゝ、おのれこちら向くな。こちら向いたら取つて噛むぞ。あゝ、いかう酔うた。これへ寄り居ろ。枕にして寝やうに。▲伯母 あゝ、汝は甥ではないかいやい。▲甥 ああ、恥かしや。免さつしやれい〳〵。▲伯母 やるまいぞ〳〵。

おしゆくらう―御宿老、としより
おました―參らせた
わがみ―汝の意
まぶつてやらう―辨償する意か

おしゆくらうが、あつたによつて、初酒をおましたわいの。▲甥はあ、それや、めでたうござりまする。▲伯母さればいの。▲甥したらば、二番酒をたべませう。▲伯母いや、今年は緣起をかへて、わがみには盛らぬほどに、重ねておぢや。▲甥はあ、その義なら歸りませう。▲伯母ようおぢやつた。▲甥はつ、扨も〳〵、伯母が憎いことを申さるゝ。何と致さうぞ。いや思ひつけた事がござる。これに鬼の面がござるほどに、これを被て、嚇して飲みませう。取つて嚙も。▲伯母はゝ、悲しやの。免さつしやれませい。▲甥やい、おのれはおれを見知つたか。▲伯母あゝ、いえ、こはいものでござる。▲甥やい、この酒部屋に住む、酒甕ぢや。知らぬか。▲伯母はあ、いや存じませなんだ。▲甥おのれは、今甥が來たと見えたが、伯母一人、甥一人のものを、酒を飲ませをらなんだ むごい奴は、取つて嚙まう。▲伯母はあ、免さつしやれませい。▲甥今度から、飲まし居ろか。▲伯母はあ、飲ましませう。▲甥それほどは、身がまぶつてやらうに、飲まし居れよ。▲伯母あゝ飲ましませう。▲甥そんなら、おれも飲まう。▲伯母それにござりまする。參りませう。▲甥こちら向き居るな。

あがり時分—酒の出來上る時分



四 伯母が酒

二人 甥 牛袴、鬼の面
伯母

▲甥 罷出でたるは、この邊の者でござる。某が伯母は、酒屋でござる。何時も某に、初酒をくれらるゝやうにござる。最早あがり時分でもござるほどに、參り食べうと存ずる。とかう申すうちに、これでござる。伯母樣、内にござりまするか。▲伯母 甥殿か、ようおぢやつたなう。何と思うて、お出やつたぞ。▲甥 されば、何時ものごとくに、最早あがり時分ぢやと存じ、初酒をたべに參つてござる。▲伯母 なう、甥殿、今年はこの邊に、めでたい

よそへずい―よそふは食物を器に盛ることなればこゝは食べられぬと云ふ意なるべし

山伏山伏のてがらには、祈り出してがらではないか。▲柴刈はあ、まことに、狂ひまするわ。▲山伏人、あれを見よ。お侍の物に狂ふを見よ。▲柴刈何のかの仰しやれても、おらが晝飯はよそへずい。

あらがやつそいの―あらがふな、口答へすな

おぢやらぬが、某が晝飯をば、ようお食やつた。▲山伏 あいつは、ありや、何事をぬかす。▲柴刈 はてな、あらがやつそいの。口の側についてあるわいの。▲山伏 え、こゝな、思ひつけた事がある。食はぬ飯が髯につくとは、この樣な事であらうず。食たが食はぬか、山伏の手柄には、祈出して見せう。▲柴刈 したら、賴みまする。▲侍 やい〳〵、山人、いや某は埒が明いたぞ。最早往ぬるぞ。▲山伏 なう〳〵、お侍、まづ、往なつしやんな。こなたも此處に休ましやつてござつたさうなり、身共も此所に臥せつてござる。ふしようながら、まそつとござれ。祈り出して見せませう。それ山伏と云つぱ、貴い人なり。兜巾といつぱ、一尺ばかりの布を、黑く染め、襞をとつて、額に當つるを以て、兜巾といふ。數珠と云つぱ、まことの數珠であらばこそ、數珠玉を百八繋ぎ、數珠と爲る。一祈り祈つたり。ぼろおん〳〵。あつたらけたを、はちがさす。ぼろおん〳〵。▲柴刈 なう〳〵、の、けくてそのぼろおんで、少し殘つた飯が、減りさうにござるぞや。▲侍 な、山伏が、可笑いごとずるな。▲山伏 橋の下の菖蒲は、誰が植ゑたしじやうぶぞ。ぼろおん〳〵。やい〳〵、山

にじつて—なすりつけて

ひだるい—ひもじい

物をぬかせ—物を言へ

さりながら、山人が起きて、飯を食たなどとあれば、悪うござるほどに、まづ參らうか。え、あれに山伏が寝て居る。山伏の口の邊に、飯をにじつて置きませう。え、かうして置いてからは、如何ほど寝ても苦しうござらぬ。▲柴刈 あゝ最早、はて扨、日が晩じてござる。まづ、序に涼しい處で、晝飯を食べうず。いえ、此處な、無いが、鳶が食たか、鳶が食たらば、蓋がせずにあらうが、誰が食たぞ。いえ、此處に寝てゐらるゝしてが食はれたものぢやあらう。起しませうず。なう〳〵起きやれ。▲侍 あゝ、あゝ、いかう寝たこと。何ぢや。▲柴刈 いや、そなたは、おれが晝飯は、食やらなんだか。▲侍 や、此處な奴は、侍に云ふやうな事を云うたがえい。▲柴刈 いや、侍と云うても、ひだるい事は、堪忍はならぬよの。▲侍 やい、其處な奴、あたりも見て物をぬかせ。▲柴刈 寝て居た者は、そなたとおれとか、おぢやらぬわいの。▲侍 彼を見をれ。彼處にも、山伏が寝て居る。▲柴刈 はあ、まことに寝てをりまする。彼奴起して、問ひませう。▲侍 行て問へ。▲柴刈 なう〳〵。▲山伏 あゝ、いかう寝た事かな。して何ぢやぞ。▲柴刈 いや、お山伏、起すのは別の事では

次第—例の如く曲にかゝる文句
うそをふかう—口笛を吹かう也
大峯—吉野の金峯山
まどろむ—睡眠すること
たんました—食べました

三　苞山伏

三人　山伏　衣、兜巾、篠懸
　　　侍　長袴、小さ刀
　　　山人　括袴、竹のさきに苞をつけて擔ぐる

▲山伏　次第貝をも持たぬ山伏が〱、道々うそをふかうよう。罷出でたるは、大峯葛城參詣致し、只今下向道でござる。扨も〱、今日はいつにかはつて、暑うござる。此處に涼しさうな所がござるほどに、まづこの大木の下に、まづちとまどろみませうず。▲柴刈　罷出でたるは山人でござる。柴を刈りに參らう。何とやら、あつうおぢやるほどに、まづこの涼しい處に、一寢入致さう。▲侍　罷出でたるは山の彼方まで、ちと用あつて參る者でござる。何とやらあつうござるほどに、この木の蔭でちと休らひませう。え、山人も、寢てゐらるゝよ。見れば晝餐がつけてある。あれを何であれかし、食べてから休らひませう。えゝ起きなよ。まんまとたんました。いや某も、此處にまた、ちと寢ませうず。

踊節─爪立てゝ迄曲にかゝるうたれて云々も亦然り

こんくわい─吼といひ嶽といふは狐の啼聲也、こんくわいに恨悔を掛けたるならん

この上は、天下は我が物ぢや。小歌節で往なう。踊節 いのやれ、古塚へ。あしなかを、爪立てゝ、(こゝにて罠を見付て膽をつぶして、) はい、はつ、扨も〳〵、人間といふ者は、賢いものぢや。身共が戻る道中に、まんまと張つて置いた。様子を見ませう。いえ、旨臭や〳〵。一口食はうか。や、この鼠は、親祖父の敵ぢや。一撃ち撃つて食はう。節 うたれてねずみ、音をぞなく。我には晴るゝ胸のけぶり、同こんくわいの涙なるぞ、悲しき。くわい。(中入)鼓座へとび入る。

▲をひ をぢ坊主の意見を、聴かうとは申したが、狐を釣らずには居ることはなるまい。罠を張つて、狐を釣りませう。(舞臺の眞中、向ふの方に罠を張る。) ▲狐 (生にて出る。) くわい。(橋懸り、又は鼓座よりも出る。舞臺のさきへ這うて出て、罠を見てその後、人の居るか居ぬかを思うて見廻し、そこにて立つて、腹鼓、いろ〳〵の曲をして、罠の上を飛び越し、手足にていろひ飛びかへり、又は横飛色々の曲、口傳あり、その後罠に掛つてなく。) くわい〳〵。▲をひ さ、掛つたは。▲狐 くわい〳〵〳〵。▲をひ どつこい、やるまいぞ。▲狐 くわい〳〵。▲をひ どこへどこへ。▲狐 くわい〳〵。

かざ―にほひ

つれ―つれな事ともいふ、つれない事、なさけない事

わたい―渡れの轉か、來いの意

あどない―あどけないに同じ

の尊い出家の鼻の先へ、穢い物を突きつきやる。その竹の先なは何ぞ。▲をひ これは鼠の油揚でござる。このかざを嗅ぎまするると、狐どのが、食ひにかゝられまする所を、この繩でひつしめて、皮をひつたくりまするが、いかう氣味のえいものでござる。▲狐 こゝな人は、まだそのつれをいふかの。その繩を捨てゝわたい。▲をひ 畏つた、捨てませう。▲狐 いや、愚僧がこれに居る内に、前な河へ流しておぢやれ。氣味の惡い物〳〵。▲をひ 畏つた。いや〳〵、何と云はれても、狐を釣り止むことはなるまい。まづ此處許に罠を張つて置きませう。申し〳〵、最前の罠を河へ流しましてござる。▲狐 おう〳〵、一だん一だん。意見の聽かれて、嬉しうおぢやる。何なりとも用の事があらば、寺へ云うてわたい。錢でも米でも、用にたちませう。▲をひ 辱うござりますれ。御無心申すまでゝござらう。▲狐 さらば〳〵、も、かう歸りまする。▲をひ はて、御茶でもまゐりませいで。▲狐 又やがて參りませう。さらば。▲をひ ようござりました。▲狐 おう〳〵、扨も〳〵、人間と云ふ物はあどない者ぢや。をぢ坊主に化けて、意見をしたれば、まんまと騙されてござる。

わごりよ―そなたに同じ

參り申し上ぐるは、これは變化のものなり、禱らせいとありければ、承ると申し、四方に四面の壇をかざり、五色の幣をたて、禱らせらるゝ。玉藻の前はこれを見て、御前にたまりかね、御幣を一本おつとり、下野國那須野の原へ落ちて行く。疎略にしては叶はじと、上總介、三浦介に仰せつけらるゝ。その後兩人御請を申し、那須野の原へ下著す。四方を取卷き、百疋の犬を入れ、遠見檢見を立て呼ばはる。遠見申すやう、胴は七尋、尾は九尋の狐にてありしが、圍八丁おもてへ見ゆると、なう、おそろしいことの。その時三浦の大助がひやうど射る。次の矢を上總の介がひやうど射た。彼の狐を終に射止めた。その執心が大石となつて、空を翔くる翼、地を走る獸、人間をとること數を知らず。かやうの恐しき獸などを、わごりよ達賤しき分にて、釣り括ること、勿體ないこと、かまいて思ひ止まらしませ。▲をぢ　はて扨、狐と申すものは、執心深いものでござりまする。愈止りませう。▲狐　おう〳〵、嬉しうおぢやる。その狐を釣るものを、ちつと見たいの。▲をぢ　易い事。御目にかけませう。これでござりまする。（狐の罠を見せる。）▲狐　はい、こゝな人は、こ

ふつ〳〵と―ふつつりとに同じ斷然と

抑狐と申すは―此の物語は謠曲殺生石にあり

幽王―周代

博士―陰陽師

どに、必ず〳〵、おとまりやれ。▲をひ 何しに僞り申さうぞ。さやうの狐を釣ることは、なか〳〵思ひもよらぬことでござる。▲狐 よい〳〵、意見の聽くまいといふことでおぢやろ。この上からは、甥を持つたとも思はぬ。ふつ〳〵と、中違でおぢやる。さらばさらば、罷り歸る。▲をひ 申し〳〵、まづ戻らしやれい。▲狐 厭ていば〳〵。▲をひ 平に歸らつしやれい。この上は、何を隱しませうぞ。狐を釣りまするが、をぢの御坊の御意見に任せて、ふつ〳〵と、止りませう。▲狐 確とさうでおぢやるか。▲をひ はて、何の嘘を云ひませうぞ。▲狐 おゝ、嬉しい。これも其方の爲ぢやぞや。それにつけて、狐の執心深いいはれを、語つて聞かせう。かたり 抑狐と申すは、皆神にておはします。天竺にては、班足太子の塚の神、大唐にては、幽王の后と現じ、我が朝にては、稻荷五社の大明神にておはします。昔鳥羽院の御代の時、清涼殿にて、御歌合の御會のありし時、えいその如くなる大風吹き來り、御前なる、四十二の燈火、一度にはら〳〵ぱつと吹き消しければ、東西俄に暗うなる。みかど不思議に思召し、博士を召し占はせられ候へば、安部の泰成

なお隠しやつそ―隠し給ふ勿れ
あたんをなす―あだをなす也返報をすること

はゝ、はあさても〳〵、似たことかな。まづ、彼がところへ急いで参らう。いや、急ぐほどに早これぢや。ものも、甥子内におぢやるか。▲をひ いや、をぢの御坊の聲がするが、ものもは誰そ。いえこゝな、何と思召して、御出でなされたぞ。▲狐 されば〳〵、此中は久しく逢はいで、懐しさに参つたが、何事もおぢやらぬか。▲をひ されば〳〵、まことに此中は、手前取紛れまして、御見舞も申さず、無沙汰致してござる。まづ御息災で、めでたうこそござれ。いざ内へ這入らしやれませい。▲狐 おう、はや内へも這入りませう。其方に意見の爲たい事があつて、これまで参つておぢやるが、聴きやらうか、聴きやるまいか。▲をひ いや、をぢの御坊様の意見を、聴かぬと事がござらうか。何事なりとも聴きませう。▲狐 はあ、おう嬉しい。そなたは、狐を釣りやるといふ事を聞いたが、まことかいの。▲をひ いや〳〵、さやうの物を釣つた事はござらぬ。▲狐 いや〳〵、な御隠しやつそ。殊に、狐やなどと云ふ物は、執心深い物で、そのまゝあたんをなすものでおぢやる。その上狐につけて、とつと仔細のある事でおぢやる。事大事のことでおぢやるほ

こんくわい―一名狐釣

次第―例の如く曲にかゝる文句

こつちやう―俗に骨頂と書く此の上も無き物をさしていふ

白藏主―藏主は禪僧の役名經藏を監す



二　こんくわい

二人　狐　衣、頭巾、杵杖、面を著て出る
　　　猟師　長袴

▲狐次第われは化けたと思へども〳〵、人は何とか思ふらん。これは、此所に住居仕る古狐のこつちやう。さるほどに、この山の彼方に、猟師の候。我等の一門を、釣り平げる事にて候。何とぞして、彼が釣らぬやうにと思ひ、則ち彼がをぢ坊主に、白藏主と申してござるほどに、これに化けて參つて、意見を加へ、殺生の道を思ひ止まらせうと存ずる事でござる。何と、白藏主によう似たか知らぬまでい。まづ水鏡を見ませう。（狐にて水鏡を見て笑ふ。）あ

太子―刊本斯くあれど「だいし」と訓めり大士とすべきか

たばつた、参らせた―之も曲にかゝる

奥歯が三枚見ゆる―諺なり

聞天の御福を、主殿に、まゐらせたりや、まゐらせたと、申す時に、御前の、たばつたりや、たばつたと、御意なさるれば、ようござりまする。▲との　急いで渡せ。▲くわじや　はあ、くらまの太子たもん天の御福を、主殿にまゐらせたりや、まゐらせた。▲との　たばつた〱。▲くわじや　はあ、餘りせはしなうござりまする。まちつと靜に受取らつしやれませい。▲との　急いで渡せ。▲くわじや　御福を、主殿にまゐらせたりや、まゐらせた。▲との　たばつたりや。たばつた。▲くわじや　申し殿樣、餘り又、長うござる。中をもつて受取らつしやれい。▲との　急いで渡せ。▲くわじや　鞍馬の太子多聞天の御福を、主殿にまゐらせたりや、まゐらせた。▲との　たばつたりや、たばつた。▲くわじや　まゐらせた。▲との　たばつた。▲くわじや　申し殿樣、▲との　何ぢやぞ。▲くわじや　あゝと仰しやれませい。▲との　あゝ。▲くわじや　めでたい事がござりまする。奥歯が三枚見えまする。壽命長うござりませう。▲との　それこそめでたし。行て休め。えゝ。▲くわじや　はあ。

ありのみ—梨の實のこと

抑へて取らう—無理に横取りすること

香の衣—香染とて丁子にて染め淡紅に黄色を帶ぶ

鞍馬云々—曲にかゝる

が聲を、聞き紛はうか。▲くわじや　はあ、いや、御福を給ばつてござる。▲との　御福は何ちや。▲くわじや　福は、ありのみでござりまする。▲との　それに待て。やれさて、某に下されう福をば、太郎冠者に取らさつしやれたは不思議でござる。抑へて取らうと存ずる。やい、冠者、某も福を給ばつた。▲くわじや　それは、何とやうにたばらつしやれてござる。▲との　いや、其事、夜の夜半の前後に、八十ばかりの老僧が、香の衣に、香の袈裟、皆水晶の數珠を爪繰り、汝に福を與へるほどに、太郎冠者に持たして置く、道にて受取れと御意なされた。急いで渡せ。▲くわじや　はあ、それに待たしやれませう。やれさて、人主には、成りたいものでござる。某がたばつた福を、抑へて取られまする。思ふさまなぶらずば、渡しますまい。▲との　やい冠者、何とて遲う渡すぞ。急いで渡せ。▲くわじや　畏つてござる。さりながら、御前の御意なさるゝ如く、八十ばかりの老僧の、道にて抑へて取らるゝならば、福渡といふ事をせずば渡すなと、御意なされてござる。「▲との　それは如何やうなことぢや。▲くわじや　いや、かう申しまする。▲との　何と。▲くわじや　まひぶし　鞍馬の太子多

宿坊―參詣人を宿す僧坊

おぢやつて―御出になつて也

これきかう―其言を聞かんための

い。▲くわじや 雌鳥でも、大事ござりませぬか。▲との やい其處な奴、雄鳥がうたうたら起しませい。▲くわじや 畏つてござりまする。扨もく、某が、をんどのうたふを、知るまいと思うで、をかしいことを申さるゝ。ま一度起して、嬲りませう。申し殿樣。▲との 何ぢやぞ。▲くわじや 宿坊から、お人がござりました。▲との 何と云うてござつたぞ。▲くわじや ようこそ、籠らつしやれまする。お淋しうござりませうほどに、この提重を、冠者を對手になされまして、開かしやれませいとておぢやつて、ござりました。▲との どれその御使は。▲くわじや 何が。▲との いやその使はいやい。▲くわじや いや、さう申して參りたら、ようござらうと申す事でござる。▲との 退り居ろ。憎い奴の。おのれもそれに、臥せり居ろ。▲くわじや 畏つてござる。えゝ、これきかうだましぢやものを、ちつと臥せりませう。はあ、あら尊や。申し殿樣、最早夜も明けまする、下向なされませう。▲との よい時分に起した。下向いたさうわいな。來いく。やい、冠者、某は夢のやうに聞いたが、汝は、あら尊やと云うたが、何であつたぞ。▲くわじや いや、私ぢやござりますまい。▲との おのれ

福渡ー一名鞍馬參

鞍馬ー松尾山鞍馬寺とて延暦十六年草創也毘沙門天（多聞天と譯す福神也）を祀る正月初寅に賽人群集す

御前ー神の廣前なり

狂言記 卷之二

一 福渡

二人 殿 長袴、小さ刀
冠者 半袴

▲との 罷出でたるは、御存じの者。太郎冠者あるか。▲くわじや 御前に。▲との 念なう早かつた。汝喚び出すは別義でない。鞍馬へ參らうと思ふが、何とあらうぞ。▲くわじや 內々は御意なうても、申し上げうと存ずるところに、一段でござりませう。▲との よからうな。▲くわじや はあ。▲との 供に來い。添うで來い。▲くわじや はあ。▲との やい／＼、汝は、いつも代參に參らすが、道々名所があらば語れ。▲くわじや いや、別に名所はござりませぬ。▲との とつと、ござりました。御前でござりまする。▲との 手水おくせい。▲くわじや はあ。▲との やい、某は今宵、お通夜を申すほどに、汝は、それに居つて、鳥がうたうたらば、起しませい。▲くわじや 鳥は何鳥でござりまするぞ。▲との 鈍な奴の、鷄がうたうたら起しませ

目の前にある―鼻の事なり

如何ほどさう云ふとも、鹿を射たらば鹿にならいでかなふまい。▲三郎 やい其處な坊、鹿を射て鹿になるならば、坊主を射て出家にならう。▲僧 射る事はなるまいぞ。胸に三寸の彌陀があるぞ。▲三郎 彌陀があらば割つて見よ。▲僧 待て少時。年ごとに咲くや吉野の山櫻、木を割りて見よ花のあるかは、と聞く時は、割つたりと、花はあるまいぞ。▲三郎 いかにもある。▲僧 何處にある。▲三郎 目の前にある。これははなではないか。▲僧 何でもない事、疾とと行け。

勿論—おんでない事—

文—經文

を持つた事かな。▲三郎やい、其處な坊、彼の弓はなぜに捨てたぞ。▲僧殺生を爲る道具をば、この尊い愚僧が、持たうはずは無い。▲三郎やい、其處な坊主、殺生を爲る事をして、佛の嫌やるか。▲僧おんでない事。▲三郎いや、其の仔細が聞きたうおぢやる。▲僧なかなか、語りて聞かせう。それ出家と云つぱ、五戒を保つ。五戒といつぱ、殺生、偸盜、邪婬、妄語、飲酒戒、中にも佛の戒め給ふは、あゝ殺生ぢや。▲三郎やい坊主、頭は圓めたれども、ものは知らぬ。殺生して苦しうない文がある。語つて聞かせう。それ達磨の文に曰く、殺生せよ〳〵、刹那も、殺生せざれば、その身地獄へ箭の如くと云ふときは、如何ほど殺生しても、苦しうない。▲僧やい、それは、胸の中の殺生ぢや。玆に殺生をして、地獄へ墮つる文がある。語つて聞かせう。がうぢんくぢやう、すいほうふじやう、こしくぢんでん、だうしや、ぶつくわと聞く時は、とがにならいで叶ふまい。▲三郎やい坊主、またこの方にある。一心に生ぜざれば、萬法に科なし。科なければ法なし。法なければ佛もないと聞く時は、如何ほど殺生しても、科にならぬ。▲僧やい、其處な者、

ざれごと—串談
旦那—檀家に同じ
旦那坊—檀那寺即ち菩提寺の坊主
教へてまつせう—教へて上げ申さん
過去帳—寺々にて死人の法名を書き付け置く帳

やらぬ。▲三郎 實正持ちやらぬか。これでも、持ちやらぬか。▲僧 あゝ、持ちました〳〵。▲三郎 これもざれごとでおぢやる。さすが御坊、見上げました。身共をば旦那に取らしやれて下されい。▲僧 何が扨、お前樣さへもつて、ならしやれてくださるゝならば、私が爲には、一の旦那でござる。▲三郎 辱うこそござれ。こなたをば旦那坊と頼むからは、この世彼の世までも頼みまするぞ。▲僧 何が扨、さやうの通りでござる。▲三郎 なう〳〵御坊、早や頼みたうござるは。▲僧 何でかござりまするぞ。▲三郎 この弓をちと持つてくりやれ。▲僧 いやそれは、つひに持つた事がござらぬところで、持ちやうを存ぜぬほどに。▲三郎 おう、知りやらずば、教へてまつせう。かう持ちやれ。▲僧 かうでござるか。▲三郎 おう、持振りようおぢやるぞ。さゝ、おぢやれ。▲僧 參りまする。こなたに申したいことがござる。▲三郎 何でおぢやるぞ。▲僧 旦那とならしやれて、下されまするからは、過去帳にも書きまするほどに、名苗字を名乗らしやれい。▲三郎 ふん、某を、お知りやらぬか。左近の三郎と申すは、某がことでおぢやる。▲僧 ふん、そなたは狩人か。扨も〳〵、穢い奴が道具

これでも—弓をひく狀をなして嚇す

ざれごと—戲れ事

魚をお參りやろ—魚をお食べなさらう

お內儀—妻

行かします。▲僧 いや、山の彼方まで、ちと用ありて參る。▲三郎 某も參るほどに同道申そ。▲僧 いや、お前見ますれば、お侍と見ましてござる。似合ひませぬやうにござるほどに、まづ先へ參ろ。▲三郎 なう御坊、出家侍と云うて、いかにも、似合たものでおぢやるほどに、同道申そ。▲僧 いや、身共は急ぎの者でござる程に、まづ先へ參らう。▲三郎 やい坊主、確と道連になるまいとことか。してこれでもなるまいか。▲僧 あゝ申し〳〵、なりませう。あゝ。▲三郎 かう、弓を加へたは、ざれごとでおぢやる。さあ〳〵、ござれござれ。▲僧 まづ御前、先へござりませう。▲三郎 いや、出家を供に連るゝといふ事はない。まづ先へ行かしませ。▲僧 はあ、その義ならば參りまする。▲三郎 なう御坊、問ひたい事がござるの。▲僧 何でかござるの。▲三郎 さぞ魚を、おまゐりやろの。▲僧 いや〳〵、出家の魚を食ふといふ事はおぢやらぬ。▲三郎 いや、おまゐりやろ。▲僧 いや〳〵食べぬ。▲三郎 して、確と食はぬか。これでもか。▲僧 あゝ、いや、食ひました〳〵。▲三郎 さうでおぢやろ。なう御坊、さぞお內儀をお持ちやらうの。▲僧 出家の、女房持つものではおぢ

見とむない—見たうもない
どれ—何處の意



十 鹿狩

二人　僧　頭巾、衣、數珠
左近の三郎　毛頭巾、括り袴弓かたげ、おつとり矢

▲僧 罷出でたるは、山の彼方まで、ちと用ありて参る愚僧ござる。まづそろ〳〵参ろ。▲左近の三郎 罷出でたるは、この山下に住居いたしまする左近の三郎と申す狩人でござる。又今日も、狩に参らうと存ずる。まづそろ〳〵参らう。扨も〳〵、狩の門出に、見とむない奴めが行き居る事ぢや。やあ、彼奴喚びかけ、嬲らうと存ずる。なう〳〵御坊。▲僧 こなたの事でござるか。▲三郎 なか〳〵。▲僧 何の御用でござるぞ。▲三郎 其方は、どれからどれへ

目をいれる―目をかけるなり味方をすること

一さし―舞一番

一張の弓―以下曲にかゝる

さんと申しければ、眞平聞いて、今こそ我が子の遠平なり、汝船よりも急いで下り候へ、命を全う持ち、君に廻り逢はうと思へ、某は、君を御代に出だし申すぞ、治定なりと、船は沖へと漕ぎ出だす。こゝに又、平家方にて名を得し、和田の小太郎義盛は、源氏に目をいれる侍なれば、此度頼朝を貢ぎ申さんとて、頼朝の御船に追付かんとせし處に、遠平は涙の態にて居たりしが、頓て遠平を生捕る態にもてなし、頼朝の御船に追ひつき、君の御目にかゝる。頼朝御覽じて、勢は增したり、目出たかりけると、斜ならず御喜のをりから、船底に隱し置きたる遠平を取り出し、眞平殿に褒美こそは出さんとあれば、君御覽じて、いかに眞平、かほどめでたきをりからなれば、一さしとの所望なり。畏つて候とて、御前をずんと立ち、舞一張の弓のいきほひたり。東南西北の敵をやすく平げ、皆々、御免なされ候へ。

て、いかに岡崎殿に申す、船より下り候へと申しければ、その時岡崎、某年寄りて、君の御用にたつまじき者と思召し、さやうに候か、某は船より以てまつたく下りまじき、所詮、たゞ命二つ持ちたる人をば、船より下し候へ眞平殿とあれば、又その時眞平、世の中に命二つ持ちたる人の候ものか。その時岡崎、さん候、御諚にては候へども、昨日までは某も、命二つ持ちて候、一つは君に參らせて候、親子は、一生二つの命にてはなく候か、眞平、とあれば、その時眞平、あやまつて候岡崎殿とて、我が子の遠平に向ひ、いかに遠平、汝船より下り候へと申しければ、遠平聞いて、某幼少にて、君の御用に立つまい者と思召し、さやうに候か。某は、船よりは下り候まいと申しければ、その時眞平、君の仰、父が命を、背く者ならば、人手にはかけまじきとて、腰の刀に手を掛け、すでに刺し違へんとせしところに、お前なりし土佐坊、中へ飛んで入り、これは何事をし給ふぞ、まづ止まり給へと申しければ、その時眞平、所詮たゞ、某船より下り申さんと、すでに下りんとせし所に、遠平見て、父御下りさせ給ふならば、某、船よりも下り申

九七騎落

一人　男　長袴、小さ刀

扨も、源氏の御大將に、兵衞佐頼朝は、石橋山の合戰に、かけ負けさせられ、一まづは、御開きあるべきと、御船に召され、土肥の次郎眞平を召し、いかに眞平、味方の勢は如何程あるぞと仰せければ、その時眞平、さん候、たゞ七騎と申し上ぐる。其時頼朝、父義朝の江州へ落ちさせ給ふも七騎、今頼朝が落つるも七騎、思へば忌まはしき次第なり、誰か一人船よりも、擇つて下し候へ眞平と、仰せければ、その時眞平、畏つて候とて、御前をずんど立ち、船のせがいを見渡せば、一番に田代殿、二番にはちんかいの四郎、三番に土屋の三郎、四番に土佐坊、五番に岡崎、我等親子の者なれば、皆君に命を參らせんと思ふばかりの勢なれば、誰か一人船より下し申さんと、案じやすらふ所に、頼朝御覽じて、いかに眞平、何とて遲なはるぞ、急げ〳〵とあれば、その時眞平、畏つて候と

御開き—落ち行くこと

義朝の江州へ落ちさせ—之れは平治の戰に負けてなり

せがい—舷に棚の如くつけたる板

ちんかいの四郎—謠曲には新開とす

かしき―喝食とて禪寺などの小姓給仕の役をなす者

せんくに一く―千句に一句なりと云ふ

菜も丈比べして居るわ。▲はじがみ　あれ上を見さしませ。あれ子供がからかふは。▲す　あれは角力でおぢやる、▲はじかみ　なう〳〵、あれ〳〵川上をからげて渡るは。▲す　いやあれは、裾を濡らすまいが爲でおぢやる。▲はじかみ　なう〳〵、淸水寺には、おちごなりとやら、かしきなりとやらがあるといふが、其方は、望はおぢやらぬか。▲す　いや身共も參らう。▲はじかみ　程なう著いておぢやる。▲す　なう、おちごなりとやらは、すぎたと申すわ。▲はじかみ　その義でおぢやるならば、某はせんくに一くで、から〳〵と笑うて、歸らうと存ずる。▲す　いや某も、住家へ向けてすつこも。

しませ。▲はじかみ 心得ておぢやる。はじかみこん。▲す すこん。▲はじかみ なう〳〵、あれを見させませ。いかい紙店でおぢやらぬか。あれは皆唐紙でをりやるほどにの。▲す なう、側に積んだは杉原でをりやる。▲はじかみ おぢやらしませ。此店を見さしませ。▲す はて好い生物。▲はじかみ あれを見さしませ。唐のかしらがおぢやるわいの、▲す 立物は、水牛でおぢやる。▲はじかみ なう〳〵、此の藪を見さしませ。はれ、いかい大竹でおぢやるの。なう、皆唐竹でおぢやる。▲す あけをすつかと切りて、酢筒にしたらばおぢやろ。▲はじかみ は、よつぽどにおしやらいで。▲す いや、思ふことが、色外にあらはるゝとやらで、酢筒が欲しいと思ふことぢやによつて、申した事でおぢやる。▲はじかみ なう、よつぽど來ておぢやる。▲す 此處は何處でおぢやる。▲はじかみ お番所へ著いておぢやる。彼の桃を見さしませ。▲す はれ、いかい桃でおぢやる。▲はじかみ あれが皆唐桃でおぢやる。▲す なう、これを見さしませ。杏でおぢやる。▲はじかみ なう、程なう五條河原へ著いておぢやる。時のものとて、やさしや、唐えもきが、いかい事おぢやる。▲す なう、杉

唐えもぎ―唐蓬にて蓬の一種か

からく天皇―以下亦生姜の緣にて「辛し」の「か」の字につき秀句を云ふからくは華洛か

からしからもの―之れにては歌として整はず一本に「辛き物からしから蓼からひるや（或は辛大根）から木を焚いてから煎にせん」とあり

烏丸通―以下唐紙杉原などやはり耳に秀句を云ふ

御出であつて、すきの御酒を下された。一つたべ、二つたべ、三つ目に御詠歌を下された。お主これを聞かうずるよ。▲はじかみ 急いで語りやれ。▲す 住吉の隅に雀が巣を懸けて、さぞや雀は住みよかるらんと、下された。これに增したる系圖はあるまい。賣子にならせませ。▲はじかみ まづ某がもお聞きやれ。昔からく天皇の御時、薑賣と召されしが、唐門のからりと通り、から緣にかしこまる。その時わうゐん、唐紙障子をからりとあけて、から〳〵と御感あり。辛き御酒を下されたり。一つたべ、二つたべ、三つ目にお肴とて、御歌を一首下された。これへ寄つて聞かせませ。からし、からもの、から木でたいて、からいりにせんと、下された。これに增したる系圖はあるまい。お主、賣子にならせませ。▲す いやはや、これもよつほどの系圖でおぢやる。さりながら、するこ天皇も、からく天皇も、位は同じ事。いまからは、相商に參らず。▲はじかみ お、まことに、仰る通り、酢のいる所には薑もいらうず。さゝ、まづ賣らせませ。どれへ向けて參らうず。▲す 眞直に、行かせませ。▲はじかみ やあ、某は烏丸通へ參らうず。▲す まづ賣ら

系圖—來歷の事

藁苞に黃金—當時の諺

おんでない—云ふまでもなしの意

推古天皇—以下の文句「す」といふ字につきて秀句をいふ

わうゐん—王院か

やい、其所な者、耳の邊へ寄りて、何をつこん〲といふぞ。▲すやい、其所な者、おぬしは又、何をはじかまろ〲といふぞ。▲はじかみや、そちが何事を云うたとまゝよ。この藁苞などには、いかう系圖のあるものぢや。▲す何といふぞ。その藁苞に系圖があるといふか。▲はじかみなか〲有る。▲すちつと聞きたうおぢやるの。▲はじかみいや、知らずば云うて聞かせう。藁苞に黃金と云ふことある。其上薑などには、いかう系圖の多いものぢやが、そちが其の酢などには系圖があるまい。▲すいや、酢にこそ系圖がおぢやれ。▲はじかみ何ぢや、酢にも系圖があると云ふか。▲すなか〲おぢやる。▲はじかみや、ちつと聞きたうおぢやるの。▲すお、なか〲、語つてきかせうが、して、位に負けたらば、其方は賣子になるか。▲はじかみおんでないこと、どちらなりとも賣子にならうず。▲すさらば、これへ寄つて聞かせませ。昔推古天皇の御時に、一人の酢賣、禁中を賣りまはる。その時わうゐん、酢賣々々と召されしが、すの門をするりと通り、簀子緣にすくと立つておぢやる。その時わうゐん、透張障子をするりとあけ、する〲と

はじかみ―生薑に同じ

こん―賣物の聲



八　酢薑

二人　酢賣　括り袴、竹杖に酢筒をつけてかたぐる
　　　薑賣　括り袴、竹杖に藁苞をつけてかたぐる

▲はじかみ　罷出でたるは、山城の國、薑賣でござる。又今日も商賣に、參らうと存ずる。それ商人とは、足をはかり、聲をはかりに商はねばならぬと申す。まづこれからよばはりませう。はじかみこん。▲す　罷出でたるは、和泉の國の酢賣でござる。又今日も商に參らうと存ずる。やれさて、一段の日和に出合せたる事かな。先づ賣りませう。すこん。▲はじかみ　はじかみこん。▲す　すこん。▲はじかみ

いや、冠者奴は、どこもとに居るぞぢやまでい。▲ていしゅ 申し殿様、御歌に冠者はいりますまい。急いで後を詠まつしやれませい。▲大名 して、短うおぢやるか。▲ていしゅ なかなか、字が足りませぬ。▲大名 したらば、出づるを幾個も書いて置きやれ。▲ていしゅ いや、それではなりませぬ。▲大名 はて、冠者めが、早う戻り居らいで。▲ていしゅ 申し殿様、急いで詠まつしやれませい。▲大名 こゝな奴は、諸侍に手を掛け居つて、憎い奴の。▲ていしゅ でも、字が足りませぬ。▲大名 あゝ、思ひ付けたは。▲ていしゅ 何と。▲大名 ものと。▲ていしゅ 何と。▲大名 太郎冠者が向臑に、某が鼻の先。▲ていしゅ 何でもないこと、疾とといかしませ。

向臑—はぎを間違へてすねといふ　いかしませ—御かへりなされ

身は歌よみでー
大名の自慢の語

いづれもの、御腰掛けられては、あの萩の花につけて短冊を掛けさつしやる。殿様にも遊ばしませいと仰しやれい。▲くわじや 心得ましてござる。申しまする。▲大名 何とした。▲くわじや 亭主申しまするのには、いづれもが短冊をなされまするほどに、花につけて、お歌をば詠まつしやれいと申しまする。▲大名 ふん、亭主にこれへ出よといへ。▲くわじや はつ。▲大名 御亭、只今は歌を詠めとおしやる。久しう詠まぬが、何とおぢやろ、一つ詠まうか。▲ていしゆ 遊ばしませう。▲大名 かうもをりやろが。七重八重九重とこそ思ひしに、とへさき出づる萩の花かな。▲亭主 あゝこれは、いかう出來さつしやれてござりまする。▲大名 亭主、身は歌よみでをりやるいの。▲ていしゆ あゝ、いかう出來さつしやれてござる。▲大名 やい、冠者、亭主が出來たてゝ、いかう喜ぶわ。汝は何方へぞ行け。暇を出すほどにゆるりと行て寛いで來い。▲くわじや 畏つてござりまする。▲ていしゆ 申し殿様。▲大名 御亭、何でおぢやるぞ。▲ていしゆ 只今短冊に書きまする。も一度吟じさつしやれませう。▲大名 おう、心得ておぢやる。七重八重、九重とこそ思ひしに、とへ咲き出づる、いづる、

御腰掛けられう—御立寄あらうといふこと

鋸おくせい—鋸を持來れ

心に立てう—生花の心に立てん

い。▲ていしゆ 心得ましてござる。はつ、これは又、見苦しい所へ、御腰掛けられうとござりまする。辱なうこそござりますれ。▲大名 やい、くわじや、ありや亭主か。▲くわじや はあ。▲大名 御亭、不案内におぢやる。かう通りまする。▲ていしゆ はつ。▲大名 やい、太郎冠者、床几々々。▲くわじや はつ。▲大名 やい、亭主に、これへ出られいといへ。▲くわじや はつ。御亭これへ出さつしやれい。▲ていしゆ 畏つてござる。▲大名 御亭々々、聞及うだよりも、いかう庭が見事でおぢやる。▲ていしゆ はつ、このぢうは手入もいたさぬによつて、いかう穢うござりまする。▲大名 いや〳〵、さうもおぢやらぬいの。なう御亭、あの向な松は、女松でおぢやるか、男松でおぢやるか、▲ていしゆ いや、あれは男松でござりまする。▲大名 ふん、いかう見事おぢやる。やい、冠者、見事なな、▲くわじや はつ。▲大名 あの左の方へすつと出た枝を見たか。▲くわじや なか〳〵、見ましてござる。▲大名 鋸おくせい、引切つて心に立てうに。▲くわじや はゝ。▲大名 はゝ、御亭、不案内におぢやる。▲ていしゆ これ〳〵。▲くわじや 何でかござるぞ。▲ていしゆ いや、彼の殿樣に仰しやれませうには、

これではなりますまい―殿の記憶の惡しきに迷惑する也

物によそへ―何物かに擬ふらへ

申し、殿様、これではなりますまい。▲大名 おう、なるまいわい。急いで戻れ。▲くわじや 申し、殿様。▲大名 何ぢや。▲くわじや さりながら、物によそへたら、覺えさつしやれませうか。▲大名 よそへ物によつて、覺えうず。▲くわじや すなはち扇の骨によそへませう。七重八重と申す時に、七本八本廣げませう。九重と申す時に、九本廣げませう。とよ咲きと申す時に、皆廣げませう。▲大名 おう、これはよいよそへ物ぢやわい。やい、して又その後があるぞよ。▲くわじや はあ、これは猶よそへ物がござる。▲大名 それは何によそへるぞ。▲くわじや すなはち身共をば、臑脛ばかり伸び居つて、厚く折檻なされまする。その脛をば、思ひ出さつしやれませう。▲大名 おう、これが一段ぢや。來い／＼。▲くわじや 疾とござりました。すなはちこれでござりまする。それに待たしやれませ。▲大名 やい、くわじや、亭主に、大名ぢや程にこれへ迎に出よと云へ。▲くわじや 畏つてござる。御亭、内にござるか。▲ていしゆ いえ、くわじや殿、何としてござつたぞ。▲くわじや その事でござる。頼うだ人が、此方の庭を聞及うで、見物にでござるほどに、表へ迎に出さつしやれ

句づくろひ―歌の句を作ること

とよ―十重のこと

うござりませう。▲大名 おう、これが一段よかろ。それへ向けて行かうぞ。▲くわじや は、さりながらこれへござれば、お歌をなされねばなりませぬ。▲大名 それは如何やうな事を詠むぞ。▲くわじや 三十一文字の言の葉を、傳へた事でござる。▲大名 あゝこりや、なるまいわい。▲くわじや は、申し上げまする。▲大名 何とした。▲くわじや 某上京邊を通つてござれば、若い衆の見物にござらうとあつて、萩の花に付て、句づくろひをなされたを、聞いて參りましてござる。御前に敎へませう、▲大名 やい、冠者、その庭にも、萩の花があらうかな。▲くわじや 殊に亭主すきまするのが、萩でござりまする。▲大名 ふん、その義ならば、急いで敎へい。▲くわじや 畏つてござる。七重八重九重とこそ思ひしに、とよ咲き出づる萩の花かなと、申す事でござる。▲大名 ふん、してそればかりか。▲くわじや はあ。▲大名 いや、これほどの事ならば詠まうほどに、急いで來い。▲くわじや 畏つてござる。▲大名 來い來い。やい、冠者、して、今の歌のいひ出しは何であつたぞ。▲くわじや 忘れさつしやれてござるか。七重八重でござりまする。▲大名 おう、それぢや。して、その後は。▲くわじや

あるかやい—冠者を喚ぶ詞

心やさかたな—風流な

七　萩大名

三人　大名　立烏帽子、素襖、袴、小さ刀
　　　冠者　半袴
　　　亭主　長袴

▲大名　罷出でたるは、隠れもない大名。此中御前に詰めてあれば、心が何とやら屈してござる。太郎冠者を喚び出し、何方へぞ、遊山に参らうと存ずる。あるかやい。▲くわじや　御前に。▲大名　汝を喚出すは別義ではない。何方へぞ遊山に行かうと思ふが、何とあらう。▲くわじや　は、内々は、御意なうても申し上げたう存ずるところに、一段でござりませう。▲大名　よからうな。▲くわじや　は。▲大名　何と、西山東山はいつもの事。様子の違うた所へ行きたいが、何處許がよからうな。▲くわじや　まことに御意の通り、西山東山はいつもの事でござる。されば、何處許が好うござりせうぞ。はあ、思ひ付けてござる。これよりも下京邊に、心やさかたな御方がござる。殊の外の庭好きでござる。これへの御遊山が好

一遍上人―融通念佛の一派を開く遊行ともいふ
なもだ〳〵―曲にかゝる
蓮華經〳〵―曲にかゝる
如何な事云々―法華淨土の二坊主が我しらず御題目を混じて間違ふるを滑稽とす
實に今云々―終迄曲がゝりとなる
昔在靈山云々―南岳大師の語

を浮かしたいと存じまする。いや、思ひつけた事がござる。一遍上人の踊念佛がござる。これを申しませう。なもだ〳〵。▲法華いや、某も負けは致すまい。蓮華經々々々。▲淨土南無だ。▲法華蓮華經々々々。▲淨土南無だ。▲法華淨土これは如何な事、取り違へてのけた。實に今思ひ出したり、昔在靈山妙法花、今在西方妙阿彌陀、娑婆示現觀世音、三世利益同一體と。この文の聞く時は、法華も彌陀も隔はあらじ、今よりしてはふたりが名をば、今よりしてはふたりが名をば、妙阿彌陀佛とぞ付かうよ。

齋—佛家にて食事をいふ
はぺん—半平又は半ぺん
むざいがき—有財餓鬼を無菜と洒落たる也
論義—佛教上の事柄を論辯すること
しゆ致し—しゆは修か
くわ〳〵—鉦の音
看經—讀經のこと

の上にもある事、だんばう方へ齋に參れば、事足らうたる御方へ參れば、醍醐の烏頭芽、鞍馬の木の芽漬、はべん、麩、椎茸、無量のさいを滿ち〳〵て下さるゝ。彼の事足らはぬ御方へ參れば、燒鹽一菜で下さるゝ。彼の、無量の菜が滿ち〳〵てあると思うて、心に觀念して下さるゝを以て、一念彌陀佛、卽滅無量罪、又は菜とも、解かせられたる法問な、ありがたうはおぢやらぬか。▲法華 たつた解かせませ。▲淨土 これまででおぢやる。▲法華 して、それがまことでおぢやるか。▲淨土 なか〳〵。▲法華 悉皆たゞ、それはむざいがきといふものでおぢやる。▲淨土 いや〳〵、むざいがきではおぢやらぬ。▲法華 無いものを有ると思うて食へば、むざいがき、ではおぢやらぬか。▲淨土 いや、そちがやうな者に構をよりも、非學者論義に負けじとことがある。まづ、念佛しゆ致したが好い。▲法華 いや、まつと云はしまさいで。いや、某もちとまどろみませう。▲淨土 いや、とかう申す間に、御經時になつた。くわ〳〵〳〵。なまいだ。▲法華 悉皆彼の坊主は、夜の目が寢られぬと見えた。某も看經を致さう。▲淨土 いや、負けじ劣らじと精を出さるゝ。何とがなして、彼の坊

五する云々―法華經に五十展轉隨喜功德の語あり芋を隨喜といふより滑稽的に說けるなり

檀方がた―檀家

たつた―唯に同じ

宗論―宗旨の上にて爭ふこと

づ、五する展轉、隨喜の功德といふ事がある。聞きやつた事があらう。▲淨土まことに、どこでやら聞いておぢやる。▲法華聞かいで何とせう。三國に憚るほどの法問ぢや。▲淨土まづ、いかい事をいはずとも、語らせませ。▲法華まづ、五するてんでん、ずゐきの功德、又は涙とも、解かせられたる法問な、大地を割り、芋の子を植ゆる、天地の潤を以てずゐきを出す。丈ゆるゆるとせいじんしたるを、刃物で以て薙倒し、芥子で辛々と齏へ、檀方がたで下さるゝ時は、尊うて、ありがたうて、涙がこぼるゝを以て、五するてんでん、ずゐきの功德、又は、涙とも解かせられたる法問は、有難いことではおぢやらぬか。▲淨土たつた解かせませ。▲法華いや、これまででおぢやる。▲淨土して、それはまことでおぢやるか。それは芥子が辛うて、涙がこぼれたものでおぢやらう。▲法華まづ、小言を言はずとも、其方も解かせませ。▲淨土をゝ、宗論でおぢやるほどに、某も申そ。これへよりて聞かせませ。一念彌陀佛、卽滅無量罪と云ふ事がある。お聞きやらうのう。▲法華をを、まことに聞きはつつたやうにおぢやる。▲淨土其方の身の上にもある事、又某が身

晩じて―暮るゝこと

法問―佛法上の問答

心やれ―心得やれ、心得よ

が、日も晩じてござるほどに、宿をとりませう。ものも。お案内。▲やどや、表に案内があるが、案内はどなた。え、最前のやうな御坊ぢや。▲淨土なう〳〵、最前も、某がやうなる坊が、宿を取つてござるか。▲やどなか〳〵、宿を取らつしやれてござる。▲淨土某にも貸して下されい。▲やどいや、出家の相宿はなりませぬ。▲淨土いや、さきほどの御坊と某は、弟子兄弟でござるが、言葉論を致し、先へでござるほどに、某にも貸して下されい。▲やど心得ました。▲淨土なう〳〵、御坊。▲法華いや、其方は何として來たぞ。なう御亭主、別の間ではおぢやらぬか。▲淨土はてさて、ないとおしやるわいの。▲法華其方が構うてのやうわいの。して其方は、某に後先に附いてまふは、法問ばし爲ても見やうと思やるか。▲淨土いや、まことに、よいところへ氣がついた。夜長にもおぢやる程に、いざ、法問を致さうず。▲法華まづ、したらば、其方からおしやれ。▲淨土まづ、そつちおしやつたがよいわ。▲法華ふん、其儀ならば語らうほどに、どちらなりとも、負けた方を、數珠を切らするほどに、さう心やれ。▲淨土まづお語りやれ。▲法華耳の垢を取りて聞かせませ。ま

あみつれた―編み連なれる

たか―たくば

法然上人―源空

もつけな事―思ひ設けぬ事

相宿―一室に合宿すること

る人に、かまはうよりも、某は先へ行たがようおぢやる。はあ、嬉しや、逃げ延びてござる。▲浄土なう、御坊、はてさて人に走らしやつた。▲法華ゑ、こゝな、其方とおれと、あみつれた身がいの。▲浄土いや、都までは同道申すとの約束でおぢやろ。▲法華いやはや、つれだてならば、つれだたうほどに、某が数珠は辱くも、日蓮上人より、傳りの数珠ぢやほどに、ちつと戴きやれ。▲浄土戴きたか、そち戴け。▲法華いや、是非共戴かせう。こりや〱、はゝ、嬉しや、思ふまゝに戴かした。▲浄土なう〱、某が数珠も辱くも、法然上人よりも傳りの数珠、ちつと戴きやれ。これ〱、はあ、嬉しや、戴かした。まつと戴かせう。いやこりや、見失うて、はてさて、もつけな事した。▲法華はあ、嬉しや。逃げ延びてござる。まづこの所に宿をとりませう。ものも。お案内。▲やどや、表に案内がある。お案内はどなたでござるぞ。▲法華いや、旅の坊主でござる。一夜の宿を貸さつしやれい。▲やど易い事でござる。奥の間へ通らしやれい。▲法華畏つてござる。亭主、出家の相宿厭でござるぞ。▲やど心得ました。▲浄土これは扨、これほどに行き延びはせまい

おとましい―疎ましの轉、厭はしい、とんでもない

黑豆を數ふ―惡口にて數珠を採むことをいふ

一部八卷云々―法華經のこと

て、おとましい者とつれだつた事ぢや。▲淨土 いやはや、も、いやがると見えました。▲法華 なう、坊、して、其方は又、此方へは、どれへ行かしましたぞ。▲淨土 いや、信濃國善光寺へ參りておぢやる。▲法華 やあ、參らいで、叶ひそむない坊主ぢや。▲淨土 して又、其方は何の方へ行かしましたぞ。▲法華 いや、甲斐の身延へ參詣致した。▲淨土 おゝ、參らいで、叶はぬ御坊ぢや。▲法華 なう〳〵、御坊、其方に意見したうおぢやるわいの。▲淨土 何でかおぢやるぞ。▲法華 彼所の隅でも、此所でも、黑豆を數へ、ぐと〳〵と、願はうよりも、其方、その數珠を切つて、法華にならせませ。▲淨土 いや〳〵、法華にはなりともなうおぢやる。其方にも意見がしたいは。一部八卷の二十八品などとて、事むづかしい事を願はうよりも、南無阿彌陀佛とさへ、申すればよいに、某が法にならせませ。▲法華 いや〳〵、なりともなうおぢやる。なう〳〵。▲淨土 何でかおぢやる。▲法華 はつたと忘れた事がおぢやる。彼の向に見ゆる在所へ、某は寄らねばならぬ。▲淨土 いや、某も寄らう。▲法華 いや、先へ行かしませ。▲淨土 いや、待合せうと約束でおぢやろ。なう〳〵。▲法華 其方のやうな

上方―都の方
卒爾―粗忽
一貫日―一千日
情強―強情我慢のこと
心にくう―床しく

れからどれへござるぞ。▲法華 いや。かう上方へ參る愚僧でござる。▲淨土 え、身共も上りまする。卒爾ながら、道づれにもならしやるまいか。▲法華 いや、身共も、つれ欲いと存ずる所に、合うたり叶うたる事でござる。都までは同道申さう。はれさて嬉しや。さ、ござりませい。▲淨土 まづござれ。先でござる程に。▲法華 參らうか。▲淨土 ござれ〳〵。なう申し、かうして、同道申すからは、乃至は、こなたの方にも、又身共が方にも、五日十日暇のいる事がござろと、まゝよ、待合せ同道致さうぞ。▲法華 なか〳〵、五日十日の事はさて置かつしやれい、一貫日でも待合せ、都までは同道申す。▲淨土 はれさて、よい御坊に出逢うた事かな。して、こなたは、都は何處許にござるぞ。▲法華 いや、本國寺の愚僧でおぢやる。▲淨土 いや、きやつは家例の情強でおぢやる。道すがら爭ひませうず。▲法華 なう〳〵、御坊、して、そなたは又何處許でおぢやるぞ。▲淨土 いや、も、何處と申したらば、京邊土の者でおぢやる。▲法華 いや、さう仰やれば、心にくうおぢやるほどに、名乘らしやれ。▲淨土 その儀ならば、名乘りませう。黑谷の坊主でおぢやる。▲法華 はれさ

次第ー謡曲の節の名なり此の文句は謡ふところ
きやうせんとー仰山とか
本國寺ー大光山と號す日蓮宗の本山にて京都堀川にあり
身延ー久遠寺といふ日蓮宗の本山
下向道ー歸路
黑谷ー紫雲山金戒光明寺淨土宗の本山

六宗論

三人　僧二人　笠、衣、數珠
　　　宿　長袴

▲法華 次第 妙法蓮華經、蓮華經の經の字を、きやうせんと人や思ふらん。罷出でたるは、都本國寺の坊主でござる。このたび思ひ立ち、甲斐の身延に參詣致し、只今下向道でござる。やれさて、身延と申す所は、聞き及うだよりは、殊勝な所でござる。若い折にかやうに修行を致さねば、老いての物語が無いと申す。先づそろ〳〵上りませう。いや、程は參らねども、草臥れてござるほどに、まづこの所にすこし休らひませうず。▲淨土 次第 南無阿彌陀佛の六の字を、むづかしく人や思ふらん。罷出でたるは、東山黑谷の愚僧でござる。信濃國善光寺へ參り、只今下向道でござる。まづそろ〳〵上りませう。あれへよささうなる道づれが行かるゝ。呼びかけ道づれに致さうと存ずる。しゝ、申し。▲法華 こなたの事でござるか。▲淨土 なか〳〵。▲法華 何の御用でござるぞ。▲淨土 して、こなたはど

あには子―長子

ほえたとても―人の物言ふを罵る語、ぬかしたとても

の娘のあには子ではござらぬか。又、戻すまいと仰やる。そなたの爲には、孫ではおぢやらぬか。母を尋ぬるが、かはゆうはおぢやらぬか。▲おや 何ほど其の様にほえたとても、往なす事ではないぞ。▲をな なう、父様、彼の様に來て又泣きやれば、往ないでも叶ひますまいほどに、往なして下されい。▲おや いや、往なすことではない。▲むこ をな、それぢや。しうと、しうと、一度再び呉れた女房をば、戻すまいと云ふか。連れて行て見せう。▲おや やることではないぞ。▲むこ 何の連れて行かいでは。▲おや こりや何とするぞ。▲むこ 舅覺えたか。をな、これへ負はれい。▲をな 父様、祭には來ませうぞや。▲おや 親を踏倒して行き居る奴は、何女房なれや。其方に居れ。

奇特や—不思議や

しゝ—呼び掛けの詞
おぬし—汝
かな法師—子供の名、法師は今男子を坊といふが如し

ざる。ものも。お案内。▲おややら、奇特や、表に案内がある。お案内はどなたでござる。▲むこは、いや苦しうない者でござる。▲おや見馴れぬ御方でござるが。▲むこやあ、見馴れさつしやれぬはお道理でござる。此方には、をな上臈と云うて、娘子がござらうが。▲おやなか〳〵、ござる。▲むこしたが、それについて參りましてござる。▲おやそれは、なんといな事でござつたぞ。▲むこいや、ちよつと兩人諍をめされまして、お出やりましてござる。耻かしながら、尋ねて參りました。▲おやふん、扨は此方は、聟殿でござるか。▲むこはゝ。▲おやはて、こちへは歸りませぬが、隨分其方を尋ねて下されい。▲むこ畏つてござる。これは如何なこと、此處へも戻らぬと申すが、何と致したものでござろぞ。▲をななう、父樣、耻知らずが來ました。▲おやさればいやい。▲むこはゝ、女共の聲がする。ものも。▲おやいや、又表に案内がある。しゝ。こなたは何としてござつたぞ。▲むこ何としてと事があるものぞ。女共の聲がした。通さつしやれい。▲おややい、そこな者、おぬしがところへは、最早彼の娘はやらぬぞ。▲むこなう、舅殿、あの内に居るかな法師は、此方

食ひ倒れ—夫を罵つて云ふ
われ—汝の意
かまひて—構へて、必ず
何しに—どうして
恥知らず—夫のこと
めぢや者—妻なる女

うして來るは、別の儀ではござらぬ。内の食ひ倒れが言事をしたによつて、戻りました。▲おや何といふぞ。子中をなしたる中を、出るぞ引くぞと云ふ事はあるまい。一時も置かぬ。御歸りやす。▲をななう、父樣、さう仰しやるは合點でござる。さらば往にまする。最早逢ひますまいぞや。▲おややい〳〵、それは何事を云ふぞ。身をも捨てうといふ言葉か。▲をななか〳〵。▲おやいや、それほどに思ふならば、まづ這入れ。▲をな心得ました。▲おやしてまた、われは確と往ぬまいといふ氣か。かまひて親に恥をかゝすなよ。▲をなは、父樣、何しに往にませうぞ。▲おやおう、したら、えいは。▲をななう、父樣、其の恥知らずが、尋ねてなど來る事がござろほどに、此處へは來ぬとおしやれい。▲おやおう、ぬかることでは無いぞ。▲むこ罷出でたるはこの邊の者でござる。夜前めぢや者と言葉論を致したれば、ついと出てござるが、そこら邊を尋ねますれども、居りませぬ。定めて親の所へいんだものでござろ。尋ねにまるりたうござれども、つひに未だ聟入を致さぬよつて、何とも參り惡うござる、と申しても、參らずばなりますまい。いや、程なうこれでご

つれやひ―夫

をな―をんなの略、親が娘のことをいふ



五貫聟

三人
舅 長袴、小さ刀
聟 半袴
女

▲をな 妾は此の邊の者でござる。妾がつれやひ、何ともかともならぬ酒飲でござるが、醉狂を爲られて、迷惑致します。それにつき意見を申したれば、暇をくれてござる。別に參らう所はござらぬほどに、恥しや、親のかたへ歸りませう。ものも、お案内。▲をなが親 聞いたやうな聲がするが、誰も出ぬか。や をなは何として來たぞ。這入りはせいで、餘所〳〵しい有樣な。▲をな いや父樣、己が此

ごろんじやれ―御覽なされ

殿樣、ござりまするか。▲との 又こりや冠者が來たか。そつちへ行け。▲くわじや いや、申し、本々の冠者でござる。▲との 何としたぞ。▲くわじや これごろんじやれませい。鬼の拔殼でござる。▲との 何でもない事、退り居れ、え。▲くわじや はつ。

生をかへて─生れかはりて

抜けたは─仮面とれたる也

ぬが、親、祖父の報でござるか。鬼になるならば、生をかへてなりともならいで、生きながら鬼になると事は、何の因果でござるぞ。さりながら、是れでは、何處へ參つたとも、抱人はござるまいが、何と致さうぞ。何と致したとも、馴染のかどでござる程に、頼うだ御方へ參り、どうぞ申して見ませう。殿樣ござりまするか。▲との 冠者戻つたか。▲くわじや はあ、歸りましてござる。▲との なう、恐しや。鬼をば冠者には使はぬ。やれそちへ行け。▲くわじや 申し殿樣、冠者は冠者でござる。何といな、因果でござるやら、このやうに鬼になりました。今までの樣にこそは使はされませずとも、門の番なりともさして下されませう。▲との やい、そこな者、鬼に番をさせたらば、人出入もあるまい。そつちへ行てくれい。抱へる事はならぬぞ。▲くわじや お馴染のかどにさへ、さやうでござる程に、身共も覺悟致してござる。もとの清水へ行て身を投げませうず。扨も〳〵、このやうなる、因果の有樣になりても、命といふものは惜しいものでござる。これから寢轉うつて、あの池へ陷るならば、なんなく、身は投げませうず。えい、こゝな、抜けたは。申し〳〵

行てうせう—行きて來よ
行きまするていに—ていには、と云ふにの約
鬼のおもて—鬼の假面
まん〳〵と—うまうまと
あると事—あるといふ事
さしまへ—指料刀
とつくりと—とくと、十分に

處へ。▲との 彼の樣へ。▲くわじや 行きまするわいの。▲との 早う行てうせう。▲くわじや はて、行きまするていに。あゝ、いかう醉うたことかな。これでこそなれ。ようその、この男が飲まずに行かうよ。ふし。めがゆく〳〵。おめがゆき候。あゝ、いかう醉うた。まづ、ちつと寢て行かうず。▲との やれさて、冠者を使に遣つてござるが、又彼奴めが酒に醉ひて、臥して居るかして、遲うござる。行て見て參らう。さればこそ、餘念もなう寢て居る。何と致さうぞ。思ひ付けたことがござる。これに鬼のおもてがござるほどに、著せて置きませう。まん〳〵と著せました。まづ急いで歸らう。▲くわじや はあ、いかう寢たことかな。枕下に寢たかして、はあ、顏が重うござる。あの淸水へ行て、手水を使ひませう。なう、悲しやの、許さつしやれませい。扨も〳〵、淸水に鬼のあると事は、存ぜなんでござる。さしまへがあるならば、彼奴を爲留めたうござるが、賴うだ人に爲留めさせませう。さりながら、ま一度、とつくりと見ませう。これは如何なこと、己が爲るやうに爲るが、いやこれは、己が鬼になつたげな。はあ、悲しや。扨も〳〵、人惡かれとも存ぜ

殿様は云々—先方にて尋ねらるる詞
念を使ふ—念を押すこと
ひよんな事—奇妙な事
慮外—恐縮
けなりう—羨しく
たんませう—たべませう
數—盃の也

の御事でござりまする。殿様は、何事もないかなどと、問はしやる時には、何と申しませうぞ。▲との はてさて、いらざる念を使ひ居る事かな。はあ、思ひ付けてござる。いつも彼奴に酒を呉れまするが、今日は呉れずに遣れば、まひもどり〳〵致す。飲ましてやりませう。やい、冠者、これへよつて酒を一つ飲うでいけ。▲くわじや はて、ひよんなことをおしやれまする。身共が、かうして戻りまするも、酒がたべたいではござらぬ。も、かう参りまする。▲との 一つ飲うで行け。▲くわじや あゝ、そりや、ようござりませう。▲との さあさあ。▲くわじや いや、御酌慮外にござりまする。これへ下されませう。▲との さあ〳〵受けい〳〵。▲くわじや はあ。▲との よい酒か。▲くわじや いや、何とござつたも、覺えませなんだ。▲との 然らば、ま一つ飲め。▲くわじや はあ、あゝ、ござります〳〵。申し殿様、身共に、此の樣にお氣を付けられますをば、朋輩共もいかうけなりう思ひまする。も一つ、たんませう。▲との 過げうがな。▲くわじや いや、數が惡うござりまする。▲との さあ飲め。▲くわじや はあ、あゝ、いかう醉うたかな、いや。▲との 急いで行て來い、やい。▲くわじや 何

彼の樣—殿の情人

四　拔殼

二人　殿　長袴、小さ刀
　　　冠者　半袴

▲との　罷出でたるは御存じの者。太郎冠者あるか。▲くわじや　御前に。▲との　念なう早かつた。汝喚び出すは、別義でない。彼の樣へ參りて、此中はお人でもしんぜぬが、何事もござらぬか、冠者を見舞に進ずると申して、急いで行て來い。▲くわじや　畏つてござる。▲との　急げ。▲くわじや　はあ。さても〳〵、頼うだる人は、何時も彼の樣へ行くをりは、酒をくれらるゝが、今日は何と致してやら、忘れられてござる。ま一度もどつて、たべるやうに致そ。申し殿樣、ござりまするか。▲との　何としてもどつた。▲くわじや　その事でござりまする。久しうて人を進ぜらるゝほどに、御狀を遣されたらようござりませう。▲との　いや、狀まではいらぬ。急いで行て來い。▲くわじや　畏つてござる。これは扨、何としても呉れられぬ。いや、思ひ付けた事がござる。申し殿樣。▲との　何としてもどつた。▲くわじや　そ

親子の道―以下總て謠節となる

相舞―二人つれて舞ふ舞

ざりまする。▲むこ謠なら謠と疾うは云はいで。▲謠親子の道となるからは、たゞ何事も、かく事も、許したまへや舅殿。▲しうと も一つ參れ聟殿。▲むこ も一つ參れ舅殿。三三九獻重ればゞ、後は酒宴の餘にて、▲つれまひ聟も舅も諸共に、聟も舅も諸共に、相舞舞うてぞ歸りけれ。ふやらの〱ふん。

騒がしやんな—騒がせらるゝな

申し合せ—持ち合せ

ざりますか。舅内にありまする、お這入りなされませいの。ふやらの〳〵ふん。▲むこ　さても〳〵、太郎冠者奴が、中昔のたゞ中を申した。やい冠者、ありや、どなたぢや。▲くわじや　舅殿でござりまする。▲むこ　鈍な奴の。しうと殿なら舅殿とは云はいで、辭儀が有る。や、このき、このき、きゝら、きんのき。あゝ、騒がしやんな〳〵。辭儀でござる。この、こゝで、一つ廻つて、このて、てゝこ、てんのて。はゝ、あ、疾うも參らうと、存じたれども、かれこれと致して、暇もえませいで、遅なはりましたるところ、御赦免あられませいのふん。▲しうと　苦しうござらぬのふん。太郎冠者、盃出しませいのふん。▲くわじや　まゐりませいのふん。▲むこ　まづまゐれのふん。▲しうと　たべて申すふん。▲むこ　戴きますのふん。▲しうと　舅受持つてござる。聟殿に、一つ音曲を遊ばせと申せふん。▲くわじや　申しまする。舅受持つてござる。聟樣に音曲を遊ばしませいのふん。▲むこ　やい、冠者、行て申そずるには、是れへ音曲を申し合せませぬ。▲くわじや　申し、聟樣、そりや何のことでござりまする。▲むこ　音曲の事ぢやわいやい。▲くわじや　音曲とは謠のことでご

なか〳〵―諾ふ詞、然りの意
したら―さうしたら
まんまと―うまうまとの約、巧に
ものも―物申すの略、案内を乞ふ詞
申そずる―申さうずるの約
御意なされる―仰せられる
いを―云はうの

といふ。▲むこあゝ合點でござりまする。かうさへ申すれば、好うござりますか。▲六郎兵衛なかなか。▲むこしたら、かう參りまする。▲六郎兵衛ようをりやつた。▲むこはつ。やれさて、まんまと習うてござる。急いで參らう。程なうこれでござる。ものも。お案内。▲くわじやこりやどなたからござりました。▲むこおのれは誰ぢや。▲くわじや御内の者でござる。▲むこ冠者か。▲くわじやはつ。▲むこ行て申そずるには、聟が參りて候と、それ〳〵申せ。太郎冠者、やい〳〵おのれは、聞きも定めいで行きをる。大事の辭儀がある。▲くわじやはつ。▲むこふやらの〳〵ふんと云へ。▲くわじや申し〳〵、ござりまするか。▲しうと何としたぞ。▲くわじや聟様の御出でござる。▲しうとなぜに此方へと申さぬ。▲くわじやまづ待たつしやれませい。面白いお辭儀がござりまする。▲しうと何とした。▲くわじや聟が參りて候と、それ〳〵申せ、太郎冠者、ふやらの〳〵ふんと、御意なされまする。▲しうとやい、冠者、聟殿は浮世人ぢやによつて、さやうに御意なされたものぢやあらう。いて申そずるには、舅内にありまする、御這入りなされ。ふやらの〳〵ふんと、いを。▲くわじやはつ。ご

ござらうず―ござりませう

つせう。それにお待ちやれ。さても〳〵をかしい事を申して參つた。おもふさま笑草をすへてやりませう。なう、ゐさしますか。▲むこ はつ。▲六郎兵衛 そなたは、仕合な人ぢや。聟入の書が、物の本のうへにをりやつた。▲むこ はれ、すりや又、仕合でござりまする。▲六郎兵衛 さりながら、大昔、中昔、當風と云うて、三段おちやるが、どれを習やるぞ。▲むこ されば申し、昔も高等にござらうず。さるから當世も惡うござらう。只中昔ををすへて下されい。▲六郎兵衛 なう、こなたは聟入をめさるれば、分別までが上つた。中昔はまづ、舅の方へ行きやつたらば、案内を請やらうず。その時に、御内の者が出るであらう。その時おしやらうには、舅内ゐらるゝか、聟が參りて候と、それ〳〵申せ、太郎冠者、ふやらの〳〵ふんと、おしやつたがよい。さて、舅の前で、このき、きつ、そこで一つ廻つて、このて、て、てゝこてんのて、ふやらの〳〵ふんと、おしやればよい。▲むこ 畏つてござる。餘のは皆合點でござるが、此のふんが、合點がまゐりませぬ。▲六郎兵衛 おう合點のゆかぬこそ道理なり。もののあとでふんといふを以て、これを吟聟

知らぬまでい―までいはまでを延ばせるにて、語句の終に添ふ
作兵衛―聟の名
をりやつた―御出になつたの意
目利―鑑定
をすへてまつせう―致へて差上げん

けてござる。▲しうと 聟のわせたらば、これへと申せ。▲くわじや はあ。▲むこ 罷出でたるは、舅に可愛がらるゝ、花聟でござる。さやうにござれば、度々、聟入をせいとあつて、節節の使が立ちまする。今日は何であれかし、聟入を致さうと存ずる。聞けば聟入には、色々の辭儀がござるげな。某いまともにはじめでござる。こゝに又、六郎兵衛様とて、何もに功者な御方がござるほどに、これへ參り、辭儀の樣子を習うて、參らうと存ずる。程なうこれでござる。ものも。お案内。▲六郎兵衛 おもてに案内があるが、誰ぢや知らぬまでい。いえ、作兵衛、ようをりやつた。▲むこ はつ。▲六郎兵衛 して又これは、いつもより、綺羅びやかにをりやる。▲むこ 此の樣子をば、目利なされませい。▲六郎兵衛 さればの、聟入などではをりやるまいか。▲むこ さればこそよ。物に心得さつしやれた程ござりまする。聟入でござりまする。▲六郎兵衛 して又これへは、何として、寄りやつたぞ。▲むこ いや、その御事でござりまする。あまた聟入には辭儀があると承つてござる。こなたに一つ習はうと思うて參つてござる。▲六郎兵衛 はてさて好うこそをりやつたれ。をすへてま

吟じ聟—一名音曲聟

わするる—おはすの略轉

おぢやる—ござる



三　吟聟

四人

舅　長袴、小さ刀
聟　素襖、立烏帽子、小さ刀
六郎兵衛　長袴
冠者　半袴

▲しうと　罷出でたるは、娘の親でござる。さやうにござれば、太郎冠者を呼び出し申し付けうと存ずる。太郎冠者あるか。▲くわじや　御前に。▲しうと　念なう早かつた。汝喚び出す餘の儀でない。今日は最上吉日、聟のわするるげな。掃除などをいひつけ、えつ。▲くわじや　はつ、皆々今日は、聟様の御出でぢや。いつものやうに、見苦しくしてござらずとも、上臈衆も、身だしなみを肝要でおぢやる、申し付

箙—兜のうしろに垂れたる物

忠度—同音の糊といふ語を呼び出す

しさる—退く

あらうずる—あらんとするの約にてあるといふ程の意

失せう—去れ

かき切りて見てあれば、箙についたる短冊に、花といふ字を題にするゝ、行き暮れて木の下かげを宿とせば、花や今宵の主ならましと、詠じ給ふは、平の薩摩の守忠度にてはなきか。▲冠者はあ、それでございました。▲とのやい、そこな奴、おのれ言葉のするゝで聞いてある。紺屋に使ふは賤がひめ糊にてある。▲冠者いよ〳〵それでござりました。▲とのしさり居ろ。某が内にあらうずる奴めが、ひめ糊、忠度のわけ差別も知り居らず、大骨折らせ、大汗を流させる、前代未聞の曲者。この度折檻の加へうずれども、重ねて、折檻の加へうずる。其處立つて失せう、えつ。▲冠者はつ。

前車云々—説苑漢書などに見ゆる諺
高紐—鎧のこはぜの紐
ものゝふの云々—平家物語「もものゝふの取傳へたる梓弓引いてや人のかへすものかは」に作る
詠じせは—「せ」の字原本或は「て」とも讀むべきが如し
腹巻—鎧の如くにて袖なき物
かいこうで—かきこみての轉
鹿毛—茶色

返し、前車の覆すを見ては、後車の戒とする、一しように引けや、一しように懸れやと、下知をなす所に、源太は兜をぬぎ、高紐にかけ、一首の歌はかくばかり、ものゝふのとりつたへにし梓弓、ひいてや人のかへすものかなと、詠じせは、梶原は西東、さん〴〵に撃つて廻りしが、よき敵をば十七八騎、切つて落し、梶原が二度のかけと、呼ばはて、しんづしづと、ひいていりたる、所にてはなきか。▲冠者いや、さやうの物でもござりませなんだ。▲とのこゝに又、御一門にとりては、丹後の少將忠澄か、無官の大夫敦盛か、知盛か、逆茂木切つて廻りしは、川原太郎か、川原次郎か。寄手にも、龜井、片岡、伊勢、駿河、武藏坊辨慶にてはなきか。▲冠者いや、さやうのものでも、ござりませなんだ。▲とのここに又、主は誰とも知らねども、白絲縅の腹巻に、白柄の長刀かいこうで、鹿毛なる馬に打ち乘つて、渚を添うて落ち行くを、又味方の方よりも、岡部の六彌太忠澄と名乘りて、六七騎にて、追つかくる。よき敵と見、馬の上にて無手と組み、兩馬が間へ、だうと落ち、上よ下よとしたりしが、六彌太やがて、取つて押へ、亂れ頭をつかみあげ、首

牀几—腰かけの一種なりそれを持來らしめて自らかゝるなり

大手—表口

云つぱ—云へば

押付—鎧の背と革とを横に界する板

某が好いて讀むのは、源氏平家の物語などを讀むほどに、一つ二つ讀まうほどに、有らば有ると、軈て答へ。▲冠者 畏つてござる。▲との 牀几々々。▲冠者 はつ。▲との これへ寄つて聞け。扨も、赤間關、速鞆が沖にて、おん身を投げさせ給ふ。西海、四海の合戰のうちに、有らばあると軈て答へ候へ。いで其の頃は、壽永二年の事なるに、平家は時節の思をなし、津の國生田の森に陣を取る。その城郭は、前は海、後は嶮しき鵯鳥越、左は須磨、馬手は明石よな。大手には、生田の森をこしらへし、そのあひ三里が間は、滿ち滿ちたりしよな。陸に赤旗いくらも〳〵立てならべ、天地飜す有樣は、宛然錦を張つたるが如く。此の樣な物ではなかつたか。▲冠者 張つてだにござるならば、よこしませうが、その樣な物ではございませなんだ。▲との 玆に又梶原が二度のかけと云つぱ、梶原平三景時、源太景季、後陣平山の武者所季重が一の木戸を切つて落し、分捕高名數をつくす所に、かくて、梶原本陣に歸り、源太はと尋ねしかば、源太は敵の方よりも、押付を見せうずる事を不覺と思ひ、深入をし、鎬をけづり鍔を割り、攻め戰ふを見て、梶原取つて

二　糘糊

二人　殿　長袴、小さ刀
　　　冠者　半袴

▲との御存じの者。太郎冠者あるか。▲冠者御前に。▲との念なう早かつた。汝を喚び出すは、別儀でない。此中御前につめてあれば、新知をくわつと下された。何とめでたい事ではないか。▲冠者これはおめでたい事でござります。▲とのそれにつき明日は、出仕に上らうと思ふが、彼の紺屋へ遣つたる、肩衣は張つて參つたか。▲冠者されば、取りに參りてござるが、何やらん足らぬと申して、張つてくれませなんでござる。▲との紺屋に足らぬ物ならば、簇絹張のやうな物ではなかつたか。▲冠者いや、さやうな物ではござりませなんだ。▲との退り居ろ。おのれがやうなる鈍な奴は、物によそへて、聞いて來たがよい。▲冠者いや、よそへて參りました。▲として、何によそへて來たぞ。▲冠者殿樣の、いつも四疊半敷へ、取籠らしやれて、讀ませらるゝ物の本の内に、有るかと存ずる。▲とのふん、

新知—新増の領地
くわつと—意外に多くといふ意
肩衣—武家の小禮服社杯の社ばかりをいふ
物によそへて—何物かに擬へて
物の本—讀み物

寔にて囃しの詞なりさうよのといふ囃し詞は興福寺延年舞歌にも見ゆ

前代―前代未聞の意

身が前へは叶ふまい―目通りを許さずとの勘氣の語

ひやろ〳〵―笛の譜にて舞ひ納まるなり

をりやろの。▲藤六 さあ〳〵、囃いて見さしませ。▲藤六、下六 信濃の國の住人、麻生どんの御内の、下六と藤六と、烏帽子折に參りて、囃物をして行く。實にもさあり。やよ實にもさうよの〳〵。▲大名 如何にや如何に、汝等、主の宿を忘れて、囃物をするとも、前代の曲者、身が前へは叶ふまい。▲下六 はあ、これでをりやるは。▲藤六 さあ〳〵囃しやれ〳〵。▲藤六、下六 主の宿忘れて、囃事して行く。實にもさあり。やよ實にもさうよの〳〵。▲大名 如何にや如何に、汝等、忘れたは憎けれど、囃事が面白い。▲藤六、下六 實にもさあり。やよ實にもさうよの。▲大名 何かの事はいるまい。先づこちへ、こきいつて、まづ烏帽子著せやれ。ひやろ〳〵、とつぱい、ひやろの、ひ。

なう、なう〳〵―共に呼掛の詞
頼うだ―主人をいふ
をりやる―居るの敬語従つて在るの敬語ともなる
尋ねうず―尋ねんとすの轉じたるにて尋ねんと欲すの意
信濃國云々―曲にかゝる囃し物
麻生殿―此の大名のこと
實にもさあり―誠に然りといふ

六、殿の待ちかにやる。急いで持つてをりやれ。▲下六さうであらうと思ふたい。なうなう、某が出た迄は、七五三飾門松がなかつたが、今は、七五三飾で、頼うだ御宿を忘れた。▲藤六まことに、某も忘れたが、はあ、これでをりやるは。殿様ござりまするか。なう、此處でも、をりやらぬわいの。▲下六あゝ、某が覺えた。此處でをりやる。殿様ござりまするか。わつ、此處でもをりやらぬは。何としたもので、をりやらうぞ。▲藤六某が思ひつけたは。頼うだ人の、國と名を申して、囃事で尋ねうず。▲下六おう、まことに、これがようをりやらうぞ。して、何と云うて囃さうの。▲藤六物と云うて囃さう。信濃の國の住人、麻生殿の御内に、藤六と下六と、烏帽子折に參りて、主の宿を忘れて、囃事をして行く。▲下六あゝ、これが一段でをりやらうぞ。さあ〳〵、云うて見さしませ。▲藤六心得てをりやる。▲下六、藤六信濃の國の住人、麻生どんの御内に、下六と藤六が、烏帽子折に參りて、囃物をして行く。▲藤六あゝ、何とやらこれでは、後が淋しうをりやるわいの。▲下六某が思ひつけたは、あとで、實にもさあり、やよ實にもさうよのと、云うたらばよう

襟付—襟のやうす即ち著物の重ね
紅—染色の名赤と紫との交り
もよいか—もう善いか
おのれ—目下に向つていふ汝の意
むさい—汚いこと

が、ござりまする所で、御前の御頭へ、つけねば結はれませぬ。▲大名ふん、知らなんだ。さあ〳〵、來て塗れ。▲藤六はつ。▲大名やい、まづ離せ。痛いはな。▲藤六はあ、いや、ちと結ぼれてござりまする。▲大名やい、して、何と、明日の、襟付は、どうしたものであらうぞ。▲藤六まづ下には、白小袖を召しませう。▲大名して又中には。▲藤六紅梅がようござりませう。▲大名上には。▲藤六熨斗目を召さつしやれたがようござりませう。▲大名おう、これは映合うてよかろ。さあ〳〵、結へ〳〵。▲藤六はつ、結ひましてござる。▲大名して、もよいか。▲藤六いやまだ、額に、おだいづけと申す物をつけまする。▲大名さあ〳〵、急いでつけい。▲藤六はつ。▲大名やい、其處なやつ、なぜにおのれが、むさい唾をつけをるぞ。▲藤六いや、これでなければ、つきませぬ。▲大名つかずば、如何ほどなりとも、はきかけをれ。▲藤六はつ、ようござりまする。▲大名して、これははや、烏帽子が遲う來るな。▲藤六さればござりまする。▲大名急いで、おのれは迎にゆけ。▲藤六畏つてござりまする。▲下六えい、殿の待ちかねさつしやれう。まづ烏帽子を持つて、急いで參ろ。▲藤六なう下

はーハッといふ返事の詞
やいー目下の者に呼掛くる詞
一段ー一層
うい奴ー神妙な男
折るー烏帽子を作ること
いかうー大層
美男石ー美男蔓の油

してなりとも、御禮にあがらつしやれませいで、かなはぬ事でござりまするに、あがらつしやれたらば、ようござりませう。▲大名よからうな。▲藤六は。▲大名やい、して、それがしが烏帽子が、剝げてあつたが、何としたものであらうぞ。▲下六心得まして、此中塗りにやつてござりまする。▲大名一段うい奴ぢや。急いで取つて參れ。▲下六畏つてござりまする。▲大名急げ、えい。▲下六はあ。▲大名戻つたか。▲下六いや、まだ、御前を去りもしませぬ。▲大名油斷のさせまいと云ふ事ぢや。▲下六はあ。▲大名急げ。やい、藤六、烏帽子はまづ折りにやつたが、して、烏帽子髪などといふものは、結ひつけぬ者は、え結はぬといふが、何としたものであらうぞ。▲藤六その御事でござりまする。若し殿樣御出仕などとござらう時に、御役に立たうと存じ、某烏帽子髪の結ひやうを存じて居りまする。▲大名何ぢや、知つたといふか。一段ういやつぢや。いかう暇のいるものぢやげなほどに、急いで、來て結へ。▲藤六畏つてござる。▲大名さあ〳〵結へ。▲藤六はつ。▲大名やい、そこな奴、某をば、打擲をしをるか。▲藤六いや其の御事でござりまする。此の筒の中に、美男石

烏帽子折ー一名麻生

隠れもない大名ー名乘の詞、我は知らぬ人なき大名ぞとなり

念なうー思ひの外に



狂言記

巻之一

一　烏帽子折

三人　大名　茶筅髪、素襖、小さ刀
　　　藤六　半袴
　　　下六　半袴、かけ烏帽子を持つ

▲大名 隠れもない大名。藤六をるか。▲藤六 御前に。▲大名 下六は。▲藤六 兩人これに詰めてをりまする。▲大名 念なう早かつた。汝等、喚び出す、別儀でない。明日は正月元日、出仕にあがらうと思ふが、なにとあらうぞ。▲藤六 まことに、國許にござりま

卷之四

卷之五

續狂言記

卷之一

卷之二

卷之三

卷之四

卷之五

狂言記上　目録

狂言記

巻之一

巻之二

巻之三

一狂言の役名は主なるをシテ又はオモと云ひ、脇役をアドと云ふ。其他役割の名前によりて、殿、太郎冠者など呼ぶこと多し。

一狂言道には古來主なるもの三流あり。大藏流、鷺流、和泉流これ也。

一本書は則ち和泉流狂言の詞書を收む。繪入狂言記と題して元祿年間に大成せられたる刊本四部二十冊二百番あり。分つて狂言記、續狂言記、狂言記拾遺、及び狂言記外篇となす。本書は之を底本として編纂し、上下二卷に分ちて上梓す。

一刊本狂言記は、漢字及び假名の用法に於て頗る不完全なるものあるを以て、本書に於ては漢字は或は訂し或は補ひ、假名も亦力めて語源的歴史的用法に從へり。但し「居(を)ろ」「致(いた)そ」「抱(かゝ)ゆ」「變(か)ゆる」の類は姑く元のまゝとなせり。

一頭註は、語義出典の大略を掲げ、其未詳なるもの、又は疑はしきものは之を闕く。蓋し狂言記の註釋方面は、實に未開の荒蕪にひとしく、今後の研究に據るべきもの多ければ也。

大正三年二月　　校訂者　野村八良

緒言

一中古以來行はれたる猿樂が、滑稽なる所作を事としたるは、物語草子の類にも散見する所なるが、室町時代に至りて、猿樂の能(卽ち今日云ふ能樂)大に發達すると共に、本來の猿樂は却て狂言の名の下に其特質を發揮し、莊重嚴肅なる能は、諧謔縱橫なる狂言と相俟ちて演ぜらるゝに至れり。能の材料は多く古代の神話傳說史蹟等を主とせるに反し、狂言の資料は大抵日常俗間の事件に據れり。彼は古歌古文の趣味を根柢とし、此は俗語俚諺を有體に傳へて、當時の世相を赤裸々に示せり。隨て舞臺上の人物亦その間に大差あり。狂言に於ける大名も坊主も山伏も目代も鬼も閻魔も、皆その知能力量に於ける弱點を暴露し、以て好笑の料に供せられざるなし。誰か能に比して異彩あるを思はざらむや。卽ち狂言は、喜劇的文學として國文學中に價値を有するものと云ふべし。

一狂言の詞遣には、獨白と對話とあり。本文に於て此の二者錯綜す。これ最も讀者の留意を要する所也。詞の外に語(かたり)の部分あり、小歌、謠、囃物など音曲的の部分もあり、又能がかりの物卽ち仕舞狂言もあり。これらの諸體は、乞ふ之を本文につきて會得せられむことを。

狂言記 上

